遊ばしませんか、ねえ、お君さん。」

「然うですともね、誰も參りません處へ、夜分お出で遊ばして、どんな間違がございませんとも限りません。不意に突當られましたばかりでも、私はまあ、どんなに吃驚いたしましてございませう。」

見返れば慈か眞直に隔つて、此折から助役と云ふのも、踊取も、佐野屋と一に成つたと見え、ちら〳〵月の影燈籠、黑き人影動きつゝ、同一處を立去らず、姫を愛慮ふ氣勢である。

六

お定それと心付き、

「まつたくでございますよ。お君さんだつて、宿を出ます時は、こんなお月夜に、どう間違ひましたつて、人に突當られようとは思ひがけもいたしません。

それでございますから、ひよつとした事で、又どんな間違が無いとも申されませんし、あれが町中でございましたから吃驚しただけで、濟みましたやうなものゝ、もしか姫樣、恐しい噂のございます、お城で御覽なさいまし、目をまはさないでは濟みませんではございませんか。ねえ、お君さん。」

「はあ、然うですとも。」と云ふ中も震へて居る。

「それに三太夫樣なり、誰方か、男の方がお供でもいたして居りますれば、未だしもでございますが。」

未だ言ひも終らぬに、

「あゝ、お前たちを連れて行かうと言ひはしないよ、安心おしな。」

と姫は莞爾。

お定目を圓くして、

「ですけれども、」

「ねえ、お定さん、」

「否、いゝえ、頼んだつて連れて行きやしませんよ、直ね、」

姫は愛々しく打傾き、

「直私歸つて來るから、二人して此處に待つておいで。そんな臆病な者と一所に入ると、風が吹いても倒れさうよ。まあ、お君、お前震へておいでだね、確乎おしよ、何だねえ、小兒見たやうな。」

「私は、私は宜しいのでございます。姫樣が、」

「何ともありやしないわ。ね、お定も可いかい、直歸るから、お君、お前、其の團扇をお貸しよ。」

「はい、」

「蟲が集ると煩いから。」

姫はお君の手から參らせた團扇の柄を、口に銜へてうつむいて、眦を曲げて後毛を掻上げ給ふ。

東京なる御館の庭を漫歩きの、池をめぐつて築山にかゝらせ給ふと敢て違はぬ氣色ゝ見て、お定是はと、あきらめながら推返して、

「姫樣、それに、あの、姫樣は東京でお生れ遊ばし、今年お十八で、はじめて此方へおいでなさいましたのでございますから、些ともお城の中の御樣子を御存じではございますまい。井戸やら、釣やら、あの、燒跡へだつて、うつかり入るものぢやないと申しますのに、夜分ではございますし、」

「月夜ぢやないか。」と、澄して松ヶ枝を御覽ずる。

「ですが、お城趾でございますもの、況井戸やら、抜穴やら、錆びましても刀の折れたのなんか、どんな處に落ちて居りませんとも限りません。」

「私ね、繪圖面でよく拜見して、本丸の處、二の丸の處、お濠のやうすも、お炊場のことも、井戸のある場所だの、お天守のあつた處、誰が何處で討死をなすつたと云ふ事もね、あの何とかいふ奥女中が、可哀さうに身體を洗つたまゝ

見えなくなつたといふね、」

二人又ぎよつとする。

「湯殿のあつた處まで、皆知つて居ますよ、此の團扇でかうやつて、」

薄は右へ葉、左へ穂。

「草を分けて行くんだよ。」と直に蓮歩を移さるる。

「あれ。姫樣。」

「お君さん、こんな時に、秋山さんのお嬢さんが居て下さると可いんですね、あの方だと、どうにかしてお止め申し上げるんだけれど。」

「眞實ね。」と柔々云つた。

「全くよ、今夜は音樂會があつて行つて在らつしやるんだもの、市長さんなんかもお衣さんのヴァイオリンを聞きにおいでなすつたと云ふのに、姫樣も行らつしやれば可いぢやあないかね。おや、どうしよう、ずん〳〵おいで遊ばすよ、あれ、お君さん何うしようね。」

草の灯

七

湯川の畑の音、松の聲、摩利支天の森の下を、石燈籠に並んで二人、梢洩る月に影を投げて、風に樹の葉の搖るゝとともに、ぶら〳〵歩行の野良調子。

「やあこれ、主や大分長い事拜んで居たが何を願うたゝよ。」

「言はいでも知れたことんし、大願成就だ。」

「余持に成りたいかの。」

「まゝ、そんなもんぢや。だがの多十、」

「やあ、」

「金子は欲しいけんど、私何も金持さ成りたくはねえことんし。」

多十なるもの頷いて、

「知れた、知れた。はあ主が大願ちふは、東山の女が事だつべや。」

「すんと、胸ぢや。」と前はだけの胸を叩いて見せて、眉にかけた手式の端をなぶる。在方の息子風、腰に一挺の尺八を管高にさして居る。

岩代國のお百姓、かや〳〵と打笑ひ、

「搗けちや、彼は新妓で全盛ぢや。角を握つて暴牛をおさへればとツても、主等が手に合ふことでは無いの。其にの、お互に、在所の名が觀ず しくないことよの。野郎がまへと云ふでねえか。なあ、これ、野郎がまへと云へば、野郎さおかまひと云ふことぢや、女ッ兒は寄つかねえと、天道樣おつしやりつけだ。それよりは、やあ、三吉。」

「何だのし。」

「手近な處で、出來べい相談があるに氣はねえか。」

「主が相談は何時も出來ぬことに極つて居るわし、大方又何だつべい、西瓜のたねを銀貨にするちふ事だつべい、主、じやうだんものだあ。」

「おッと言はぬ事、犬の兒だ、」

と暗い中を潛つて出て、

「そりや、境内を出れば、もう、其の内へ入るも同一ぢや、其處な茶店のお房ッ兒よ。」

「それ見さい。」

「はゝはゝ、これ、見さい、さいて哭りよ。」と多十、居合腰になつて、肩を立て、體を斜めに指を撥ねて、三間柄を下段の殺勢、無手で鳥刺の眞似をして、熱と見込む。

御剌棹なら尖の屈きさうな間近な處、此の御堂は場末の町から湯川に添ひ、野郎橋を通つて、温泉の勝區東山に行く、途中一町ばかり引込んで、淺いが森の中に在り。左右は田圃で、北の方遠く飯盛山の裾に展けた、折から月の、中空に、黑雲を捲上げて、鱗の色銀の如き一條の龍の蜿るは、城の搦手なる樹立の中に高く殘つた石垣の名殘である。西の高を後に控へ

て、露も星も見え透いた蔭蓑闇、灯影薄の穏に映り、葉は翠に、根は黒く、破れた岐阜提灯のやうな小屋は、あはれな娘の掛茶屋であつた。

多十やッと氣合を入れ、

「はて、わけなしの、悉し、寝鳥を刺いて取るやうなもんぢやが、なあ、三吉、主が云ふ通り出來ぬ相談、西瓜の種でしよことがないかい。」

「駄目なことよんし。」

「それにしても好え容色ぢや、これはあ、主が前だが、東山の新敍さが、鱗舟斗をしても追つかねえだよ。」

「如才も無ア鮮に何だとえ。越後もので無えだで、角兵衛はすぬとこと。」

「吐かす！」と黄なロを開けて笑ひ、多十腰を伸して、ずいと立つたが、わあーと、しッこしの無い驚の聲がぼやけて、思はず背後へ一足退く。

足許の土から湧いて出たやうに、土とすれすれ、ちよろ〳〵と白きものあり。

「何だつべいや。」

三吉腰なる尺八を抜いて、追取刀、うつむいて透して見て、

「犬ころ、ころ、ころ、犬の見だんし。」

八

「見さい、あれ向うの松の棚の根ッこの處さ、いかい事ころ〳〵して、眞桑瓜が轉がつたやうでねえか。」

多十も及腰に瞻つて、

「はあ、矢張犬ころだア、はてな　此の節の不景氣で、皆持つて來て棄てるづらあ。」

「人間の棄てられたのも居る處ぢやで、犬ころを放すにも、丁どりかつべいことんし。」

と少いに悟つをことを云ふ。

「惜い別嬪だに、内密でお房ッ子の店さ休まうで無アか。男知らずに、もう今年は二十を越したつべ。對手欲しかつべいことは、主とかはりはあんめえと思ふだがね。」

「言はつしやることよ。」

「その上、今年の春は一人のおふくろを亡くなしたで、嘸心細く寂しいことだつべ、そりや此の、」

と多十薄を握つて、手の露を額に押當て、

「觸らばこぼるゝ風情なりけりと言はあ。主唄の文句で知つて居べい。處で主さ尺八の吹ける藝人といふもんだで、むかうから袖を引くことよ。其代にゆで玉子を二ッ取つて、ラムネを飲んで、主が其の拂をするだぞ。」

「御造作でござりますだ。」

「はゝはゝ、駄目べい言はねえで、内證で遊ぶべいよ、誰も來はせぬ、心配は無アと思ふ。」

「措けちや、措けちや、」

三吉些と歩を早うし、

「お房ッ子が許さ、臆をかけて、ひよつとか知れべいなら、會所中に附合人の無くなる事さ、主知つて居べい。それにはあ疾うにから、ならずものゝ權太めが、内々手に入れて居るちふだぞ。何方も人外だで、似合だつべいよ。なア多十。」

「然ればよ、お房ッ子は知んねえが、野郎が方さ血眼で附き絡ふと云ふだ、床の間に活けようなら、金屏風の座敷で親められる綺麗な枝でも、掃だめに捨てゝ置きや、蚯や蛇も一所だアさ。どのやうに嬉うても、他にかまひ人がねえ事なら、慾には口說き倒されべい。」

と次第に聲低く、やがて口を噤んだが、掛茶屋の前である。

「そりや掃溜ぢや。」

「鼻を撮むべい。」

「然うはせぬことんし、罪になるだ、」

とこそ〳〵、件の松の根に近よう、店頭を向うに避けて、通りがゝりに、多十裝束氣で捨世離

をいふ。

「今晩は。」

「や、默らつせえ。」と傍から制したが、はやくも娘の耳に入つた。

お房は中形の浴衣に、なえた黒繻子と唐縮緬の腹合せの帶、前垂の淺黄の紐、これだけ新しいのを低く〳〵めてすなほな艶のある黒髪を、結はぬ銀杏返し、燈火を少し離れて、道を行くものゝ目に背いて、くの字に縞近く床几に掛けたが、黄楊の櫛も人柄で、茶店の姐さんと言はうより、少き女房が浮身を窶した水仕奉公の趣あり。紅と青とに襷ぎ足した、交りの襷を上から釣して、土間にくるりと轉がつた、眞白な小夫の、天窓で土を捏ねてじやれる手を、内向いて、あやして居たが、多十の聲に半身で此方に向き、

「お掛けやすいな。」と柔に優しくいつた。多十思はず小鼻の皺を弛くのばし、ニヤリとして、

「はあ、休めといふだかね。」

「お休みなさいましな。」

「そんりや、休めだ、やあ、三吉。」

「行くべい。行くべい、」と三吉すねたやうな身振なり。

「待ちなさろ、まあ、可えといふに。」

多十は低聲の扇くやうに、伸上つてお房を見た。

九

「姉、己はあ、何もお前さ、恁うといつて、別の仔細もねえだけんど、世間體があるでや、速の者も店さ休むことは罪だちふげに、今度來て寄りますべい。」

面と向つて恁るかけかまひのない差合を、お房は穢て覺悟をするまでに、斷念めて居るのであつた。

「次に來ておくれやすえ。」と寂しい顔で莞爾する。

薄の中の女郎花、曲らぬ愛の捨て縺さ。多十の其のまゝには立去り兼ねたが、三吉に袂を引かれながら、躊躇まつて、眞向に手を振げた奴風。

「なう姉え、茶一ッくれさつせえ、舌を濡らして行きますべい。やあ、お造作だが、此處へ持つて來てくんなさろ。」

「あい、」と靜に礫を差置き、小犬がちよつかいに出した小さな前足を、上から手鞠を突くやうに押へたが、土瓶から波々と、松の根際へ出前の番茶。些と大ぶりな茶碗に注いで、盆に乘せ、帶に挾んだ手拭の端を、まさぐりながら、草履でしと〳〵と、灯を離れると月影に、透通るまで色白な、孤の顔が照らされた。

「澤山おかはりをしなさいましよ。」と、しとやかに差出すのを、宙で大づかみに取らうとした、近頃の殘暑のため、干破れたやうな多十の手が、茶碗に蓋被さると、殆ど同時に、

「えゝ、措けッちやあ、汚れるといふに。」と三吉が横ざまに拂つた掌、辷つてお房の二の腕を礫と打つ。痛さに眉を顰めたが、盆は手を放れて、茶碗はバッタリ。

「あれ、」と留めようとした指尖を、其まゝお房は土に支いて、蹲つた。

「ようー」と吃驚、多十は斜遠に飛退つて、松の枝に片手をかけ、足にかぶさつた茶を、ひかゞみにぐいと措りつけて、

「はッ魂消た、何をする。」

「私等、我等はア御國さのために兵隊になるだアぞ。こんなものを飲むと汚れるだ。」

づいと立はだかつて力んだが、月に隈なく、明かに三ッに破れた、茶碗を見ると、三吉も遊巡。袂を口に立ちも上らず、ものも言はず、お房の涙ぐんだいぢらしさに、遣瀬がなく大憤氣で、

「フム、」といつたまゝ茫然と立つたが、四邊を見廻し、じり〳〵逃足、
「お城のお化ぢや、そりや出た！」と呼はりざま、身を翻して街道の方へ、ばた〳〵と駈け出す後から、
「三吉やい、主ア、主ア。」
多十も續いて一目散。
彼方からも此方からも、ちよろ〳〵と二四三四、慰め顔な月の影、綺麗な洲あり、白あり、黑あり、尾を掉つて、くう〳〵。
膝に兩手をかけた一頭を、お房は袖でしつかり掴く。
爾時二人が見えなくなつた、堂から正面の路の中へ、街と立出でた仇姿。こゝに人ありと見たらしく、覺束輕くつか〳〵と間近く寄つた。
根上りの圓髻小形に品よく、白襟で、質素な越後上布、唐繻子の黑の丸帶で、裙短にきりゝとして、灰汁も色氣も拔けたる風采、眉を拂つて鐵漿を含んだ、瞼の腫ぼつたい、目の涼い、鼻筋の通つた、丸顔ながら引締つて何處にか品のある中肉中脊、古風の孤の造であるから、年紀のほど定ならず。急いで來て立留まると、ふと風が止んだので、水色縮緬の扱帶の下に、ぐツとさし込んだ、女扇を、覺悟の懷劍拔かうとする時、人の氣勢に身を起したお房と顏を合せたのである。

十

草葉に繁く袖に洽く、日に一杯の露ながら、お房は懷しげに摺寄つて、
「おかみさん。」
「おゝ、お房さん。」
「まあ、おゆツくりやしたなア、」と待ちかまへて居た樣子である。
「町は賑だね、まるでお祭のやうな騷だもん。だから、つい小兒見たやうに、ぶら〳〵彼處此處見て歩行いて、田舍ものぢやないか。あゝ、其で遲くなつたんです。大層待たせたね。何ね、こんなに長く成るなら歸りには寄らない分に言つて行けば可かつたと思つたよ。」
「どれほど遲うても可う來ておくれやしたこと。」
「よく、來だ店をして居たねえ、而して待遠くつて、戸外へ出て居たのかい。」
惜然した風情を見て、直にソレと、破れた茶碗に目を着けて
「まあ、お前涙ぐんで。又何か言はれたんでせう。然うだらう。」
と頷く如く、
「今來ようとすると、突然に二人、村の者が此方から飛んで來て、打突りさうにして駈け出して行つたもの。何だね、いつもいふ通り、亭主にしようとも、兄にしようとも思はない者に、何をいはれたつて構ふことはないぢやないか、お房さん。」
强くいつたが、
「しかし亂暴をされちや打棄つて置かれないね。其の茶碗は何うしたの、こんな處まで持出して、松の樹で缺いたんですか。」
「あの若い衆が通りやしてな、今晩は、と聲を掛けなはつたから、休んでおいでやすというたらなア。」
「然うすると、」
「傍へ行て腰をかけたら身體が汚れる因つて、茶を此處へくれ、言やはるで、持つて出ると、一人の方が取つて呑まうしやはつた處を、汚れる言うて、もう一人が、私の手を叩きやしたで、」と、ぢつと堪へて涙をはら〳〵。
女房默つて聞いて居たが、瞳を寄せて街道の方を視め、
「お房さん、まあ人つて掛けようぢやないか、種々話もある。えゝ、お前、そんなものは打棄つてお置き。」

「でも、こなひだ、おかみはんが買うておくれやして、五ッ揃うて居るのやし。」
「可いよ、打棄つてお置きよ。あゝ、よツとしよ。ほゝほ、もう年を取ると、一々此の掛帶だよ、厭だねえ、」
尋常に腰をかけ、女房襟を寛げながら、
「おゝ、涼しい、何時もお前ん許は寒いくらゐだよ、もう蟲が鳴くだらう。」
「鈴蟲が鳴きますぜ。」
「可いことね。あら、御覽、またお友達が殖えたぢやないか。まあ、ころ〳〵やつて、白や、」
くうと鳴く。
「そんなに巫山戲ると蹈まれるよ。可愛いねえ、幾つ居るの。」
「五ッになりましたわな。」
いそ〳〵膝をついて鐵瓶の下を覗く。
「お房さんお構ひでない。然う、五ッなんて居たのかね、それぢや一ッ茶碗が破れたつて何でもないよ。」
女房は帶の間から、御殿持の煙草入、思ふ處あるらしく、目を瞑つて、稍仰向き、胸の邊で、手さぐりに筒を外す、床几にかけた毛氈も、煙管の銀に花やかである。
其處へ差寄せた煙草盆で、無言で點けると手許に引き、持返して輕く一ッ、トンと火皿の灰を落す、廂をはら〳〵と露の雪。
女房は遠視いて、松の梢に颯々として、流るゝ如き銀河を見た。
「秋ぢやないかね。」

松毬

十一

日暮陰風吹鐵衣
孤軍轉鬪陷重圍

「お房さん。」
「嘸おかみはん、お草臥れ、此方へお上りやしてお休みやすな、」とお房は古毛氈の端を引張る。
女房は心閑に一服を味ひながら、松風に耳を傾けると、吟詩の聲が近いて、
房中白骨行應朽
樓上紅粧尚思歸
「お聞き、誰か來るやうだね。」
「良いお月夜だす因つて、書生さんが、ぶらぶら歩かしやはるのだつせ、今に來やはりますやろ、おかみはん、あんな唄お好きだすの？」
「何ね、好も嫌もないけれど……」
いひかけて打案じ、
「お房さん、書生さんでも何でも可い、此處を通つたら聲をおかけよ。何時のやうに寄らないでも大事ない、一體どんな事をいふんだか、私が一ッ隱れて居て聞いて見るから、」
「お止しやす。お聞きやしたらお氣に障りますせ。私もう何も思やしやせんもの。」
「まあ、お前おかまひでない。否ね、何うせ分つて居る事だけれど、わざ〳〵路傍へ呼出して、盆ごと打敲いて茶碗を壞すなんて、憎いことをされちや私が默つて居られない、あのね、一寸、」
「何え。」
「其處の戸は明いて居るかい、」と目で知らして、うつむいて吸殼を輕く拂いた。
葦簾の横に附着いて、譬へば古びた繪馬堂の如き、此の掛茶屋の母屋がある、月下に嘻く戸を鎖して、店の燈は其處まで屑かず、喪服で包んだ家の如きは、長く煩つたお房の母、世を去つて幾時も經ないのであつた。
煙草入を早く了ひ、すッと立ち、
「お房さん團扇を一本、蚊が居ようね、あゝ可し、扇がありました。」と靜に胸をおさへて云つた。

「蚤が居まつせいな、おかみはん、私の事なら打棄つて置いておくれやす、お氣の毒でなりやせんえ。」
「可いよ、そしてね、何かいつたら、構はず言ひかへしてお遣り、背後に母さんが附いて居ると思つて、氣丈夫に、分つたかい。」
再び耳を傾けたが、
「來るよ、」と云つて、薄の藍、白い穂にならんだ人の、黒髪も顔も隱れる。
間もなく日和下駄を蹈んで來る音、露にしッとりとした地に、近々と早や此處へ。
お房は柱の竹に片手をかけ、袖を取つて、姿を半ば露して、便りなげに待つて居た。松の下行く男の影。
それと見て内端に呼ぶ。
「お掛けやす、お掛けやすいな。」
其の人首を低れ腕を拱き、玆に茶屋ありと知らずに居たらう、呼ばれてはじめて心付いた趣で、立停まると、振返り、左右を見て、つかつかと歩を轉じ、燈を慕つて來ようとする、路の中で前のめり、
「や、」と手を擴げて、ぢつと見て、呟く如く語るが如く、
「犬の兒だ、犬の兒だ。」
「休んでおいでやす。」
「涼しいな、」
と云ひながら、麥藁帽を脱いで持ち、痩ふ色なくずッと入つた。
休むと汚れるさへいふ店に、近頃異數な學生客。濃い飛白に扱き帶して、素足に日和下駄。色の淺黒い鼻筋の通つた、眉の濃い、品の可い、青のすらりと高いのが、眼に星の光あり。

十二

客は床几の眞只中、正面に遮るものゝない稲田の空に、仄なる石垣の名殘を望んで、
「彼處に見えるのは、あれは若松の城だらうか。」と秀でた眉を顰めたが、穏ならぬ色があつた。お房は何の氣もつかず、
「はあ、お城だすえ。」
「然うか。」
とばかり默つて了ふ。
「あの、お茶一ッおあがりやす。」
「……、」
無穏なさゝうに、
「もしな、」と云つて、捧げ出した濃茶一碗、又たゝきまされようか、彈飛されでもしようかと、きつきの今で、お房はおど〳〵。
それでも返事をしなかつた。客は目が覺めたやうに、瓶を上げて、まともに見たので面を背ける、お房の袖にも小犬の背にも、はら〳〵と松の影、流るゝばかりの露を留めず、蛍の子の天井を渡る月は、濁れ色の艷かな女の髮に染むのである。
客はあはれにしをらしく、はじめて知つて茶碗を受けたが、口はつけず差置いて、
「酒はあるかね、姉さん。」
「は、御酒だすか。」
「むゝ、酒だ。」
お房は取附の棚に五六本、貼紙は正宗とした罎が、マッチの箱と並んだのを指して、
「彼で可うございますならお飲りやす、おいしうおすか何うだすやろ、」たよりなさうに云ふのであつた。
棚を見込むと田の風の吹通して、埃は濁つても居ないらしいが、松の葉越しの月が射すだけ、日の經つたのは知れるのであつた。
「可からう、早速一杯。何、姉さん、猪口が見當らなけりや茶碗で構はん、出しておくれ、濁けりや冷で遣つけよう、飲口が宜かつたら燗をして頂くとする、どれ。むゝ、結構に行ける、面倒だが突込んで貰はうか、其ね、口についた

封じ紙をよく剌してくれ給へ、然うだ、湯氣でべろりと剛がはがれると、難儀だからな。」
「何うだすえ、熱いのが可うおすか。」
と罎をつけた鐵瓶の肌を、やさしい手で兩方から壓へる仕種を見て、馴れないのを知つたか、氣の毒さうに、
「いや、可い時分に僕が出さう、手を伸せば譯なしだ、可し、可し。」
お房は優しい目のふちに皺を寄せて、眩しらしく客を見上げ、
「ようしておくれやす、私不束だすな、お氣の毒や、」
「いや、宜しい、扨恁う段取が出來た處で、何か肴はあるまいか。」
「何も旨いものはおざいやせんけれど、鶏卵の湯煎にしたの、何うだすやろ、」
「茹鶏卵か。」
「然うだつせ、地鶏卵で新しいのだすえ。」
「妙々、其を五ッ六ッ、出しておくれ、鹽はあるか、占めたな。」
盆を手許に引寄せた、客は足を擧げて床几に落着き、罎を取つて自ら注ぐと、下にも置かず、ぐつと干した。
「上出來、而して又なか〳〵名酒だ。姉さん、最う店を仕舞ふ處だつたらうに飛んだ邪魔をした。」
「何うせな、寂やしても寂しいのです、何時までもお休みやしておくれやすな。」

十三

客は旨さうに舌打して、
「難有い、不思議な處でありついた、こんな處で飲まうとは思はなかつた。姉さん、僕はね、土地のものぢやない、今も町を通つて來たんだが、大分暇で一寸一口遣るやうな家は、二階の欄干も物干も溢れるほどな景氣だらう。中にや、三味線太鼓の音のするのがある、旅烏が一羽ぢや些と氣が怯けて入られない。入つた處で、氣がさして駄目だし、他國の者とでも旅籠へ歸つて此の月に雨戸を閉めて飲んでも不味し、路々大騒ぎだつたのに、よく、まあ、こんな人通りのない閑靜な處で飲ませてくれる。大いに淋すね、然も酒が可い、かはりをつけておくれ。」
倒に雫を切つた、見事に一本。
偽り大量ではないと見えて、もう顔の色も、ものいふ調子も變つたのである。
お房も嬉しさうに、いそ〳〵しながら、
「お世辭だせうけれど喜んでおくれやして、私もな……」
「何、君も惡い心持はしないといふのか。」
「お嬉しうおつせいなア。」
ハタと膝を打つて、
「厚意謝するに言なし。むゝ、いや、此の鶏卵も又至極結構だ。」
「もつと、お食りなはるものがあると可いのやけど、あの、何うだすいな、夏大根の刺んで漬けたのがおざいやつせ。」
「大阪漬だな、貰はう、貰はうとも。お誂だ、」と大に乗る。
「そんならな、もし一寸行つて取つて參じます、待つておくれやす。」
「いや、御足勞には及ばない、其處にあるンならばだが、取りに行く、だつてお前、」
「直、其の母屋だつせ、わけありやしやせん。」
と前垂の端を取つて、お房は薄の前を通つた、あとから小犬がちよろ〳〵とついて行く。
「待て、待て、一人ぢや寂しいや、とら白。」と云ひかけたが、どちらも忽ち見えなくなると、松葉がパラ〳〵と濕れて落ちる。巣はぶる〳〵と身震ひして、上げ胡坐の脚を土間に擲へ、胸を反して眉を顰めて、鶴の城の渺として、月に百年の歴史を描けるを見るや、心迫ることあ

るかの如く、ぱた〳〵と忙しい足踏。
其處へ草履の音すた〳〵、
「遅かつだすやろなあ。」
「これは恽り。丁ど二度目のお燗もついた、姉さん、其處が母屋なのか。」
「然うだす、犬小屋だつせ、」とあきらめたやうに恋も望も忘れた風采。
「晴いぢやないか、誰も人は居らんのかね。」
「え、」
「父様や、母様は。」
「おかあさんは先逢て亡くなりやした、お父さん私知らんのだす。」
「ぢや、御亭主？」
「眼だつせ、」と身を細く、兩の袂をぐいと絞る。怪訝な顔をして、
「それでは一人か。」
「はあ、一人だす。」
「夜も、」
「何ッ時やかて、一人だつせいな、ほゝゝ、」
客は又仰いで飲み、
「笑ひ事ぢやない。こんな處に年中一人で居て何うする。」と目を輝かして云つたが、何を思ひ出したか、今更果敢ない店の彼方此方を眴して、突然座を上げて、

「ラムネの罎が！　冷してあるな。」

十四

「姉さん、飲むよ、大いに飲むが嬶はんか。」と猪口を持つた手を腕まくりで、客は目を睜つていつた。
お房はたゞおとなしく、
「ラムネ食るのだすかいな。」
「はゝあ。ラムネ、いや、ラムネを飲まうといふ理窟ぢやない。些と外に仔細のある事だ、此の仔細といふのが、又なか〳〵不思議に面白い、何うだ話して聞かせようかね。」
「聞かしておくれやすな、私ほんとに寂しいのだす。」と客の床几を少し放れて、お房は前垂に袂を折りかさねて小犬のつむりを屈へながら、前髪のふツくりした、瓜核顔をなつかしさうに振仰ぐ。
「寂しいか。あゝ、寂しからう、ラムネの話も寂しいや。」と何を思出したか、がツくりとうなじを垂れた。
「何だすえ、ラムネはんッて人さんのお名だすの。」
「人の名か。」
聲を沈めて胸で笑ひ、
「人の名だ。時に姉さんの名は何といふね。」
「私の、……」
「うむ。」
「ほゝほ、私名なんかないのだッせえな、同舎ものだす。」
これを聞くと目を瞑つて、
「ラムネも同一やうなことを云つたつけ。都をば霞とともにいでしかど、秋風ぞ吹く白河の關。富士も淺間も鄙の名所だ。私は松島でございます、手前那須野が原でございますと、自分から名告らないでも、知つてる者は知つて居る。なあ、姉さん、僕が一つお前の名を當てゝ見ようか。」
「當てゝお見やす、それだすがなア、あなた此處に小犬が居りますよつて、白やなんか言やはつては厭だつせ。」
「警句一番したね、こりや愉快」
と會心の笑を洩したが、唇を切るが如く、杯を銜と横に引いたり。
「心配するな、ラムネは人の名といつたけれど、出まかせに白とはいはん、謹んで申てよう。」
「そしたら私も、あなたのお名をあてまつせ。」
「面白いな、しかし野郎の名は難しい、難しいといへば女の名だつて一度であてるのは容易でない、何うだ、旨くあたつたらお前、僕の女房

になるか。」
「えゝ、其の代りにあなたを申てやしたら、且那はんになつておくれやす。」
「可し、僕の名も赤酒から思ひついて、糟なぞは不可いよ。」
「滅相な何のまあ。」
「それでは申てよう、」とぢつと又お房の顔を瞶めたのである。
はッと赧らめて打俯け、
「堪忍しておくれやす。」
つく〴〵と打守り、
「益々宵て居る。」
「ラムネはんにだすかいな。」と思ひ切つて云つたるやうに、お房は遣瀬なく俯向いた。
「何うだ、お前の名はお房……、」
「は、」
「お房さんといやしないか、」
「……、」
「然うだらう。遊つたか。眼なものを無理に女房にしようとは云はないから、申つたら申つたといひ給へ、何うだ。」
「まあ、」とうつかり顔を上げ、女は驚いたやうに胸を反して、下についた手に力を入れると、小犬は袖の下でクヲと鳴いた。
「申つたか。」
「何うして御存じだす。」と目を圓くした驚き顔、うつとりとなるばかり、いはむ方なき、靨窪さ。
惚然とした趣で、思はず猪口にかけた手が震へた。
口の初で、
「こりや足許が海にならうも知れない。」

十五

「今度は、姉さん、何、お房さんが申てるんだ。さあ、」
お房はつい居て、衣紋を直し、更まつた形になり、
「それでは言ひまつせ、一時待つておくれやす、」と、土間を探ると、五ツ六ツ、又三ツ四ツ、其處にも二ツ彼處にも一ツ、自然に零れたか、取詰めたか、松毬の數ある中から、お房は一ツ拾ひ取つて、撮んで耳を寄せて、月ある方に、雪のやうな顔を傾けて、ぢつと聞く思入をして無言。
「や、」
と叫んだ、けたゝましい客の聲に、お房は振向き、
「何だすいな、」
「そりや何だ、何だね、其は、」
耳のあたりに捧げ持つて、
「これだすか。」
「榮螺の殼ぢやあるまいな、」
いふことの餘に唐突であつたのに、客も自分で氣がついたか、
「然うだ。山の中の國だつけ、」と殆ど無意識に呟くのであつた。
お房は串戯と聞いて取り、
「榮螺ッて貝の事だすか。」
「貝だ、貝だ、相模の海の名物だが、其の松毬を何うする、未だ焚火をするには早からう。」
「此な、犬の子が皆嬉しがつて手玉を取ります因つて、拾うて置いとくのだつせいな。」
「だつて、耳に當てゝ何か聞くやうな事をするではないか。」
「あのな、此の邊は、森として居ます因つて、夏でも颯々と松の風が吹きますのが、心に染み込んで居るはけに、此な松毬を恋うしてな、」
お房は眞顔で打傾き、
「耳につけてぢいッとして居ますとな、松風が聞えまつせ。其にな、もし、夜さりなんぞ寂しうてなりません時、一心になこれを耳にあて

て居りますと、亡なはりやしたお母さんの聲がして、遠くの方の、百里も千里もある處から、あの、何かいつてくれやはるやうな氣がしまつせいな、」

ほろりとして聲を震らし、

「それやはけ、今な、あなたの、名を聞いて見ませうと思ひまして。」

然も思入つた狀して、頷き、

「然うか、いや。そりや聞えよう。去年海端では榮螺の殼を耳にあてゝ、浪の音が聞えるといつた人があつた。成ほど、松「毬」には風の音が響くだらう。どれ、僕にも一ツ貸し給へ、」と床几を放れて、ずり落ちるやうに土間へ片膝。

「あれ、おめしものがよごれやす、」と帶に挾んだのを、引出して拂ふとて、はらりと開く朝顔集。

「構やせんよ、」と退けようとして、端と端を、心々に、放とならず放しもせず。

娘ははなじろみて月の隅てに袖屏風して左の耳。男は別なるを手探りに露の小笠の草枕、右の耳にあてゝ、目を閉ると、身動きに酔が出て、渡と全身の血が湧いた。動悸激しく胸を打つて、漂ふ船に乘る思、稻葉の白く風に動くを、打寄する月の浪かと覺えて、あはれ玉の緒もゆらぐかと、心ゆくばかり恍惚する、耳許に娘の聲、松「毬」の中に響いて、

「新三郎さん、」と確に其の人、

我に返ると、目の前にお房が微笑み、

「あたりましただすやろな。」

「え！」

「新三郎さんといやるお名で、あの松坂さん、屹とだつせいなあ。」

松坂新三郎——客は衝と立上つた。

十六

又拳手と床几に腰、はッとはずむ息繼に、注置の酒のさめたのを茶碗から半も殘さず。じりじりと膝を向けて、

「新三郎だ、いかにも松坂だが驚いたな。お前何うして知つて居た。不思議にも何も、殆ど言語道斷ぢやないか。」と詰寄らないばかりの劍幕。

お房は澄して、

「知つて居たのではないのだす、お約束の通りあてたのだつせ。」

「姓名ともに。當る譯がないぢやないか。」

「貴客やかて私の名を丁とあてゝだつせ。」

理の當然に一言もなく口を噤んだ新三郎は、しばらくして苦笑。

「可い加減に調子を合せたのだらう、眞個の名が、お房さんと云ふのぢやなくつても、其處はお世辭だ、はいといや其までといふものさ。」

「あら私嘘を……、ほんたうに房だつせ、あたたこそ可い加減なことおつしやるのやないのだすか。」

「正銘いつはりなし、本當だから尙驚く。理窟は措いて、大抵女の名は女なみに極つて居るが、男と來た日にや、權兵衛太郎兵衛から藤原の朝臣鎌足まであるんだから、まぐれあたりにも當らうやうは無い筈だ。」と半ば獨言のやうにいつて、とろりとした目で、くる〳〵と四邊を眺し、穩ならぬ面色で、

「まあ、可いや、何でもかまはないから、姉さん本當のことをいつてくれ。一體何だ、僕は今何うして居る。と恁う膝に手を置いて、床几に腰をかけて居るんだらう。」

「ほゝゝゝ、」

「串戯ぢやない、笑ひ事處かい、容易ならぬ次第だ。僕は死んでるのか生きてるのか。確に酒を飲んで居ると考へるが、まさか、夢ぢやあるまいな。」

「まあ、あんた、何うしやはつたえ。」

「待て、今お前がものを言つたな、確に。それ

から、先刻お前の名を當てた、あとで僕の名をすつかりいつたな、事實々々、正に事實だが、こりや何處だ、若代國若松だらう、福島縣會津郡。」

お房は素直に、

「はあ、」

「正に相模の國の杜戸ぢやない、さら〳〵鳴つてるが、風の音か。」

「もう秋の風だつせ。」

「海ぢやあるまいな、背後は、」と捻向いて、葦簾越に差覗き、

「なるほど、土手が薄原で、うしろの畠は唐芋か。」と又見直して視めたが、其處に人ありとは心付かず、葉がくれに潜んだのは、母屋にかくれて耳を欹てゝも、板戸が隔るので飽足らず、密に忍び出でゝ身を寄せた、お房が女房さんと呼ぶ女。薄に縋つて露も溢さず、靜り返つて居るのである。

「其處でと……、」

考へ、

「此の先に川がある、何といふ。」

「湯川といふのだす」

「湯川、可し、果して田越の川に不非。」

調子をかへて、

「橋があつたな、」

「涙橋のことだすか。」

「涙橋か、些と氣になるが、しかし、これも湘南の景ではない、奥の御堂も杜戸の明神ではないだらう。果して此處を會津として、これが夢でも現でもないとすると、さあ、遂解らない。不思議も亦極まるぞ。」

「何だすえ、相模だの杜戸だのといやはして、あゝ、何だすな、其の先刻のラムネはんの事だすか。」

「全く其のラムネだ、乃至又榮螺の事です。」

新三郎は少しく落着いた樣子である。

榮螺の殼

十七

「聞給へ、月こそ逆ふけれども去年の今日だ。相州葉山の濱、杜戸の濱といふ處で、丁度此の店と同一やうな葦簾張に休んだ事がある。ラムネも榮螺も其の店にあつたんだ。だがね、其處等のは、休茶屋といふのぢやない、衣類を脱いで潮浴に海に入る、濱水浴の先づ支度小屋といつたものだ。」

白砂の美しい波打際に八九軒、たゞ、葦簾で間を仕切つたのが一列に並んだが、七月も末だはじめつ方、殊に其の年は雨勝で、廂の都を通るゝほどの陽氣ではなかつたので、下櫻山、辻子の海、鳴鶴ケ濱、養神亭、日影の茶屋から葉山をかけて遊客の客も數ふるばかり。女波男波の拔手を切るのは、別莊方の坊ちやんより、土地の小兒が多い位。況して通りがゝりに衣類を脱いで、貸手式に張殷で、さつと一浴の如きは皆無なので、數多い其の葦簾張に、客を呼ぶものゝ姿もなかつた。

中に一棟、左右から、四ツづゝ數へて眞中あたりの葦簾の蔭に、夕陽の春く沖を視めて、葉山に月は白いけれども、軒に夕顔の花ちなく、黄昏の風情あはれに、女一人、悄然ゐんで居るのを見て、新三郎は、其の時、近きあたりの知る人の別莊に逗留中、晩餐の小鱠鮮し、、猪口を過した醉心地、もてなされに事が足つて、早附木なぞは忘れて出たので、月の出汐の波の色、此處で一服と思ふ蟹草の火も欲しければ、喉も渇いた折であつた。

「直ぐにラムネをいふと、其の娘がかぶりを振つて、これはお止しなさいまし、今まで一杯に西日がさして、此の小桶の水は湯のやうでございました。冷して置きます中のラムネなぞは、

沸いたりさめたりしたのですからお身體に障りませう。店を出します時、村の衆が貼片がはりだといつて覗つてくれましたから、砂地に出して置きますが、賣物ではない、といつて、何の通りがゝりのまぐれ客。際物でお鳥目さへ取つて了へば、あとで行倒れになつたつて構はないものを、殊に又盛場の人氣の惡い中で、深切に茶を沸してくれる。其もね、砂の上へぢか置で、七輪があるばかり。螢火ほど殘つた中へ、消炭を拾ひ込んで、腰の折れた團扇は、前に使へと出したあとだから、かけがひの無い蒲鋒小屋、姉さんは浴衣の袖で煽いだではないか。

早く飲ましてくれる氣で、然うやつて氣はあせつても、心は落着いた女と見えて、僕が煙草を飲まうとすると、杉簪の尖の煙つたので、煙を挾んで出したんだが、固より火鉢なんぞ無いのだから、其處でそら先刻から、大層評判になつた其の榮螺だ。」

新三郎は飲込ませるやうに笑を含み、

「ね、又何につかふのか知れないけれど、此處に松毬のあるやうに、其處ぢや榮螺の殼澤山。やがて椽の苔が生えて、紅蟹が棲みさうな、竹の柱の土臺にしたのが、怪しからずごツ〳〵して、怎う昨夕あたりは潮が來てかぶつたかと思ふくらね、尖々に露を含んで、涼しくかさなり合つて居たんだね、其の中から一ツ取つて、娘が今の煙を入れて、床几の上へ寄越してくれた。唯恥しさうに見えたつけが、何の極りの惡いことがあるものか。

玉を敷いたやうな美しい白濱を、蒸籠越。葉山の月が、香のするやうに眞丸く間近に出た。波はあつても夕風の空。風は嘘、片一方の杜戸明神の眞暗な松からばかり吹いて來るやうな、何ともいはれない心持の好い時だ。榮螺の殼の煙草盆は、人の別莊に客で居て、綺麗に灰ならしをかけた、落脚に紅をつけた艷の火入から、密と吸ひつけて、おかはりといふ手附をしつゝ、灰吹の蓋をあけながら、紅革の厚湯團、結構ぢやあるけれども、眞四角に坐り込んで、えへんなんと、嚔を咽喉へ引込ませるとは雲泥の相違。

あゝ、雨露さへ凌げたら、此處で世帶をしても一生は暮される——姉さん、醉つぱらつて云ふのぢやないが、仔細がなければ、僕は養子に、でもなる氣になつた。」と滿を引くこと如件。

十八

「するとね、土瓶の下を働いて居る女は、厌々とある髪を、結はない櫛卷で、海邊の女だから、お前さんのやうに色は白くなかつたが、襟許もすつきり。些大柄だが、仇氣ない、うまれつきを其まゝ野育ちとは見たが、實にしをらしい、引かけ帶がずり下つて、背中の伸びたのもすら〳〵と委よく、褪せた淺黄の下じめが美しかつた。

はい、お茶が入りました、と茶碗になみ〳〵と注いでくれたが、いづれ海水浴の連中が、赤裸で出入つて、手盛でがぶ〳〵遣ると見える、先づあの湯屋の上り場といつたやうな店だから、茶盆に及ばず、砂地へ蹲んだなり手で寄越す容子なんざ、十年連添つた女房ぐらね、微塵も色氣がない中に、口ぢやいはれない風情があつた。聾へて言や、紋着羽織で畏つて、庶の間の牡丹を拜見するのと、山路に行暮れて、薄と一所に寢るやうなもんだらう。

お手盆で換へて頂く、番茶の其の旨い事。

出花なり、醇覺なり、飲むほどに干すほどにだ、やがて土瓶が輕くなる、澤山御馳走をありましたねと、古風な氣取氣のない處が、柔く深切に聞えたので、又今更染々と顏を見ると、眉の濃々しい、鼻筋の通つた、目の涼い、但し瞼の肉が落ちて、うるみがあつて冴えないが、下ぶくれで痩せても居ない、目に立つのは唇の、寃然紅をさしたやうな、活々として居た事で、もし其の色が沈んで居たら、恐らく、髪をおろさない尼法師とも見えたらしい、寂しい女、それだけに何となくあはれで、こんな者でも力に成つてやりたい氣がした。

しかし效々しい働振、水をさゝうとして、腕まくりで柄杓を取つた、が桶に汲込んであるのを、土瓶にうつす時、眞白に澄んだのに、きらきら月がさすから、これは、海邊には珍しい、好さゝうな水だ、といふと、亡なつた親仁はこればかりが自慢でございました、唯今では餘所のお別莊のお庭の井戸になつて居りますけれども、擔で頂きに參りますと、先に居たものならば、とおしやつて、汲まして下さいますと、何心なく云つたやうだけれども、聞くものゝ身に取つちや、いかにも氣の毒に考へられて、酷く身に染みたもんだから、然うか、といつた切、何を思ふといふ事も無しに、默つて了ふと、女が纖穂がなかつたと見えて、其時だ。

又一ツ榮螺を拾つて、今度は菓子盆にでも使ふ氣か、微塵棒一ツ見當らないが、と思つたが、然うぢやない。

姉さん、先刻、お前が行つたやうに、其の榮螺を耳にあてゝ、ぢつと遠くのものを聞くやうに、恍惚して、やゝしばらく……だから、不思議に思つて尋ねたんだね。

然うすると、はじめは浪の音がすると云つた。氣を靜めて、何にも餘所の事を氣にかけないで、一心に耳に當てゝ居ると、底の底の方に、何とも知れない好い音が響いて、千萬無量の、しかし騷がしくない、寂しい美しい聲が籠つて、龍宮の御殿で、魚がひそ〳〵話をして居るのが聞えるッて、本當に確と信じて居るらしい、嬰兒のやうな無邪氣な顏。

無邪氣な心は、濁がないので、まるで、神か佛かと思ふやうな、尊いものだから、唯、あはれな深切な、優しい女と見て居た目に、別に、響へやうのない品のある處が見えて來て、些と行過ぎた考へぢやあるけれども、成程龍宮のひそ〳〵話が、榮螺の貝から聞えるも道理。四邊の景色も景色なり、此の月が隱れたら、麥も一所に、海の靄で、消え失せる、ものゝ精ぢやあるまいか、と思つたくらゐ。

其のくらゐなら、先方で承知をさへしてくれたら、せめて擔で汲むといふ、其の水桶をかついでなりと、一生を送る覺悟をして、二度と又例の落雁で煙草を飲むやうな、馬鹿なことをしなけりや可いものを、」

新三郎は足踏をして、我と我身をじれつたさう、

「其處が凡夫だ。」と肩を搖つた。

十九

「其榮螺を耳に當てた麥と、其の仔細を話した樣子のしをらしさに、僕は自分を忘れてね、更めて何かいはうとした。何か言はうとしたつて、更まつて些と變だがね、醉つちゃ居るし、人は居ず、濱邊にや、唯其の小屋に二人なんだから、まさか唐突にもいかんから、名を聞いた。何といふ名だつて其の女の名を聞いたんだ。」

新三郎は自分で當時の事をいふ如く、今も我を忘れて語つたが、急に我身に返つた風情で、目を睜つて、ものを見るやうにして默つた。

時に其處とも分かず、あたりめ草の中に、あはれに床しく、露が結んだ鈴の絲が、葉に濡つて搖ぐかと、微妙な聲が幽に聞えた。

「やあ、松蟲が鳴いて居る。」

お房も我に返つた狀で、思ありげに其方を見返り、

「佳い聲で鳴きまつせえなあ、あれ、お聞きやす、遠くでも聞えますやろ、毎晩な、私唯一人して此を聞きましては、泣いたり笑つたりしまつせいな。今夜はあなたが來ておくれやして、

おもしろいお話をしてくれやはる因つて、今まで氣も附かずに居ましたの、もつとお酒つけますせいな、遊んでおいでやして、あとを聞かしておくれやす。歸りやはると、又蟲の聲ばかりだつせ、淋しうおすけにな。」と、便なげに打見た目に、涙含まぬばかりであつた。

頭を振つて、

「いや、未だ其の仙に松毬があるぢやないか。それ、おつかさんの聲が聞えるといふ。其に上を越したものはないではないか。」と酔つた人のいふとは聞えず、逢親の僧の、識、德ともに秀でたるが、女人を悟すが如くに言つた。

お房も目える狀にいや〳〵して、仇氣なく、

「否な、何にも思やしませんで。一心におつかさんの事思ふ時は然うだすけれど、さきへな、蟲の聲を聞きまして、あゝ淋しやと思うたら最後だつせ。どないしたつて、矢張蟲の聲ほか聞えやせんもの。」

新三郎は、やりちがへて兩の腕で胸を抱いて、

「不可ん、何故然う泣かせるやうな事をいふんだ、女の兒のいふことでな、涙ぐむのは、大日本帝國御先祖から御法度だ。」

呵々と高く笑ひ、眦を切つてしばたゝき、

「しかし道理だ。迷つた事よりほか聞えまい。先祖、お前がするやうに松毬を取つて耳にあてた時は、海と山こそ遊ふけれど、相模と岩代と百里を隔てゝ、恋うも肯た事があるものかと思つた所爲か、しばらくは夢を見たやう、酔つてるためもあらうけれど、是許もゆら〳〵して松吹く風も波に聞えた。四邊が眞暗になつて、自分の居まはりばかり月で明う、大な光の輪で包まれた氣がする中に、向うむきの女の其の、淺黄の扱帶の色まで見えて、ぞッとする時、自分の名を呼ばれたので、はッと思ふと、振返つたのはお前の顔だつた。

それにつけても、榮螺の底に、龍宮の聲が聞えるといつた、其の時の人の恥入るわけだ。いかにも心に迷さへ無かつたら、自分がしても貝の中に、波の底の響がしたらうものを、幾と外に思つて居た事もあつたもんだから、其の方へ氣を取られて、直に其の蓆簾張を出て了つたがね。

僕の耳に響いたのは、龍宮の聲ぢやなくつて、ヴァイオリンといふ西洋の樂の調だ。

直傍の、杜戸明神の裏の、月の良い巖の上で、然るお孃さんが彈いて居た。卽ち僕が客に成つて居た、別莊の主人の娘にあたる。今度、此國へ見えた、姫様といふのも、場所は隱れて居るが、同一相模の海の、鎌倉長谷といふ處の別莊から泊りがけに遊びに來て居た。別莊の主人は、以前、矢張會洋の家來であつたんだね。

さあ、其のヴァイオリンの音に聞き惚れて、ふら〳〵と蓆簾張を出て了つたために、龍宮の聲は聞かずじまひ。」

二十

「何うだ、姉さん、まあ、お前は何方が好いと思ふか。なまなか其の西洋の樂を奏でる人が奇代の上手だつただけに僕、當分、いや長い事、丁度今月で滿一年。

正にヴァイオリンの音に迷つて居た。其がために又と得難い、龍宮の音信を聞かうとも思はなかつたが、あゝ。」

深く歎息して、松坂は床几に掛けたる其まゝ、居ずまひを正して打望む、路傍の松黑く、枝が亂れて、鶴ケ城は靄の中に包まれて見えず、空の薄曇に雲が動いて、過去つた幻の路を辿りつゝ語る中、水の透通るばかり明瞭だつた四邊のものゝ色は、朦朧となつたのである。

忍ぶには便可し、薄にさら〳〵と氣勢があつたが、蟲の音は處を移さず、思ふに樣子を伺ふものゝ、身じろぎをしたのであらう。

しばらくして、

「まるで夢を見るやうだ。」と、獨打棄つたやうにいつたが、氣をかへ、

「然ういふわけだ。榮螺もラムネも、これで皆分つたらう。其處でお前さんだが、度々いふやうだけれど、春恰好、容子といひ、聲といひ、唯些と小造で、年紀が二ッばかり若いかと思ふだけ、居だつて又失敬だが、假小屋同然。まあ、こんなに肯たものがあらうかと見て居た處だつたから、つい名をあてるのに、お房さんかといつた、房といふのは、其時の娘の名だから。」

「まあ。」と息をひくやうにして、下から上へ袂をお手玉、細く忙しく動かしながら、

「本當だすかいな。」

「嘘かも知れんが、當つたとするんだ、それが、お前は又何うして僕の名を當てたらう。」

「そりやな。」

と直に應じたが伏目になり、帶の横を輕くたたいて、

「あのな、松毬に聞いたのだつせ。」

「實際は。」

「然うするとな、お母さんが教へたのだす。」

「ぢや、先刻約束をしたつけが、其の母樣に聞いて見たら、何と、お前は女房になれようか。」

「……」

「僕の女房だ、卽ち松坂の細君だ。」と、新三郎は陶然として大に酔つた、前のめりにふら〳〵と頭を垂れて、確と兩手で膝を壓へる。

「可うございますともね、私あお媒妁をいたしませうね。」

と、朗にいふと、松蟲の鳴く音を留め、薄を分けたのは以前の女。

お房より新三郎の驚き、振向いて、酔眼をとろりと睜ると、簾越なり、草の中だが、曇つた空に、澄明く、目も眉も衣の色も、すらりと鮮麗な立姿。

「嗄、清瀧の女房ぢやないか。」

清瀧は樓の名で、東山の温泉宿、松坂の旅館であつた。

「ほゝほゝ、大芝居。松坂さん、今夜は妙な處で、此で二度お目にかゝりますね。」

惡權太

二十一

清瀧の女房輕く頷いて、あでやかに莞爾し、

「御免なさいよ。」とづッと出る。

途端に礒と身を伏せたは、猪が轉んだやうな、毛むくじやらの荒漢。

但其の身の輕い事、社の路の薄原から一段低い島のへり、五側ばかり植込の、繁つた唐黍の畑の中へ、土に生えた奴の兩脚、根こそぎに薙ぎたるばかり、もろに膝を折敷いて、風より高き音は立てず。足を踏張り、尻を立て、握拳で泥を摑んで、身體にびり〳〵と筈を張つた、髮赤く蓬に伸びて、肩に鱗のあるばかり、窪める眼、扇き鼻、唇を剝き反した——口や牡丹を吐かむとす。——

腰切の古單衣に、細の帶、脚絆ばきで、素跣足で、手拭を咽喉にわがねた、年紀二十有七八歳、獄ならば老人株、人間ならば血氣の壯者。薯を透して葉を通して、あからさまなる葭簀の中、ちぎれ〳〵に亂れかゝつた青簾越に覗くが如く、蝗の色に露の添ふのも、男女の委に影のさすのも、あからさまに、つい間近。

清瀧の女房の、松坂には見せじと忍んだ、後姿も、この方には指を伸ばして屆きさうな處だから、唐獨黍の軸を小指に爽に調子高な酔つた聲、女房、といふまで聞いて、眉毛の毛蟲打震き、蛇の舌閃いて、目の色の變つた折

から、不意に清瀧の女房が、聲をかけて露れたので、見られちやならぬと、土に匍つた。

傳へ聞く其の昔、肥後の御曹子爲朝に、獸の皮をひさいだる山男に似た古今の怪物、人か、あらず、獸か、あらず、惟ふに是、渡天の僧の法衣の袖に宿り來て、我が敷島の、山奇に、水の怪なるあたりへ、種子ならぬこぼれ種、雜の中に生ひ出で、あはれ民草の數には洩れず、親なく、妻なく、子なく、家なく、着物もない、が、雛を、岩代國會津郡若松なる野郎構の中に置き、身を摩利支天像の、御堂の椽の下に置いて、權太郎、渾名を岩越名代の繪、飯豐山の岩から岩、枝から枝を傳ふに發して、磐梯嶺といふ、あぶれもの、禽獸とともに人も知つて、あたりへ寄らぬ靈犬である。

卽是、お房を魅入つた色男で、もゝんがあと天窓から鹽をつけて嚙るかはりに、やいの、といふ次第であるから、思ふべし。爰に焦慮の心中。

其血湧き、肉動く、殺氣を籠めて、月が空に面を蔽ふと、銀河を斜に一刷毛颯と、末濃に野末に廣くなつた、眞白き雲の其の端から、ひらりと下立つたやうな、美しいもの、妾が、同一畑中の、唐蜀黍の繁の外へ。

水髪のつら〳〵と、鬢輕きみだれ銀杏、簪の玉尾に蒼く、露草一輪折りかざして、夜目に夕顏のほの見ゆる、玉の顏、雪の膚、羅を透く鶴の色、すらりと瘦せて、風采描ける天女に肖たり。白絹の襟に朱鷺色の無地の長襦袢、秋の曙、茜淡く眠れる如き薄鼠の縮に、白抜きの秋の七草、絲薄の穗は柔く、ふつくりとある胸をつゝんで、一本帶の垣根に亂れ、裳は婀娜たる女郎花、松蟲の影を宿し、桔梗の花袖に開いて、月の移るかと露に濡れたり。

片手に輝く錦の小包。上前の片褄を、密と片手で取りながら、湯川の岸から素直に、畦に通つた一筋道、枝豆青く植ゑたる中を、社に志す人か、薄に蟲を聞く人か、葭簾越の灯に路を尋ねて寄る人か、靜々と近いたが、これも松坂の高櫓に、不圖歩を留めて、やがて此と足を早うした。姿を見て、急いで、つか〳〵と寄らうとする、日の前に大蝦蟇の、四ツに這つた權太の形に、輕く退いて、敢て騷がず、右手の扇を颯と開くと、白地に羅綸の雁がねなり、半面に霧をかけて、見て、見直しに彳んだのは、秋山衣子、新三郎がお房に語つた、ヴァイオリンの名手といふのは、此の美人の事である。

怨恨

二十二

「私は何でございますよ、今日は嬰兒になりましてね、お城の姫樣が十八で、はじめての御入國だといつて、大層賑な儀があると聞きましたもんですから、町へ見物に出て參りましたのでございますが、松坂さん、人込の中でも何でも潛つて、見世もの、赤い看板だつて見る覺悟だつたものですからね、行きがけに此のお房さん許へ、蝙蝠傘なんか預けましてね、大層な意氣込で出掛けましたけれど、まさか小兒衆ばかり立つて居る、辻の手品も覗いては居られませんから、あの大町名古屋の龜遊軒の射術を貴方。

人立の中で見物をして、貴方のお手際を拜見したんでございます。

それから、貴方は、ずん〳〵何處かへ出て行らつしやるから、お後へつきまして、丁度可いお連だとは存じましたけれど、未だ昨今でございましてね、御緣があつてお宿を申しつかりましたばかり、そんなにお馴染でもございませんのに、お呼かけ申すも如何かと存じましたし、

餘り露骨で失禮ではございますけれど、ひよつとかして、旅の御鬱散に、廓へでもお出で遊ばすのぢやないか、もし然うだと御一所は御迷惑と存じましてね。ですが、私も別に何處へといつて當はありませず、最う其方此方、お房さんの許まで歸らうかと思ひまして、道順でございますもんですから、うか〳〵お跟き申して參ります中に、貴方は傍見も遊ばさないで、段々淋しい方へお運びで、到頭お城の中へお入り遊ばすのが、廣い大手先で、遠くから見えるぢやありませんか。

ぢや、何、おともをしてお連になつても大事ないと思つて、あとから參りますと、まあ纔の間でございましたのに、あの可恐しい草の生え。夜分の事なり、お姿を見はぐりまして、一番高い處の、靈藏の穴のふちで、姫樣と貴方と三人、妙な工合で、睨みツこで、又ばら〳〵にお別れ申しましたが、まあ、何だつてまた、夜分、あんな處へおいでなすつたのでございますえ。」

清瀧の女房は唯一ツある狹い床几に、新三郎と膝を組違へに、靜に煙草を燻らしながら、世馴れたもの、言ひやうである。

最初媒妁をと唐突に云はれたのにこそ、醉つた上にも返答に支へたが、斯の間に對しては、新三郎は敢て猶豫ふには當らなかつた。

「いや、鶴の城の一件ですか、ありや驚いたです。實に弱つたのなんのツて、全く意外だつた。しかし一人で遣つて來たのは、女房さん、貴女は豪い。」

「はあ、私は土地の者で、よく樣子を知つて居りますし、其に此の國ぢや、つい近ごろ、あんなに澤山忠義な方が、石になるまで、無念に凝つて討死をなすつた場所ですから、落ちて居ます瓦のかけらまでも、魂があるやうに言つておいでなさいますけれど、私は別にそんなに尊いとも恐いとも思ひません。」

「益々豪い。私なんざ土地ツ兒でもない癖に、非常に城の光景には恐入つた、唯一言もなく降參をして了つたです。失望落膽、恐らく男兒兜を脫いで軍門に降つたくらゐ、躬甲斐ない、腰の拔けた、ぐうたらな、馬鹿々々しいことはないですな。で盛に飲みます、けれども敢て醉はんです。」

「お房さん、大分作上つたの。」

「四本ばかしだすえ。」

「ざつと七合だね、それにしちや。何ですね、貴方、もつとお發しなさいまし。お房さん、お酌をおしな。何だつてあんなお城なんぞに降參をなすつたの。」

「あんな城！」

新三郎目を欹て、

「あんな城？　こりや怪しからん、僕をして降參せしめたほどの城を、何と、あんなとは怪しからん。」

「おや、大層御贔屓を遊ばしますね。それぢや貴方は降參でなくツて、お城の方へ裏切をなさいましたか。それでは此のお房さんは、お嫁に上げられはしませんよ。」

二十三

「はてな、するとお前さん方は、城に怨でもある人かね。」

「松坂さん、怨のあるのは私で、お房さんは、お城に憎まれて居る方です、どつちも禁物なんでございます。」

不審な一言、

「何うしてゞすか。」

「兩親とも殺されましたのでございますもの。」

「殺された？」

はい、あの御維新の時、官軍が瀧澤峠を越しまして、皆樣で籠城を遊ばす時でございます。私の兩親とも、水の出花と申したやうな、若

い同士で、然も貴方、私がお腹に居りまして、母が臨月でございましたが、敵が亂入と申しますので、拔身を提げながら父が母の手を引きまして、一先づ北邊へ落さうと出掛けます途中、ばら〳〵お城へ駈込みます、藩の方に出合ひますと、下郎何處へ行くと聲をかけたものがあつたさうです。わけを話して、しばらくお見免を願ひたいと、父が申しますのを、いや此の會津藩には、敵を目の前に置いて、夫婦で道行をするものは無い筈だ、車怯！　といひさま貴方、拔討ちに斬つたさうでございます。母が倒れましたのを、翌朝八百ものを賣りに參ります、野郎がまへの百姓が、此の騒ぎに荷を打棄つて負つて逃げてくれました、私を其處で產みますと、それなり母はなくなりましたさうでございますが、怨ぢやありませんか。足輕だつたと申します、二人扶持や三人扶持で、生命まで差上げて可いものですか。何ぞといふと忠義々々つて、鼠が犀がはりをしやしますまいし、お房さんの母樣は又、親御や姉さんが自殺をなすつた中に、死ぬのは厭だつて、泣いておいでなすつたもんだから、其の姉さんの姑にあたる、朝ツから忠義忠義といひつけて、武士のだの、梓弓だのと、歌なんぞ遣りました嬰な婆がね、おのれ、武士の道をわきまへぬか、弁錯してやらうと、長刀を持出した處へ、官軍方の長州のお士が一人飛込んで參つて、是非は知らず、若い娘が、取亂してアレ〳〵いふのを、三途河の婆のやうな切髮が、長刀で追つかけるもんですから、突然押へつける、ちえッ！　と殘念ですッさ。」

清瀧の女房は物語りながら、淺笑したが、薄く蒼く唇から氣を吐いたは、含んだ煙草の殘の煙。

「何うでせう。ちえッ殘念、子息の一生の心得違ひ、下賤の女を妻にしたれば、大事の場合に敵を詠ぜず、自殺もならず、介錯に除取つて、死後れ、汚らはしや、敵のために手籠になるか、と大粒な涙を流したもんですから、其のお士が貴方ね。

そんな中にも苦笑をして、血迷うたか、婆、手前幾歳になる、皺だらけの面を見ろ、いや、手能にされるの、辱を蒙るのと、咽喉を突いたり、舌を噛んだり、第一已達がついて居る、官軍を馬鹿にした譯だ。時々兵糧にやさしつかへても、同一日本人ぢやないか、誰も夕にかつゑちや居ない。可哀さうに、といつた彷には、すなほな髮の長いのを、疊に敷いて若い奥さんが、血塗になつて居ました。それは何です、此のね、お房さんの母さんの姉さんで、其の姉さんが片附いた後に、實家が死絕えたものですから、姉さんの緣附いたさきへ、世話になつて居たんださうですが、姑は大變な癇癪やきで苛め拔いたッて話ですよ。

ですから、其時たんぞも、武士の妻はこんな時だ。さあ、死ね、やれ死ね、ッて懷劍を出して押つけて、えゝ腑甲斐ない、腰拔けだ、車怯ぢや、死にやうを知らぬな、下司め、私が教へてやらうと、また婆さんの裝束が大袈裟でさ。死におくれたのが殘念なくらゐなら、さつさと舌でも噛めば可いのに、白無垢の三枚襲かなんかで、嫁の膝を片膝でおさへつけ、たぶさを摑んで、仰向けにして、自分も拔いた九寸五分の、咽喉佛の處へ密とあてゝ、怨うせい、怨うせいッちや、五分、一寸づゝ、ぐい〳〵、とせりあげて、目を白黑させながら、其の摑んだたぶさを搖るんですッさ。」

新三郎は目を睜つて、

「あゝ、樓上紅粧尙思還、尤だ、死ねない！」

と幾度も頷いたのである。

二十四

「お房さんのお母さんが、目の前に姉が修羅道

の責苦に逢ふのを見て、おど〳〵しながら、留めようとして傍へ寄ると其の懷劍を逆手に取つて、婆め、切尖を伸ばすから、寄るにや寄られず、縋らうとすりや、足を上げて、何を〆め直した白羽二重の蹴出しなんぞ踏開いて、威丈高になつて、さあ〳〵云つちや、」

女房はぐッと仰向き、蒼白な咽喉へきらりと、煙管の吸口が細かつた。

「自分で仕方をしちや、せり立てるもんですから、若い姉さんは、もう覺着になつて、目が眩んで、突伏した拍子に、婆の手が齒を壓へると、雪の樣な襟脚から、だら〳〵と染んで、下の疊がどつと鮮血になつたさうです。」

「おかみはん、私もう。」

「お房さん恐かないよ。……御覽なさい、ぢや、直ぐあとで婆が自害をするかと思ふと、何うして、今度はお房さんのお母さんに、また何ですわ、忠義が何とかで、お國のためが何うとか、何が何とかだから自害をしろッて、逃げて歩行くのを長刀で追つかけた一件でせう。

それから何だつたさうですよ、其の長州のお士が、姑婆を壓倒して置いて、女中、さあ一所に來な、何處か近在に知合があつたら、其處まで送つて行つてやらう、帶なんざ何うでも可い、髮も其まゝで、疾く、と出しなに鴨居にかけておいた槍を取つて連立つて、送り屆けて下すつたのが矢張此さきの野郎がまへのお寺です。

後に其のお侍は、左の手に書を負ひまして、其時、官軍で假病院に使つて居りました、同一お寺へ見えましたもんですから、お房さんのお母さんには、早く申すと命の親。

其處でこそ、命がけで看病をしてあげました。不思議な緣で、夫婦になつて、此のお嬢が出來たんでございますがね。

婆さんは氣が遣つて、戰爭の濟んだあとを、方々、取亂して駈け歩行いちや、忠義々々と口癖のやうに德舌り廻つて、お城を拜んで大道で土下座をしたり、棒ちぎれを持つて橋の上で水車のやうに振廻す。其の中にや嫁姑姉妹の事を、いや、淫婦だの、毒婦だの、敵の間諜だの、裏切だの、と惡口雜言。

後で聞いて私なぞが考へますれば、若奥さんの思だらうと存じますけれど、人氣の立つた時分ですら、武家方、町人、百姓まで、氣が違ふほど忠義な婆さん、活きながら武士の道の精靈だなんて大騒ぎ。

此娘の父上でございます……ね、長州のお侍も、もう身體が不自由なり、長々の浪人で、國には妻子もない身だからと、若松で世帶をお持ちなすつて、御夫婦で、其お狂人どのをねえ、まあ謂はゞ、姑さんの敵ぢやありませんか、それでも深切に引取つて、お世話をなすつたんださうですよ。

然うすると、例の大道へ出て、人立の中で、お城の方へ土下座をしたり、長刀の一手を御覽に入れたいのだから耐りません、跣足で駈出して仕やうがないものですから、少し窮屈な思をさせると、じれ込んで、梁へぶら下つたぢやありませんか。

やあ、淫婦の、毒婦の、裏切の、間諜の、非望人夫婦して、忠義の精靈にぶらんこ往生を爲せたわつて、土下座と水車にヤンヤ〳〵囃し立てた連中が、まあ何うでせう、人でなし、畜生とまで言罵らして、飯盛山、鶴の城の、お國の恥だなんて云ふでせう。

ぢや、其の人達が、それほどに大事がる婆さんなら、自分が世話をすりや可いけれど、暴れ廻る人間は銅像にも出來ませんし、いくら忠義の精靈だつて屎糞を垂れ散らしや汚いではありませんか。水一杯飲ませようともしない癖に、口に秘は立たぬと思つて、可い加減にする

が可いんです。

了局にゃ尾に鱚が添つたもんですから、段々に評判が伸はつて、未だ此の娘のお父さんが活きておいでの時分から、附合ふ者もなく、それこそ口を利くものはなかつたのでございますが――お房さん、今年で七年になりますね。」

二十五

「六年あとに父上さんが亡なりましてから、男親がないと、さあ、馬鹿にして、それまでは、唯向うから口を利かず、外で逢や遠くで指をする、偽へ行きや、そッぱうを向いて了ふぐらゐだつたのが、貴方、面と向つて、汚れるの何のと、云ふやうになりました。

若い方や、學校へ出て、これから軍人にでも成らう人なぞは、尚の事。お國のために命を擲げようといふ者があんな不屈の奴等、彷へでも寄つたら、そこから血が腐るなんて酷い事をいつて、其の癖何なんでございますよ、今時の人で、委しい樣子は知らず、唯汚れるとだけ聞いたのなぞは、惡い病の筋でゞもあるか、××遊ひの者でゞもあるやうに思つて居るのも深山ございます。御覽なさい、先刻も先刻です、店の前をひやかして、入ると汚れるからッて、向うの松の樹の下まで、塗盆で何うでせう、お茶を持出させて置いて、たゝき落して茶碗を舐つたちやありませんか、此の娘ばかりぢやない可哀相に犬の兒までが、うろ〳〵してさ、可憎しいッたらないんですよ。」

新三郎は深く思入つた風情で聞く。お房は顫に靠と袖。

女房は語を續け、

「あの人達に謂はせたら、私も矢張非望人の子でございます。松坂さん、ですから、お城に怨が有るぢやありませんか、お房さんはお城に憎まれて居るのぢやありませんか、ねえ。」

新三郎は胸に墨んで聞いて居たのを、一時に、

「いや、解つた、解りました。無法極とも。

凡て無理の絶頂といふお言だが、無理はない。如何にも僕には解つたです。不埒至極だ、そんなもんです。鶴の城に絶えない燐火は、忠魂の光だとばかり思ふと、大に違ふ、露となつても消え失せない、怨め涙もあるんですな。お說の通り、兩便や食物の厄介がないと思つて、無暗に忠義偽しにして、人の命を、勝手に自分達の廣告にするんです、己が身の飾にするんです。廣を拜むものは、内の女房で、招猫を祭るものは賣女の徒だ。嗚呼忠臣、楠氏墓、忠義は默つて行ふべし、不斷談ずるものではない、既に飯盛山の少年隊の如きも然うだ。えらい〳〵と譽め讃しにして、何故其の親に別れ、姉に別れた、心の中を汲んでやらないだらう。もし、人でも、討死をするのを拒んだものがあつたら、人は必ず、卑怯と言ひ、未練と唱へ、烈しいのは逆賊といはう。何の、會津が亡びたつて、土も水も滅るのぢやなし、日本の國が小さくもなるのぢやない、唯、若い同士の初產の兒は、死んだあとでは見られぬではないか、なあ、おかみさん。

國に殉ぜし自殺なんかさせられた日にや、懇しい良人の前途を見屆ることは出來ないぢやないか。女房を逃れて遁げたのも無理はない。自殺を拒んだのも道理だ。しかし、唯一途に忠義と心がはやつて、君のため國のために、夢中で討死をした人達は、なほ氣の毒だ。何爲なら、之は、戀も欲も知らない嬰兒の、呼吸の根を留めたやうなもんだから。」

二十六

新三郎は恨然として、

「いかにも城は怨むべしだ、僕も大に怨む、馬鹿に藩に障る、無法に憎い。」

清瀧の女房大に勇み、

「それぢや矢張、貴方も私どもの仲間ですね。まあ、嬉しいねえ、何うぞね、私も眼で聞きましたら、貴方まるッ切御酒の上とも思はれませんん、あの此の娘を見て遣つて下さいな。」

「もしな、おかみはん、」と慌しく遮つた。

「可いよ、人から退け物にされて、まあ、こんな可哀さうな娘はありませんよ。否、世間は廣し、會津ばかりに目は照らないとは存じて居りますが、餘所へ出すのは口惜しい、矢張此の土地で、ソレ見たかと、立涙なお婿さんを持たして遣りたいのでございます。

此の娘も、お母さんの亡なつたあとを、直ぐ野にするのは可厭だといつて、我慢して居りますし、私も悔しうございますから、敵も足蹈をしないことは承知の上で、故と、こんな人寄せの茶店を出さして置くんですよ。」

新三郎横手を打ち、

「其處だ、其處ですな、人生意氣に感ず。おかみさん　僕は、僕は今鶴ケ城を怨むべしと云つたですね、けれども、僕をして、當時此の處にあらしめば、譬ひ一合三人扶持を頂かずと雖も、敵の片足も城の土は踏ませたくない。命を擲つて戰ひます、即意氣だ。

今お前さんが、人の襟頸に附かないで、此の、人の嫁ふ娘を、子の如く世話をするのが意氣で、此の娘が父、母のあとを去らぬといふのも意氣で、故と茶店をさせるも意氣だ。お前さん方が、もし其時、今の年紀で、而して一國の城が落ちる場合に出會したら、恐らく、一番に討死をする人なり、自殺もする人だ。乃ち其の人の口から城を怨みだといふから、敢て咎めない、僕はいかにも道理だといふ。

而して、僕も大に怨むと言つた。言つたが、僕の此の名城を怨むのは、お前さんの怨み方と大に違ふ、違つて然も愚なるものだ。

お前さんは、意氣で怨む、眞實で怨む、情で怨む、間違つては居るけれども、人を動かす、一婦怒れば三年旱すッ、肝で可い。思切つて怨め、七生までも怨め、勇士も敢て瀋とする。

僕の怨方と來た日にや、意氣地なしの骨頂、のろまの素天邊、愚痴で怨む、卑怯で怨む、女々しく怨む、お話になつたもんぢやない。三尺の童子も何恥辱とする次第なんだ。

一體僕は、此の會津に何をしに來たと思ひます、個に鶴ケ城を見ようために來たのだね、又、何のために、此の城趾を見るのかと云ふに、一松坂新三郎、子は青年の詩人也。

と醉に乘じて言はうとしたが、心付いて、口を噤んだ。

「先づ畫師ならば、繪にする處、城の景色を描く處。僕のは商賣……といふのも變だが、畫師ぢやないのだ。青しく其の文字で城を寫すんで、歌にしてこれを謠ふんです――これを謠ふんです、はゝゝ、はゝゝ、」

擲つ如く高く笑ひ、

「藝數のない門附の言種のやうだが、是を謠ふんです。其の事を、御承知でもあらう、會津の門閥家の、秋山といふ、退役の陸軍少將に親まれて、わざ〳〵東京から出向いたのだね。何故といふと、瀋侯奥平伯爵家の會議、そら今度、此地に見えた、先刻城の中で、お前さんと三人出會した、那の竹子姫といふのが、此の暮に、矢張陸軍の現職に居る、然る侯爵の少佐の許へ緣組をするに就いて、其の式場で、持參の土產、舊領地、鶴ケ城の歌を唄つて、これを秋山の娘が、ヴァイオリン――西洋の樂に合せて、彈かうといふのだ。

其處で、貴方から來た結納の中に、其の方の又舊瀋の風景を、今東京で、飛ぶ鳥を落す、名高い畫師に描かした、一雙の屏風を贈つたから、此方も確乎頼むよと、秋山の爺さんが、念を推

して寄越したんです。

外國との戰爭も、算盤で出來る今時分。維新の節は東羽の中堅、蒲生氏郷以來世に聞えちゃ居るけれど、何のザジズゼゾの國の城一ッ。と若氣のいたり。いや、こんな奴は年を取つたつて、お若輩さ、と、横ざまに額の汗を拭ひ、

「其處で保養旁、東山の、おかみさんの許へ逗留をして、暢氣に寂轉んで居ると、一足後れて來た竹姫の同勢が、町方へ繰込んで、秋山の舊の邸へ御輿が据る。わッしよい〳〵とお祭禮騒ぎ、公會堂では其の秋山の娘の音樂の會がはじまる。花火が晝間ッからポン〳〵。御へ響くから、こりや午睡をしても居られまいと、其處で出掛けた。

道草に、急遊軒といふのかね、あの射的が幾らず命中といふので、自分ながら、勇氣凜々。城に差懸ると日が暮れたね、だが良い月夜だつたでせう。

月も良し、時も良し、さあ來い。矢でも鐵砲でも持つて來い。自分が此處に來たからには、薄も唯の薄にあらず、瓦も唯の瓦ぢやない、苔蒸す石垣にも句を刻んで、末世に傳はるものにしようと。」

我身ながらも軽母しかつた。

古城

二十七

時に氣清く、月涼しく、松の梢に吹く風も、颯と我が袖に音信るれば、直ちに微妙の調を起し、葉末に繁き夜の露も、分け行く扇にはらはらと散れば、忽ち五彩の珠と成り、葬の下に埋もれた瓦も、一度我眼に映ずれば金鍬形の兜である。萩の草摺、薄の旗。滿天の星、燦として、鎬を削るばかりの風情、古城の詩、呵して一氣にして成るべき也と、新三郎も意氣天を衝いて昂然として、あはれ此の城、掌に在り。開けば草となり、閉づれば句となり、唱ふれば韻、颯へば律、袖と草と風と月と劍と露と、餘々として相觸れて、其の聲皆金玉と、獨自ら許したのは、唯纎に、大手の跡なる、崩れた石垣の間を潜つて、左に外濠の一方をのみ見た時の感であつた。

眞先に驚いたのは急に眞暗になつた事だ。大手先から遠く見た處では、唯萎の好い松が二三本、低い石垣の纏つたのなんぞ、いかにもお手輕な。惡くすると、月夜に見る大川端の何處のか、妾宅の跡ぐらゐに見えたのが、何うだらう。急に然う暗くなつたもんだから、雲でも出たかと空を見ると、繁つた枝の裏に月は鏡のやうにかゝつて、其で光を透さないほどな森ぢやないか。

右にも左にも前にも後にも、蕭々と、五抱十抱の大木、何の事はない見上げるやうな、黒革縅の勇士豪傑に取卷れた氣がして、大に臆を挫がれたね。

木の香が身に染むと、草は深し、露が骨まで透つて、寒くなつて、急いで、潛り抜けると、直にまた明くなつた。

城の外で見たのとは、松の繁で濾しただけに、月の色も變つて凄い。

振返ると、森は又平常の樹立になつて、森嚴として、其の下を越した時は、幹と幹で十重二十重に取圍んだ下闇の濃かさ、凡十町と思つたのが、別に然までもなく、はなれ〳〵に、ばらばら立つて居るばかり。

月の影も根まで射して、細いが、下には葬の中を、踏分けた路もある。而して、寂して、今來た邊で蟲は靜に鳴いてるな。木精でもあるか、それとも、稍に五位鷺の巣でも造つた下を、運惡く通つて、怯かされたのであらうと思つた。

それから森を出ると、廣場だつたれ。夏草もずッと短く、内證か知らん、處々に、瓜だの、茄子だのが作つてある。歩行くと、尖つた角のある石、瓦の缺などが、蔓つた蔓草の中にこつ〳〵して、水溜が方々にあつて、些とも人の歩行いた跡がない、さあ、氣になるのは空井戸だ。

やさしくいつても、籠城の時分、官軍から打込んだ、大砲の彈丸が、黒煙を車でまはすやうな形になつて、轟と落込んだあとだけでさへ、二三丈窪んだといふのだから、容易いわけのものではないのだ。何處に、何十尋といふ深いのが、草に埋れて居ようも知れない、と思ふと、蔓が爪尖にかゝるにも足が竦んで、うつかりは進めぬ。其も見通しなら可いけれど、右からも左からも、可恐しい牙を喰違へたやうに、大石を組合せた、石垣が突出て居て、折曲る度に、からりと、其處らの樣子が異つて、こはれごはれの堂があるかと思ふと、根こそぎに棚の倒れた處がある。明くなるかと思ふと、暗くなる、吹く風も同一冷さぢやないやうな、それでも身體は汗になつた。側の埋井戸、拔穴、穿の類が可恐しいのだから、足にじり〳〵力を入れて、まさか這ふといふわけには行かず、成るがたけ、手に觸るものさへあれば、枝なり、石なり、力にして、縋り縋り一扉を一里と積つて、ものゝ五六里も足を引摺つた。確、七ツめを入つた角だと思ふ。何心なく前へ出ようとして、フト土の色の變つたのに心付いて、密と見ると、凹になつて、どんよりして、草の中に水があるやうだつたから、根强い薄につかまつて、伸上るやうにして覗いて見たんだ。」

二十八

新三郎は一息つき、

「今思ひ出しても悚然とする、而して頸を前へ出して、覗くやうにして、見れば見るほど、其の水の色のやうなのが、唯一個所窪んだだけではない、段々向うへ擴がつて、然も愈下へ低くなるやうだから、これはと思つて礫を拾つた。

密と向うへのせるやうにして、拋ると、ずぶずぶと沈んだやうだつたが、しばらくして、ヅンと響いて、谺を返して、どぶん、大洪水！」

ハッと思ふと、思はず、膝ががッくりとなつた。蹌踉と退いて、大盤石を眞平面、疊を合せたやうな石垣の石の、苔の滑なるにひッたりと背を凭せたのであつた。

來る時は、ひたすら路の心づかひにのみ、氣を取られて、一の扉、二の扉、唯假初に爪先上りとばかり覺えたが、思はざりき、疾、濠の深き事、足許に無慮、一千尺。

瞳を凝せば、倒に望遠鏡面の海の月を、夜の山の頂から瞰下すが如くである。

路は盡きたかと茫然として彳むと、石垣に添うて一條、八重葬の根を潜に、恰も鼈の脊いたやうなのが、蜒りながら、長く高く通じて居た。

人の通ふと見定めて、心强く、譬へば、主の棲んで色の睛碧なる、可恐しき淵を遠かる思ひして、汗ばみながらすた〳〵と上る。徑は一曲り、二曲り、三曲り、四曲り、天に黄金を鏤めたる、星の中なる七曜星、宛然行く人の胸を纏つて、緑もて手足を操る如く、ぐるりと土堤を七曲り。一點の北斗鼎座の處、其處が丁度行留で、四邊は板の如き野となつた。

時に、山あり、俄然として目前に近く、天の一方を塞いで顯れ、水あり、油然と湧いて、湖の如く、渺として碧を湛へ、森あり、雲の如く生じて、暗夜に異らず、三方を遮り終りぬ。

惟ふに人の爰に來るとともに、其の遂來り、其の森出で、山迫り、星近づいて、天に神將、樹に怪禽、土には阿修羅、水には龍王、劍を抜き、矢を番へ、牙を鳴し、鱗を立てゝ、葬々と鎧ひ固めた、實に〳〵、令百由旬內無諸衰惱

類の靈地や是。

さては木丸のあとかと思ふ。心一たび轉ずれば、奇なるかな、天の川、靜に流れて、山の麥、枝の掬、水には鶯蕉の眠ると見るまで、松に四疊半の響あり、樹立の外には遠花火、夜商人の聲かして、池の面、月の前、水淺黄の空を流れて、すら〳〵と螢が一ツ。

其の光、斜に上へ縺を曳いて消えた處に、一座、見上ぐるばかりの拳が見える。

新三郎は其處こそ、此の城の絶頂と思つたので、いで〳〵と心を勵まし、北斗の星に面を向けて、衝と進んで、手探りに草を攫でると、石で疊んだ段が知れた。

五段六段、段を攀づるに從つて眞直になつて、やがて胸を衝いて身の反るばかりに急だから、兎角に及ばず、兩手を撃手と草に縋ると、腕を卷いたは葛か否や、裏葉颯と白く亂れて、露のぱら〳〵と降る中を、吹ざまに燈と輝いて、眞蒼に飛んで亂るゝ螢、幾百といふ數を知らず。

途端に危く、眞倒に、手を放して落ちようとしたが、辛うじて身を支へて、新三郎は生れて以來、はじめて不知火の海の底を滑るが如く、雲の懸橋を渡るが如く、青龍の背に乘るかと覺えて、半ば夢心地に身を攀ぢて、纔に足を踏因めると、冷い火の粉の降るやうだつた、螢は一ツ消え、二ツ消えて縺いて一團に、倒に下へ落して眞暗な中へ、颯と入ると、穴の半が明く見えたが、驚破地軸を貫いて井戸ありと見る〳〵内、上から一なだれに蔓つた同一葛の葉の、葉うら、葉うら、葉うらに隱れ、葉うらに隱れて、纔に二ツ四つ消えもやらで、其處ぞ底深しと知るべをなすのみ。

二十九

新三郎は城の主の、我を捕らむための穽かと戦いたか、非ず。偖にいふ、猪苗代の湖の畔、湊村戸の口に通ずる抜穴か、非ず。これ蓋し三百年來、麗を貯へた穴藏で、籠城の折からの其の底を穿つて取出したが、水晶の如くに凝結したのを鶴の脚で突碎いて、辛うじて使用したと傳ふるのである。

此の穴のある處、天守の趾で、城中の絶頂であるから、一望、曠然、森邏と退き、山街と展き、湊は目の下にかくれて、新三郎は一人、雲の中、天守の上に、刻める石像に似て突立つた。

大手から望み見て、土塀六尺、屏風に過ぎず、躍らば越えなむといへる者、正に此處に於て可慚死矣。

山續き、峰連り、頂聳えて、近く層なり、遠く望み、城の周圍凡五十里、天然の城壁たゞに二重ならず、三重ならず、金屋あり、盤梯の峰は其處か。水星あり、猪苗代の湖は彼處か、近く越後の飯豐山、遙に日光口、宇都谷峠、見果てぬいろ〳〵の雲形も城の模樣に異らず。

「ねえ、おかみさん、今夜これで二度蠱つた。丁度先刻、穴藏の絲で、お前さんに遇つた時も、白い旗のやうな雲が、銀河と一條ならんで、一條ずツと開いて、花乎月を隱して居たらう。

もう氣が遠くなつたやうに、餘り大きな城の景色に、見負けた僕には、晝だか夜だか解らなかつた。

唯其、熊ケ谷をはなれるとすぐに藏、奥州の入口からづッしりと大きな重いものゝ坐つたやうな、其ばかりか、梟は鳴く、朽木は光る、見晴の田圃にも、那處此處、灯か、それとも鬼火か、血か骨かと思ふと、又野にも山にも、敵の旗が群つて居るやうな氣持がする。」

地の底には喊の聲。

其處に立つは我ならず、正に一個史中の人傑、結束して此處に上つて、山野を瞰した敵に望み、白旗を振れば藏となり、黑旗を動せば夜が來るやうに思ふと同時に、

一迚もいかん、とても僕のやうな者が、此の城を文字にうつして、ヴァイオリンの音に合せるなどゝは思ひも寄らん。諦つて人に聞かせる處か、助けてくれを呼んだつて、聞えやしまいと失望した。

いかに、自分を知らねばつて、ぬッと押し入つて、然も夜、天守まで登り詰めた、酒亞々々さが可恐しい、と恐入つて氣可憚しく、穴へ入りたいやうな氣がして、しばらくあの腦藏のふちに、腕組をして俯向いて居た。

串戯ぢやない、全く、其の、弱い螢の光にも引入れられさうになつて成らないから、持て、こんな意氣地なしは死ぬも可いが、」

新三郎は屏を噛んでいつた。

「忠臣義士が討死のあとだ。臆病ものが交つちや、嘔迷惑なことだらう、と、やう〳〵額を上げて、見ると何うです。」

我が影ならぬ女の姿、朧朧として二ツの幻、雲に漂へる趣あり。

思はず、衝と眞直に立つと、一人は左へ、一人は右へ、今一人は其の右へ、おされ〳〵にぐる〳〵と、巴の如く穴藏のふちを、一目はりづゝ、正に二度、いづれも顔の色眞蒼で。

三人、背石になつて立つた、一呼吸で、ばたばたと青しく倒れようとした時、凜として清しい聲で、

（此處へ來たは誰だえ。）といつた、（此處へ來たのは誰だえ。）といつた、凜とした清しい聲で、（此家へ來たのは誰だえ。）といつた、いつたのは竹姫であつた。

二人はハッといつて土に手をついた。いづれも魔所だと知つて居たから、兎に戰氣に顔を見ながら、不思議の邂逅に言を交はさず、無言のまま物別れに、前後して城を辭した。中に就いて最も偉裕のあつたのは竹姫で、こゝに坐して鬼神にも齊眉かれ給ふべき、女性であるから。

三十

「言語道斷、女の子に叱られて、ハッといふやうな野郎が、これ、豆腐だつて、旨く切れようの道理がない、況やだね。

何あとで考へると、件の姫公も、可恐しい紛れにあんな事をいつたのだらうけれど、何うしたのか、あの時は、何故此處へ來た、と一言いはれて、實際思はず天窓が下つた。

其がといふと、今いつたやうに、兎……おやない、此の麥藁の安帽子を、向うへ投げて降參して、聞く打てゝ居たもんだから、はッ、はッてんだ、三太夫、」

自ら嘲るが如くに、

「癪に障るぢやありませんか、僕、我知らず土下座をしたぜね。

姫公が又驚かしやあがつて、全く其の時は、僕を叱咤すべく、天守のあとへ天降つた、女神のやうに見えたんです。

名代のお轉婆で、人さへ留めなきや馬に乘つて、猪狩にも出かねないんだから、大方、人の寄附かない城へ、づか〳〵入つて來たんだらう。

だつて豈夫、其の人だとは思はなかつた。勿論顔は見た、顔は確に姫公の顔と見た。そりやいつも一所に傳舌つたり、秋山の娘と一所に、三人で、氣障だね、江戸の市中を下可愧しくもなく、馬車に乘つて歩行いた事なんぞあるんだから。第一。そんな心がけだから、城を見て恐入るのだ。

ね、此處だ、聞給へ、先刻、お房さんに話したのを、お前さんも聞いたでせう。そら、榮螺の殼の一件よ。

青天井も同樣な、濱の茅蜩に世帶を持つて、女房のくれる貝殼から、龍宮のひそ〳〵話を聞くことが出來るやうなら、何の脊津の小城一ッ、手に唾して取るべしだ、驚くことは此ともも

ない。」

古城の歌我に於て何かあらむと、新三郎は惘然として、

「然るに、其をです。其の柴垣の蔭は打棄つて、杜戸明神の巖端で、別莊の令嬢が彈ずるヴァイオリンの音に駈けつけて、いやはや、同一巖に腰をかけて、ウン成程など、隨喜涕仰を遊ばすやうな料簡方だつたもんだから、姫公の馬車に合乘を名譽と思ふやうな事になる、其の合乘を名譽と心得る始末だから、おかみさん、僕今姫君を稱して姫公といつた、いつたが、今夜がはじめてだ。現在、先刻までは奥平伯爵の姫君と思つて居たね、姫様といつたですよ。

何うです、其姫様が御婚禮のひろめの席で、唱ふ歌を、仰せ畏んでこしらへるのを、天晴名譽と心得るやうだから、いざとなると、松風の音にも腰が抜ける、鳴鳴の聲と聞えしは松風なりけり世の中はだ。然も何だと、口約束をした汝が嫁が西洋だらうが、何だらうが、絲に合せてチンなどゝ、御入來のお客様のお聞きに達しようといふんぢやないか。

何ともどうも、嫁のろの隊長、二本棒の鱗棒子だ。男子天窓に油をつけて、滿座の中で、汝が嫁の絲に乘せる歌をつくらうなどゝあきらめたら、首くゝりの他に何が出來る、大きな嘘だつて出やしない。況や古城の歌をやだね。

切めて、切めて、龍宮の聲を聞くことのならぬ耳でも、城へ入る前に此處へ來て、お房さんの松毬から、風の音を聞いて說いたら、恁麼にだらしなくはなるまいもの！

悔、悔しいが仕方がない。一瞬地に塗れて、又再擧を計る勇氣なしだ。しかし何につけても、姫様や秋山の娘は來魔だ、二度と又顔を斷じて見ない。で、此のまゝおかみさん、東山へ一所に歸つて、翌日は東京へ出発だ。かけおちです。

敗軍の將は共に兵を談ずべからずだけれど、姉さん、君のお酌を頂む。いかにも松毬が氣に入つた。蘇つたやうな松風の音だね。大きいもので波々と一ッいかう、敢て玉手を勞する、呀、構はず、嬢を倒に持ち給へ。」

姫神

三十一

「あれ、松坂さん、何方へ。否、此のまゝお歸り遊ばしては、此の娘が可哀相でございます、お嫁約人なんですもの、默つちゃ居られません、お聞きになら私の方がいたしませう。」と輕く留めて打微笑む、女房の袖の端を、お房は下に居て、引いて、慌しく、

「もしな、おかみはん。」

新三郎は左右を見遣り、

「いや、何處へも行かない、何處へも行かないが、こんな話を、面と向つて遣られちゃ、僕だつて大いに照れる。あとでよく姉さんの氣も聞いてくれ給へ、僕は心の變らないのを、神明に誓つて來る。」

かたゝ〳〵靜に其の胸を鎭めようと思つたので、森の中を透して眺ねた。

「お堂は誰を祭つたんだね。」

「摩利支天様ですよ。」

思はず、

「荒神だ、醉つて居ちゃ失禮か。」

「否、此處の摩利支天様は、優しい、天女の御像で、殿方の弓矢、劍術、女の針仕事まで、一切、藝事をお授けの御願だと申しますよ。」

「南無、藝術の、はッ。」

頭を下げようとして、其まゝ、よろ〳〵と前へ、新三郎は扉を出た。

「謹んで隨緣し奉らう、おかみさん、直ぐ歸る。」

「行つて入らつしやい。」

「お早く戻つておくれやす。」

虜中白骨行鹿杙
樓上紅粧尙思歸

「キーッ、」

きり〳〵と歯を噛む音、飯嚢嵐の惡樵太、五尺の鐵砲の肩を入かへ、鉄口を今、御堂の路へ獨出た、新三郎にじり〳〵と向けた。

背後でばちりと扇を疊んだ、秋山の令孃衣子は、靜に提げて居た、錦の袋、ヴァイオリンの小さな包を、急に袖の下に高く抱へたのである。

當時樂壇に美名を馳せて、斯道の工匠といはるゝ人、今日故郷の公會堂に、小學校の生徒の唱歌、教會連の讃美歌をまぜた、女教師のオルガンなど、十數番の番組の其の眞打を加へ勸もせず勤めた歸途。

裏の畠でポチが鳴いたり、向うの山へ鞭が飛んだり、エン、ヤラヤアと腕車を推したり、耶蘇が耶を清めたり、無山かけたりする對手の、奏樂者お衣さんは、氣の毒で見て居られぬと、臨席しなかつた姫の、鶴の城の拔け駈なんぞ、衣子は夢にも知らないのであるから、其の姫のために城の歌作らむと、先んじて會津下りをした、人も知り、瓦に許した新三郎。扨て姫いよいよ入國して、輪袈裟で何しする中へ、先生飯出坊さんまで、全市鼎の湧くが如く、菩提所の御家老様のお娘御、江戸さ一番の藝者を拜めとどいや〳〵、停車場のやうに寄り來る中を、風と腕車で駈けぬけさせ、灯しかさねた軒提灯の、七ッが三ッ三ッが一ッ、いつか背に遠花火、橋近うなる、畑の彼方に月の森あり。

傳へ聞く野郎構の摩利支天は、姫神にておはします、文藝守護の御願、手習するにも、文讀むにも、裾さきの針を持つにも、幼き時から信仰して、甘えるばかりに願ひし御堂。

人は知らじ今夜の会衆、當代の學者、學生、紳士、貴婦人萬衆が招手の中に、上野、神田の大會に、奏づる時の此にあらず、我ながら自ら許す、心清しき出來堂も、靈の前に、跪きて、鰐口の鈴の緒に繰ると、おなじ思ひのしたればならむ。

あら尊や。十年の苦學ありとはいへ、ボーゲン（ヴァイオリンを奏づる弓）の持方一ッ習ひ得しさへ、皆姫神の御利益。

三十二

薔薇の雪の薫る時、電燈の花の輝く時、女王の如く迎へられて、自ら學べりと思ひつゝ、己が姿を水鏡、うつす高峰の月や忘れし。

忘るゝとしもなけれども、年久しうして故郷に來て、取紛れたりとはいへ、未だ御堂にも參らずと、湯川の瀨の音、松の風、森の影空に濟み、郊に星の露を眺めて、衣子は悚然と寒くなるまで、尋く長く勿體なく、あはれ懷しくも床しくなりて、心漫に腕車を下りた。

其時、深靴をついて下りたが、川風颯と袋を吹いて、袂涼しく肌若く、其朱舞色の長襦袢も、秋の草の紹の一重も、唯肩にかけて朝霧を身に絡うた心持の清々しく、胸下駄も浮いて輕きに、土筆菫草に腕れたる路なり。舊より仰中の薄を分けても腕車が通るのではないのだし、御堂へ參つて裏路から、東山もつい近し。待たせて置くに及ばずと、供の車夫を歸さうとして、願ると、畏つて母衣を撥ねたが、讃本を包んだ風呂敷包を、腰掛の中へ入れようとして、

焦茶の天鵞絨の高帽を外す時、膝の上に乗せて居て、今下りるとて差置いた、ヴァイオリンを、眼迄へ心なく下したのを見て、自分も人も蹈む處と、衣子は不圖氣になつた。

其のまゝ腕車に預けて歸すが、心無いやうに思つたので、取替へて涼傘を。

ヴァイオリンは衣子が自分に。それから御堂に詣づる路、幼稚染の畑を縫に、枝豆の黄影を拾うて、耀に染む夏の月、遠音に村の若者が、妻を呼ぶ尺八のをかしき音も、姫神の御前に導く、草刈る童の笛かとばかり。

衣子はいそ〳〵と蓮歩を運んで、ぱッさり行當つた唐黍の自然生。

滑つて土手へ上らうと、見るや向うの薄の中に、行燈に青き馬追の宿るやう、一軒、月に草簾の茶屋。草の茂にあからさまであつた。

時に男の高調子、東の間も忘れぬ聲、後姿も正に其の人。

清瀧後の畫寂が覺めて、月の渭川を過りしが、さるにても微妙きかな、御堂に參るは我がためのみか、雪にも花にも手を携へて、おなじ園生に遊ぶ人の、冥福をともに祈るにこそ。しばらく逢はぬ戀人なり。衣子は飛立つ心を慎めて、暫く不意を打つて驚かさむ、揮手からか、大手からかと、四邊を眴すと不思議の怪物。

飯豐猿の椎太である。

つまも離れる草簾の中へ、敵意を挾むに相違がないから、衣子は、忍びやかに、樣子を見て居た。然るに清瀧の女房が、過去りし物語と、新三郎が鶴の城の述懷、とは、彼一句、是一語、緘めて濃かなるものであつたが、時間は半時に滿たなかつた。時々男の爽なる聲、衣子には意を悔へず、きれ〳〵に聞ゆるばかり。唯醉へる事のみ明瞭に知れて、これを其の人の理に服と。柳屑を寄せるばかりであつたが、しかし、其の間に椎太郎が氏せる最期は、あまたび衣子の見る目を驚かしたのである。

他なし唐黍の莖を、向齒に噛り切つて、密と手で倚にしたのである。衣子ははじめ、土を嘗めるのかと、傍目も觸らず視める間、泥に片頰を埋めながら、犬が干物の骨をしやぶるが如く、がり〳〵と喰ひはじめて、やがて根を放すと、横にして、膝を立て、兩手で握つて、穂の下へかぶりついた。が、頭を捧つて喰切つて、殘さず葉を拐ると、づんどにした青い軸、手に長きこと約五尺。

べたりと卻却ひ、兩膝を再び折敷き、胸にあてゝ、眞直にして、尖つた先を、衝と件の簾を的に差向けた。お房の袁の動く時、新三郎のものいふ時、清瀧の女房と、いづれを打たむと三人の一人、迷ふか銃口をまはしながら、眼を光らし髪を動かし、足を踏ばり、身もだえして、手許の痙攣、息を白く、消すまじと、吹いて、フッ！　フッ！

飯豐山の獵夫は、瞋恚嫉妬の炎を吐いて、つらき女か、憎き男か、とりもち都の女房か、唐黍の鐵砲に吐く呼吸の火繩をかけて、唯一發と狙ふ身構。詩吟一聲、新三郎が床几を放れて路を出た時、肩を搖かへ、瞳を轉じて、驚破！

衣子は見る目も危く、堪りかねて、トン、と足踏をして、つゝと出た。

惡椎太驚いてヌックと立つたが、簾の下に犬と寝るから其の女主人の家主樣、摩利支天の御像見るやう、麗麗に氣高い、姿を一目、あとしさりをして、白眼、唐黍の銃を投げると齊しく、踵を返して背後影、猿より疾く見えずなんぬ。

簪の質

三十三

「あなた、さ、お藥、あとで冷水を召食れ、さあ。あなた。」

水呑を片手に、片手には、露の小粒の藥を据ゑて、衣子は、新三郎の然も痛苦に堪へないやうな、眼を塞いだ面を覗き、

「まあ、苦しさうだこと。松坂さん、あなた大層俳つたのね、一口召食れ、清心丹ですよ、合藥ですよ。」

五三の桐の定紋を、金蒔繪の蝴色塗の香箱は、藥を振出したまゝ、しまはないで、檻襤褸の御守殿持の紙入と一所に、淺黄の絹縮珍蝶々を白拔なるを、心なしの太鼓にきりゝとしめた、帶の間に挾んで居る。新三郎の口に寄せた藥の色は、薄曇りの月に、指環の寶石は、本堂の狐格子の蔵の中から一條さし出づる燈明の灯に映じて、其に燦然として輝くのであつた。

新三郎は階の上の眞正面、觀音開きの片扉に、ぐッたりと背を凭せ、蹴居に腰、兩手を膝頭に組んで、砂だらけの廻廊に脚を立てながら、仰いで、眉を顰めて、幾分の冷さを得むと欲するやう、後腦を板戸に擦りつけて、切なさうに口を利かず。

彼はお房の莖簾張を辭して、森の下を一文字に突進して此處へ來ると、はッと勢よく禮拜をするや否や、はじめから恁る體裁であつた。

衣子は惡椎太を見送つて、横に薄原を拔けると直ぐ後について來たのであつたが、二三度聲をかけても返事せぬ、新三郎の樣子を見て、藥をと思ふ、水がなし、手水鉢は木の葉の下ずみ、心づいたのは莖簾の茶店で。

それから御堂を伏拜んで、男の傍へヴァイオリンを差かけると、「扇を帶に、俯向いて深くさしたが、急いで引返して駈出した、おとなしやかでも、學校育ち、恁うなると、やがて、水呑と、もう一ツ、華鑑を借りて戻つた、疾い事。

新三郎は其の間に、一度眼を開いたが、下蔵を彼方に走る秋草の妻を窺はむとはせず、懶げに、じろり、彷なるヴァイオリンを一日見て、又眠る、酔に蒼ざめた顔の色は、一層慘憺たるものとなつて、無量の懊惱を露して居たのであつた。

「あなた、あなた苦しいの、又いつものやうに我慢しておあがんなさい。身體を痛めますから、」

身體を男の横にして、

「飲まして上げませうか、一寸、いつか貴下、矢張酔つて苦しがつた時、姫樣から紫雪を頂いて、夢中で姫樣に背中を叩かしてさ。そら、あとで耳盥を見て大テレに照れちやつて、この藥は紫の雪ですな、お手づからでなくッては頂戴出來ない、天上の靈藥、恩賜の紫雪だつていつた事があつてね。

そんな窮屈なんぢやありません、私のは一寸す、君に奉る御藥よ、胡蝶と申す女でなくッちや厭ですか。」

警句一番して莞爾すると、藥は吸ひ込まれたやうに美しい掌から手も動かさず男の口。

ガリ〳〵と邪險に噛んで、唇に近かつた水呑からがぶりと一杯。

咽喉に支へたか、がぶ〳〵と飲んで、ごくりと通つた。

新三郎は我知らず、水呑を取るに先んじて、衣子の手首を摑へたので、纖き腕は力なく搦れて、水は膝へざぶりとかゝつた。

故とたしなめるやうに、

「亂暴ねえ、御覽なさいな。」

といひながら左の袖を上へ上げて、輕く振動かすと脇あけから、ちぎれたやうな襦袢がこぼれる。

「おや、手巾を落したよ、」と、直にかけた男の膝、朱鹿色の霞を隔てゝ、衣子は密と手を取つたが、水に濡れたかヒヤリとした。

「冷いことね。」

三十四

縞袴の袖の溢れたまゝ、はら〳〵と頻かしい、年紀も二ツ三ツ少やいで、街と廻廊を彼方へ去つた、欄干の横木十字の角へすらりと立つて、乘出すやうにして、高く月に水呑を透かして、斜にして、くるりとまはして見た。

底にまだ殘つて居たから、猶豫はず、ぐッと干して、不圖、

「水杯ね、」

と思はずの振で笑つて言つたが、心付いて、

「おゝ。厭な。」

背後ざまに其の水呑を蔽すと、亂れた袖に引かゝつて、扶に入らうとするのを、はづして、帶の結目に伏せた。振返つて、斜に見ると、新三郎も又目も開いて視めながら、得もいはれない顏をして居るので、衣子はあらたまつて極の惡さう。默つて、しばらくして、優しく睨む眞似をして、醉の覺めたらしいのを綺しさうに、

「醉つてます、對人。」

「醉……」

聲は異樣なものであつた、頃刻くひしばつて無言であつたためか、噛みしめた齒に、かすれかすれ。

「醉、醉、醉はないで、令、令孃、お、水を最う一杯。」

「上げませうか。」

衣子はいそ〳〵傍に寄つた。並んで、水差を取りながら、

「氣がついて？　あなたまるで夢中だつたわね、先刻私が來た時なんか、傍へ寄つても顏も分らないくらゐなんですもの。お藥を上げませうと思つても水がないもんですから被虜の茶屋へ行つて借りて來たんですよ。知らない顏ですから、いきなり道具を借りるのもをかしく思はれると惡いから、譬を抵當に置いて來たの。否ね、其には及ばないで貸してくれさうだつたんですけれど、また世帶を持つてね、お金子に困る時、何かの、あの繻吉だと思つてね。」

一たび其口を開かば、正に城をも傾くべきが、譬を賈に器を借る、松に羽衣を脱ぎかけた、三保の浦の風流あり。拔いたのは、桔梗の花形に、寶石の星を聯ねた、金脚なるものであつた。

「細菅慘憺でせう、だつて苦勞をさせるんだもの、貴方、相濟まない譯ね。」と莞爾。新三郎は默然たり。

「でもお酒だから可いんだけれど、これがもし本當の病氣だつたら、何うでせう、」

「……」

「眞實よ。」と老實にいつて、はじめてほッと小さな吐息。

爾に目を開き、

「眞實？　何が眞實ですか。」と屹といつたが、要領を得ないこと。

「眞實ッて……、え、眞實ッて……然うぢやありませんか。あなた眞青になつて苦しさうで、見て居るものが辛くつてよ、病氣でこんな容體だつたら大變ぢやありませんか。」

「打棄つてお置きなさい。」

優しい目で、

「又？　屹とよ。醉ふと我儘をいつてしやうがありやしない。何時かもこんな晩ね、ホテルの歸途に、築地の海岸を二人で歩行いて居たら、何うです、急に思出して、逗子へ行きたくなつたつて、これから直に出掛けるなんてさ、憎らしいから、勝手に御執心の龍宮の聲でも聞いておいでなさいといつたら、まさかと思つたのに終汽車で、杜戸まで行つて來てね、それなんですもの、」

といひかけて、

「忘れて居たこと。さあ、冷水、もう醉つた弁抱はして上げまいと思ふけれど。」

三十五

姉が弟にいふ如く、

「だつて可哀相だから、厭ね、お酒がまだ香ふよ。ほんたうに姫樣ばかりぢやありません、今夜なんざ、私のだつて思賜だわ。」

「打棄つて置くが可いです。」

「打棄つて置いて何うするの、」

「死んぢまへば其までです。」と撫つやうに云つて面を背けた。

其の顏を追ふやうに、情の籠つた、さかしい、涼い目を働かして、

「また、そんなことをいつて、姉さんもう世話をしないから可い、駄々兒ッちやありやしないよ。」

「えゝ、駄々兒ですとも、工匠！」

向直つて新三郎は言ふ聲に力を籠めた。

「僕は駄々兒です、意氣地なしの骨頂、野呂間の素天邊、二本棒の纖階子だ、貴女のやうな、陸軍少將の令孃で、音樂界の花形で、下谷一番伊達者といふのに、醉つぱらつた介抱をして頂くやうな、氣の利いたんぢやありません。打棄つてお置きなさい、へむ、一人姉さん下谷にござるだ。」

新三郎はポンと手を拍つ。

「そら、ね。」と笑つて居る。

「何の、何の人をつけ、おもしろくもない、意氣地アなくても、智慧がなくても、これでも江戸ッ子のはしくれだ、ヂャンと打つけれや目を醒す、火事に如才はございませんが、ヴァイオリンの合方で、棟續長屋の、夜があけて堪りますか。」小兒は泣出す。犬は吠える、お附合迷惑で大屋樣御難儀だ。串戯ぢやない。」

「そら、ね。」と笑つて居る。

「お衣さん。」

笑つて答へず。

「令孃、令孃。」と、聲高に呼んだ。

「厭ね。」

「貴女惚れてますね、僕にぞッこんだね、ぽッと來て居るんですな。」

「知らないわ、私。」

「否確に惚れて居ます、又、惚れて居なくッて、此の世話が出來るものか。世の中にや、貴女に一寸見られたばかりで天窓からぞッとするものが無數ある。醉ざめの水なんか飲まして貰つて御覽じろ、氷の木伊乃だ。僕も惚れてます、何のことはない、ひれふしてですな、御足の指に接吻し奉るくらゐ惚れてるんだ。兩方惚れてるから、此の緣まとまる、大吉だね、月や奏樂者片や詩人、凄い取組でございますな。

白鐵細工の、天狗の孫見たやうな小僧の呼出しで、陸軍の少將が馬に乘つた立行司だ。」

「そら、ね。」と笑つて居る。

「ね、惚れて居ませう、けれどもです、けれどもですな、貴女は其の位置を以て、其の風采を以て、其だ立入つたやうですが、且つ其の容貌を以てだ。いふまでもない又其の藝術を以てだ。一朝すべてを泥土に委して、是を車夫に與へようとはしますまい、馬丁に與へようとはしますまい、譬ひ其の男に惚れてもですな。」

「ね。」と唯笑つて居る。

「又問邊つて與へてならうか。今あなたが、其の身體で車夫や馬丁の媽々になるといへば、天が許さん、人も許さん。人ごとぢやないけれど、僕も敢て許さんです。近い話が、姫樣だ、伯爵の令孃竹子姫が法界節と駈落をするッ云つたら、貴女は何と、默つてこれを許しますか。」

「そら、ね。」と笑つて居る。

狐格子

三十六

新三郎は眼を瞑らし、

「敢て前さんでせう。けれども、車夫といひ馬丁といひ、法界節といつて、更に人を頼はせず、一家を挙んで居るものなら伝授すべしだ。貴女は何と、くどいが、其の位置、藝術、風采の一切を以て、これを城の番人に與へますか。

城の番人！

僕がこゝに云ふのは、戈を横へて城門に立つて、敵を防ぐ勇士といふ意味ぢやない。大手前の番太郎だ、蒼前革の袴で六尺棒で、徒士が上つても土下座をする、いや。其にも劣つた、折助仲間、緒賣の類、いざ鎌倉といふ時にや、塗の埋草にもならない野郎で、一人扶持の食潰し、あはれんで言や、不便なもんだが、手厳しく掛合へば、禍殃人、賊臣ですな。

得て然らいふ奴は、城の草を取らしても、猫に、目をまはす、當然だ。」

切齒をして、

「埋草になりや、車前子の方が餘程おためだ。今僕は、僕は今、奇生！　此處からも判然見える、鶴ケ城に對しては、草にも劣つた、折助仲間緒賣の類です。打棄つてお置きなさい。折仲の酔ッぱらひを介抱遊ばしたなんと云つちや、御家老の嬢様お身の上です。貴女お手討もんですぜ、何の事はない、女金烏田の投首で、紫の縮緬様、帶子の帶を緊矢の字、緋縮緬の蹴出か何かで、鬱金の扱帽を長く引摺つて、奥庭の松の立木に縛られて居る方だ、あゝ、いたはしや、影が薄い。

御奉様お情で、旨く行つた處で背戸口から落人で、そら、乳母の家へのめずり込んで、其處で法界節といふんですな。第一、貴女御兩親をどうします。打棄つて置いて早くお歸りなさい。お衣さん歸つて下さい。」と叱といふ。

「貴方、私一人だわ。へゞれけのレケちやつた處なんか見られたもんだから、極が悪いもんだから、いろんな事をいつてさ、あなた、お酒をあがると何時も然うよ。私やもう厭だけれど、お父さまなんか、其處が好いんですとさ、そして何時でも然ういふの。新三郎さんが酔つていふ、あのぶう〳〵を一緒めにすると、一陣ぐらゐ、逃めッて、喉仏が出來ますとさ、現在のなんぞ例より壯だから、三軍を叱咤するのね。」

聞きも果てず、

「ど、ど、何ういたし、ぐうの音も出ず、ぐうの音も出ないんです。城、城のしの字も出ないんです、城の歌なんか出來るもんか。」と思ひ餘つて心の裡を。

衣子フト氣がついて、

「あゝ、貴方、それでお酒を飲んだのね。」

「……」

「道理で、姫様が入らしつたのに、顔出しをしても下さらないでさ。それだから今夜、東山へお迎に行かうと思つて來たんですよ。畑の向うまで來ますとね、思出したと云つては勿體なうございますけれど。」

片手を上げて伏拜み、

「此ね、摩利支天様は、私が小兒の時から信心して ね、まるでおねだり申すやうにして居たの。新さん、あなたや、私たちの神様ですよ。何うぞ、新さんも立派なものが出來ますやうにと、お願ひ申しに來たんですわ。何もそんな顔をしないたつて、私たちの思でも出來ますよ。」

「何うして！　何うして！」

「否！」

「金及ぶべからず。せめて漆の埋草なら可いけれど、折伸だから迚も不可ん。しかし、口惜いです。實に無念だ。僕はもう、爪でも長かつたら、一念で、城、城の石垣に切めてひつかき続でもつけて見たい。」

「まあ、あれ又そんな顔をしないでさ、ですから御酒なんかあがるなよ、よ、新さん。」

と實心から、引添うてしめやかに、

一文上てばね、あなた、あなたは酔つて三軍を叱咤したり、號令をかけたりなんぞなさらないでも可いの。他に仕事があるんだもの。さ、上げますよ。冷水でもあがつて、判然して下さいよ。だから、いつでも、およしなさいッていふのにね。」

果は縷々と言ふのであつた。

三十七

「眞實に、酔つちや何にも出來ないわ。」

「お待ちなさい！」

新三郎は片膝を立てゝ聞直り、

「何酔つちや出來ぬ？　以ての外だ。此の、此の酒あつたればこそ、未だ幽に絲のやうな望を繋いで、蔭に臥し、蹶を嘗めて、僕も聞いた、——此の、藝術守護の廊列支天様の威徳の縁に立籠つて、捷かに建旗を立てるの出氣があるんです。

然うでなくッても、僕をして酒なからしめば、元来、榮螺の中に源神の宮殿を見る能はずして、泰嶽者の雲に魂を飛ばす折伸だ。疾の昔、衣の襟高きこと八寸二分、散髪の分け方骨髓に入つて、洋服に羽が出來てね、巨匠の袂にぶらさがつて、半巾の面縛で、死刑をうけ、魂魄此の土にも留まり得ないで、愛神のお茶漬、蜆餐の餌ともゆきませんぞ。一體あの小僧なんか、何を食つて活きてるだらう。車夫をやるでもなし、馬丁をするでもなし、何をして活きてるだらう、恐らくわれ〳〵を喰つとるのだ、われわれが其の餌食であるとして見ると、僕なんか、お香物でお茶漬の方で、貴女なんざ本膳七五三だね。否、事實。あゝ、おなじ餌食なら氣の知れない愛神にやられるより、如かず、龍宮の細語を聞かうと心がけて、昔から手心の知れた魚の餌食となる事だ。」

堪りかねて、

「貴方。」

「……」

「新さん、私一人だわ。」

「……」

「私一人だわ。」

「……」

「私一人だわ、新さん。」

「勿論、秋山合嬢唯一人、僕は酔つたテレ隠しに、見榮をいふのでも、太平樂を並べるのでも、駄々を捏ねるのでもありません。僕はもう然と酔つちや居ないんです。お互に身體は清し、何にも疾しい處はない。僕は折助たることを知つた、仲間の女房に女工匠は荷が重い、實に天下の不細濟ですから、篤然と別れます。相濟まん。全く相濟まん。かゝる車夫馬丁に劣るものとは知らなかつた、あなたと手を携へてと思つた大なる望は、しかし、貴女を欺いたんぢやありません。また自ら欺きもしなかつた。自分は信じて居たんだが、己を知らざる、甚しいものであつたんです、別れませう。」

「まあ。」

手にひかへた冷水の水呑を取つて、新三郎はぶる〳〵と震へた。

「水杯。」

「え。」

「誰んでわかれの水杯。」

縋りついて、

「ま、ま、待つて下さいよ、新さん、全くなの。」

「もう同一ことは言ひません。」

「ぢやあ。」

衣子は口早に息忙しく、

「それぢやあ、私、折助でも仲間でも可うございますよ。新さん、そんな、そんな仰ぢやありません。」とばかり、呆れ顔に茫然として、餘の事に、

「私や、涙も出ないんだもの。可いわ、折助でも。」

一百、そりゃ不可ん、そりゃ不可ん。それだと僕が今謂つた、天人ともに詩さん事になる。第一差配さんが遂癒、小兒は泣出す、犬は吠えるだ、折助長屋にヴァイオリン。」

新三郎は傍に着く端に丸ある、秋野の露に月の影射す如き、錦の包の樂器を見て、片手にこれを取上げた。

「先づ、其方へお取りなさい。で、僕は杯を此方に持つ。」と云ひかけて、衝と立ち上つた飯幕に、結梗、刈萱、女郎花、あはれ、吹き靡けたやうに衣子も立つた。羅の袖もはら〳〵して、

「何うするの。」

「そして此ッ切別れませう。」

三十八

「それとも、今、たつた今、其のヴァイオリンを撥ちますか、ボーゲンを持つた手に鋼釜を提げて、折助の飯が焚けるか何うです。もう然う決心をして下さるなら、天人ともに許さないでも、山の中なり野末なり、これから二人で駆落ちしませう、何うです。」

「そりゃ、何ですけれど、いくらも私は。」

「ぢや、其のヴァイオリンをお棄てなさい、目の前で大池へ投げて下さい、松風や浪の音なら、極楽つても氣がつかないが、鉢巻小屋へヴァイオリンぢや、目に立つて仕様がない。」

「だつて。」と人形のやうにしッかり抱いて、悄然としたのである。

「不可ますまい、又、可いッたつて、僕がさせない、天がさせません、人もさせない、思ひ切つて別れるです。」

衣子は堪へかねて、身を揉んで、

「だつて、今、今、だつて、新さん。少し考へさして下さいな、もう何うしたら可いだらう。」

「いや、決心は瞬間です。僕だつて、僕だつて、此の、此の決心は明日までは堪へられない、一秒時。」ときれ〴〵に云つて聲をくもらしたが、

「えゝ。」といふより、其の自ら誓つた、別れの水を毒の如く、立突つたまゝぐッと仰いで、盃と投げると、水呑は白い絲を曳いた。

「あれ。」

衣子は言も其の地に落ちざるに先んじて袖で受けようとしたやうに、階からドンと下りた、立端んで、見る〳〵涙頬を伝ひ、

「まあ、まあ、新さん、それは借りて來たのぢやありませんかねえ。」

痛切なる辭して、新三郎、

「其のかはりに置いて在らつしやつた簪を、茶屋の娘にやつて下さい。」

衣子は瞬もしないで居た。

「ぢや、又杜戸の姉さんが出來たんですね。厭です、いくら、いくらあなたが、そんなでも私は厭です。簪は記念といふぢやありませんか。それだけれど、私未練ぢやないけれど、こゝで此のヴァイオリンを棄てる決心が出來ないかも、あなたの心が鑑まるまで一度お別れ申しませう。お別れ申しますよ。別れて參りますけれど、路々も考へてね、直にも引返して來ますから。」

と聲も心も沈み果てた、頭を垂れて一歩二歩、衣子のうなだれて、行く姿、優しく氣高く、うつくしい、唯見る此の世の人にあらず、月宮の美娥邪あつて、流罪の露に萎れるが如し。

新三郎は爪立つて、伸上るまで見送つて、唯一聲、

「お衣さん。」

片手にヴァイオリンを抱いたまゝ、衣子の最後に見返る時。

「たとひ僕と別れても、あなたはマイステリンとして、此とも戀つたことはありません。」

「あなたは？」

「僕は。」

「詩人。」といつて爪尖に力る入れた、衣子は顔出して戻らうとしたが、一歩動かず、描ける如くに突立つた美人の姿を一目。いはれあるべし、聞くが如くんば、我巣を棄てざれば、海神の宮殿に參じて、城の獣作ること能はざるべき也と、さかしき人は歩を轉じて、蝶々の帶、薄の裳、寂しく松吹く風に消えたり。

新三郎は倒れようとして、控と狐格子の扉に凭つた、響に揺れて、がたりと上から、肩にかゝつたものがあつた。

「まあ、何う遊ばしたものでございます。」

來たのは清瀧の女房で。

三十九

「お房も案じて居りますよ。おや、今人らしつたお嬢様は何處へおいでなさいましたえ、松坂さん、もし、松坂さん。」

「おゝ、かみさんか。」

「何うなすつたんでございます。お嬢さんはお見えなさらないぢやありませんか。」

「追掛つたです。」

「え。」

「様子でも知れたでせう、彼が即ち、僕をして、姫公に土下座をせしめる鯨人だ、思切つて追返した。」

と新三郎太息をついて言つた。

「だつて、あんなお美しい嬢さんを、何うしてあなたは。」

「何うしてたつて死ぬほどの思だ。一生懸命、なか〳〵これが容易な事で出來るものか。」

女房は深く頷き、

「皆、お城のせゐでせう。」

「勿論。」

「恨みですねえ。」

「僕はもう、恨みが通越して無念です。此の力足らずとはいへ、何の城一ッ、城一ッ奪くことはない筈だに、それが、矢張、姫公に土下座の料簡から起るんだ。其のために、秋山のを棄てたと思ふと口惜しい。おかみさん先刻、簪を置いて來たでせう。彼は、お房に遣つて宜しい、秋山の女の飾を奪つて、お房の髪に結すんです。悪魔のわざだ、夜叉羅刹の擧動だ。しかし、杜戸の黛淵に美人が弾ずるヴァイオリンを棄てゝ、改めて龍宮の細語を、榮蝶に聞く、少くとも松ぽッくりから風の音を聞く誓の驗だ。何のこれならば城の獣、何の事が、と思ふけれど、駒から割つたやうに、身體半分割り取られた心持で、あの秋山に分れても、未だ、獣の其の結だつて見出さない、分らん、些とも分らん、おかみさん、僕は何うして居るですかな。」

女房近く寄つて、とみかうみ、

「否、弓を持つて在らつしやいますよ。何うしてねえ。」

「弓を？」

新三郎は愕然として、唯見れば弦を挑んで、肩にかけ、弓杖を支いて房に凭れた、思ひもかけず凜々たる勇士の如き已が姿。

「おゝ、こりゃ今、僕自身、自分の魂が抜けたのかと思つた、後姿が、向うの松のかげにかくれた時、何か上から來て胸に障つたものがあると思つたが、何うともなれ身體と、別に氣をつけても見なつた。それぢや、此の弓！」

「奉納の額のでございませう。」

女房も廻廊に上つて、並んで上を仰ぐと白い、新な額面は亀遊軒の一流が、謹上再拜のそれであつた。

添へて二條、白羽箭。

「何うしてこれが落ちたかね。」

目を瞑つてものをもいはず、しばらくして、雲の晴れたやうな面色して、女房は悚然とした。

「もし、摩利支天様のお授けです。」

「お授けです。」

これには答へず、廂が低いから、女の手でも届くと取れた、矢を持直して、押頂き、

「矢遊ばせ、松坂さん、あなたの弓のお手並は、私が拝見いたしました。思ひ切つて、一心に射て御覧なさいまし、さあ、貴方。」

「何を、的は。」

「お城です。」

「……」

「ね、恐ずやありませんか、憎らしいぢやありませんか。口惜しいでせう、無念でせう。敵とも仇とも、障礙とも思つて十分に射てお了ひなさい、もし、お分りになつたでせうね。」

新三郎、身ゆるぎをして、雀躍し、凜々しき面に笑を湛へた。

「應。」

「お分りになりましたでせう、さあ、あなた。」

「應。」

時に三日月を大く抱いて、弦を引いて切と放した。びんと鳴つた。

取直して、片肌を脱ぐと、筋がしまつて肉が震へる。

女房が片肌ついて、上へ捧げ出す矢をそばめて、屹と彼方の的を望んだ。

霧開けて、月小く、掛ける如き城の趾、墨絵の松の梢に在る。

ガッキと番へる。

「南無帰利支天尊。」と御名を念じて、女房は、ぢつと見詰めて、じりゝと寄つた。

涙橋

四十

「やあ。阿魔、欲しいか、これが欲しいか、ようこそ、欲しかつべい、こら、小いもんだが太く光らあ。」

湯川橋にかけた涙橋・波つた枝の路の折れ角、空の色のどんよりと、水も白くなつて曇つたのは、鬼が此の屋を隠んだ所為か、蝶々、紫に輝く簪を、指のさきにくる〳〵ときらめかして、羽を出して禁獄つくは飯豊猿の悪様太。

「こら、何うだ、ふはゝ、やあ桔梗の花、簪とけつからあ。やあ、阿魔、汝、夢中になつて見惚れて居るで、ちよろりと意に攫はれたど、欲しかつべいな。」

裳の雪の消々に、お房は取飛して、土の上。葬の袖の風祭、御石の簪を守つて、唯一人、御堂へ新三郎を見に行つた、清瀧の女房の留守を、どさり天井から飛込んで、聲も出ぬ間に掴ひ、簪を蹴倒して悪様太、疾風の如くに飛び出すから、兎角うの分別も、ものいふ隙もなく、銀杏がへしの根を飛して、跳足で此處まで追つて来た、お房は橋を渡り越して勾配に膝を突くと、呼吸を切つて起きも上らず、唯唇を動かすのみ。

飯豊猿、渾名の如く、毛だらけの脚を折り、尻を突出して中腰に踞みながら、

「やあ、姉え、欲しくば簪返すべい。已はあ、何も盗賊でねえだ、汝の面見たいだで、座利支天様さ御堂の縁の下で寝るれど、乞食でねえ。眼のう一ッ打放しや、食賚も、飲賚も、博奕賚も出来るだんで、何もこれ人様のもの座一葉、欲しかあねえ。たゞ、はあ、邪魔のねえやうに、汝此處までさ誘引出したど、別あねえ、返してやるべい。」

ずッと寄ると、お屋は其の袖を見るさへ恐しさうに、わな〳〵と、震へたので、猿は長脚を高く踞んで背後へ廻つた。

廻つて、上の力から大きく持つて行く、簪は流星の如く、光を殘して、若く輝いてお房の黒髪に宿つたのである。

女は纔に振向いて、鶴白な手を腕も露に、

嬉しさうに拝む姿。

悪様太風な顔で、

「拝むわ、拝むわ。」

と言うてゲラ〳〵と凄く笑ひ、

「むゝ、拝むわ、そんねえに嬉しいか。簪返して貰つたで拝むほど嬉しいか。まだ〳〵、まだ〳〵、其の拝んだ手、放してはなんねえだよ、しつかりと合せて居るだよ。苦しくッても放してはなんねえ、血反吐を吐いても合せて居るだ。身體がしびれても取つちやあなんねえ。やあ、阿魔。」

と疾くいつた、悪様太の顔の色、芳年が彩色の青面鬼闘志の風あり。

「これ、可いか。そしてお念佛唱へるだ、汝、いま首いがめて殺してやるだ。」

「あ、あ、あれッ、」

片手を解くと、お房は搦まれた襟を放さうとおさへて、逃げようとして、前へ倒れた、項は玉を仰べて、するりと衣紋が中へ投けると、裾は紫乎と踏留められた。

「殺くな、やい。己が、これ、うむと睨んだから、甚だつて逃しッこはねえだ。やあ、阿魔、汝、風の吹く時は恐えだらうと思ふで、こ、汝の家をぐる〳〵と廻つたい、雨の降る夜さは夜一夜、汝の軒下に立つて居たど。其の美しい頬げたを見ては、遠くから拝んだい。なに、これ、通りがゝりの姉えが預けた簪一ッなくならかいて、生死の目をするだあに、己がといふと、鬱を見てせえ、泣くやうにおびえるだ、今點ならねえ。それも吐賊だちふなら我慢すべいが、汝、今夜他に男を拵えたど、業のウ妬けて、身體ア油で煮られるやうだア、堪んねえ。だけんど狐や狐でねえ、人間は一匹取換だで汝を殺しや、己も死ぬだ、やあ、阿魔、あきらめて往生せいちや。」

月下の的

四十一

「分つたつべい、汝、人の命せつを無にして死ぬだ。己、深せつを無にされて死ぬだ。已が汝に殺されて、汝已を殺すも一ッだ。殺すも殺されるも同だつけ、算盤珠の當つて見せえ、己が方が引合ねえだ。汝惜しい命だつべ。已、同然で人間交き川来ねえだけんど、入んねえ命といふはねえ、蟲けらだつて惜しい命だ。やあ、打つた跡たゞ賚るだよ、己が命も死んでやるべい、埒かねえで殺されろい。」と、熱き涙をこぼしながら、拭ひもせぬ手拭の自分の項を巻けるを取つて振いて、ぐッと押當てた。

お房はばた〳〵、左右の手で、空を打つて、

「おかみさんえ。」と呼吸の下。

悲は目の前に来たのである。東山の素見もどりが、二人此の体につか〳〵と寄つたが、一人は飯豊猿を見て、一人はお房を見、齊しく過と左右に退いた。

先から、橋の向う詰にも五六人、影は隠いたり、すぼんだり。

「因果娘だ。」

「因果だなあ。」

「忠義の爺さんが、氣が遅つて、長刀をつかつた涙橋だ。」

「然うだ、此橋だ。」

など、聞念めたやうに囁き合ひ、助けむとは四より、寄らうともしないが、一人、出し戸の者腰を屈めて透す人、いづれ、耶の毛で突いても飛上りさうな氣勢であつた。

悪様太酒嚢をなし、

「清瀧のさ呼ぶだあな。はあ、人間は一匹とッかへだ。あの、女房さ、生命がけで汝を庇ふで、何うすることもあんねえだつたい、汝情なし女の、人形だ思うてあきらめて居たど、もう、

色男さ、拵へたで、合點しねえ。呼ぶのは留めぢや。

こゝへ、清瀧のさ、來て己を留めべいなら、あの人を己殺すだ、人間は一匹取替えよ。一人殺しや、己其場で亡ばるだ。も一人汝を殺さうとはしねえけんど、あの人殺して助かつちや、汝、世話になつた義理い濟むめえ。やあ、覺悟しろていば、分んねえか。」

お房は覺悟して、動かなくなつた、しばらくして又手を合せた、はや、血が流れたかと汗びつしより、それがつめたく氷つたやう、死したる如き黑髮に活々して輝くは、蕃の珠の着い光。

靜のやうに手拭を、差俯いた咽喉にまはして、權太は已がこはばつた手を、左右から緊め寄せようとして、裳をおさへた足を踏張り、一念佛唱へろ、やい、阿魔、念佛だ、念佛だ、南無、南、南無、南、南無、南、うむ。」と一緊め、緊めようとした手を其のまゝ、空を仰いだ、惡權太、怪訝な顏して、足許を視め、左右を眴し、前後を顧み、きよろ〳〵と首を擡つて、ぢつとして稍少時。

お房を踏跨ぎながら、ぐツと伸び、流の上に目を注いだ。

月晴れ、雲切れ、月動き、西の水銀、左右に碎けて、岩に乘り、石を嚙み、岩に乘り、石を嚙んで、脚下に飜へる湯川の水。

唯見ると、岩に乘り、石を嚙み、岩に乘り石を嚙む、微の中に燈燭として、目を捺めて衝と錦流れつ。

手を放して、ぢツと出て、岸に半身を乘出いて、流れし切め來れる方に大な耳を傾けた。

聞澄ませば、流の音、風の聲と相分れて、別に更に湯川を傳ひ、虛空に聞ゆる微妙音。

之を久しうして、權太眼を瞑り、足を爪立て、其の音の聞ゆる水上の方を屹と見たが、よろよろして、影も定めず、引かるゝが如く、操らるる如く、胸毛も搖れて心臟に音の徹すと覺しくて、兩手を組んで、あとがれて去つた。

知らずや湯川に淵をなす、水蒼く、月白き、巖に坐して、神女あり。我死なむか、此棄てなむか、包の錦は溪川の行く方も分かず流しやりしが、あまりの惜しさに、唯一曲、衣子は岸に片跪をなげて、先刻に一度ボーゲンに手つかゝると覺しく、靈分れたり、水靜まつて、響く名家のヴァイオリン。

程ど同時に、新三郎は白羽の富つた頬の色月に輝き、見据ゑた瞳に心を籠めた、胸に御堂の扉を洩るゝ燈明の赤きを浴びたが、あたりにものゝ氣勢あり、姫神霊祝かせたまふかと、氣清く、神女澄み、骨氷つて、颯と靡いた單衣の風、銀黃金の鎧を吹いて搖ぎの絵も鳴るかとばかり、此のまゝ雲にも乘らむずる、我を忘れてきり〳〵きりと滿月の如く引絞つた。

銀河斜に鶴の城、其の片襲殘れる石垣、押手の拳に手に取る如く、矢頃は遠く隔つたが、青春意氣のほとばしる處、幻の虹を描いて、練絹の絲を空に曳けば、海の宮殿に夢幽たる、月夜の的はじり〳〵と狙ふ雙眼に引寄せた。

いで〳〵と思ふ、こはいかに、矢猛に震ふ虛空の音樂、泣くが如く怨むが如く嘶くが如く、耳を刺んで胸を抉つて骨に染む時、矢尖にちらつく衣子の袖。

美しき星に圍まれて、樂器を抱いて天に在り。

左に外し、右に避けても、矢の根冷く、疾き劒、正に其の胸について放れず、秋の草の彼の壑、森の陰に消えたる時だに、おのが身半ばそぎ落されて、魂の拔け失すると、血汐凍かりし新三郎、目も眩み、腕しびれ、力なえて、當脚の案山子矢を落した、よろ〳〵と、蹌踉いて、思はず、はら〳〵と落涙する。

射損じたり、第二矢。

清瀧の女房、柳眉を逆立て、控への二の矢を、

「貴下！」と取つてさし出すを、屹と見て、打頷き、新三郎は取直して、再び丁と番へたのである。

思ひ切つて一歩を進み、更に秋水の瞳を凝し、姫神の御名を胸に、鎧の袖を搖直せば、白氣再び空を射て、放たずして疾く貫く的、矢頃可炎、飛流の翼縫ふ可き也。

曳固め、きり〳〵と〳〵め、兵弗と切つて放す、弓は大浪を打つて返した、矢響き高く白羽の神鏃、遙に遙に霏々として、風と相打つ雪一片。

さて手應は胸にあつた、新三郎は見る〳〵中、愁然として、心ひらけ、鏘然として文字聲あり、腹案成ンぬ、立處に。

眞言

明治三十三年五月

燈へ蟲が來るのを、格別に厭がるのが、十二時前後のことだつたさうで、洋燈の下に書を開いて讀んで居ると、其を防がむため、いくらか羹いのを我慢して閉切つてある窓の障子へ、ざら〳〵といつて飛びついた蟲があつた。音にもぞつとする位、眼なのであるから、もしやこれが飛込んだ日には怨靈に取着かれたやうに座敷の中を立つて逃げ、居て防ぎ、手で拂ひ、袂で拂ひ、ぢたばた狂ひ廻らねばならぬ。丁度書も讀んで佳境に入つて居るのに、情ない、と思ふ内も、ばさり〳〵と障子にぶつかる。たはしで搖るほどの響、小さな雀でどもあらうと思はれて、益々恐しい。入れてはならぬと一生懸命、讀んで居た書も是等のものであつたらしい。妙な考へを持つた少年であるから、整然と坐つて、屹と向ひ、眞言を稱へて一心に印を結んだ。

別にこれが事を仕出來したとも思はず、其まま又机に向ふと、つい讀み惚れて果は忘れて了つたのである。

やがて寢ようといふ時、其の外の雨戸をしめようと思つて、障子をあけると、敷居の處に、かたまつたものがある。いますらりと明けて、其者の戮にさはつたと思ふに、蠢きもしないで、ぢつとして居るのを、灯をかかげて見ると一疋の蜘。それではと、氣がついたから、羽を抓んで掌へ乘せたが、下羽も振らず、もがき苦しんだやうに小さな足を寄せたまゝ冷くなつて居るのであつた。

何心なかつたのが、此體に吃驚して、今更驚いのあるのに、我ながら氷を浴びたやうに悚然とするばかり。

これが、毒蟲でどもあれば知らず、何の罪もないものをと、あはれにたつた。けれども何とせむ、因より修行を積んだ神通があるのでない、はずみで無心にやつたこと。呪を解いて助けてやることが出來ない。とかくして思出したから、人知れず、あゝ飛んだことをしたつけ、蟬、蟬、おまへだと思へばこんなことにするのぢやなかつた。又いやな灯取蟲だと思つたもんだから、つい氣の毒なことを、堪忍しておくれ、もう可いから飛んで行かないか、とありのまゝ打あけて、それから靜に呼吸を吹つかけると、むぐ〳〵動きはじめたが、道ふやうにして指のさきまで、擽つたく歩行いたので、どき〳〵しながらふるふ掌を、障子の外へ出すと、中庭で颯とたつて、月のかゝつた棕櫚の樹の梢に羽ばたきを聞いたといふ。

――観花全集卷十五「春舞踏」より

紅雪録

一

「且那切符をお買ひ申しませう。」

「あい、何うぞ、」と袂から財布を出して、外套の抽の下で、手を差入れて探へたが、然ももどかしさうに、突然、二箱待合室の front に二つ並べた、大だる卓子の端へ、倒にざらりと明けると、十錢五錢二十錢銀貨五十錢、紙幣まじりに電燈の下へ堆積として擲がつた、名古屋の停車場に於てである。然は雪ひつくやうに、胸を卓子に附着け、蓄ひかゝる麥で、片手でそゝッかしく勘定して、

「幾千だつたい。」

用を聞いた赤帽は、俄に小腰を屈め、

「貴客、何方まで、」

「新橋、」

「五圓十三錢でございます。」

「一イ二ウ三ッと、四圓、五圓と十三錢。」

と摑んで渡したのを、赤帽は黒い毛絨の手袋に納めた、大な掌に請けて、一度熟と見て、やがて出て行く。

停車場はがらんとして、夜の名古屋は眞白である。

突は小用しを財布に突込み、袂へ落すと、二つ三つ肩を搖つて、雪の名殘を邪險らしく拂つたが、四邊を眺し、つか〳〵と前面の暖爐の傍に寄つて、立つたまゝ手を翳し、吻と息を吐いて、焦茶の中折を被つた其の頭を垂れたが、敢て是は、火氣がなく、些の暖さの取れない處から、石炭の燃えて居るや否やを見むために、俯向いた訳ではない。

丁度其時、先刻から一人此の暖爐の前の腰掛に、外套の襟を立て、帽子の鍔を耳に伏せて、時つて、火箸で突いたり、掌で煽いだり、息を長く吹いても見たり、兎さま角うさま試みても、火の揺らないのに倦倦んで居た男があつて、此の旅客の來て彳んだのを見ると、ござんなれ相談相手、待兼ねたといふ風に、勇んで、帽子を掴上げるやうに顔を用したが別に言葉を懸けさうにもないから、

「何うしたんだ、變な暖爐だな、」

と呟いても、雖聊かも動かされた樣子がない。で到底是は、石炭で燃すといふことに就いて、何等の思慮も、分別も、知識も、經驗も、方法も、傳說も、歷史も、勿論技術も持たぬ紳士である、と斷念めた顏色で、鐵火箸をぐわちやり、

「えゝ、」舌打をして、腕を拔き、嘯然として白塗の高い天井を仰いだ。

待合には唯二人のみ。

此處へ赤帽が其の紅を鮮明に、小倉の服の色の褪せたのも明らさまに、電燈に照されつゝ、漲着いて入つて來た。

「貴客、切符、」

「御苦勞、」と受取つた、旅客は入口の方を忙しさうに見返つて、

「急行は十二時四分だね。」

二

「はい、未だ二十分ばかり間がございます、」

「未だ、二十分、待遠だな、」と呟いた、けれども二十分は然したる長時間ではない、除に此の人が待合室に入つてから、忙しく汽車賃を出して、慌しく歩行いて、急いで暖爐の傍へ寄つて、間もなく赤帽の手から切符を受取つたまで、もゝ十分とはかゝるまい、案ずるに何ぼ仔細あつて、須臾も早く、名古屋の地を離れて去りたいのであらう。

其の清い目も、優しい眉も、鼻筋の通つたのも、頬のふつくりとしたのも、停車場で慌て惑ひ、焦り、ふためくやうな容貌ではない、俱其の色は、正滿近う誰も沈むより一は、より多く沈んで居る。

單に中折の帽子、外套だけの打見では、農も、工も、商も、武も、文もないのだけれども、松は風にも調べあり、梅は閨にも音信れて、此の人全體の風采は、誰が目にも學校出の年少き紳士であつた。

「お荷物は、」

「彼だ。」

細い大鳥の、羽織の袖を聞いて指す、二つある入口の扉、右なる方に、一脚の腰かけがあつて、旅行鞄の中形なのが置いてある。

「お一個だけ。」

默つて點首く、と心得て會釋して、赤帽は直に踵を返した。

先刻から二人の話が途切れたら、直に、獨言して釣入れようと、頻に赤帽に目を注いだ暖爐の前の家ぢな男は、恁う速に立去るのを恰向いて見送つたが、紳士の荷物の後へ、壁に背を凭せ、腕組をして、向直つて立つた、赤帽の肥つた肩い淺黑い顏を、間遠に熟と、怨めしさう。

折から。どや〳〵と入つて來た。

眞先に一名の陸軍士官、帽子の低いのを冠つた肥大な紳士、痩せた細君、老人夫婦で十三ばかりの被布を被た、孫か、末子かと見えるを連れた一組と、高等學校の制服を被た學生一人、此の七八人の人數に旅籠屋の女中、男衆が附き、見送人が交つて、待合の左右の入口から前後して繰込むと、直に八方へ入亂れ、ずッと出て退るのもあり、斜に突切つて暖爐を目指すがあり、荷物を卓子の上に載せるのがある、意味もなくてぐる〳〵と廻るのがあるし、袖を拂ふのがある、下駄を鳴すのがある、紙を捫むのがある、反つて外套の袖を背後さまに擦ねるかと思ふと、俯向いてコオトの裾を引張るのがある。

さて僅な待合の内にも、成りたけ足數の少い近路を知つたらしく、別に三名の赤帽は列座を料つて、肩に、頭巾に、膝にひだに、ちら〳〵と雪を蒙らぬはなき旅客の間を、赤き鞠の飛交ふが如く働いた。いづれも停車場居まはりの旅居から唯廣い庭一つ起すばかり、發車の間際に、待合に入つたらしい些少な距離を經て來たのでさへ、見る限り黑いものとしいへば、不殘其の形を留むる、雪は降頻つて居るのである。

又今停車場に着いたさうな、數石の際にかたまつた下駄の音、コト〳〵と響を交へて、町に降り積ること約五寸なるを嚼いて、此處に雪の浪の寄すると聞ゆ。

「且那々々！」

と大聲に呼んで羅紗の筒袖を左右一杯に突張らせ、手首をすくめた、春の圖扱けて高い、眉と目の間の伸びた、口の大な坊主の親仁。

素足に高足駄を穿いたがカラ〳〵と叩を蹈んで、陸軍士官の面前に不作法に突立つて、眞白な呼吸を吹き、大口を開けて、

「且那々々。」

三

十二時に早や五分、今にも汽車が、と一同は身構へる、士官は左の腕を差伸べながら手袋を捩め直して居た處。

「出掌でげす、且那、汽車は參りません。」

「汽車が來ない、何うしてか。」

「はあ、雪で留つたのでございます。」
「雪で留つた、そりや、」といつて、斜に卓子に凭かゝつて靴を投出して居た身體を直にして、室内の人々を睨して、唇に嘲笑を浸したのは、いで諸君、諸君と憂を俱にせむ、猛き武士の心優しき態度であつた。
「雪で、おや〳〵、」
「此の雪で、」
「然うかも知れない。」
「然うだらう。」
と口々にいひ交した、時も時なり、一人として此の新聞に耳を傾けないものはなかつたので、室内は殘らず動搖み渡つた。彼の肥大なる老紳士とともなつた痩ぎすな夫人の如きは、然も旅馴れた狀に振舞つて、見返つて來たらしい、五十餘りの、是も古ぼけた羅紗の筒袖の襟を上げて、其鯨鬚喉も胸も釦を懸けず、めりやすの股引、だらしのない尻端折で、大形の編蝙傘を携へた、前齒の拔けた老僕に對して、恰も我が家の奥と表で一寸別るゝやうに、輕く言葉を交しつゝあつたのさへ、二三歩、低い駒下駄で、つか〳〵進んで出て、誰にいふともなく、
「まあ、まあ何うも、」と呟いた。
氣の狡い學生は、其の眞爲を正さんとや、御

服の裾を煽つて改札口へ駈出した。靴音は長く響いたのである。
不殘、自己の齋し來つた紙報の反響であるのを視て、坊主人窓は得意顔に、今度は其の所謂且那なる武官のみならず、多人數を對手のつもり、調子はづれの聲を一層張り上げ、
「どうも豪い事でございますよ。何しろ貴官、江州の山の中で列車が埋りましたさうで、又被處い等可恐しい雪だと申しますな。いや最うしッきりはございませんが、此の降ります事な。當所でも珍しい大雪で、はい、飛んだ話でございます、雪に埋るなんて、何うも、はゝ、はゝ、」と頬當したやうな古羅紗の襟が、天窓へすぽんと冠さりさうに、身を拔上げて高笑す。
士官は秀でたる眉を顰め、
「何のくらゐ遲れるか。」
坊主は突張つた筒袖の手首をぐしやり、同じやうに眉を顰め、
「其がさ、もし、何時間おくれますかな、何だつて此の汽車が雪龍に遭ふなんて、東海道はじまつて無い事でございますでな、何いたせ、十時に此處へ着きます筈のな、其さへ今の期參りませんで。」
「呼、然うか、」

「そりや大變だ。」
「驚きましたな。」
沈着なる士官よりも、先づ四邊に立つたのが、輩々に驚くのであつた。
「えゝ、お寒うございますで、何なら最う一度、手前どもへお歸りの上、御休息なさりましては如何でございませう。へい〳〵、いづれ發車いたします時分を見計ひまして、又お知らせ申しますで、へい、」
「いや、そんなに遲れやせまい、」と同情ある士官は、自ら他をも慰めるが如き口振でいふ。
「だがもし、はゝはゝ、いづれ參るには參りませう。それに汽車の事でございますから、へい、けれども夜が明けますまでは、お待ちなさる譯にはなりますまいで、へい〳〵〳〵、」
ニヤ〳〵笑ひかけてまくし立てるのを、士官は默つて聞いて居たが、フト言急に調子荒く、
「見て來い！」
恰も構内で鈴が鳴つた。
兩三人同音に、
「宿引め！」

四

鈴の音ぐわらん、ぐわらん。駈出して行く坊

主の高足駄かた〳〵〳〵〳〵、カラコロカラカラと忙しげな多人數の足音引續いて、廣濶なる停車場構内は、頃刻、恤と肩と袖と前後左右に入亂れた、汽車は正しく着いたのである。
此の時まで、黑き外套を見好げな品の好い後姿、冷き暖爐に手を翳して悄然として差俯向いた、以前の年少き一名の旅客は、當夜の一棒事に觸れ廻つた飛言者の坊主の來つた時も、唯少し、頭を上げて、上なる大時計を一目見たばかり、敢て振向きもしなかつたが、それか、あらぬか此の物音にはじめて此方に身を轉じて、徐ろに、入口附近な、彼の荷物を置いた腰掛に歩み寄れど、承はつた、赤帽は依然として、壁に背を凭せたまゝ、腕拱いて突立てり。
「君か。」
「私でございます。」
「今來たのは、」
「十時に此處へ着きます分が、三時間遲れて來ましたので、」
「急行は、」
「此のあとでございます。」
暖爐を擁抱いて、蹲つた例の男も、此の汽車に迷つたさうで、
「や、どッこいしよ、」と懸聲して、欠伸とともに伸上つたが、此方に赤帽の話つたのを聞きつけて、動かず、中腰で見合せる。
「眞實でございますね、」
と指せた夫人が、眞先に、續いて、どほ〳〵と學生は肩にかけた提鞄の重いのを、はづして手に提げたが、卓子の上へどンと投げて、
「徹夜だ徹夜だ、」といつて背後ざまに伸上つて、十二時既に三十分を過ぎた時計を視めながら、烈しく靴の爪尖を刻む。
袋に最も適當なる相談對手の出來たのは暖爐係で、腰は今おなじ腰掛の一方に少女を据ゑて、自分も又附添うた老婦人に對して、堀へに堀へた滿腔の不平を漏しはじめた。
「どうも此の貴女、新橋なぞは、何時だつてこんな事はござんせん。冬向は貴女。これでなくッちや凌げませんのに、何うでございませう。此の鑑裁ッたらないぢやありませんか。西嶺を越しますと、何となく人間の氣が節薄になりますので、鐵道の人たちだつて何も自分達のものぢやなし、とうにも石炭を入れて焚けば宜いのでございますがね。私はもう、先刻から怨うやつて始終せつちやうをして居りますけれど、火氣が失せて暖爐の裡が次第に黑くなつて來た中は、未だしも厭がありました。御覽じろ、これ、段々白くなつたのは心細いぢやありませんか。何もこれ、汽車が江州で埋まつたつて、暖爐の中へ雪が降るといふわけぢやなし、はあ、はあ、石炭がなくなつたんでさ。」
老婦人は火を求めて一服つけたが、灰だらけになつた女煙管を、空しく懷紙で、くる〳〵と捲いて拭ひつゝ、
「此のお寒いのに、石炭がないのでございますかい。」
暖爐係は顰を窄めて、彼の耳まで被さつた帽子の裡で低聲になり、
「其が貴女、否、あるにやありますよ。それ、向うの卓子の下を御覽じまし、あれ、ブリツキの箱に入れて、鑪の十能までつけてさ、黑砂糖の接待といふ麗樣式、石炭にあぶらがかゝつて、然も旨さうに、きら〳〵光つて居りませう。」背後に、老婦人が振返るに連れ椅子に凭りかゝつて立ちながら、少女の身を庇うて居た同伴の老紳士も、齊しく石炭の箱の、暗き中に電燈の光を密びて、幽に螢くのを眺め寢ひ、
「焚いては不可いのでございませうか。」

「其處でございます、どうもソレ宜有物でありますから、私どもが、迂に手をつけますわけには參りませんで。」

五

「もし貴女、僅な事で大した遊ひでございますこと、暖爐が消えましたのでございますか。」

防から靡を靡けたのは痩せたる貴夫人。

此の女性は、先刻から見送の、例の前はだけの老僕を歸すことに忙しくつて、暖爐の事などにはかゝづらつて居る暇がなかつた。

先づ其の吾妻コオトの袖口をキチンと胸で合せて、其處へ手を組んで、指をかさねて乳の邊へ附着けるのをキッカケに、根上りに結ひつめた夜會結の項を伸べて、少し俯向き氣味になるとともに、「ねえ、お前」と呼びかけて、扨て、御苦勞であつたこと、歸つたら宜しくいふこと、わざ〳〵見送つてくれた其の深切を謝すこと、停車場まで來ただけで厚意のほどは屬いて居ること、別段に荷物もない事、遲いこと、夜が更けた事、路が悪いこと、雪が積つて居ることを、一息に「呼吸に順序正しくいつて、其の老體であることを最後に、御苦勞であつたを最初に、最う歸つてくれといふのであるが、これは待合に入ると直に取掛り、凡そ八九度といふもの繰返された口上一點するとともに肥大紳士を一寸見て、

「貴下、」といふ。

づんぐりした聲で、

「あゝ、もう歸つて宜しい。歸つて宜しい、」とたゞそれだけをいふのであるが、いかにも取つて着けたやうに大儀らしく口重い、多人數の中に、此の人ほど無口なのはたゝく、又其の細君ほど口數の多いのはなかつた。

今も今とて、此の度は、扨て——御苦勞から——其の——老體——をいつたあとへ、恁ういふわけで何時汽車が來るか、衣があけるか、其さへ知れぬ、道中は不慮の出來事が多いもの、背で御勞を旅行した時、外宮から二見ケ浦へ廻る途中で屋つた俥が前へのめつてあはや五十鈴川へ倒に落ちようとしたが、危く車夫の肩につかまつて無難であつた話を、おくれ毛を震はしながら同一の委勞を風さず、細やかに物語つて、それから見ると汽車の後れるなどは問々ある筈の

貴下、」

あゝ、歸つて宜しい。歸つて宜しい。」

然うすると又前はだけの老僕といふのが、ひしやげた箱子で續けッさまにお辭儀として、次手に其の裾を紙合せると、やがて、仰向いて、ニヤリ〳〵と笑つて、果は目を瞑つて、どう、仕り、きういひ終ると口を閉ぢる。其處で又彼が閉く、一度は一度より衣紋に、めりやすの襟引の襟まで廻れるのが絞切形。

あぐね果てゝ、此の時、人を轉じて暖爐の方へ口を入れたわけで。

「はじめから威勢よく燃えては居りませんやうでございましてすがね、それでも赤いものゝ見えました中は、何となく未だ凌ぎ可いやうでございますが、どうも堪りませんこと、」コオトの襟をしめて、益々袖口を引合せる。

ぐわさり、ずる〳〵と引出した石炭箱を引立てゝ、憤然と暖爐の前へ投下したのは學生である。

「棒ひませんよ。何有、棒ふもんか。」

と山裝、千能をずばと突込んだ、例の男が未練らしく紺足袋を穿いた足を、冷い鐵に押つけて居たのを引込ませると同時に、プス〳〵プス〳〵と陽炎の薄煙。

あれだけ火がないのかと、一同いひ合せたやうに悵然とした。

「來ました。難有い、」と、例の男、直に火氣を

取る。

これを小耳に挟んだ商人風の山高帽。

「辻占が可うございますな、最う參りませう、」

同一風俗の一人が、

「いづれ追つつけ參りませうが、しかし私は一時間や二時間、汽車の遲れましたのは致し方ないとして、前途が心配でなりません、函嶺は無事でありませうか。」

答へて、

「然れば何とも申されません、尾州參州は安心でございます。私もな、何うも其處を案じるのでございます。」嶺關より來るべき汽車を待ちつゝ、泰嶺の峰を說くなりけり。

若い紳士は、並んだ赤帽にすら語もかはさないで考んだが、愁然として再び時計を望んだ。

一時半。

六

何爲か暖爐の火が燃えぬ、突く、叩く、こちるなど、あらゆる手段で拵んだけれども、僅に煙の濃くなつたばかり、炎は縱ほどに縮れても閃かないので、例の男は止むことを得ず、再度火鑵を投出して歎息した。

「こりや壞れて居るんです、から、だらしがありませんや。雪で埋出しでも折ひましたか知ん、こんな事といふのがあるわけのものぢやございません。」

小女は裾の燃え立つやうな、友染縮緬の羽織を着て、美しい毛糸の襟卷、さげ髪にリボンの飾、掃へたやうな蝦茶色の袴を穿いた繭たけた見であつた。

項を襟にすりつけて、うつとりとした可愛い聲で、

「眠いよう、眠いよう、」

「まあ、可哀相に、もう無と我慢をおしよ、」と情ない聲ですかしながら、老婦人は其の時までに手傳つて煽いで居た、一折の懷紙を詮方なげに袂へ入れる。

背後から老紳士、

「寒ると風邪を引くで、辛抱せいよ、佳い見ちやの、佳い見ちやの。」

疲せた貴夫人何條これを見て默して止むべき。

「お孫樣で在らつしやいますか、まあ、お美しい、嘸おねむでございませうね。」

「はい、末ッ見でございんし、いゝえ明けまして十三になりましたが、孩兒で仕樣がございません、はい、否、靜岡の些と手前で下ります。」

こんな事と存じましたら、今夜は逗留をいたしませうものを、此の汽車で歸りますやうに、宅へ電報をかけましたから、皆停車場で待つて居りませう。はい、此の娘の兄や、貴女、姉どもでございんして、何事とは存じませんから、路で又どんな間違ひでもありはせんかと、大抵心配をいたして居りませう。北とでも拔く貴女。

今更此地で消るわけにも參りませんし、然うかと申して、迚も今夜は歸るまいたぞと存じて、皆が宅へ引取りますと、其も氣儀なのでございましてね。

宅から持つて來た事が居りませんと、こんなに遲くどうすることも、出來ません。雪道を貴女、これを遲れまして小半路歩行かねばなりません。」

「私歩行くのは厭よ、母ちやん、」と拗聲になつて少女は頸に項を動かす、傍の老婦人も涙ぐんで、

「お前そんなことをいつたつて仕樣がありませんん、はい、はい、否學校のお休みにお伊勢樣へ詣りましてねえ、おもしろかつたね、いゝことをおしだけれど、疲が悪くつて困りましたねえ。」と、頻ずりして頬に頬。

待合の同情は、不殘此の母子に集つて、駆

むるもの闕すもの、騒然となつて、吸噓は冷いまでも、一時電燈は渺と其の光を増した、がやがて其の反動は著しく、氣の滅入るばかり寂然とした。

交り合つた人々の會話は、絶切れ、一組づゝ一組づゝになつたと思ふと稍絶えて、稍絶えてやがて細語となり獨言となつて、果は一言を發する者さへなくなつた。

少女は老婦人の腕に突伏した、側の男は暖爐の上に、やけに眼をついて打傾いた。士官と學生とは左右から卓子の上へ半身を乗出して、國民と讓賣とを打視むる。傍に二個の商人は、すねたやうに、背中合せになつて、氷りついて、一は西の方畫圖の汽車を待ち、他は東の方秦嶺の輪を想へり。めりやすの肩引は、あらゆる徒然と退屈を吸ひ盡すばかり、口と肩を押開いて、壁際に仰樣、少し放れて肥大神士と、押並んで腰かけて、寝せた貴夫人は、衾裾を正しく、卽ち刻尖に指を組んだが、其のコオトの色も額も色も、ものゝ幻の消え際かと花乎として、電燈も且つ白け渡つた。

怎くして莊嚴なる此の名古屋の停車場も、雖大なる雪の中に、唯圖に孤峙の掘立小屋、屋根あり柱ある建物に過ぎざるのみ。

七

更に長方形の入口の扉の中に描かれたる、室外の光景を透かし見れば、あはれ、果敢ない、風情であつた。

人々は唯まばらに黒く淡き土間の上に、斑々として、吹きつくる風にはら〳〵と白き澈は、岩に碎くる潮に似て、尾張國を押し浸した雪の大浪の退いたあと、散々に名殘の海松布を撒き散らした趣あり、彼處にも又小さな暖爐を取卷いて、二重三重に輪を造つたが、筵の繩の斷れたる如く、横倒れになつたるあり、俯伏しになつたるあり、つんのめつたかと思ふあり、行倒れの如きもあり、赤毛布に蒸蔵を交へ、風呂敷に頭巾を並べて、夜氣沈々、地の底に、あらゆる構内の光明を引き込む時、壁の色灰に似て朦朧として見えたるありさま、荒海なる難破船の、釘の殘つた一室に、幾百年の昔より、底の藻屑に影を留めて、世を終るまで怨靈の消えざる姿に異なるなく、時として遥に漂ら蒼き火の暖爐を透きて見えるのも此等の執念を懍みて、魔王が船幽霊に與ふといふ、呪の炎かと物凄い。

然れば硝子の窓越の、停車場前なる廣場も、白き海の如くに似て、二層三層の高樓に、ちらちらと、電燈の沈んだ色の搖ぶさへ、時夜の潮の輝く風情、独恐しく寂寞として、唯聲は風。

雪は雪、ものゝ氣勢は寒さであつた。

時に彼の少き旅客は、低しゝ、といふよりも、寧ろそれよりは發し得ないやうな沈んだ調子で、

「君、君」と二聲呼んだ。赤帽は舊の如く腕を拱いて壁に描かれた姿で突立つて、稍々頭を下げて居た。離れたものには居睡をすると見えよう。但突出でた扉の下に、黄色を帶びた一雙の眼は、怪しき星の光を帶びて、圓かに開いて居たので、重い口ながら遠に應じた。

「はい、」

少い旅客も、恐らく寒を眠つて居ると思つたのであらう、餘り器用に返事をされて、はッと出後れたか、少時して、

「何は、酒は買つて貰へまいか。」

「は、」

「酒さ、」

「御酒でございますか。」

「何處か、其處等に賣つちや居らんか。」と絵も人間を憚るらしい。

「えゝ、構内の出向人は皆引いて了ひました

すが、未だ起きて居れば、停車場前の旅籠屋にはございませう。」と是も心得たらしく密にいふ。

「酒をする、君でなくッても誰か目覚けて、一ッ御苦勞を願ひたいんだ、お願みだが、」といつた顔の色、以前より猶青ら、

「是で、何うか、」

衝と手に渡した一枚の紙幣は、豫め懷手の袂に取出して居たのもしい。

「何のくらゐ買ひますか。」

「大なのを二本ばかり。」

「罎詰で、四合入の、はい、宜しうございます。」

と飛然、壁から放れたが、身體を廻らして出ようとして、フトしんせつに心付いたと見えて、入口の扉を入交りにハタと閉めようとする。

搖れ遊ひに、すッと入つて來た婦人がある。黒綾のコオトを着て、鼠縮緬の頭巾を、被らず、ト纎く頸に卷きつけた、生際の濃い、拵上げの淡い色ッぽい、ふさ〳〵とあるのを埋い銀杏返し、ぱッちりした黒目勝に、一寸輪、伏目勝で然うとは見えず、色の白くまで白い、圓顔ではないが細面といふでもない、肩も腰も小ぶとりな中年増。

口は唯美しい飾だけにつけたやう、ものはいふまじい狀に固く唇を結んで、沿ましてッンとして反身なり。

八

續いて白い手巾を襟にかけた、薄命らしい小女が、兩手に、大な風呂敷包と革鞄を提げて、ちよこ〳〵とお供で入る。

あとをドン、赤帽の姿は消える。

扨て長者町あたりと見えた、此の雨女は、辨しく十二時以前から待草臥れる迷中であるが、雪に最も近い構内の入口の腰掛を、二人で占めて、氷りついた風情で居た。

惟ふにお納屋の中二階、將たそれ河文の奥座敷にあもざるよりは、浸りに浸らすまじき嬌音を、うつかり知人に聞かすまじく、故らに遠ざかつて居たのであらう。否や、此の待合室に且那云々、說をなすものあらむか、未だ執か是なるを不知。

今赤帽が扉をさゝむとしたので、餘りに三等の待合の、船幽霊の如き物凄さに堪へかねて、こゝに其嫋娜たる姿を顯したに相違ない。

直に年少な旅客の居る、端近な件の椅子に背を向きになつて腰をかけた、間へ持參の荷物を入れて、小女は悠に悄然。

定に入つた如き前面の隅なる、痩せた貴夫人の、一寸鬢を上げて、此方に打顧んだ眉を向けたばかり、敢て一人として目を着けようとするものはなかつた。

實際、此の待合室は、開き尤物を求むるより、列車を欲するに急なのである。

ぎいと扉が、赤帽を附着けて、ぴたんと閉まつた。

折角の人の氣、無にならないのを嬉しさうに、しかんだ面に笑を湛へて、人には藏すものゝやう、上衣を開いて脇の下に忍ばして來た、二本の罎を密と出して、

「へゝゝへゝゝ、」

「どうも御苦勞、」といつて旅客は何故か深い歎息。

「且那、お剩錢を、」

「そりや可いよ、可いよ、可いんだよ。」

「え、何うも、」

輕く一寸掌を上げて頂いたが、其のまゝ衣兜へ突込んで、片手も入れて、赤帽はぎろりと四邊を睨はした。

心付いたか、慌しく、

「汽車は、關ケ原で埋りました。急いでぐんぐん推して參りました爲に、搜關車の前へ、どえ

もい雪の山が持上つたと申しますな。何でも十二時四分に出ます、急行の切符を四五枚切りました處へ、電報が參つたさうで、此の停車場が出來ましてからはじめてなんで、はい。だが、旦那、先刻着きました此處までの列車も無事に參りましたし、樣子が知れると直に迎の機關車と、工夫が大勢加勢に出ましたさうですで、皆でえッさと引張つて參ります。遲れるたつて然う大した事もございますまい。えゝ、其の御酒、荷物へお入れ申しませうか。」

「いゝや、」

といつたが、自分で革鞄の口を開けて、差覗いて取り出した、四角な紙製の小箱一個、びりびりと眞中を裂くと、猪口が花片の牡丹形。

「戸外は未だ降つてるか。」

「どん〳〵、どん〳〵、」

「大雪だな、」といひ〳〵器械の口を外して、斜に取る、縦に逆歩といふ銘あり。

寒さに手が震へたか能く注げず、烈しく傾いて唯僅に底に滴つたのを、ぐいと引かけ、又注いで、呷つて、ぐい。

衝と身を起して、例の冷ました美人は小刻に此の腰かけをツンと離れた、同席御免といふ如し。酒を厭ふと悟つたか、後姿をじろりと見て、此と其の眉を顰めたが、杯を碪と下へ、四合入を倒にして、仰いで目を瀉つて半ばを一息。

もぎ離すやうに口を取つて、トンと其の逃歩の底を外套の袖に支くと、吻と息を吐いたが、早や、目瞼に遲と漲る血の色。

低聲で呼んで、

「赤帽君、どうだ君。」

九

呼ばれて赤帽は其の梟にも似た鋭い目を細、うしたが、酒の香を嗅ぐや否や、實はあらぬ方を見て居たのであつた。

「寒くッて寒くッて、堪らないぢやないか、君も一杯やれ、」

と破り棄てた「包紙の端で、罎の口をきり〳〵と拭いて、其まゝ赤帽に差向けた。

「ぐッと引かけ給へ。」

「無有うございます、まあ、貴客、あがりまし、」

「可いよ、澤山あるよ、さあ、君、」

「では其のお杯で下さいまし、其の方が結構でございます。」と然も〳〵嬉しさうに手を出した。

直に飲して、

「成程然うか、おや、是で。」

酌は身體を捻向けて手が逆になつたので、四くなつだ〳〵と出て、掌に溢れたので、受けたる赤帽、慌しく右の手で持ちかへると、唇に衝つて噴ひ切るばかりに手袋を外すや否や、未だ雫の留まぬ猪口の下へ重手をしたが、ぐッと受けて、我慢して、やがて、べろり横撫に嘗めた時、酒涛りの其の手袋は痴を放れてほろりと落ちた。

構はず赤帽の肩を、彼是旅客の肩と摺れ〳〵に、近く見れば硬い毒蟲の生えた顎を、猪口の上へ持つて來て、直角に腰を突出して曲げたが、ちゆッと吸つて舌鼓、タッタッ。

「へい、貴客へ。」

「まあ、お腰へだ。」

「で……ですかた。」

「追つかけて最う一杯。否、未だ、構はず構はず、」

五杯目をごくりと飲んで、漸ッと腰を伸して、短胴の下へしめ込んだ、三尺の下あたりへ、重いものゝやうに飲みさしを据ゑて持つ。

「何うだ、おもしろい事でもないか、」

旅客は此時ふら〳〵として、眦を腰かけの手に曲げて、頬を支へ、仰向いて、赤帽の顔を見

上げて打惚いた。

赤帽は庇の下で、顰暗く伏目になり、

「おもしろいは旦那方こそ、當地へ新年の御旅行でございますか、」

「何、然ういふわけでもない、」

「何時おいでになつたのでございます。」

「昨日の朝さ。」

「東京から、」

「あゝ、然うだよ。」

「それは大分御遠方から、又强いお急ぎでございますな。」

「詰らんもの、」と投げたやうに落膽した風していふ。

「そりや、最う一向詰りません、別に見るやうな處はありませず、名所も景色もございませんので、」

「否、なか〳〵然うぢやないよ、前津も住し、大池も住し、此の電車の通る正面にすッくり記念碑の立つた處なんざ、西洋へでも行つたやうだ、田舍漢は目を瞞かす。それに紫川といふ名所があるぢやないか、第一君たちの名所だらう。」

「御串戯おつしやいまし、私どもは何、それよりか、今度建立になります、納骨堂の方が、難有い名所なんで、はい。

何でも信濃の善光寺より、もつと立派な善請ださうで、去年の夏からかゝつて居りますが、大した地形でございます。まあ其でも出來ましたら、精々通ひませうと存じまして、あくせく働いて居りますんで。

何の旦那、紫川なんて、名所どころか、金銀を棄てる河でございます。」

と赤帽は苦笑。

「嘘を吐け、もつと飲んで、此と其の泥を吐かないか、」と此方も微笑んで罎を取る。

赤帽は時に四邊を見たが、人は唯昏々として、灰の如く、煙の如く、一の色濃き影もあらず、却つて柳行李、支那革鞄、風呂敷包など、算を亂したのが、むく〳〵と動き出しつゝ、人語を發するらむ氣勢である。

抑らず杯を上げて、殘れるを飲み干した。其を返さうとして猶躊つて、つまさぐつて、俯向いて熟と視めたが、

「此のお猪口は、旦那、牡丹亭のでございますな。」

十

「えゝ、饅飩の煮込が、彼處は名物でございまして、火鉢ごと座敷へ持出して喰はせますが、閑靜な佳い處でございます。牡丹亭へおいでなさいましたのでございますか。」

「あゝ、牡丹亭へも行つた、紫川へも候つたさ、」と酒がいはすか、明さまに詰つたが、聲は沈んで居た。

其處で赤帽が心安げに、

「失禮ですが、お杯を戴上げませう、へゝへ、其はお樂みでございます。」

「何、」

と受けると赤帽が酌をする、旨さうに一口飲み、

「私ぢやない、朋友さ、同伴さ、飛んでもない馬鹿な奴さ、好色な奴さ、な、しかし淡しい男さ。」

「へい、お同伴樣で、」

些と要領を得ないで赤帽は眞面目である。

「長々と川一條や野の原、魚其の水は紫で、廊の灯は美しからう、こゝへ千之助が旅姿で通ふのか。」

「千之助樣とおつしやいますと、」

「千の字さ、私の其の朋友さ。深見といつてれ、兎角深みへ嵌りたがる男だ、又其の溝へでも墜ちなければ可い、」と半ばは獨言のやうに

いつた。
「お一人行らしつたんでは危險でございます、一所に行つてお上げなされば可うございました。だが旦那、然うすると婦人の兒が喜びますかはりに、怎うやつて結構な御酒を頂くわけには參りませんので。」
「お世辭もんだな、さあ、又上げよう、しかし君、男の的では詰るまい。」
「どういたしまして、えゝ、少しわけがございまして、婦人なんぞ人間とは思ひません。」
「いやお互になに、」
といつて呵々と笑つたが、夜陰なり、折から片隅の一燈薄暗い中に、此の聲は凄かつた。
「なんぞといふが、其の實は人間以上かも知れないよ、人は知らず私には事實然うだ、ねえ、赤帽君。」
「へい？」
「人間以上か、以下か、何うだか知らないけれど、何しろ名古屋の婦人は酒を嫌ふと見えるな。」
旅客は突然、妙なことを。
赤帽は何かは知らず、
「然うとも限りはしますまいで、一般に餘り酒の好な婦人といふのはございません。」
「特に名古屋が甚しい、見給へ、此處に居た美人なんざ、酒をはじめるや否や逃げました。」
と大分酒が廻つて來た、勿論一息に約二合を呷つたのであるから。
對手も以ての外呼い樓蟻で、
「成程御尤でございますな。」
「激しいのは、人の飲むのを見てさへ三舎を避ける、杯を鼠したら驚落をして、酒を飲ませたら目を眩すだらう、實は其の深見千之助といふ男も、此の名古屋へ酒を飲まうと思つて出掛けて來たのさ。」
「何處か お氣に入つた料理屋がございますので、」
「否、飲ませて貰はうといふのだ、酒を强請りに來たんだね。」
「へい、」
「其の强請らうといふ對手は、當地の高等官の細君でね、所謂當世の貴夫人さ。多分名をいつたら君なども知つて居よう、地方は廣くッても狹いから、彼が謂某の夫人といつて指を折れば直に分る。名代の派手者で、殊に無類の美人だから。」
「えゝ、成程、其のお方へ、千之助さんとおつしやるのが、酒の無心に入らしつたんで、旦那、餘が惡うございますな。」
「聞きやうも惡いんだ、何も銀の平打の簪や、金蒔繪の櫛を證據に、牽り込まうといふのぢやない、貴夫人といふのはね、其の千の字の姉さんなんだよ。」

十一

「兩親のない男だから、姉は唖で勿論だけれど、母親とも、父親とも、兄とも、叔母とも思つて、懷しがる、慕ふ、甘える、可恐しがる驚ぎなんです。其唖に、去年手酷しく禁酒を命ぜられたと思ひ給へ。矢張新年、此の名古屋へ來た時の事で、弟は東京に住んで、姉は、かたづいた先の主人が當地へ勤めるので、來て居るんだが、久しぶりで逢つたんだ。殊に一學校も卒業して、まあ〳〵祝譽を擔つて來たといつても可い、唯二人の姉弟です。夫人の方でも懷しい、慕はしい、甘やかしたい、又叱つても見たい男の兒だから、逗留をして居る中は、彼處、此處と連れて歩行く、朝ッから御廻走して、寢る間も惜しいくらゐに驅いださうさ。其のうち又夫人の知己の令嬢なんか、女連三四人で、千の字と一所に、前津の田圃をぶら〳〵歩行で、皆それ指環ね 時計ね、金剛石、紅寶石、眞珠、

黄金、珊瑚、白檀やら、友染やら、櫻模樣、江戸樓、といふ拵裝。此の稻塚の跡だの、大根の枯葉などをおもしろさうに、田舍道の丸木橋を恐怖がつたり、手を曳いたり、泥濘を辷つて、暴紙を使ふのもあれば、向うで手巾をふるのもあつて、さゝんざで此の一行が牡丹亭へ練込んだ時。
母屋とは立離れた亭づくりの六疊か何かへ、色と香を充滿に陣取つて、一寸一口といふ處だが、女連、殊に其の姉さんは、千之助の些少も左が利かないのを知つてるから、お銚子拔で、といふ謎になると、件の千の字此處で堪らなくなつて、事餘顯に及んだといふのは、是非お烟の熱いのをと註文をしたんださうな。
尤も姉さんの知つて居る千之助は飲まなかつた、けれども最う大學を卒業しようといふ間際から、些と仔細あつて飲みはじめた、なか〳〵の酒家なんだ。」
赤帽は酌をしながら、
「いづれ、お仕込みでございませう。」
「馬鹿をいへ、私が仕込まれた位なものだ。
（生意氣だね、）か何かで仔細なく許可が出て、直に杯洗がちり〳〵、凡て、まぶし、茶腕蒸、お鮨に、奈良漬、甘いものは、むしかん、外郎の類に至るまで、辛いといへば唐辛子にもかつて居た處だから、ぐいのみに三四合またゝくの間、口を喇叭にして、けるのを眺めて、呆れ返つて居るのを、
（姉さん、）などゝいふと、此の辨の驅けやうが、魔性のものを呼ぶやうだつて交ぜ返した、人の惡い令嬢があつて、姉、串戯半分に不機嫌不斜。
（私が困るわ、）と苦々しがつて居る中は未だ可かつたさうだッけ。
其の勢でふら〳〵と出た、暮方だつたつて、酔顔朦朧として眞赤だから、姉さんが、
（恥ッかきねえ、同行は恐れる。）
とそれでも慌狼していふと、
（其方で頭巾を被れば可い、）なんのつて大氣焔。
道が變つたから、あの大池のふちを通つた、黄昏なり、遠くでちら〳〵と灯は點く、はじめてだから大な湖と見えたらう、国つた千の字は、龍宮の入口でも見つけたやうに、好い景色だつちや、ふら〳〵水際へのめるから、
（貴下、危いことよ、）ッていふのがあると、姉さんは邪險な癖に、優しく眉を顰めながら、
（うつちやつてお置きなさい。）
（誰か對手はありませんか、直に心中だ。）と先生大生酔。
色氣かと思ふと、袂から、茶屋で攫つて來た、ゆで玉子を出して噛ります。
是で最う當分勘當の價値十分だから、姉さんは貴夫人式の丸髷、脊が高くなるほどッンとしてずん〳〵、前へ行くあとから、よろ〳〵よろよろと道を綾にかけて歩行いたが、一軒屋の手前に、路傍の明地の端へ、夕風で焚火がしてあつた。
ちよろ〳〵炎の上つてるのを、とろりと見つけて、何處まで意地が汚いのか、止せば可いのに。」
「はて、へい。」
と赤帽は豚口を尭按へる。

十二

「深見が卷煙草を出すと、突然口へ銜へて、蹌蹌けながら點けようとすると、僅なことも思愛で、蟲が知らせるとでもいふ事か。況まして前へ立つた姉さんが、其時フト振返つて、
（あゝ、危い、）といつたが間に合ず、無精にも程のあつた、懷手をしたまゝ口で吸ひつけようとしたから、ぐら〳〵となつて、焚火の

上へ横倒につゞのめつた。」
赤帽は思はず口へ出して、
「えゝ、危い。」
「そら、懐手だから足掻がつかない、其まゝ炎を背めさうに、ぐた〳〵となつたが、あ、あ、と皆いつたッ切。
夫人が紅の色をかへて飛んで來て、地へ膝をつくと、友染の長襦袢が泥染れになるのも構はず、一心になつて抱起したが、片袖宛で火さ。
自分でも紫紺の縮緬の帶卷や、江戸褄の波處此處焦して構はず、揉消す處へ、皆寄つて始末はつけたが、直に腕車で愛知病院へ駈込むといふ騒ぎぢやないか。
左の二の腕から大火傷、今でも痕は消えないが、まるでこれから、」
といつて旅客は袖をかゝげて見せた、其の露したのは右の腕で。
「ずッとこれへかけて朱で卿ものをしたやうに、俱利伽羅吹々〳〵の龍の形、可恐しい極印を打つた、其の千之助の手を取つて夫人が自分は涙ながら、じり〳〵とあぶらを絞らせて、此處できつぱりと禁酒の申渡。
尤もそんなにかたまるまでに、いかに親身とはいひながら、其の優しい介抱といふものは、怪我人より夫人の方が、いた〳〵しいまで痩せたくらゐ。
此處で一言もなく恐れ入つて、男らしく立派に誓つた。
（決して酒はのみません。）
恁ういふわけで酒を斷つたが、東京へ歸つてから、又感心に、一滴嘗めても見ないといふ大勇猛な、精進さ、まあ、ざつと一年間。」
赤帽は取つておきの手の猪口を、つく〳〵と見てうつむきながら、然も感に堪へた趣で、
「御酒をおやめなすつた其のお方も感心でございますが、留めさせた其の御夫人は偉家うございますな。眞心が通じませんでは、然うは爲られぬでございませうに。えゝ、たとひ親身の方樣にした處で、今時そんな優しい婦人がありませうか、いづれ極昔風なお孃樣で、女學校などゝいふものは、門をお潜りなさつたこともないお人でございませうですす。」
と思ひ入つた樣子で聞いたが、目は輝くのであつた。
旅客は何とも心づかず、
「どうして、東京で有名な學校出のばり〳〵だ、縱の字も讀むし横の字も讀む、馬や自轉車は知らないが、ぶらんこにも乘つたらう、荒き風處ぢやない、テニスの球にまで當つた人だよ。」
「へい、袴を穿いた婦人にもそんなのがありますか、へい、」
といつたが心ありげな、あとの言を酒で壓へて、赤帽はぐつと飲んだ。
「怪我にもそんなしんせつな人でもありましたらな、張合になつて留められませうに、私なども、へい、是が病で不可ません それでずッと御辛抱なさりますか。」
旅客は丁と膝を拍つて、
「はゝはゝ、處が不可い。」
「はて、留められませんかい、」と彼方も色に出て罰赤に笑つた、齒が白い。
「其處で酒を强情りに來たのさ。」
「なるほど、」
「其の姉さんに、」
「へい、なるほど。」
「いかに飲みたければといつて、一旦斷ちますと誓つたものが、對手が金比羅樣でなくつたつて、むざ〳〵飲まれるものではない。
何、さきは婦人だ、しかも姉だ、また東京で酒を飲むのが名古屋まで知れるものか、知れたつて小兒ぢやなし、一人前の男だと、いつて了へばそれまでだが、其處は義理だ、情愛といふもんです、」
といひかけて情然とした。

十三

「そんならまたそれほど義理情愛をわきまへたら、默つて禁酒をして居れば可いやうなわけになるが、其が不可い、といふのは、赤帽君、君は何故か十年の知己のやうな氣がしてならん、こんな場合であるからかも知れないが、私は然うではないやうだ。」
「私も貴客、何となく、へん、飛んだ無躾でございます。」
「あゝ、私の知己なら、千之助にも又知己だ。朋友のために、まあ、聞いてくれ給へ。
元來ね、其の深見が酒をはじめたそも〳〵が、何も好や道樂ではないんです。私なぞが見ても、止むを得ず酒にしたのだ、詰り癖なんだ。
奴は其の豫て生命がけで戀つて居た婦人があつた、思うて遂げざる戀で、其のものは他家へ緣づいてしまつたんだ。」
赤帽の眼は又きろりとして、黄を帶びて輝いたが、人知れず一種異樣なものであつた。若し一目是を見たら、いかに酒が言はするにせよ、必ず其の物語を中止したであらう、けれども赤帽には庇があつた、庇は人に暗かつた。
「緣づいて了つたんだと、唯口でいへばそれだけの事だけれど、若い當人の身に取つちや、身體がしびれて血の色が變るくらゐ、それからといふものは、酒を飲まないで、千之助、瓶に活きた色のある事はなかつたんだね。
是だもの、いかに義理だつて、情愛だつて、姉さんの一言で酒を斷つたのは容易なわけぢやない、こりや私などには出來ない。
けれども又、情愛で飲みはじめた酒だから、同じ情愛で斷つことが出來たんです。
一體飲む中も、止めてからも、心が狂ふほど、情ない思ひをしながら、其處は教育のある男だから、やけを起すなぞといふ不心得な事は微塵もなく、蔭ながら其の餘所へ緣づいた、戀人の無事を祈り、幸福なやうにと希つて、舅姑の氣質やなんか、實家の親だちより恐らく一倍だらうと思ふほど、氣を揉んでさ。いや、其の初產のおめでたさを、風の音信に聞いて、朋友の醫學生に、西洋產婆と、取揚の優劣を、内證で聞く如きに到つては、乃至々々しいが、心は清い。
然して其の男の心持といふのは、何時か、何年の後か、或は何十年經つてか、そりや知れないけれど、先方が白髮になり、自分も齒が拔けて、誰が目にも色氣のなくなつた時か、もし然までに待たないでも、自分も斷念めて他の女を女房に持てるやうになるか、或は一朝當然として大悟徹底をしてだ、女に對して心の動かないやうな見留がついたら、其の時こそ戀人の手を公に握つて、御亭主の前、親類の前、知己の前で、一度自分が、どれほどに思つて居たかを、其の婦人に打明けて、離別つて退けようといふのだつた。
何故なら年は若し、思ふの墓ふのといふ事なんぞは、天下の一大事と心得て居たのだから、情なく傍へ緣附かれるまで一度も素振にさへ、前方へ心を通じたことがなかつたさうで、又それだけに心は深いんだものね、死ぬまで默つて居るのは偉り情ないといふわけなんです。」と聲もしめやかにいふのである。
赤帽の顏の色は、やゝ解けて、
「それでは約束をして置きながら、寢返りを打つたといふわけではございませんな。」
「眞個さ。」
「へい、それならば未だしもでございますがね、

もしか寝返を打つた阿魔なら、活かしては置けませんで。」と、可恐しい世辭をいつて、又杯を傾けながら、

「貴辛、心がはりなら女學生でございませうが、何にも知らんのでは大した薄情な女といふではありませんで、薄情な女でなければ、大方蝦茶縞は穿いた事のない人でございませう。」

「可恐しく蝦茶に祟る、意恨でもあるか、」

と不圖耳に立つてうら問うたが、

「へゝ、何、然ういふわけでもございませんので。」

「然うか、いや然し遅つたよ。千の字の其の叶はなかつた戀人といふのは、矢張朔さんなる夫人の學校朋達で、しかも容色が佳いので、兩方惚れ合つて、姉妹同樣、婦人同志で恰氣をしたといふくらゐなんだ。」

十四

「だから千之助の朔さんといふのも、大に其の間の弟の情を知つて居るから、同じ酒の意見にも、特別の意味が籠つて、實に涙があつたんだね。其處で、其のまんま熱酒して、其の氣で幸福をすれば、何事もなかつたのを、急に我慢が出來なくなつて、東京から酒を强請りに來たといふものは、何うです、去年の秋、其の戀人が、產後で果敢なくなつたぢやないか、勿論、葬式でね、どうせ、はじめッから兒を產まうなどは無理なんだ、無理だつて、しかし、こればかりは仕方がない。

仕方がないのに、斷念められないのは、千の字で、唯一心に、そら、今の其の機會を待つて、一度思つただけを打明けようと、東屈なやうだが因緣さ。そればかりを樂みに、當にして居た、其の美しい的に、ほろりと消えられては、急に闇、風も處も知らず名もない山の中に、眞暗な道を辿つて、唯便りにした綺麗な星に落ちられたやうに、心細く、儚なく、寂しくなつて、其のまゝ死ぬのさへ、冥土に輒のないやうな、何ともいはれない心持。切て酒でもなくば、逆も立つちや歩行かれなくなつたから、其處で强請りに來たわけなんだが。

其も勸める役所があつて、おいそれと、直に旅行も出來ないので、一日千秋、此の新年の休暇を待構へた。

今度は、兎も角も一旦男が盟を立てた、其の盟を破らうといふのだから、獨り止むを得ない心の中をね、利發な朔さんは大抵察子で知つても居ても、是も道理、つひぞ口へ出した事はないのだから、更めて打明けよう、手紙でいへる事ぢやない。

そんな、こんなで、明日名古屋に出掛けたんです。」

赤鉛は庇を斜に、酒に熱して色づいた、耳を傾けて聞いて居たが、

「はあ、」

溜息をして、獨で頷き、

「酒も唯惑うがぶ〳〵頂いて了へば其までゞ、此の婆婆を素通りにしたも同一で、何の味もないでございますが、そんなに嘯めて召食つた、其の御酒は貴辛、まづ、どんな味がしたでございませうな、」と舌打をしながら祟々。

旅客は案外氣の拔けたやうに、

「いやはや、甘からず、辛からず、苦からず、濃からず、他のない、力のない、當のない、水のやうだといひたいけれど、それも波立を飲むやうなもんぢやなかつたさうだ。」

「へい？　然ういたしますと、」と力を入れる。

「實は飲まずさ、」

と扇折れていつた。

「おう、それぢや、其の朔さんとおつしやる夫人から、何てつてもお酒が出なかつたのでございますか。」

「何これを許さないやうな思ひやりのない婦人なら、東京から、わざ〳〵誰が强請りになぞ來るもんか。また、はじめッからそんな人には盟もしないさ。」

「では貴客、」

「居ないよ。」

「はて、」

「留守さ、暮の三十日から奈良へ旅行をして留守だといひます。其の主人も居ない、是は公用で、もつと以前に、佐世保の方へ行つて居るんだ。

あとは書生と女中ばかり、森閑とした留守宅へ、昨夜一晩、望の酒處の沙汰ではない。

然も歸宅のほどは知れずといふね、然う何時までも家をおあけはなさるまいとて佛ぢやいふのだが、日限で拔けて出た身體だらう。松の内待つて居る數ではないから、唯もう花乎、三時間と五時間と、行うして居ては、魂が拔けて、身體が蛻の殼にならうも知れぬ、又の事、と思ひ切つて、盡過ぎ、出發つて歸ることに極めると、それでも未だ買つて歸る土產に氣がついたもんだから、

旅客もつい、話の次手に心付いたか、又革鞄を開けて取出した。

「談話に紛れて、すつかり心付かなかつた、愛に好下物がある、灘萬とかいふのゝ湯鮮ださうだ、汽車の中で、酒の時ッて、内から……旅籠屋で、お歲暮に到來といふのを達引いてくれた。一ッ喰はう、君もやれ、甘いぜ、此品は。」

十五

「其處で書生さんに調へて貰つて、革鞄に詰込むと、直に出發。

皆が見送らうといふのを、いや、暫時の間も留守が大事だ。か何か氣の利いたやうなことをいつて、其の代り、停車場まで腕車を、といふので、輾場のを雇ひ込んで、さつさと引出させたは可い。これが其のまゝ此處へつけば、何の仔細もなかつたのに、途中で、彼の記念碑を見ると、フト陡が魔して氣が變つたんださうさ。」

「えゝ、其處で、あの紫川へ。」

「否、そら、ものが記念碑だらう、何か不知、禁酒事件に取つては、千之助に一大記念のある牡丹亭だ、腕車の上で、不圖其處を思ひ出した。

行つて見よう、と突然聲をかけて、棍棒を其方へ向けさしたんだ。

然り物足りない旅行なり、神氣なし、それに汽車も此の急行があるといふ考へで、牡丹亭へ行つて見ると、一寸腰をかけてと思つたのが、つい、其の何となく懷しくつて、爲られない。酒は飲めないのに、肴は鮪、あの片思ひといふのなんぞ、氣にして箸もつけないで、人ッ子一人居ようぢやなし、寂れた景色を視めて居る中、雪がちら〳〵と降り出した。

眠な底冷がして、一昨昨日あたり、青空が見える底から、時々さつと、高い銀杏の梢から、落葉するやうに降つたつけ。

又此の雪が禁物なんだ。

何でも千之助が其の戀人を見納め、といふのが、其の人、湯あがりで、ほんのりして、濡髮が思はせぶり、横顏にかゝつた姿で、机に頬杖をついた處を、硝子窓、其の窓へ一ぱいにしッきりなく、がか、ゝつてこんもり、珠で飾つたやうなそこへ、ぽんやりと赤く灯の影が映るのを、移の垣根越、其の家から辭り際、玄關で分れた道が、屋敷町の寒手へぐるりと廻つて、逸つて部屋へ入つた令孃の居間を、梅の枝から透かした處。

然も結納の取交はせのあつた夜さ。千は、」

旅客は羨しくいつた。

「男子でありながら、何だらう未練らしい、雪の中に立竦んで、暫時然と見る内に、見る〳〵

中に其の合羽の紺の色が部屋の内の暖さに、硝子窓には寒さへ置いたのに、遠と青白くなつたのを、あゝ、心の冷さが、面に顯れる位な女と、怨みに思つた事もあつたが、夭死をされた時には、ぢや、もうあの時分も、影が此の世の人ではない、早や既に白玉樓中の仙女であつたのかも知れないなどゝ、何かにつけて思になつて、くだらない事も忘れないから。

雪で又思ひ出した。

然も急には留みさうもない、其處等も白くなる、火鉢を煽へてつくねんとしたッ切、名殘が惜くつて立てないから、日の暮れるまでも怨うしてなぞと。

しかし冷い中に待つて居る事大は氣の毒千萬、それに新年で急しからうと、其處で、荷物を引取つて返したさうだが、此が又惡かつた。

さあ、居ると聊めると歸りたい、何の、一人で其處に暮として、日の暮れるまで遊ばれるくらゐなら、最う一晩、姉さんを待つたつて可いわけなんです。

革鞄を提げて、せつかちに牡丹亭を飛出すと、いつかの大池の岸について町はづれまで一町足らず、火傷をして乘せられた時覺えがある、此處で車を、と思つたが間遠で、さあ、無からう。

記念碑の處まで出さへすりや電車もある事と、其のまゝ目つぶしを喰ふ雪の中をかまはず、突切つて何町か分らない、方角をつけて急いで來ると、間の惡い時といふものは。何と暴緒が ブツツリ。

雪は薄くかゝつたばかりだから、踏留まるはずみに路の惡い處へぐつしやり足袋跣足、出るも引くもならぬこと。

幸ひ土塀板塀だの生垣つゞきの裏町で、一人も人通りはなかつたから、軒まれの體で躍つた形は、御當地の人へ見せないで濟んだが、其のまゝもや何うする事もなりません。

可懼梅に、雪も小降になつたから、おまじなひほどに白く積つた、路傍の移垣に革鞄を寄せかけて、ともかく馴れぬ旅路といふ體裁に……、下駄を結へつけようとして居ると……。」

十六

一（貴客、貴客、）と優しい聲で呼び懸けた婦人がある。

此方は手巾を引裂くのも面倒だから、其のまま、俯向いて結んで居た處、其處等に知己はなし、婦人だし、別に通りがゝりのものがあつて、其に話しかけたのだらうと思つたけれど、呼ぶのがつい耳近で、判然枕頭で聲でも鳴くやうだから、振向いて見ると直ぐ背後。

革鞄を立てかけた移垣の其の枝折戸に、目の覺めるやうなのが立つて居た。

年紀は二十三四、後で七ッになる兒と、五ッのと、二人の母親であることが知れたんだから、六、七かも分らない。

生際の濃い、あまるほど澤山な髮を花月卷で、冴々しく燦々する寶玉を飾つた横櫛、乙女椿の花簪、目の涼い、二重瞼の、頬のふッくりした、色の白い、口許の緊つた少し濃過ぎると思ふ程に眉のくッきりとした、脊も此高過ぎるばかりだから、猫見草がある、肉が厚いといつた柄で、立增つた品格があるではないが、何となく總體におもみのある、其が然も嬋めいた形容だつたさうだ。

一寸見には……先づ、燃え立つ牡丹の大輪なのを、どんより曇つた少し蒸暑い日に、身體へ汗ばんで覗めるといつた風情。顏を見たばかりでも、ほんのり人肌の暖さが身に染みて、ちらちら降つて居る雪も、其の人の身に觸ると怨嗟と薄紅。花片にもなりさうな。傘はさゝず、赤い鼻緒の上草履で其こそ小留みのない白いものが、圓く積つたやうな新しい足袋。構は

ず薄雪の庭芝を踏んだが、片襟がぞろりと爪尖にかゝつて、惜氣もなく、蓮葉に小肥りのした二の腕の露なまで、袂折戸の柱に高く片手をかけて、伸上つて覗くやう。

片手に桃色の紐の手巾をはらりと、其の手で上前の褄を取るやうに、猫鼠の風通お召の上衣の、朱塗色の扱帶があからさまに、怨うずり下つて幅廣な、其下あたりで輕く指のさきで引上げたが、一體に着崩れのした、下着はづッしりと更紗縮緬、紅色友染の對丈縮緬も、嚴長う、身うごきをすると薄色の其の裾が、はら〳〵となる、しどけなさ。

上に黑縮緬三ッ紋の羽織を、無造作に引つかけたが、肩を辷つて、其の褄を取つた手首にかもんで、緋縮子の裏が、だらりと肩へ、一太刀浴びた紅かと、罪も、帳いも、情も、色も、其處から溢れるばかりの 襲。

見てさへ然うだのに、片膝取亂したほどの酒機嫁か、羽織のずッて落ちるまで、炬燵にでも蒸されたらう、うつとりと濕ッぽく、霞を帶びた肌の艶、顏の色、雪にめげないのも道理であつた。

（私ですか。）

（貴客、御想像ですさうだ、こりや勿論鼻緒を踏切つたのを見て、しんせつで出て來たんだね。

然ういつて、兩手で手巾を扱いて、斜邊に腕へかけて、裂く眞似をした時、微に口を歪めたが、（あれからお見受け申しまして、私も、あの、手巾でも差上げませうと思つて來たんですがね、お待ち遊ばせよ、貴客、それぢやお穿物が間に逢ひましても、御足が泥だらけで、あれ、濕なし、お氣味が惡くッて不可ません。まあ、一寸お寄り遊ばして支度をなすつて行らつしやい。さあすぐに。否、私だつて、お世話をやかして頂きたいと存じて、出て來たのでございますもの、御遠慮を遊ばすな。誰も居りはいたしません。）と慌惶していつたさうだ。

平に辭退をしたんだが、又雪も殆して來たし、つい其の言に誘はれた。

（お姐口から失禮ですが、お言に甘えますが、しかし表へ廻りましてお臺所口で何うぞ。）貴客田舍家へおいで遊ばしてそんな事をおつしやるものではございません。」と招いて手を取るやうに、身體にまで心を入れて、千之助を連れ込んだが、どうして田舍家どころぢやない。

大家の別莊と見えた、生垣の工合なぞは古風な寮のぞうに讓へたが、向ふと、正面に小高い西洋造の構があるんだ。」

赤帽が突然、

「且那、其、其奴が、どんなことをいたしました。」と猪口を持つた手が震へた。

「知つてるか、」

「名古屋に西洋室のある別莊は一軒しかございませんで、澄江！」といつた眼の色尋常ならず、ぎろり、旅客の目に映つて、殺氣を帶びて見えたのである。

說林

明治三十年八月

故人一話の說に因れば蝋に飯粒をクッつけたので水馬が釣れるさうなり。柳浪子の說に從へば、好物くさいといふは五色の香がするのなり。天外子が說を聞けば、腹の痛む時（チキン、ロース）を食べれば直り、宙外子の說によれば、人酒パンを多食すれば美人に逢かる。また水蓼子の說に從へば、蚯といふものは恐いものなり。正太夫子の說く處に因れば、すべて小說家は口紅を、けて歩行くが宜しく然。

――鏡花全集卷十五「雅句帳」より

續紅雪錄

一

「澄婦、澄婦といふか、赤崎君、君は彼の別莊の美人を澄婦といふか。」

旅人は懲しく凝みかけるやうに言ひ返した。

「えゝ、能く彼の體が、白い骨になつて溶解けない事だと思ふくらゐなもんなんで、」と横に蒲鋒を喰ひ切つた。

「大層委しいと見える、ありや一體何ういふ身分だ。」

「へい、御存じではございませんか、ありや貴客有名な、……といふ、大したお役人様の夫人でございます。」

「否、そりや聞いた、千之助に聞いたから心得て居るが、其の生立だよ、其の以前の事だよ。」

「まあ、且那、千之助様を先づ、別莊へ連込みました、あとをお聞かせ下さいまし、承りかけたで、氣になつてなりません。又お話の樣子に因りましては、申上げます心得がございますで。」と半ば戯したのを口へ入れて、掛指をぺろりと舐める。

旅人は永第に酔が出た、何の仔細もない事を、然も感に堪へた趣して、

「あゝ、成程、私も人事だが、癪に障つて、腹に納めちゃ居られんのだ。こんな事を胸に持つて、ぐづ〳〵して乘つた日にゃ、雪の上へ、猫汽車が乘からう。最う〳〵東京へ歸るまでに、すつかり胸のすくやうにさらけ出して了ひたい。

其處で千の字だ。

其の婦いたのに連れられて、枝折戸を入つたわ。風俗のしどけない、裾がぞろりと敷きさらなのと並んだ處は、お庭内を道行といふ姿だけれども、前鼻緒の切れた下駄と、鞄とを兩手に提げて、跛を引いて情手は、餘り圖の好い形ぢやない。意氣地なしの千の字め、何の事はない、小學校の色男が、腕白に苛められて、泣ッ面で居る處を、綺麗な餘所の小母さんに助けられた有樣です。

これから何處ともなく、室の花がほんのりと薫つて來いやうな、婦人と肩を、いや婦人に肩を摺寄せられて、些と固くなつたといふ體で、あひはらず跛でね、薄雪のかゝつた一面の芝の上を、取着の其の小高い西洋室へ行くんだが、芝生は貧弱な小さな山の形に出來て居て、段はないが爪尖上り。右の方は此の築山の裾を、小川が一條縦つて居たが、水が切れて美しい小石ばかり。雲の掘の北面は雪封じて凄しさ、龜裂が入つたやうに底に氷が張つて居た。通る間、外の樹はない、梅がばら〳〵五六本、枝ぶりに紅梅だらうと思ふのもあつたが、皆蕾が堅かつた。

左の方は、遠く奥の方に、黒板塀が、松の植込の中に見えて、此處は、飛石、石燈籠、盆栽もならべてある、折曲りの縁も見える、永第に歩行くにつれて高くなると、目の下に、菊葉の小屋が故つと一ツ、茶座敷と見えて、廂には落葉の赤らんだのが其のまゝ、庭も仕切つてお定りの敷松葉。横手の、今の縁側に、ずッと障子が並んで、端の一枚が開いて居た、早や樹の蔭は薄暗いから、其處にでも人が居れば居るだらうかと思ふやうなものゝ、寂寞して、なるほど、（誰も居ません）といつたのが眞個らしい。

何でも、此の西洋室は、一室だけ、好事で、

別莊の二階に掛へたので、直ぐ扉を開けると、築山へ出て、芝生を下りるやうになつて居るのだつた。

入口の扉の傍に、前津から覗見へかけて、田圃を見晴しの處に、何處の公園にもある、ロハ臺のやうな腰掛が二三脚置いてあつたから、千之助は其の上へ鞄を置いて、

（お言に甘えまして、飛んだ失禮をいたしましたが、それでは此處を少々お借り申して、）

（何ですね、貴客、まあ、此方へお入ンなさいまし、）ッて、二三歩前へ駈抜けると、庭内を練つて來た上靴のまんま半ば引明けたなりになつて居る扉の中へ、ひら〳〵と入りながら、ぱたりと其處へ上靴を直して出して、

（さあ、何うぞ、御覽なさいな、吹込みますぢやありませんか、）と半身を出して硝子の戸越。

雪が又颯と一時。

二

（本宅は貴客、これでも何ですよ、賑かな町の方で、近所が賑々しいんですよ。其にね、主だつた人は移ほどから、上向きの用をかねまして、東京へ參つて居て、留守なんでございますけれど、移だもんですから、つい人出入が多し、客も浮山で煩くつて不可ません。

御走から又何の彼のッて、氣忙しくッて逆氣せましてね、大概病人になりましたから、一日ゆつくり、些と手足を伸しませうと思つて、今朝起抜けに、此方へ參りますつもりにして置きましたのに、出掛けようとすると、又二三人、餘所の夫人だの、お嬢樣たの、中には御夫婦づれで入らつしやるのたんかあるんですもの、ひとり者の處へは罪ですね、）と手巾を口に當てなんぞ。

（やう〳〵お蚤過ぎになつてから、出て參りましてね、一日だけ、尼になりました氣で、おいれ休ま身と思つたんです。

然ういたしますと、女中どもが、憎いことを申すぢやありませんか。

どうして嘸かなことの好な、私がですねえ、洒落にも、好事にも、一人で別莊へなんか入らしつて、半日だつて辛抱がなるもんですか。須磨、明石は、本で讀んでこそ風情がありますけれど、ッて女中が云つたと謂ふんだが、そりや何うだか、大方自分のこしらへた、青葉の綾とかいふんだらう。

それでも聞く者にゃ癪があつて、優しい氣がする、別莊なか〳〵の學者さ、君が云ふ、いづれ蝦茶を穿いたものと、直に分る。」

赤崎は讀めたやうに、讀めないやうに、

「へい、人相に露はれるでございますかな、蝦茶にも、ありや山に千年、寄宿に千年、甲羅の生えた萬年蝦茶でございまさ。

其の婦、見た處は學校あがりのやうぢやございますまい。私しは能く知つて居りますが、豪い御役人の夫人で居ながら、惡くすると、高等浮寶、高寶人上りも驕奢ぢやありませんで、女郎上りのやうに、べたついて、第一、あの裾ッつきを寛うして、蹴出をふんだんにひらめかす工合なんざ、容易ぢやありませんや。あゝいふのは、何でも拘泥れた處から、襦を引掻る如いものは、聽服と心得て、惜氣もなく踏み出すんでございませう。何だつて貴客、婦人の癖に、帶がなくッて歩行くんだから、蝦茶を穿いた圖は、惡く見ると大道中を褌一ッでお練りも同然、肥つてこそ見えますけれど、長襦袢一枚といふ姿だ、無法だらうぢやありませんか。

奴め、其に驕れ切つて居るもんだから、ソレひら〳〵とやるのは平氣でさ、不躾千萬な、私ア考へますが、屹と其の千之助樣とおつしやるのが、しどけないッてお話だと、承りますから、是非其の風を、見せられたのに遊ひますま

いと思ふですがな。」

「なに、其のくらゐで済むものか、蹈き込んだ履の草子を圍んで、差向ひで居ると、椅子へかかつて居ながら、下で密と足を踏む、」

「はあ、はあ。」

「婦人の方からだぜ、千の字は、汚れた足袋を脱いで上つたから素足だらう、又素足でなくつたつて、こりやヒヤリと應へる。」

「奇生、」といつて赤帽は、陶然として酔へる顰の、頬を膨らして天眼に的なく睨んだ。

盞洛は虹板で下を見ながら、駒下駄の尖を覗して、

「密からうと云つて、椅子を引摺つて暖爐の前へ揃へて、無理に並んで掛けると思ふと、手を出ませて、翳させながら、貴客のお手の力が小いか不知、なんて、見て居る中に、指環の嵌つた、細いが重い指で、一寸突くな。」

「それだ、それだ且那。」

「絞うかと思ふと又、逆上せる〳〵と云つて、目のうちを紅くして、肩を落して横顔で、睨込むやうにして、

（女は何故怨うなんでせうね、貴客の其の冷こいお手を、ぢつと當てゝ下すつたら、どんなに清々するでせう、厭？　お厭なら、撰つて頂戴、さア撰つて頂戴な、撰たれると私嬉しいのッなんのッて云つたさうだ。」

赤帽は厚い唇を剝つて、生々しい牙を剝いて、愛に笑つて、

「吐かしてけちがる。」

三

「（今度は、さあ暑いから、些と其處等を視めませう、別々に立つちや厭よ、貴客は直に景色に見惚れて、傍に居る私を忘れるでせう、怨うして、御覧なさい。）

と云ふ間、二人で打違ひにかける低い椅子さ。

（私も煙草が喫めましたら、怨うして居て、煙だけ含まして頂きませうのに、飛んだ不粋ですわ、）なんかね。」

「其の術、其の術！」

「絞うかと思ふと、

（でも怨うやつて、何時まで居られる身體でせう、貴客は下駄の緒さへたちましたら、直におお歸りになるんですもの。離れる稼古をして見ませう、）とはらりと立つと寝臺にぐッたり、崩れた風情に腰をかけて、俯向いて、

（あゝ、寂しい、おゝ、心細い、つまらない、歸すのは厭になつてよ、貴下お泊りなさいまし、）」

「吐かしてけちがる、厚かましい、」と赤帽は呼つていつた。

「何の爾時の千の字が、厚かましいと思ふものか、最う、悄げて悄げて悄げ返つて、いくらか其の姉の情で、血の動いてるやうな人間だ。はるばる來て其にや逢へず、婦人の今のいひ種ぢやないが、寂しい、心細い、詰らない處で、牡丹亭の雪で無常を感じて、鼻緒が切れたので、既に滅亡、氣も魂も脱りついた處へ、優しい、情らしい婦人の、然も読へたやうな美人のだれ、何の事はない、久しい間の禁酒のあとへ、一滴、恐しく酔ふ、強い、烈しい、怪しい、花の露を注込んだやうなものだ。

然るも吹曝の雪の中から、襦袢も帯も袖も、色の濃い、蕊の長い、花片の大い、香の高いのが名も知れず爛漫として天竺の名所に咲いたやうな、硝子室へ入つたばかりか、呼爐はくわつ〳〵と。

奴は最う扉を開かれて茶色の窓掛で包まれた、一面に黄色いやうな、室へ入つた、のつけから、耳は鳴る、肉は躍る、血は走る、唇は乾く、足は竦む、膚は慄れる、氣味の悪い汗は垂々流れる、髪ッぽ口は利けず、饒舌れば前を越される、言質は引たくられる、體のいゝ生嫌が嫌疑の晩の如しだ――其で幾歳だと思召す、姓は深見、名は千之助、行年かぞへて二十七さ、早熟だと小兒のある年だ、馬鹿な奴だ、だから惚れた女には不叶戀で、指をくはへたあとが禁酒、禁酒のあとが姉さんお留守で、あとで鼻緒を跣切つた、それから酒だ、此の後でお茶漬を食べるとおいしい、お汁粉も悪くないが、婦人は不可い。凡そ烏啼が悪かつたり、鼻緒が切れた前兆で、情人の出來た驚がない、内へ歸ると女房が返討か、主人が自殺か、厚親が病氣か、女様が頓死だ、然もなけりや借金取が居催促。然も新しい寝物ぢやないか、尤も餘りお高くないのだ。然し可い酒だ、大に飲む、さあ、君も飲め。」とはずんで手を伸して猪口を御と出すと、此の人の淡話は、酒が言はするのであることを、其の容貌と風采と擧動とを見て悟りつゝ、猶後段を聞かむことを欲する思切なる赤帽は、途中で切らすまじとて滿々とこそ注いだりけれ。

「そんなだもの、何うして厚かましいなんて、心で澄まして莫みなんぞ出來るもんか。

君聞け、其の面なること甚しきやだ、甚しきに到つては何だ。庭から入れようとして、硝子張の扉から先づ半身を出してな、

（さあ〳〵、）といひ〳〵入つても行かず、立つて覗いて待つた時の、其の婦人の顰がだ、亡なした戀人に肖て居ると思つて、天窓から悚然としたと謂ふぢやないか。

いや、そんな、ちよろッかな斜節だから、嫌はれたに相違ない、又嫌はれるやうだから、女旱のした奴だ、尤も紅い雪はためしがあるが、女の降つたといふことは、年代記には記してない。

まあ、君、聞け、其の氣で聞け。」

「えゝ、聞かんで何うするもんです。」

「それだもの、泊つて行けと云はれたので、まさか泊らうとは思はなかつたさうだけれど、間抜め、眞面目になつて辭退をした、其のいひぐさを聞き給へ。

「飛んだことを、貴女の御名譽のためにも、私は直ぐ、お暇をしなければなりません、さ。」

四

「尤も此の人はね、兩親が世を去つて、東京の山の手に、學校へ通ひながら、自炊をして居た時分、花が咲いても出嫌ひで、日曜にや朝寝が樂み、大戸も雨戸も閉めたまゝ、半日引被つて居ると、郵便が來て、配達が戸を叩いても、起きないから、合長屋の娘が受取つて、庭口から廻つて、しまりはない緣側の戸をあけると一所に、庭の欅が、はら〳〵散つて入るといふ、春風の暖さ。ぐッすり寂込んで居るのを起して、手紙を渡しながら、若且那、私も眠うございます、褪の力へお邪魔をさして下さいましな、トくの字形になつて謂つたと思へ。」

「且那、何のお話でございます、怪しかりませんな、へゝゝゝ。」

「否さ、先づ曾がだよ。うむ、寂たけりや入つて寂ろ、といふと其の娘が笑つて云ふのにや、一寸、こんな時は、厭だ、成らん、不可い、とおつしやるもんですよ。然うしないと、おいやなら、殺して頂戴か何か、機會がなくッて入れません、と笑つて出て行つたので、舌を卷いて、今時の女は、と、驚いたといふ。何、本人は眞個眠いから補むこと、正直に取つたんださうだ、些と時世後れな人だな。」

「そんな事は後れた方が結構で。」

「だがね、其の氣だから不可ません、寝臺に腰をかけて、今夜は泊れ、といふのを、矢張鼻緒の世話をしてくれようと云ふのと一般、雪は降

るし、……尤もそれまでに、豫め、折角富にして、わざ〳〵東京から尋ねて來た、姉が奈良行の留守のため、詰らなく、失望して歸るッて事を話したもんだから、心を察して、しんせつに泊めようと云ふのだと思つたので。勿論、姉さんが此方に居りや、最う一晩くらゐ逗留する筈の事を、話して了つた後だから、用があるの、急ぐのは、言譯になるまいぢやないか。其處で、

（貴女の名譽のため、）さ、いひ種が厭味だね。

すると別嬢は、身體を投げ出したやうに、上靴の裏を見せて、男の方へ、白い爪先を揃へて反しながら、寢臺に深く手を支いて、長く伸ばした膝の上で、手巾を輪にしたり、はらりと解いたり、

（殿方にこそですわ、何の女に、名譽も身分もありませう。お泊り遊ばして下さいますりや、却つて私の名譽ですわ。まあ、お麗染もないのに厚かましい、それでも氣の利かない旅籠屋だと思つて下されば、隨分背入れて下すつても可いやうに存じます。お厭でせう、お厭でせう、お厭でせうが、行暮れた旅の空なら、野にも山にもお寐らないとは限らない。唯もう一思ひに然う斷念めて下さいまし、そんなにして在らつしやると、種々、東京の夫人の事やなんか、お考へなさるから、言ふことを背いて下さいません。思ひ切つて、恁うして、といふと上靴を脱いで、其の足を何だ、ふッくりした根にくるんだ、上前を引張つても、女染は鮮しい。」

「其だ、且那、」

と赤帽はフト調子高に言つて、拳を握り、腰を曲げて、相撲が仕切つた身構で、激しく足踏をしたのである。

「寢て見せて、

（まあ、御思ひに恁うやつて此處へ横にお成んなさいまし、私が撫巻を持つて來て、寄とおかけ申しませう。然うして目を瞑つて頂戴な、然うすりやもう、斷念がついて泊られますやうになりませう、よ、然うなさいましよ、貴下後生だから、然うなすつて下さいよ、）といつてね、まくれた袖の二の腕の、雪のやうなのを惜氣もなく、小兒のやうに寢臺を打つて、手巾を投げちや釣り寄せる、其の桃色のが麻く度に、得ならぬ薫が薄靄として、霞の樣、渡れ、渡れ！どうして猫がチョッカイで、幡をおもちやにすると思へるものか。

初對面の男にそんな事が、と思ふかも知らんけれど、なか〳〵其のくらゐは何でもない、あとで、海茶を一服といつて、下座敷へ逃れて行つてから、火鉢を中に兼向ひとなつた時にや、じり〳〵と摺寄つて來て、膝をね、膝へ、」

「汽車が出ます、」と野放圖な大聲、扉から坊主天窓を出したのは例の豫言者。

がらんと鈴が鳴りはじめた。

五

「お待ちなさいまし、且那、唯今出ますのは急行が着いたのではないでございまさ。此の名古屋を十一時三十分に出ますのが、あとが來ませんために是まで見合せて居りましたのを、餘り遲くなりますに因つて、仕立てゝ出すでございます。こりや一々停車場へ寄りますですから、のろくッて仕やうがありません。」

「然うか。」といつて、少い旅客は、一度立ちかけたのを翻錬つたが、早や此の待合には、荷物も人も其の影を留めなかつた。尤も汽車の出發することを知るとともに、念のため赤帽は矣よく駆け出して其の急行にあらざることを、確めた上引返して來たのである。

其の間に旅客の面影に映じて、待合に在りたる同勢は、最後に入つて來た、彼の名古屋美人

を眞先に、學生が續き、士官が續き、商人を前後に、少女を連れた老夫婦を眞中に、暖爐係が間に挾り、痩せた貴夫人と肥太紳士が其のあとへ、めりやすの股引が殿して、別に二三の赤帽と荷物とが間を詰ひつゝ、曖昧として一方口から出て去つたが、恰も消え失せたやうな感があつた。

「しかし、不殘乘つた、」と改札口の方を伸上る風情で、旅客は逢へる面色である。

赤帽は根を生してヌックと立ち、

「お話のあとが承りたいで、お留め申すではないでございます。此の汽車は恁うやつて五時一時間餘り前へ出るですがな、すぐ早や停車場五ッと行かない中に、急行が、がッと背後から出抜いて乘越すでございます。其の氣の利かん事ッたら、辛抱が出來るわけのものではないですよ。

折角お待ちなすつたものだ。

如何に後れるッたつて、彼是二時半、追ッつけ關ケ原から乘りつけませう。」

未だ決せず、差俯向き、

「是は何時だ、新橋着は、」

「お極りは翌日十二時といふのでございますがな、得て、後れ勝なのが、此の樣子ぢや、難と四時頃にはなりませう。且那惡い事は言はんでございます、思ひ切つてお待ちなさいまし、えゝ、もう暫時。」と心から留めて云ふ。

旅客は默つて、やゝあつて、

「君も、寢轉んで、留める方だな。」

「はゝ、はゝゝゝゝゝゝ、」

「いや、引留められて良い事はないのだが、可からう——。」

「お待ちなさいますかな。」

「其のかはり、もしか、來なかつたら、夜の明けるまで附合ふんだぜ。」

「可うがすとも、」

「可いか。」

「然う極つたら、」と手を伸して扉を引寄せて鍵さうとする。

と云ふ構内から、ゴッと入つたのは一名の驛夫で、此の待合の卓子の上へ、鈴をがちやんと置くと、此方をじろりと見て、身を開いた赤帽に擦れ違つて、ドンと自分で向うから閉めた、これは寐に行くのかも知れない。

汽車は汽笛も鳴さず、雪の上を幻のやうに、熱田をさして、横に長い、薄ぼい花乎した火の光が野中に埋れた時分と覺し。

「酒は未だある、眞個に飲んだぜ。やがて無くなるわ、火が消えるわ、汽車は來ないわ、君は行くわとなると、旅籠は遲し、腕車はなし、あつても行く處はなし、名古屋は厭だし、然うなりや自殺だ、」といつた。

赤帽は色を作して、屹と腕組。

「飛んだことをおつしやらあ！」

「何、其の千の字だとさ、私はどうして、いざ恁うなつた日には、汽車が來たつて、饒舌つちまはなけりや乘りやしないが、可哀相に。

千之助は散々なぶられたあとで、別莊から追ひ出された。やがて、十時過よ、それも、雪が吹雪になつてからだ、何の、何の罪もないものを……、」と少し途切れる。

赤帽は熟と見て、

「且那、綴りうかゞひますで、それから何うしたでございますな。」

六

「いかに千之助を膏めてかゝつた惡戯だつて、唯鼻緒を立てゝやるなんかで、呼び込んだばかりで、此方が名古屋へ來たわけを話すものでもなし、又先方だつて突然、泊れ、寢ろなんと云ふ數ぢやない、言つた處で誰も眞面目に挨拶をするんぢやないのだが。

其處が今のね、須磨明石の一件です。
はじめ、別纓の云ふのにや、
（女中が然う申すんでございますよ、須磨や明石は本で讀んでこそおもしろうございますが、其のお體になつて御覽なさい、どんなに寂しいか、心細いか、情ないか知れません。別莊へは、多日誰方もおいでなさらず、寮番の爺一人、お疊もお廊下も石のやうに冷くなつて寂れ切つて居りませう、場末だし、人通りはなし、飆の名所なんですもの。爺が又、談でもある人なら可うございますが、五十年前の事を、私が小兒の時分、といつて其の時に、其の祖父から聞いたこと、あれこれといふ他に、世間話は、因果絆の引き事さへ存じません。そんなものを對手にして、貴女の御氣象、何うして御辛抱が出來ませう、狸が出ますとさ。なんのと申して、人を馬鹿にして留めますのが、貴客。
女中たちは私に御褒美を騙らして、歌留多や雙六といふ巧なんでございますわ。
まあお前たち、お湯へ入るばかりが身體を清めるのぢやありません、たまには一日、浮世も離れて見なければ、と高慢なことをいつて、斷つて申したものですから、そんならおいでなさいまし、其のかはりには誰もおつき申しません、晩のめし食りものも、お重詰で持つて參つて、直に御免を蒙つて了ひますが、貴女お一人、お別莊へ流しものになつて、尼寺でお寂なさいまし、と口惜坊。
あゝ可いよ、可いとも。寒さに清水が洞れないで居たら、それで道明寺で凌いで見せるよ、晩の支度にも及ばない、と爭つて參りました。
師走のはじめの煤掃の時に、一寸見まはりましたばかり、絨毯を敷いてあるべき處へ、莚を擲げて、爺が私得に搗かせました、缺餅を乾かして並べてございますやうな寂れ方なんですもの、何の床の間を見ましても、懸物一幅かゝつて居ず、花一輪咲いては居ません、赤いのは爺の鼻の尖ばかり。
漸ッと思ひ切つて出て來ました、行火の香をさして立働くぢやありませんか。
それでも來がけには、大層威勢よく、羅げて寒いのに、十疊の眞中へ、溫ッぽい炭をついだ、火鉢か何かで、緣側の障子を明けさして、淋しい冬木を視めながら、おや〳〵何十里來たか不知、此のさきに名古屋といふ町があるのかと、望み通り、浮世を離れた心持になつて、ソレ見たか、内ぢや寂しがるだらう、可い氣味だと、風說して居ようが、然うは行かないとをかしくつて、氣違ひ染みた、一人で莞爾笑つたり何かして、澄まして居りましたが。
ぢつと鬱ぎ込んで來ましたのが、貴客、宅を出て參つてから二時とは經ちませんのでございますもの。まあ、こんな事では今夜どころか晩方までも覺束ない、何うしたら可からうと、大概苦に病みます内、ちら〳〵白いものが降つて來て、枯樹に花も咲きかゝりますから、いくらか紛れて居ましたがね、寒いの何のぢやございません。
床の間に掛けた飾鏡の大なのが、ざあ〳〵鳴りまして、靈が家の裏かと思ふと、山奥の瀧にも見えます。
掃除は綺麗にすると見えて、其處等に塵一葉ございませんのが、水淸ければ、と申すやうで、人の住んで居るやうぢやないのですわ。神樣ぢやなし、佛樣ぢやなし、よく昔から申します、お城だの、大な邸には不開室といふのがあるんですッて、座敷の眞中に、お化粧をして、總人が、客でもなし、人を待つでもなし、悄乎と坐つて居ます、私の身體が、其の不開室のお化のやうだと思ひますと、悚然として、貴客、堪らなくなつて、此の見晴しの二階へ駈け上つたんでございますよ。）と、滑らかにすら〳〵やる。尤も話は前後したが、こりや其の西洋室へ、千之助を入れてから直ぐの事なんだよ。」
と引かけたが。

七

杯を鞠の上、旅客は腰かけに胡坐になつて、
「（まあ、何より先へ、爺に暖爐を焚かせまして、肩からぞく〳〵震へるのが留りました、御覽の通り、此の室は、こんなに陽氣なんですから、やう〳〵、雪も視められるやうになりましたけれども、寂しいのは同一で、詰らないの何のぢやありません。
然うかといつて餘計な我慢のやうですけれども、今更阿容々々、歸るのは口惜しうございますし、泊るとなると、どうして貴客、思ひ出しても下座敷が悚然とする、おともだちを呼びませうにも、正月だと申すのに、誰が尼になるお交際をしてくれます。又、問違つて、望んで來る者はいくらもありました處で、氣に合はない人とお話をいたす位なら、はじめから今日此の別莊へは參りません。
何うぞ助けると思つて、おゆつくりなすつて下さいまし、よ、後生でございます。）ッちやゝ、
と引かけたが。

七

杯を鞠の上、旅客は腰かけに胡坐になつて、
「（まあ、何より先へ、爺に暖爐を焚かせまして、肩からぞく〳〵震へるのが留りました、御覽の通り、此の室は、こんなに陽氣なんですから、やう〳〵、雪も視められるやうになりましたけれども、寂しいのは同一で、詰らないの何のぢやありません。
然うかといつて餘計な我慢のやうですけれども、今更阿容々々、歸るのは口惜しうございますし、泊るとなると、どうして貴客、思ひ出しても下座敷が悚然とする、おともだちを呼びませうにも、正月だと申すのに、誰が尼になるお交際をしてくれます。又、問違つて、望んで來る者はいくらもありました處で、氣に合はない人とお話をいたす位なら、はじめから今日此の別莊へは參りません。
何うぞ助けると思つて、おゆつくりなすつて下さいまし、よ、後生でございます。）ッちやゝ、
ソレ卓子の下で爪先を觸る一件だ。
暖爐の傍へ、引寄せたり、椅子で背中を附着けたり、たうとう寢臺の上へだらしのない寢やうをした。」
「そんな處を畜生、奴の腕を突通して、彼の生つ白い皮の下にや、だく〳〵どんな風に血が流れるか、一番。淫婦め、お極をやつて居ら。」
と横顔になつて、頤を尖らした、薄い鼻がすつくりと立つて見えると、肩を聳かして、赤帽はだぶ〳〵とした衣兜の中へ、手を突込んで血相する。
瞬時さした杯を、對手の腕のあたりへ出したまゝ、差撫へて、旅客は屹と見たのであつた。
「君！」
「は。」
「無禮な奴だ、君なら殺すか。」
「殺、殺しませいでか。」
「むゝ、まあ、飲め、私なら私も殺す。」
「且那も。」
「いや、其の場合に臨んで、然も其が我が色を誇つて、男を愚弄して、半日の無聊を慰めた上に、人の迷ふのを以て自分の容色の美いことを、自分に證據立てる道具にすると悟つたら、少くとも生かしちや置かれんと思つたに相違ない、たとひ手は下さんまでもだ。
千之助だつて、いかに内氣だといつて、意氣地がないといつて、男兒は男兒だ。然うと知つたら、何、あとの辱を受けるやうな間抜けなことをするものか。
けれどもです。」
けれどもですと弱くなり、
「毒とは知らず、香に迷ひ蜜に醉うて、既に其の婦人を以て、自分の戀人に肯て居ると思ふ心から、牡丹亭の雪といひ鼻緒の切れた小路といひ、不意に天降つた天女といひ、不思議の緣といひ、故郷から遠く離れた旅といひ、唯酒が飲みたいくらゐに、わざ〳〵名古屋まで來たのといひ、姉が留守といひ、前後はまるで夢のやう、今自ら不開室の化粧した幽靈といはれたので、其の下座敷が歴然と目に浮んで悚然とした氣といひ……、あゝ、それほど今も思ふのに、一言心も通じないで、幽冥處を隔つたのは、あまりに果敢ない。其のあまりに果然ないために、此處で夢を見るのであらうと、茫然として、思はず、寢ながら投げた手巾の胸にかゝつた片端を、じり〳〵と取つて引かれて寄つた。
（あれ、ぐと一聲。」
「えー」

「思ひ出したやうに起直つて、
（まあ、私やどうしたんでせうねえ。）」
「それ〳〵。」
「喃、君。」
（何うにも怨うにも、寂しくッて、氣が沈んで、消えても行くやうに思ひました處へ、貴客をお連れ申して參つて嬉しいまぎれに、お茶もまだ差上げません。
お泊り下されば お客樣、お泊料を安うして、晩のお支度をいたしませう、それには女中が本宅から重詰を持つて參りませうが、爺に申しつけて、お湯もすぐに沸かさせます。御酒はいかがでござんすえ、ほゝゝほゝ。）
なんて仇氣なく、そは〳〵して。」

八

「（まあ、お茶を上げませうにも、あの好な紋餅を、齒のないどてで含みながら、がぶ〳〵飲みます、鼻の赤い爺の、行火（かけちや）煮くたらしは、貴客お氣味が惡いでせう。其のかはり內職に草鞋を造る人ですから、お鼻緒は上手に出來ます。もう〳〵尼になりまして行のつもりで來たんですから、お煮花の用意もございませんが、お待ちなさいまし、四疊半には、いつかいたしたまゝの棗がございませう、粗末ですが道具も揃つて居る筈ですから、一服たてゝ差上げませう、行らつしやいな！）
ずッと遠慮のない、十年の知己をあしらふやうに、ものは言はさないで、すッと扉を開けてさ、さつ〳〵と廊下へ出ると、こゝに白く塗つた欄干がある、直ぐに螺旋形の壇階子。下りようとして一すつかまつて、背を曲げると、むかうへすッきりと顔が映つた。色の白い眉の鮮かな。其の取着に 婆見がかゝつて居る。
其處へ、上靴の音を輕く行くと、
（來て下さいな。）
（何です。）
（此處をね、少々開けたいんですが、しばらく見た事がありませんから、何があるか分りません、跳でも飛び出すと、氣味が惡うございますから、傍に居て下さいな。）ッていふのだ。
婆見の下が、けんどんで、小さな 誂の本に扇を打違へにつけた、色紙が張交ぜになつて居ようといふ大變な和洋折衷。
開けると、冷い、美しい、戸棚の中に、女染縮緬の肩當をした、藍、紫、黃など五色染の絹夜具、桃色の裏がすらりと見える。
（まあ、いゝこと、雨傘にも化けないで、）といつて、何だか開けるのが大事らしいから、氣にして覗き込んで居た千之助の手を、屈んで見て居たのが立上りざまにぢッと握つて、稻妻のやうに、片鬢を深く、莞爾したのが、婆見に映ると思ふと、取つた手を引張るやうにして、ばらばらと駈け出して、其の螺廊梯の樣子段を附着いたなりにトントントン。
明るい西洋室から穴藏の中へ引摺り込まれるやうに、千はずる〳〵と落ちて行くと、早や薄暗くなつた 疊廊下へ落ち込んだ、直ぐ横手の襖を明けると、十疊宝。
向うの緣の障子が一枚開いて、戸外は雪で、こなん〳〵に烈しく巴十文字に動いて居るが、何にもない廣間は、眞中に小さく、桐火桶と淺黃縮緬の蝋いた座蒲團があるばかり、寂として唯 疊の青いのが陰に沈んで、帆の影一ッない大海日の海見たやうな。
火桶の中に、濕つて悄しかつたと聞いた、其の炭も起り切つたあとゝ見えて、鼎中に、扇になつて居る。
（しばらく此處で、まあ、お敷きなさいまし、蒲團を裏返しませうか。）と小首を傾けて、千に敷かせて、自分も一所。しばらく肩を合せて、凭れかゝる氣味合で、默つて居たが、其の內に

膝を浮して、輕く乘せると、寒いか、懐手で、うつとりして、
（待つて在らつしやいよ！　支度をしますから、）
（否、それには、）といふ內に、後 婆の、掘掘き、雪の色ちら〳〵と、今入つて來た襖の外へ、くるりと振向いて、全身で大く振返つたが、すッとしめると、遠くまで覺音がして寂寞となつた。
あとで千之助は、膝を視めてキチンと坐つて、小な嘆をしたが何ういふものか。
雪の降るのを背後にして、床の間を向いて、其座蒲團に乘つて居たが、なるほど濡だ。恐らく大な飾蠟だといふぢやないか、當地では。被するかね。」
「えゝ、よく寺方で行るでございます。門跡の書院なんか大いのをかけるですが、何か、立派だといふので遣つたでございませう。」
「其の蝋、千家の流を汲んださうだ、何でも和洋古今に渡るんだな。」
そりやよしさ、やがて半時ばかり、つくねんと待つて居たが、其の時は然まで心細くもなく、不開室と云つた部屋とは知つたけれども、自ら男のお妖と思ふほどにも無かつたさうだ。

九

「否、曳込んだの。」
「はて。」
「一時、何となく陽氣が立つて聞えたが、頃刻すると、小刻な覺音がまじつて、廊下を二三人で 此方へ 近いて來る坊ちやん、お駈け遊ばしてはお危うございますよ、といふ女の聲がして、それから一團になつたが、襖をあけると、二十二三の伸働と思はれる、唐縮緬の友染の帶をお定りのお太鼓で、厚化粧、切立の絲織の前垂したのが、薄暗い臺洋燈を持つて來ると、其に續いて、五歲ぐらゐ、洋服の男の兒と、八歲ばかりの被布を着た女の兒が、ちよこちよこと跟るやうな身振で駈け込んで來た。女中はね、あかりを置いて、一寸會釋して、おいたをなすつては、不可ませんよ、と捨臺詞で出て行く。
小兒たちは、もの珍しさうに、叔父さんの左右へ寄つて、男の兒が、突然火鉢の上へ肥つた本人、人間あつかひは爲れないのに。
しばらくすると、內の、おもて玄關と思ふ處に、から〳〵と腕車の音さ。」
「其のまゝ出しぬいて本宅へ歸つたですかな。」

九

「否、曳込んだの。」
「はて。」
「一時、何となく陽氣が立つて聞えたが、頃刻すると、小刻な覺音がまじつて、廊下を二三人で 此方へ 近いて來る坊ちやん、お駈け遊ばしてはお危うございますよ、といふ女の聲がして、それから一團になつたが、襖をあけると、二十二三の伸働と思はれる、唐縮緬の友染の帶をお定りのお太鼓で、厚化粧、切立の絲織の前垂したのが、薄暗い臺洋燈を持つて來ると、其に續いて、五歲ぐらゐ、洋服の男の兒と、八歲ばかりの被布を着た女の兒が、ちよこちよこと跟るやうな身振で駈け込んで來た。女中はね、あかりを置いて、一寸會釋して、おいたをなすつては、不可ませんよ、と捨臺詞で出て行く。
小兒たちは、もの珍しさうに、叔父さんの左右へ寄つて、男の兒が、突然火鉢の上へ肥つた赤い手をかざしたがね、片手に剝きかけの蜜柑を一個。
こりや敵の首を分捕つたやうに、座敷の中を差上げて來たものだ。
女の兒も傍へ坐ると、此の方は持つて來た護謨毬を、かさねた袂へ入れて、火桶へ手を出して一所に左右から顏を見た。
あゝ、よく肖た女の兒だと思ひながら、千馬鹿め、まだ別嬪が此の小兒たちの母親だとは氣がつかず、自分の愛人も姉弟は多かつたなんのと、お話にもなるんぢやない。
それに出入の多い耶と見えて、人見知もしない處が、最初は憎くもなかつたさうだが、男の兒が口を利くときよつとした。
（おい、剝いておくれ。）さ。
蜜柑を突きつけたから、それでも、
（是をですか。）ッて、火桶の上で、皮を剝いて渡さうとすると、
（厭だい、お獅子にするんだい、お獅子だい。）分るまい、
（あのね、怨うやつてね、くるとやるのよ、）と女の兒が高慢に指揮をしたが、薄皮を剝いて引くりかへせと云ふこツた。
色男 長つてね、指を汁だらけにして、旨く

行かない、一片、分片ちぎれたのを拾へると、じろ〳〵見て居たつけ、

（爺、上手だ、不器用だなあ、）と恁うだよ。

癪に障つたが對手は小兒だ。

（どうも旨く行きません。）と出して遣ると、べろりと吸つて、殘つた薄皮を火桶へぴよい、ヂュウ、殘り少なの火が又一倍消えて、扇が立つ、眉を顰めて手で拂つて居ると、

（さあ。）と又出した。

片一方で女の兒が、卷莫を見つけたらう。女だけに、お世辭のつもりか知らんが迷惑だ。

一本吸ひつけて渡します。

（難有うよ。）と半分ばかり飲んで置くと、あとから直ぐつけて、

（あい。）と出す。

（さあ。）

蜜柑を剝けだ。

（あい。）

煙草を飲めさ。

のべつ幕なし、汁がしみて指がべた〳〵する處へ、煙草の脂が染まるだらう、氣味の惡い事、手巾は下駄を結へようとして泥だらけになつたのを打棄つたし、一々半紙を引張り出すも、お細工ものをするやうだから、汚れた手を袂へ突込んぢや、糊祥で拭く始末。

（さあ。）

それ蜜柑。

（あい。）

煙草。

むら〳〵として、えゝ、一合ぐッと呷つたらな、此奴等殺してくれようと思つた。

しつきりなしに（さあ。）と（あい。）

其の中に煙が出るのがおもしろくなつたか、男の兒まで貪吸をして煙草の方へ手を出した、飲まれば强ひる、傍を向けばせがむ、屹と見りや泣きさうになる、立續けだから堪らない。舌は澁くなる、咽喉はつまる、頭痛はする、ごほんごほんと嗽入つて、胸をおさへて、もう〳〵煙草と蜜柑は一生たち物だと思つて、眞個だよ、心の内で泣いたさうだ。」

と旅爺は呵々と高く笑つた。

十

「可笑しからう、君も笑へ、大に笑へ、私も笑ふ、笑つて遣る、肚に其の屈辱の醜體を笑ふんだ。」又藤側から覗いて笑つて居たものがあつた。

婦人が何時の間にか向うへ廻つて、其の開けてある障子の外へ、すつくりと立つて居たのだ。

千之助が煙に咽せ入りながら、胸を壓へて、はア〳〵いつて、吹通しの方に顔を向けると、其處には、帶は解き捨てゝ、水淺黄の扱帶を寬く、胸なりに裾を引いて、春は一層高いが、先刻よりはすらりとして、其房々とした黑髪が、少しほつれて、頬にかゝつた、小耳の處へ、濡手拭をあてゝ居たが、湯上りと見えて、しつとりと雨を含んだ、花も枝も雫が垂りさう、色はいよ〳〵白く、ほんのり薄紅さへさしたのが、洋燈に映つて、あからさまになつたが、ちらりと、姿を殘しただけ。

（お寒いでせう。）とばかりで障子を引く。女の兒が、

（母さまー）といふ中に、はたり、はたりと緣を行く重たい聲音。

千之助は吃驚した、呀、此の兒の親か、上向きの用をかねて東京へ行つて居る、内の主な人といつたのは亭主。

と八分は酔のさめた處へ、先刻の女中が、今度は臺所を働いて居たか、それともお背を流した事か、緋の下じめを急拵への、襷がけで入つて來て、

（さあ、坊ちやま、母樣がおいでなさいッて、嬢樣も在らつしやい。）

といふと、女の兒は素さうに、兩手を袖につッこんで直に立つたが、男の方は、

（うむ。）といふと、喰ひ殘した蜜柑の皮を、ぐしやりと千之助の膝の上へ、憎體に、

（馬鹿。）

（あれ、何ですね。）といつた切、別に取りなさうともしないで、女中は其のまゝ、二人の小兒は厲い座敷を綾に泳ぐやうにして、一所に惡い潮が退いたわ。其ッ切、何時まで經つても誰も出て來ない、又來さうにもしないで、火は消える、寒さは寒し、ね、火桶に噛りつくと、卷莫の吸さしが冷くなつて白骨のやうだ。

手をたゝく分ぢやなし、

（あの、あの。）と口まで出る、人を呼ぶにも遠慮さうだから、大聲を出すも異なものなりで、其なりに引込んで了ふ。第一、口も利けないほどに腹が空いて了つたさうだ、然うだらう、碌に朝ッから食はなんだものな。

背中へ附着きさうに空腹な處へ、立續けの煙草にあたつて、惡寒いから頭痛はする、酸唾は走る、千之助は九死一生。

八時半頃になると、戸外へ腕車が出たやうすだ、大方小兒どもが歸つたんだらう。あゝ、熱うすると、何か、手足まとひを拂つて置いて、それから世話をして呉れる氣か、然う思へば遠くの方で、時々派手な笑ひ聲、それにや小兒の泣くのも聞えた、なんのと、それまでは、いくらか心を置いた千之助も、一心に最う、其の婦人が便になつて、あはれぢやないか、他人の女房と知りつゝも戀しくなつて、顔を見るのを待兼ねた。

寂しさは、前にも增して、鼠の走る音もしない、時々、あッといふ戸外の音は、積つた上へ眞白な布、くる〳〵卷きながら降るのであらう。

何といふ身の上です。

其處等を歩行くのも廻下駄とかいふものらしい。女中は大方、先刻の話の張合で、唯重詰ものでも肩けに來たのを、いくらか手傳はさしたらうが、泣く兒に附けて歸したあとは、煮るにも炊くにも主婦の手一つ。

馴れない事を恐れ入る、まさか、汐干の屋形ぢやなし、此處で重詰ものを開くでもないと、氣扱ひをするのであらう。酒の燗でもして居るか、いや、然しそれは折角だが飲めません、と生欠伸をしたのなんざ、大藏流、震流にありさうな、此の男の腹は後學のために、土用干をしたいくらゐだ、尤もから乾に干せちや居たが、」

「まあ、何たることでございますなあ。」

十一

「やがて又小一時間も經つたと思ふと、やうやう覺醒が聞えて來たから、膳か、椀か、あの裾を曳いて、鋼しいのがと、うつむいで居た顔を上げると、大違ひ。

めりやすの脇小僧を出して、鼻の赤いの。ねえ君」

「それ〳〵。」

「吝な大屋が、夜中に路地を開けるやうな、身構へで、

（遲くなりましねえか、お前樣、何時の汽車だ、間に合ふかね。）といつた。」

「其だ、且那。」

「千之助は唯赫としたが、問答に及ばずよ。

（あゝ、時間だ、失敬。）と一直線に突立つた

さうだが、ふら〳〵して疊に躓いて、うろ〳〵廻る。爺が落着いて、

（矢張、はあ、入つた處から出さつせえ、此處だよ。）と先へ立つ。

最う憤る元氣もない、唯恐しくなつて、疊が一町、とあとについて、座敷を出ると、梯子段。

井戸から覗くやうに上へ折曲つて灯影が射す、夢中で上り切ると、消えてもなくなつたかと思つた自分の體は、妻見に映つた。顔が蒼い。

扉は開けてあつた西洋室、ぽッと燃えるやうな暖さ。

卓子の上に、金光燦爛として、解放した淵珍の丸帶、一所に紐やら、帶留やら、裾やら、振やら八口やら、なえしをれた花束のやうに衣類を丸げて脱ぎ棄てた、寢臺に、其の五色染の掻卷をかけて、ぶつくり沈んで、長襦袢の肩襟に顔く、もつれ毛の濃い、雪のやうな頸脚を見せて、然もぬつくりとしたやうに裾を長く伸々と寢ながら、うしろから洋燈を受けて、寶玉入の指環の手に、一寸押へ、輕く斜にかざして、横文字の書を見て居た、枕頭の黒檜の欄干に、高脚の洋杯が一個、ベルモットの瓶が並べてある。

言語道斷、ものもいはず、又いはせさうにもない風だつた。

千之助は此の狀に又赫と込上げた、ニコチンの毒を吐きさうになつた胸を壓へて、通り抜けると、入口の戸の處。

すぐに廊だから、開けるトタンに閉めようとする構で、爺が引手に手をかけて待つて居た。

（豪い雪ぢや、）

といふ、芝生を見ると、眞白な中に下駄がね、鼻緒の切れたなりで揃へてある。

飛び下りて引掴むと、パッと一時に吹きつける、部屋へもばらりと散り込んだわ。

（ほい、）と閉める。

窓あかりに、ロハ臺に置いて入つた、鞄が舊の通りあるのを見て、

（あゝ、姉が名古屋に居たらば、）とはら〳〵と熱い涙。まともに面も向けられない、雪だらけの鞄を取るや否や、跣足でころげ落ちるやうに、微塵になれ、と身體を枝折戸の外へ投げ出した。

南も北も雪の横町、上も下も眞白な中に、一足踏み留ると一所に、取をさらへて來た、下駄を、一ッは前津の田圃の方へ、一ッは記念碑の大通の交へ、叩きつけ、投げ飛ばした、此の掠鳥は、吹雪の中を、何里さきへ翅けたらう。

赤帽君。」

と呼吸をつき、

「で、私は思ふんだ、よくまあ、無事で千之助が、私の居た旅籠まで駈けつけて、無事に生命があつたらうと。

何事も思はない、唯何爲恐ういふ時、風に乘つて、姉が奈良から歸つて來てくれないのだらう、と其ばッかり思つたッてな、可哀さうぢやないか。

迚も、此のまゝでは歸られないと云つて、人心地がついてから、柴川へ行つたつけ。私も强ひて留めなかつた。唯聞いただけでさへ、少時も早く、名古屋の土地をはなれようと、私は自分で思つたがな。汽車のおくれたのは、寧だ、迚も此の話を、默つて胸に持つて、東京へは歸られない。」

旅客は頭をふら〳〵と、鳥尾を撫で〳〵

「あゝ、是で少し胸が空いた、よく聞いてくれた、赤帽君、謝す、大に謝す、しかし君にや氣の毒だつた。」と眞面目に云ふのも酒なのである。

十二

赤帽は聞く中にも、醉つたか、何となくそはそはして、立ちながら足許も定まらぬやうだつ

たが、彼の黄なる目をぎよろつかせて、頻に四邊を見廻したと思ふと、

「且那……」

旅客は詰り果てゝ恍惚としたのであつた。

膝を屈めて、

「且那、且那。」

「あゝ？」

「ぢや、何でございますかな、お綾の阿魔は、」

「おあや、」

「えゝ、綾てえ女つちよ、綾子とけちがる。眠でえ、奇生。ぢや、其の今夜は、廣見の別莊に寢ましたかな。」

「寢た……さうだ。何、寂しいの心細いのつて、千之助にいつたのは皆術さ。何しろ、長襦袢一ッで西洋酒を枕頭だから、雪の降るのも花盛り、一夜雲に寢るつもりだらう。」

「で、一人で。」

「然うだ、爺と二人だ。」

「むゝ。……」

と下腹に響いた、呻くやうな獨言。

「此の雪だしよ……且那、そんな奴は何うすりや可いんでございませう。」

「此方が間抜さ。」

「いんえ、其、其の千之助樣に限らずだれ、豪い人でも、學者でも、先生でも、色じかけでたらし込みやがつて、世の中に佳い婦人ほど立派なものはない、我を見ろ、とのべつに來やがつたら、唯は置けますまい。」

「……」

「何うすりや、可いんだね。」

「まづ殺すんだ。」

「可うございますかな、殺しても。」と膝を振つて、地蹈鞴を蹈んで、赤帽は握拳を上げたり下げたり。これは醉つた目に見えなかつた。

「可いとも。」

「はあ。」

と氣を詰めた、呼吸を引いて仰むけざまに又壁へ凭れたが、腕を拱き、目を瞑つて、熱い息をふッと吹いた。

天窓にくら〳〵と響いて、重い、沈んだ、小な地震のやうな深夜の物音。

赤帽は瀾と目を開け、片手を、衣兜の廣い、上衣の下へ、跡を曲げて突込んだが、つか〳〵と出て、扉を押した。

「汽車が來ました、且那。」と聲をかけ、然も勞れた體で、椅子の手についた肱の上へ、横顔をつけた旅客の姿を、ぢつと見て、狼のやうな腰つき、前屈みになつてづッと出た。

「おい、着いたか。」

仰いで時計を見れば、三時四十分。しばらくそれを視めたなりに、旅客は外套の袖を合せたばかり、動かないで居た。

赤帽が來るのを待つたのである。荷物は輕い、乘込の世話を賴んだのであるから。一分二分、瞬く間に早や三分、やがて、五分にならうとして沙汰がない。

心許なく、衝と立つたが、鞄を提げ、杯も、燭も、其のまゝ、急に待合を出たけれども、何となく物足らず、四邊を眴すと天井高く、壁白く、プラット・フォームのきらびやかな、しかし寂しい、電燈の影に、關ヶ原の雪に埋れしとなむ、偉大なる鐵の蒸氣機關の、たらたらと汗を帶びて、黑く艷かに、堆く突立つあるのみ。

夜目には其の邊の人の影も屆かず、況して構内には、寂然として高く、纔に聲音の響くばかり、立停まれば其も留んで、赤帽の赤い氣勢もなかつた。

「はてな。」

物打案ずる場合にあらず、輕いが提げた、手荷物を、引立てるやうにして、思ひ切つて、五六歩進む改札口。

「おゝ、酷い。」

といふ喇叭な聲して、構外の吹雪の中、一旦停車場前の廣場に出たのが、吹き戻されて飛び返つた、カラ〳〵〳〵と駒下駄の音高く、たゝきを辷るやうに後じさり、少い旅客と背中合。

十三

唯見ると古代紫の頭巾を深く、紫紺錦繡の肩掛を無造作に引かけて、鐵御納戸無地のお召縮緬の薄手なコオト、絹手袋の紺淡く、細りと指の長いのが、手提の旅行鞄に、鰐珍の信玄袋を持添へた、丈だちすらりと、然ればこそ風には堪へじ柳腰、梅の薫を膚に籠めて、艷に品好き婦人である。

見返ると、振向いて、

「あれ！」

「啊！」

「千之助さん。」

「姉さん。」

「千之助さん。」

「姉さんか。」

と思はずたじ〳〵と後に退つた。

夫人はぢつと立つて瞻りたるのみ。

「まあ、よく來てねえ。」といつた聲、面をかくして曇つたが、忙しげに、結ひ目を解く眦寒く、かつ散る袖の寒紅梅もどかしさうにかなぐつて頭巾を取つた、顔は、星の目、眉の月の影、線の黒髪はら〳〵と、亂れ銀杏のおくれ毛にも、一筋の鬢を帶びず。極めて晴やかなものであつた。

旅客の傍へずッと寄つて、

「御無事？」

と頷くやうにして、聞いて、然も嬉しさうに莞爾する。

此方は酔ひたる顔を背けて——、

言出でず。

夫人は早く心を汲んだ、腕く且つ遠く離れて居ても、遽き思はしつくりと、互に心に相合して、此の構内にしゞまりつゝ、

「お細さんも亡くなつて……。」

とばかり涙ぐんでいつたのである。

「姉さん。」

「さあ、行きませう。」

「否、私は此の汽車で歸るんです。」

「歸るんです。」

「昨日お宅へ參つたんですが、折惡しく、お留守だつた。姉さん、手紙で悉しく、失礼、汽車が出ますから。唯ね、酒を、酒を飲まして下さいよ。」

と名殘惜しさうに、愁しさうに、うら悲しげな顔をして、早や立別るゝ二足三足、追ひ縋つたと見るといきなり、千之助の肩に手をかけた、思が籠つて、手が發奮んで、緊乎項を抱き、

「歸さない、歸さない、歸さない、歸さない。」

「ですが。」

「否、歸さしません！　さあ、早く行つてお酒を飲みませう、私も飲んでよ。」

行かうとする、留めるので、二ッ三ッ、改札口に近く、覺束を交へた。途端に、轟と鳴つて、咫尺を辨ぜざる雪の中を、偉人の發程、早く既に遠く巻尾の山野を壓して、行方遙に、汽車はずるずると出たのである。

「大變な雪ね。」

「ぢや、何ですか、關ケ原で。」

「はあ、埋つたの。生れてからはじめてだわ。ですからさ、九時に着くのに乗後れて、明日の一番と思つたんだけれど、何だか歸りたくなつたのよ、蟲が知らせたのね、行きませう。愚圖愚圖して居ると凍死んぢまふの。」

とつか〳〵と運歩を運び、威勢よく微笑みながら、

「雪に埋つたり何かして、氣の利かない汽車つ

たらありやしない、漸々、出られたのも、私の思だわ、眞個よ。」

「大分、遅くおつしやいますな。夫人。」

「おや。」

「唯今お歸りですか。」

と横合から出て、構の眞中に來て立停まつたのは、當驛長の何某氏、頬の豐な　眉の濃々しい、鼻の高い、口髭の美しい年配四十五六の紳士である。

繊いて、どか〳〵と其の左右に八九名、皆一樣の扮裝して、粛然として立並んだ、いづれも局内の係員、最終の列車を送り果てゝ、各がじゝ、恁くて家路に就かうとするので。

瓦斯を三ッ四ッ提げのが立交つて、灯はどれともなく、五ッ六ッ消えて暗くなつた。

十四

「ほゝゝ、立聽をなすつたのね。」

「はゝはゝ、いや、串戯は止して、これからお歸宅にならうといふのですか、志那忠でもお起しなさい、酷い雪です。腕車なんざ思ひも寄らずですよ、迚も御婦人に、歩行かれるもんぢやない。」

「だつて、自分の内を見て、旅籠屋は厭ですもの、何ともありはしませんよ。」

「勿論。お連がある。」

「失礼、あの、赤帽は居ないんですか。」と目を留められたのを機に、千之助は振れて見た、少なからず心に懸るのである。

ト、驛夫の中の一人が、

「貴客、赤帽は最う疾うに居りません。唯今此の汽車で、此處へお下りなすつたのは、夫人、貴女お一人でした。」

「はあ、唯一人、出口から構はず吹雪の中へ飛込みますとね、渦になつて捲くんですの、くるくるまはりながらあとじさりに駈け込んだ時は、呼吸が塞がつて、死にさうよ、今度は大丈夫。」

といつたが、千之助のと自分の荷物。

「驛長さん、預けて行きますよ、千之助さんも然ゝなさい。そんなものを持つちや歩行けやしないから、何うぞね。」

驛長は快諾して、

「宜しい。おい、宿直の處へ持つて行つて預かつてお上げ。」

「怖樣、恐入りますね。」

「大層お身輕になりましたな。」

「御免なさいよ。」

とて被引上げ、頭巾をかぶると、胸下駄を脱いで、裾拝の裾、紅深く、身輕う、たゝきへ足袋跳足。

「否、私が。」と自分で、腰かけの下へ突込んで、

「それでは、誰方も。」

「氣をつけていらつしやい。」

「千之助さん、參りませう。」

並んで立向ふ名古屋の市は、打見にも、厚くも狭くもなつて居た、あまりの雪に、灯の影も見えず、二人の肩は最う靠々。

「大丈夫ですか、夫人。」驛長が聲をかける。

「否、雪さへ降れば、寄宿舎の庭でよくやつたの。」

「然し唯今のは、道行のやうですな。」

「油繪の書割ねえ。」

嫣然、千之助の手を取つて、衝と躍り込むと、浴びせたやうに、一刷颯と吹いて、二人の姿は、眞白になつて隠れたのである。

「確りなさい、確りして下さい、姉さん。」

「あ……あい。」

「痛むんですか、酷く痛むんですか。」

「そんなぢやありません。」

といふ聲も息の下、夫人は千之助の外套の袖

の下に、小やかに雪に埋れて居る。
「困りましたな、困つたな、羽根込むんですか、苦しいんですか。」と一心に背中をさすつて、勞る中も、吹雪に面を向くべからず、折から頼む樹陰もなく、身を隠ふべき屏もない、二人はトある、侍町の生垣の根を便つたが、それさへ冷い眞綿の圍、袖が觸れても氷が崩れる。
「冷えたんだ、恐しく寒いもの。私は是でも、酒があるから未だ凌げる、汽車の中で冷くなつた處へ、雪路を跣足は無謀だつた、確りなさいよ、弱ッたな、姉さん、姉さん。」
男の衣服の褄に縋つて、しばらく口も利かなかつたが。
「千之助さん、打棄つて置いて行らつしやい、貴下だつて煩ふもの。」
「串戯ぢやありません、是からお宅へ行つて、人を呼んで來るまでにや、貴女の身體は凍つて了ふ、おんぶをすりや反るんだもの。驚いた、えゝ、酷い、飛墓な降だ。」
「私や、私や、あんまりだから、千之助さん。」
「えゝ。」
「笑はうと思ふけれど、苦しくつて笑へないの。」
一眞倒に泣くより笑ですね。」

強ひて嚔めるやうに情ない調子で言つたが、吃驚して留めた、慌しさ。

十五

「あゝ、そんたものを喰べちや不可い。」
夫人は苦痛に堪へやらず、左手を男に縋りながら、雪を片手に掴んで震へる。
「水一口ないのかな！」
と殆ど絶望の聲を上げた時、風がなぐれて吹きまはした、粉雪の底に、唯見ると高い窓灯、庭も屋根も、心覺えの、是ぞ恰も鼻緒を切つた折戸なのである。
膽を買かれた心地して、胸を衝く千萬無量、思を纏らすに遑あらず。
「姉さん、別莊に灯が見えます、必死の勇でお起ちなさい。」
と兩手を取つて引起すと、灯の力と、男の腕、胸を小脇に掻込んで、引抱へるやうにして、飛びつくと、寒がつたのは積つた所爲で、枝折戸は開いて居た。
千之助も、もう跣足。
一人か、二人か我さら知らず、夢中で重い體を築山の上へ上げて、硝子扉に打附かり、聲もかけず、突然引手を捻るとハタと開く、救の鍵は手にあつた。
袖を拂ふ隙も惜しや、其のまゝ絨氈の上へよろけ込むと、裾、袂を、ばら〳〵と落つる雪の、亂るゝや、散るや否や、颯と紅に染まつたのは、敷物の色の映るのではない、床に流れた血汐である。
夫人はやう〳〵、閉ぢられたやうな目を開けたが、頭巾をもれてはらりと溢るゝ、もつれ毛の露の隙から、室内を一目見て、
「おゝ、綾子さん。」といつた。
寢室の上。
今は面のほてるばかり、暖き暖爐に、ふくらかな乳房仄に、引結へる水浅黄、掻卷の襟を漏れて、いぎたなき長襦袢の胸、柔かに白く仰向いて、裾に片膝を立てたる寐姿、枕に鬢の亂れをかけて、がつくりと横に垂れた、湯上りの寢白粉、まだ其の色も褪めやらぬに、雪の痕蒼然として、咽喉にがばと鮮紅、血は長く其處から垂れて、床に花片を重ねたのであつた。
夫人は健康を復したが。
「苦」といふと椅子に倒れた。
千之助も飛退つて、扉をドンと背につける。
揺ぐわ、搖ぐわ、傍の窓掛、凸に片目を出して、ぎろりと様子を伺ふ者あり。

赤頭巾がぬッと出た。
巣は醉へる時よりは、なほ面赤く、茶褐色の薄鮮の中に微笑を浮べて、
「且那、殺りましたぜ、且那。はゝはゝ、此の通りだ。」
といつて、綾子が玉を伸べた項の中央、疵口を、赤頭巾は手に取つて、明晃々たる鋭き小刀の背で叩いた。
夫人はハッと面を蔵うた、袂も振も戰いだのである。
「一突にやつたでがすがな、未だなか〳〵汽車は出まい、首を持つて行つて、一番お目にかけようと思つて。」
と血みどれの手を、ずぱと、冷艶比類なき犠牲の、心ばかり痩せた頸にかけると、髪がゆらぎ、飾櫛がカチリと落ちる。
千之助は足が浮いた。
「ト當てがつて置いて、ちよき〳〵やりはじめた處へ、不意に飛込んでおいでなすつたで、かくれたですがな、能く來て下さつたい、私はね、紫川なんのとおつしやつたけれど、且那が千之助様だことは知つたですよ。可い心持でせうね、私もせい〳〵した、はゝゝゝはゝ。」
と哄然として又一笑した、此の時の巣の風采は、緋なる其の頭、雪夜の天を蔵ひ、兩眼に凶星あり、足に氷海を蹈み、手に尖刀を提げた、一個亙なる惡魔の如き堂々たるものであつた。
是には唯目禮して、千之助は夫人の前。
「姉さん、どうしませう。仔、仔細あつて、私が殺さしたも同然なんです。」
「えゝ。」と驚いて顔を上げた。夫人の臉は、死骸よりも一層蒼白なものであつた。
「あの、私が死にませうか。」と千之助は屹といふ。
赤頭巾は小刀を植ゑたやうに、寢臺に兩手をかけて、大く乘出し、平然として、
「貴郎方、心配はありませんで、何ね、且那を喜ばせようと思つたのは、ハケ次手だ。
此の婦人は、私が兄貴の敵ですよ。
こりやね、前に兄貴の嫂々だつたでさ。兄貴は、商人の癖に、本人氣といふで、此の阿魔久しい間、東京へやつて、豪い學者に仕立てたですよ、馬鹿野郎、蝦茶を緋の袴ほどに羅有がつたで、自分で一つ學校を立てるなんのといふ口に乗つて恐しく金子を注ぎ込んだもんでがす。何、皆浮氣に使つたのは私が知つてまさ、其のね、私さへ、一寸口說いたくらゐな奴だ。
現在弟に不義をしかける、そんなものに、何の未練を、私が證據だ、打棄れ、と言つたけれど、へなちよこめ、其の紫川や、長者町には、向うから落ッこちる奴もあつたですが、因果だね。
たうとう何です、今の亭主におもて向き寢返りを打たれると、其の時分貸して置いた、此の別莊まで公事沙汰に負けて取られてでさ、何しろ、りうとしたお役人だ。家も落目になつたんで。
地物此の西洋室なんぞも、ハイカラ阿魔の御機嫌とりに、兄貴が拵へたもんだからね、海も山もくれてやれと、さつぱりすりや可しだけれど、意氣地なしだからね、そんな、こんなで、氣が違つて、お去らばだ。
兩親も達者だつたが、其を苦にして死にました。
私ア自分が嫁はれたつて、密通をされたつて、出刃を掉るやうな客なんぢやありません。婦人は口說くもの、金は酒くものと思つてるんだけれど、兄貴の敵だ。畜生、あのエービーシーと唇を反らす、頤骨を引ッこ抜いて、棗樹枝にしてくれようと、いつも心がけて居たですがな。

不可ません。餘りだらしがないから私ア癪に障つて、一番兄貴のどてッ腹を抉つて、血を入れてくれようと、無暗に有金をつかみ出して、勘當をされると强請に行つた。

はゝはゝ、おふくろにや出刃を向ける、おやぢにや短銃をさしつける、兄貴にやナイフをひらめかす、土藏の下へ地雷火をしかけて、線香花火に火をつけたのを持つて、十間間口、一杯に立はだかつてゝ、ゆすつたですね。

鹽屋の二番は氣が違つた、皆風説をしたでがせう。

兄貴も氣が違つて死んだんだ、系統を引くと謂ひますから、私が今女を殺すと、誰も本氣の沙汰にやしません。

氣違も色情狂だ、下さりませんや。

折があつたらと、心がけてね、衣兜にや平時ナイフは呑んでゐましたけれども、手は出さないで居たですが、且那でさへ、殺したいとおつしやつたわ。堪忍は身分のある人がするこッた。

私はね、且那を學者だと見たですよ、先生だと睨んだね、學者の先生でさへ殺したい、殺したいが殺さないのは、身分を思ふからだとなつた日にや、してこいなだ。氣違ぢやありませんや、おまけに、別莊へ寢やがつて、この雪は、開いた口へ、眞白な牡丹餅です。

はゝはゝ、一口にやつつけました、はゝはゝ。」

と大口を開いて笑ふ。

「姉さん、此の人が氣が違つたんぢやない、私が氣が違つたんです、飛んだことを云つたんです。」

「且那、御心配をなさいますな、私はね、こればかりも。」

と爪尖を出して見せた、一時間の前に蒲鉾をつまんで、舌鼓をして嘗めた手の。

「其の、命が惜くてした仕事ぢやありません、立派に願つて出てお處刑を受けるですよ、これで先づ、久しく不孝をした、兄貴や兩親に逢つてあやまりまさ、死んだら眞人間になりませう。

絲瓜でもないがね、すぢを引いた氣違だと謂はれるのは業肚だで、それだけは含んで下さい、それも、何、おもて向きに云つて下さるとお名前が出る、世の中は盲千人、學者の且那が、藪で承知をしておくんなさりや萬人力だ、心がかりはありません。

夫人！」

「は……い。」

「お見受け申した處が、千之助樣のおつしやつた、お姉樣のやうでございますな。御兩親はなし、思つた方はお亡なンなさる、千之助樣は最情い方だ。優しい且那だ、貴下、可愛がつて世話をしてお上げなさい、恁う云つちや失禮だが、はじめてお見上げ申してから、何だかなくなつた兄貴のやうでなりません、唯兄貴は商人の世間見ずの坊ち野郎だ。且那は學者の先生だが、人情は一ッでさ、私は亂暴をしましたがね、これでなか〳〵兄思ひなんでさよ、夫人、よく見てお上げなさいまし。」

「はい……はい。」といつたがあどけない嫗のやうに頷いた。

「酒も澤山は毒ですぜ。」といひ遺つて、赤帽は屹然と立つて目をしばたゝいた。

夫人は聲を忍んで泣いた、千之助も落涙した。

更めて、

「姉さん。」

「あゝ。」とやう〳〵涙の顔。

「どうも此の人は殺されません、私が、代りに死ぬと云つても、姉さんも殺すまい。君も青くまい。其處でだね、姉さん、凡そ貴女の名望と、憚りだけれど、其の御容色で、非常の場合です、

此の名古屋で、凡そ、此の土地に於て、樞要の地位にある人の幾人が、某けます、否、某くんぢやない、歎願する、歎願して、言に從はされるでせう。」

「命乞ひ？」

「然うです、旅行券をごまかして、外國へ逃がすんです。」

「然うね。」

とぱッちり清い目ざし、早や映る、綾子の死繪に懐然としながら、

「千之助さん。」

「えゝ。」

「手を。」

指をおさへて、一人……二人……三人……四人……五人と算ふると互に頷き、目を見合せて、吻と息。此の物語に祕すべきは、夫人が實の姉ではなく、姉妹のやうだつた、千之助の慰人絹子が信友であることではない、夫人二人の良人の名と、及び其の地位とである。

汽車

明治三十二年七月

雲烟過眼、箱根も柿狹間も關ヶ原も、硝子窓から駈拔けるやうながら、分秒にして長距離を行くことなれば須臾の間に趣變る、汽車の旅亦をかし。

嘗て上京の途なりき。家を出づる時は雨雲の氣勢もなかりしに、一夜辰の口といふ溫泉ある山間の村に宿りしが、其夜中頃よりちらちらと降出したり。朝は風さへ加はりぬ。名にし負ふ雪國のことなれば、一日に五尺三尺と積らむも計り難しと、白山颪におもてを向けて、勇を鼓して出發せしが、ハヤ行く〳〵堆うなりて、腕車進まず、路わづかに七里にして大聖寺に泊る。あくる日は既に腕車通ぜず、徒歩して福井にいたり、こゝにて聞けば敦賀に達する山越の路鎖されたり。春日野の隧道損所あり、大良のがけ崩れたりなどいひのゝしる。市中にても湯に行くさへまゝならずなりぬ。

流ること三日半日、やうやく二日前の大阪の新聞此地に來るにあひて、還東なくも路一筋敦賀に通ひたるをうらなひて立出でぬ。幸に別條なく、金ケ崎に達すれば案外なり。恰も雪を掃し得て、一番汽車發すといふ。あくる朝被處を發すれば滿目皚々たり、柳ケ瀬、關ヶ原あたりにては、雪、路傍の小家を埋む。

雪蓑や蓑笠着たる大人數

いひつくすべくもあらず。實際は混雜修羅場の如くなりけり。賤ケ嶽のあたり見る目も凄まじかりしに、其日午に至らず、長濱附近に來れば、白きものわづかに藪垣の間にかかりて、桑も畑も皆黑し。これはといふ間に停車場に入る、長濱は霙降れり。米原は寒烈しくして、たゞ天の曇れるのみ。いともをかしきは、岐阜、大垣に着けば、比較的天日赫々とやいはむ、一點の雲もなかりしならずや。而して列車の屋根よりは雪のとけて落つる雫、雨の如くなり。行逆ふ汽車の旅客皆奇異の思をしつべし。小春日の野の一方に三十里遠き國のツイ今しがた降れる雪を汽車其處に被ぎてあるなり。師走十六日。

深々と雪を被げり終列車

汽車行くこと十里にして春の雪まばら

——國花全集卷十五「丸善小雪」より

春書

一

「お爺さん、お爺さん。」

「はあ、私けえ。」

と、一言で直ぐ應じたのも、四邊が靜かで他には誰も居なかつた所爲であらう。然うでないと、其の襤だらけな額に、皺卷を綴くしたのに、ほか〳〵と春の日がさして、とろりと醉つたやうな顏色で、長閑に鍬を使ふ樣子が――あの又其の下の柔な土に、しつとりと汗ばみさうな、散りこぼれたら紅の夕陽の中に、ひらひらと入つて行きさうな――眩い桃の花を、燃え立つばかり撫ぶつて顏に嚙つて居る鳥の音こそ、何か話をするやうに聞かうけれども、人の聲を耳にして、それが自分を呼ぶのだとは、急に心付きさうもない、恍惚とした形であつた。

此方も此方で、悉く立處に返答されると思つたら、聲を懸けるのぢやなかつたかも知れぬ。何爲なら、扨て更めて言ふことが些と取り留めのない次第なので。本來なら此の散策子が、其のぶら〳〵歩行の手すさびに、近頃買求めた安直な杖を、眞直に路に立てゝ、鎌倉の方へ倒れたら爺を呼ぼう、逗子の方へ寢たら默つて置かう、とそれでも事は濟んだのである。

多分は聞えまい、聞えなければ、其まゝ通り過ぎる分。餘計な世話だけれども　默切も些と氣になつた處。譽の應ずるが如き其の、（はあ、私けえ）には、聊か不意を打たれた仕誼。

「あゝ、お爺さん。」

と低い四目垣へ一足寄ると、ゆつくりと腰をのして、背後へよいとこさと反るやうに伸びた。親仁とは、隔てる草も別になかつた。三筋ばかり耕された土が、勢込んで、むく〳〵と湧き立つやうな快活な香を籠めて、然も寂寞とあるのみで。勿論、根を拔かれた、肥料になる、青々と粉を吹いたそら豆の芽生に交つて、紫雲英もちらほら見えたけれども。

鳥打に手をかけて、

「つかんことを聞くがね、お前さんは何ぢやないかい、此の、其處の角屋敷の内の人ぢやないかい。」

親仁はのそりと向直つて、襤だらけの額に一杯の日當り、桃の花の影がさした其の色に對して、打向ふ其方の屋根の甍は、白晝青空を烘る突に高い。

「あの家のかね。」

「其の二階のさ。」

「いんえ、違ひます。」

と、云ふことは素氣ないが、話を强切るつもりではなさゝうで、肩を一ッ搖りながら、鍬の柄を返して地について此方の額を見た。

「然うかい、いや、お邪魔をしたね、」

これを機に、分れようとすると、片手で額卷を拐り取つて、

「どうしまして、邪魔も何もございましねえ。はい、お前樣、何か尋ねごとさつしやるかね。彼處の家は表門さ閉つて居りませども、貸家ではねえが……」

其の手拭を、裾と一緒に、下からつまみ上げるやうに帶へ挾んで、指を腰の兩提げに突込んだ。これでは直ぐにも通られない。

「何ね、詰らん事さ。」

「はいゝ？」

「お爺さんが彼家の人なら然う言つて行かうと思つて、別に貸家を捜してゐるわけではないのだよ。奥の方で少い婦人の聲がしたもの、空家でないのは分つてるが、」

「然うかね、女中衆も一人ばッか居るだから、」

「其の女中衆に就いてさ。私がね、今彼處の樣手を此の路へかゝつて來ると、溝の石垣の處を、ずる〳〵つと這つてね、一匹居たのさ――長いのが。」

二

怪訝な眉を臆面なく日に這はせて、親仁、煙草入をふら〳〵。

「へい、」

「餘り好物な方ぢやないからね、實は、」

と言つて、笑ひながら、

「其の縮恐いもの見たさに立留まつて見て居ると、何ぢやないか、やがて半分ばかり垣根へ入つて、尾を水の中へぱたりと落して、鎌首を、あの狗日板へ入れたらうぢやないか。狗日の中は、見た處湯殿らしい。それとも臺所かも知れないが、何しろ、内にや少い女たちの聲がするから、どんな事で吹驚しまいものでもない、と思ひます。

あれッ切、座敷へなり、納戸へなりのたくり込めば、一も二もありやしない。それまでと云ふもんだけれど、何處か板の間にとぐろでも卷いて居る處へ、うつかり出會したら難儀だらう。

どの道餘計なことだけれど、お前さんを見かけたから、つい其處だし、彼處の内の人だつたら、一寸心づけて行かうと思つてさ。何ね、此處等ぢや、蛇なんか何でもないのかも知れないけれど、」

「はあ、青大將かね。」

と云ひながら、大きな口をあけて、奥底もなく長閑な日の舌に染むかと笑ひかけた。

「何でもなかあねえだよ。彼處さ東京の人だからね。此間も一件もので大騒ぎをしたでがす。行つて見て進ぜますべい。疾うに、はい、何處かづらかつたも知んねえけれど、豪所の樂とは心安うするでがすから、」

「ぢやあ、然うして上げなさい、しかし心ない邪魔をしたね。」

「なあに、お前樣、どうせ日は永えでがす。はあ、お靜かにござもつせえまし。」

然うして人間同士がお靜かに別れた頃には、一件はソレ龍の如きもの興、凡處の及ぶ處でない。

散策子は鍬を廻らして、それから、きり〳〵はたり、きり〳〵はたりと、鶏が羽うつやうな梭の音を慕ふ如く、向う側の垣根に添うて、二本の桃の下を通つて、三軒の田舍屋の前を過ぎる間に、十八九のと、三十ばかりなのと、機を織る婦人の姿を二人見た。

其の少い方は、納戸の破障子を半開きにして、姉さん冠の横顏を見た時、腕白く梭を投げた。其の年取つた方は、前庭の乾いた土に莚を敷いて、背むきに機臺に腰かけたが、トンと足をあげると、ゆるくキリ〳〵と鳴つたのである。

唯それだけを見て過ぎた。女今川の口吟でなければ、近頃は餘り見掛けない、可懷しい姿、些と立佇つてといふ氣もしたけれども、小兒でも居ればだに、どの家も皆野面へ出たか、人氣は此の外になかつたから、人聞れぬ女だち物恥をしよう、いや、此の男の傳では、物怖、物驚をしようも知れぬ。此の路を後へ取つて返して、今蛇に逢つたといふ、其二階家の角を曲ると、左の方に脊の高い麥畠が、なぞへに低くなつて、一面に颯と擴がる、淺緑に美しい白波が薄りと靡く清のあたり、雲もない空に歷々と跳

めらるゝ、西洋館さへ、青異人、赤異人と呼んで色を鬼のやうに稱ふるくらゐ、こんな風の男は鄙がなくても（頭子被り）と言ふと聞く。

尤も一方は、そんな風に――よし、村のものの目からは青鬼赤鬼でも――蝶の飛ぶのも帆艇の帆かと見ゆるばかり、海水浴に開けて居るが、右の方は昔ながらの山の形、眞黑に、大蘆の翼打擴ねたる趣して、左右から苗代田に取詰むる峰の襞、一重は一重毎に迫つて次第に狹く、奥の方暗く行詰つたあたり、打つけなりの茅屋の窓は、山が開いた眼に似て、恰も大なる蕈の、明け行く海から掘穿んで、谷間に潜む風情である。

三

されば瓦を焚く竈の、屋の棟よりも高いのがあり、主の知れぬ宮もあり、無緣になつた墓地もあり、頻に落ちる椿もあり、田には大な鯰もある。

あの、西南一帶の海の潮が、浮世の波に白帆を乘せて、此しばらくの間に九十九折ある山の峽を、一ツづゝ湧にして、奥まで迎ひに來ぬ内は、いつまでも村人は、むかう向になつて、ちらほらと畑打つて居るであらう。

丁どいまの曲角の二階家あたりに、屋根の七八ツ重つたのが、此の村の中心で、それから峽の方へ飛々にまばらになり、海手と二三町が間人家が途絶えて、却つて折曲つた此の小路の兩側へ、又飛々に七八軒續いて、それが一部落になつて居る。

梭を投げた娘の目も、山の方へ暗が通ひ、足踏みをした女房の胸にも、海の波は映らぬらしい。

通りすがりに考へつゝ、立離れた。面を壓して菜種の花、眩い日影を輝くばかり。左手の畦の緑なのも、向うの山の青いのも、個に此の眞黄色の、偉に限あるを語るに過ぎず。足許の細流や、一段颯と蘆を落して流るゝさへ、なか〳〵に花の色を薄くはせぬ。

あゝ目覺ましいと思ふ目に、ちらりと見たのみ、奥織文織は、恰も一枚の白紙に、曉朧と描いた二個の其の妻を殘して曾白を眞黄色に塗つたやう。二人の衣服にも、手拭にも、襟にも、前垂にも、織つて居た其の襷の色にも、聊も此の色のなかつただけ、一入鮮麗に明瞭に、胸中に描き出された。

勿論、描いた人物を判然と浮出させようとして、此の彩色で地を塗潰すのは、畫の手段に取つて、是か、非か、巧か、拙か、それは菜の花の預り知る處でない。

うつとりするまで、眼前眞黄色な中に、櫻織の妻の美しく宿つた時、若い婦女の衝と投げた梭の尖から、ひらりと燃えて、いま一人の足下を閃いて、輪になつて一ツ舞れた、朱に金色を帶びた一條の緞があつて、赫燿として眼を射て、流のふもとなる草に飛んだが、火の消ゆるが如くやがて失せた。

赤棟蛇が、菜種の中を輝いて通つたのである。

悚然として、向直ると、突當りが、樹の枝から梢の葉へ搦んだやうな石段で、上に、茅ぶきの堂の屋根が、目近な一朶の雲かと見える。棟に咲いた紫羅傘の花の紫も手に取るばかり、峰のみどりの黑髪にさしかざゝれた裝の、其が久能谷の觀音堂。

我が散策子は、其處を志して來たのである。

陽時、これから參らうとする、前途の石段の眞下の處へ、殆ど路の幅一杯に、兩側から押被さつた雜樹の中から、眞向にぬつと、大な馬の鼻がむく〳〵と湧いて出た。

唯見る、それさへ不意な上、胴體は唯一ツでない。鬣に鬣が擧がつて、胴に胴が重なつて、其の都度音も聞えさう、但殘惜いまでびたりと留んだは、きりはたり機の音。

此處よりして見てあれば、織機の二人の妻は、菜種の花の中ならず、蒼海原に描かれて、浪に泛ぶらむ風情ぞかし。

いや、參詣をしませう。

五段の階、緑の下を、馬が駈け抜けさうに高いけれども、欄干は影も留めない。昔は然こそと思はれた、丹塗の柱、花狹間、梁の波の紺青も、金色の龍も色さみしく、畫の月、茅を漏りて、唐戸に蝶の影さす光景、古き土佐繪の畫面に似て、然も名工の筆意に合ひ、陸ゆからぬが奥床しう、そゞろに尊く懷しい。

格子の中は暗かつた。

戸張を垂れた御廚子の傍に、造花の白蓮の、氣高く傾立つに、頭を垂れて、引退くこと二三尺。心靜かに四邊を見た。

合天井なる、紅々白々牡丹の花、胡粉の、傾消え殘り、紅も散留つて、恰も剩んだものゝ如く、萎靡として夢に花園を仰ぐ思ひがある。

それら、花にも豪にも、丸柱は言ふまでもない。狐格子、唐戸、相、梁、眴すものゝ此處彼處、巡拜の札の貼りつけてないのは殆どない。

て、凡そ五六間があひだ獸の背である。

咄嗟の間、散策子は杖をついて立竦んだ。

曲角の青大將と、此僅なる菜の花の中の赤棟蛇と、向うの馬の面とへ線を引くと、細長い三角形の只中へ、封じ籠められた形になる。

奇怪なる地妖でないか。

しかし、若惡魔圍繞、利牙爪可怖も、蚖蛇及蝮蝎、氣毒煙火燃も、薩陀彼處にましますぞや。しばらくして。……

四

のんきな馬士めが、此處に人のあるを見て、はじめて、のつそり馬の鼻頭に顯れた、鞭正面から前後三頭一列に並んで、たら〳〵下りをゆた〳〵と來るのであつた。

「お待遠さまでごぜえます。」

「彼あ、お邪魔さまな。」

「御免なせえまし。」

と三人、一人々々扉をかけて通るうち、流のふちに爪立つまで、細くなつて躲したが、何大なる皮の風呂敷に、日を包まれる心地であつた。

路は一際細くなつたが、却つて柔かに草を踏んで、きり〳〵はたり、きり〳〵はたりと、長閑な機の音に送られて、やがて仔細なく、蒼空の樹の間湧る、石段の下に着く。

此の石段は近頃すつかり修復が出來た。從つて、爪尖のぼりの路も、草が分れて一筋明らさまになつたから、もう蛇も出まい、其時分は大破して、丁度繃ひにかゝらうといふ折から、馬は此の段の下に、一斬、寺といふほどでもない住職の控家がある、其の背戸へ石を積んで來たものである。

段を上ると、階子が搖れはしまいかと危むばかり、角が缺け、石が拔け、土が崩れ、足計も定まらず、よろけながら攀ぢ上つた。見る〳〵、目の下の田畠が小さくなり遠くなるに從うて、波の色が蒼う、ひた〳〵と足許に近づくのは、海を抱いた怒る山の、何處も同じ習である。

樹立に薄暗い石段の、石よりも堆い青苔の中に、あの螢袋といふ、海紫の光彩ある、桔梗科の花の早咲を見るにつけても、何となく温つぽい氣がして、然も揚流のあとを踏むやうに熱く泛ばんだのが、颯と一風、ひや〳〵となつた。境内は然まで廣くない。

尤も、御堂のうしろから、左右の廻廊へ、山の麓を引廻して、雜木の枝も盛染に、其處とも分かず松風の聲。

渚は浪の雪を敷いて、砂に結び、巖に消える、其の都度音も聞えさう、但殘惜いまでびたりと留んだは、きりはたり機の音。

此處よりして見てあれば、織機の二人の妻は、菜種の花の中ならず、蒼海原に描かれて、浪に泛ぶらむ風情ぞかし。

いや、參詣をしませう。

五段の階、緑の下を、馬が駈け拔けさうに高いけれども、欄干は影も留めない。昔は然こそと思はれた、丹塗の柱、花狹間、梁の波の紺青も、金色の龍も色さみしく、畫の月、茅を漏りて、唐戸に蝶の影さす光景、古き土佐繪の畫面に似て、然も名工の筆意に合ひ、陸ゆからぬが奥床しう、そゞろに尊く懷しい。

格子の中は暗かつた。

戸張を垂れた御廚子の傍に、造花の白蓮の、氣高く傾立つに、頭を垂れて、引退くこと二三尺。心靜かに四邊を見た。

合天井なる、紅々白々牡丹の花、胡粉の、傾消え殘り、紅も散留つて、恰も剩んだものゝ如く、萎靡として夢に花園を仰ぐ思ひがある。

それら、花にも豪にも、丸柱は言ふまでもない。狐格子、唐戸、相、梁、眴すものゝ此處彼處、巡拜の札の貼りつけてないのは殆どない。

陣金といふのがある、魚政といふのがある、屋根安、大工藏、左官金。東京の淺草に、深川に。周防國、美濃、近江、加賀、能登、越前、肥後の熊本、阿波の德島。津々浦々の渡鳥、稲負せ鳥、閑古鳥。妻は知らず名を留めた、一切の善男子善女人。太貫の夜寒の枕にも、雨の夜の苫船からも、夢は此の處に宿るであらう。巡禮たちが靈魂は時々此處に來て遊ばう。……をかし、一軒一枚の門札めくよ。

五

一座の靈地は、栗等のためには平ぺ利益、樂く美しい、花園である。一度訪でたらむほどのものは、五十里、百里、三百里、筑紫の海の果からでも、思ひさへ浮んだら、東の間に此處に來て、虛空に花降る景色を見よう。月に、白衣の姿も拜まう。熱あるものは、楊柳の露の滴を吸ふであらう。懸するものは、優柔な御手に縋りもしよう。御胸にも抱かれよう。はた迷へる人は、鞍の聲、朱の玉垣、金銀の柱、朱欄干、瑪瑙の階、花崗戸。王樓金殿を空想して、鳳凰の舞ふ龍の宮居に、牡丹に遊ぶ鴛鴦を見ながら、碧玉の座に朝日影さす、櫻の花を会として、明月の如き眞珠を枕に、勿體なや、御添臥を夢見るかも知れぬ。よしそれとても、大慈大悲、觀世音は替め給はぬ。

されば是なる陣金、魚政はじめ、此處に靈魂の通ふ證據には、いづれも巡拜の札を見ただけで、どれもこれも、女名前のも、略々其の容貌と、風采と、從つて其の擧動までが、瞭然として鮮の如く目に浮ぶではないか。

彼の新聞で披露する、諸種の義捐金や、建札の表に掲示する寄附金の芳名が、寫實である時に、これは理想であると云つても可からう。

微笑みながら、一枚づゝ。

扉の方へうしろ向けに、大な寒錢箱の此方、藥研のやうな破目の入つた丸柱を視めた時、一枚、懷紙の切端に、すら〳〵とした女文字。

ちかゝ寐に懸しき人を見てしより
夢てふものは頼みそめてき
——玉脇みを——

と優しく美しく書いたのがあつた。

「これは御參詣で。もし、もし、」

はッと心付くと、麻の法衣の袖をかさねて、出家が一人、裾短に草履を穿きしめて問近に來て居た。

振向いたのを、莞爾やかに笑み迎へて、

「些と此方へ。」

寒錢箱の傍を通つて、格子戸に及腰。

「南無」とあとは口の裏で念じながら、左右へかた〳〵と靜に開けた。

出家は、眞直ぐに御廚子の前へ、かさ〳〵と袈裟をずらして、袂からマッチを出すと、伸上つて御燈を點じ、額に掌を合はせたが、引返して最う一枚、そんだ人の前の戸を開けた。

蠟ばんだが一段高く、且つ幅の廣い、部厚な勅書の内に、縦に四疊ばかり敷かれる。壁の透間を樹蔭はさすが、綠なしの疊は青々と新しかつた。

出家は、上に何にもない、小机の前に坐つて、火入ばかり、煙草なしに、灰のくすぼつたのを押出して、自分も一膝、此方へ進め、

「些とお休み下さい。」

また、かさ〳〵と袂を探つて、

「やあ、マッチは此處にもござつた、はゝは、」

と、も一ッ机の下から。

「それではお邪魔を、一寸、拜借。」

と此方は敷居越に腰をかけて、此處からも空に連なる、海の色より、より濃な霞を吸つた。

「眞個に、結構な御堂ですな、住い景色ぢやありませんか。」

「や、最う大破でござつて。おもりをいたす佛

樣に、恐う申し上げては濟まんでありますがな。はゝは、私力にもおいそれとは參りませんので、行屆かん勝でございますよ。」

六

「隨分御參詣はありますか。」

先づ差當り言ふことはこれであつた。

出家は頷くやうにして、机の前に座を斜めに整然と坐り、

「然やうでございます。御繁昌と申したいでありますが、當節は餘りございません。以前は、莊嚴美麗結構なものでありましたさうで。

貴下、今お通りになりましてございませう。此處からも見えます。此の山の邸へかけまして、ずつとあの栗種畠の邊、七堂伽藍建連なつて居りましたさうで。書物にも見えますが、三浦郡の久能谷では、此の岩殿寺が、土地の草分と申しまする。

坂東第二番の巡拜所、名高い靈場でございますが、唯今ではとんと其の舊跡とでも申すやうになりました。

妙なもので、却つて遠國の衆の、參詣が多うございます。近くは上總下總、遠い處は九州西國あたりから、開帳へて巡禮なさるのがありまし

す處。此方たちが、當地へござつて、此の近邊で聞かれますると、つい知らぬものが多くて、大きに迷ふなぞと言ふ、お話を聞くでございますよ。」

「然うしたもんです。」

「はい、如何にも、」

と言つて一寸言葉が途切れる。

出家の言は、剛、か寄附金の勸化のやうに聞えたので、少し氣になつたが、煙草の灰を落さうとして目に留まつた火入の、いぶりくすぶつた色あひ、マッチの燃さしの突込み加減、集鴨邊に彌勒の出世を待つて居る、眞宗大學の寄宿舍に似て、餘り世帶氣がありさうもない處は、大に胸襟を開いて然るべく、勝手に見て取つた。

其處で又淸々しく一吸して、山の端の煙を吐くこと、遠見の鐵拐の如く、

「夏は嘸涼しいでせう。」

「とんと暑さ知らずでござる。御堂は申すまでもありません、下の假庵室なども至極其の涼しいので、ほんの草葺でありますが、些と御歸りがけにお立寄り、御休息なさいまし。木葉を燒べて澁茶でも獻じませう。

荒れたものでありますが、いや、茶釜から尻尾でも出ませうなら、又一興でござる。はゝはゝ、」

「お淡しい御奬勵ですな。」

と客は言つた。

「どうして、貴下、然やうに悟りの開けました智識ではございません。一軒屋の一人住居心寂しうござつてな、唯今も御參詣のお姿を、あれからお見受け申して、あとを慕つて來ましたほどで。

時に、どちらに御逗留？」

「私？　私は直き其の停車場最寄の處に、」

「しばらく、」

「先々月あたりから、」

「いづれ、御旅館で、」

「否、一室借りまして自炊です。」

「は、は、然やうで。いや、不躾でありますが、思召しがござつたら、假庵室御用にお立て申しまする。

甚だ唐突でありますが、昨年夏も、お一人な、矢張恋やうな事から、貴下がたのやうな御仁の御宿をいたしたことがあります。

御夫婦でも宜しい、お二人ぐらゐは樂でありますから、」

「はい、難有う。」

と莞爾して、
「一寸、通りがゝりでは、恁ういふ處が、此方にあらうとは思はれませんね。眞個に住い御堂ですね、」
「折々御遊歩においで下さい。」
「勿體ない、おまゐりに來ませう。」
何心なく言つた孤を、訝しさうに打視めた。

七

出家は膝に手を置いて、
「これは、貴下方の口から、然う云ふことを承

「はあ、あの歌ですか。」
「御覧になつたで、」
「先刻、貴下が扉をおかけなすつた時に、」
「お目に留まつたのでありませう、其は歌の主が分つて居ります。」
「婦人ですね。」
「然やうで、最も古歌でありますさうで、小野小町の、」
「多分然うのやうです。」
「詠まれたは御自分でありませんが、いや、丁と其の詠み主のやうな美人でありましてな、」
「此の玉脇……とか言ふ婦人が、」
と、口では澄まして然う言つたが、胸はそゞろに時めいた。
「成程、今貴下がお話しになりました、其の、御傷のことに就いて、戀人云々のお言葉を考へて見ますると、是は、みだらな心ではなくて、行き方こそ違ひまするが、かすかに照らせ山の端の月、と申したやうに、艶世音にあこがるゝ心を、古歌に托へたものであつたかも分りませぬ。――夢てふものは頼み初めてき――夢になりともお委をと言ふ。
眞側に、あゝいふ世に稀な美人ほど、早く結緣いたして佛果を得た驗も深山ございますから。
それなる人獨に、戀歌を書き散らして參つた、怪しからぬ事と、さ、それも人によりけり、御經にも、若有女人設欲求男、と有りまするから、一概に咎め立てはいたさんけれども。彼がために一人殺したでございます。」
聞くものは一驚を吃した。菜の花に見た蛇のそれより。

九

「まさかとお思ひなさるでありませう、お話が大分唐突でございたで、」
出家は頬に手をあてゝ、俯いてやゝ考へ、
「いや、しかし戀歌でないといたして見ますると、其の死んだ人の力が、これは逢ひであつたかも知れんでございます。」
「飛んだ話ぢやありませんか、それは又どうした事ですか。」
と、此方は何時か、最う御堂の疊に、にじり上つて居た。よしありげな物語を聞くのに、懷が窮屈だつたから、懷中に押込んであつた、鳥打帽を引出して、傍に差置いた。
松風が背に立つた。が、春の日なれば人よりも暖く、そよ〳〵と袂を吹くのである。
出家は佛前の燈明を一寸見て、
「然ればでござつて。……
實は先刻お話し申した、ふとした御緣で、御堂の此の下の假庵室へお宿をいたしました、其の御仁なのでありますが。
其の貴下、うたゝ寐の歌を、其處へ書きました、婦人のために……まあ、言つて見ますれば懸煩ひ、いや、こがれ死をなすつたと申すものでございます。早い話が、」
「まあ、今時、どんな、男です。」
「丁ど貴下のやうな方で、」
呼？　茶釜でなく、這般文福和尚、澁茶にあらぬ振舞の三十棒、思はず後に瞰若として、……唯苦笑するある而已……
「これは、飛んだ處へ引合ひに出しました、」
と言つて打笑ひ、
「おつしやる事と申し、矢張恁う云ふ事からお知己になつたと申し、うつかり、これは、」
「否、結構ですとも。懸で死ぬ、本望です。此の太平の世に生れて、戰場で討死をする機會がなけりや、おなじ疊の上で死ぬものを、憧れじにが酒落て居ます。
華族の金滿家へ生れて出て、懸煩ひで死ぬ、此のくらゐ難有い事はありますまい。懸は叶ふ

方が可さゝうなもんですが、然うすると愛別離苦です。
唯死ぬほど恋れると云ふのが、魂を溺めるより難いんでせう。」
「眞に御串戯ものでおいでなさる。はゝゝゝ、」
「眞面目ですよ。眞面目だけなほ串戯のやうに聞えるんです。あやかりたい人ですね。よくそんなのを見つけましたね。よくそんな、こがれ死をするほどの婦人が見つかりましたね。」
「それは見ることは誰にでも出來ます。美しいと申して、龍宮や天上界へ參らねば見られないのではござらんで、」
「ぢや現在居るんですね。」
「居りますとも。土地の人です。」
「此の土地のですかい。」
「然も此の久能谷でございます。」
「久能谷の、」
「貴下、何んでございませう、今日此處へお出でなさるには、其の家の前を、御通行になりましたらうで、」
「其の美人の仕居の前をですか。」
と言ふ時、擬を織つた少い方の婦人が目に浮んだ、紫燿として菜の花に。
「……ぢや、あの、矢張農家の娘で、」
「否々、大財産家の細君でございます。」
「遊ひました、」
と我を忘れて、呟いたが、
「然うですか、大財産家の細君ですか、ぢや最う主ある花なんですね。」
「然やうでございます。それがために、貴下、」
「なるほど、他人のものですね。而して誰が見ても綺麗ですか、美人なんですかい。」
「はい、夏向は陰分何千人と云ふ東京からの客人で、目の覺めるやうな美麗な方もありますが、なか〳〵此ほどのはないでございます。」
「ぢや、私が見ても懸煩ひをしさうですね、危險、危險。」
出家は眞面目に、
「何故でございますか。」
「歸路には氣を注けねばなりませんか、其の財産家の家は。」

十

菜種にまじる茅屋の彼方に、白波と、松吹風を右方、其處に旗のやうな薄霞に、しつとりと紅の染む狀に桃の花を彩つた、其の屋の棟より、高いのは一ツもない。
「角の、あの二階家が、」
「否々、大財産家の細君でございます。」
「遊ひました、」
と我を忘れて、呟いたが、
「然うですか、大財産家の細君ですか、ぢや最う主ある花なんですね。」
「なるほど、他人のものですね。而して誰が見ても綺麗ですか、美人なんですかい。」
「はい、夏向は陰分何千人と云ふ東京からの客人で、目の覺めるやうな美麗な方もありますが、なか〳〵此ほどのはないでございます。」
「ぢや、私が見ても懸煩ひをしさうですね、危險、危險。」
出家は眞面目に、
「何故でございますか。」
「歸路には氣を注けねばなりませんか、其の財産家の家は。」
「えゝ？」
「彼が此の歌のかき人の住居でござつてな。」
聞くものは愕然とした。
出家は何んの氣もつかずに、
「尤も彼處へは、去年の秋、細君だけが引越して參つたので。丁ど私がお宿を致した其御仁が……お名は申しますまい。」
「それが可うございます。」
「唯、客人――でお話をいたしませう。其の方が、庵室に逗留中、夜分な、海へ入つて亡くなりました。」
「溺れたんですか、」
「と……まあ見えるでございます、亡骸が岩に打揚げられてござつたので、怪我か、それとも覺悟の上か、其處は先づ、お聞取りの上の御推察でありますが、私は前申す通り、此の歌のためぢややうにな、」
「何しろ、それは飛んだ事です。」
「其の客人が亡くなりまして、二月ばかり過ぎてから、彼處へ、」
と二階家の遙なのを、雲の上から蔽ふやう、出家は法衣の袖を上げて、
「細君が引越して來ましたので。懸ぢや、逢ぢや、といふ一脈ぎござつた時分は、此の濱方の

本宅に一家族、……唯今でも其處が本家、まだ横濱にも立派な店があるのでありまして、主人は大方其方へ參つて居りませうが。

此の久能谷の方は、女中ばかり、眞に閑雅に住んで居ります。」

「すると別莊なんですね。」

「いや〳〵、――どうも話がいろ〳〵になります、――處が久能谷の、あの二階家が本宅ぢやさうで。唯今の主人も、あの屋根の下で生れたげに申します。

其の頃は豪な暮しで、屋根と申した處が、あではありますまい。月も時雨もばら〳〵雫。それでも先代の親仁と言ふのが、最う唯今では亡くなりましたが、それが貴下、小作人ながら大の節倹家で、積年の貯みで、地面を少しばかり借りましたのが、私庵主の背戸の地續きで、現前立派な寺がありました。其住職の隱居所の跡だつたさうにございますよ。

豆を植ゑようと、まことに恁う天氣の可い、のどかな、陽炎がひら〳〵畔に立つ時分。

親仁殿、鍬をかついで、此の坂下へ遣つて來て、自分の借地を、先づならしかけたでございます。

とッ樣畫上りにせつせえ、と小兒が呼びに來た時分、と申すで、お晝頃でありませうな。

朝疾くから、出しに來かつたで、布子の半纏を着て居たのが、其陽氣なり、働き通しぢや。親仁殿は尚廻卷、大肌脱で、精々と遣つて居た處。大抵借用分の地券面だけは、仕事が濟んで、是から畑とほまちに山を削らうといふ料簡。づか〳〵山の裾を、穿りかけて居たさうでありますが、小兒が呼びに來たに就いて、一服遣るべいかで、最う一鍬、すとんと入れると、急に土が軟かく、ずぶ〳〵と柄ぐるみにむぐすり込んだで。

づいと、引抜いた鍬については、じと〳〵と染んで出たのが、眞紅な、ねば〳〵とした水ぢや、」

「死骸ですか、」と切込んだ。

「大違ひ、大違ひ、」

と、出家は大きくかぶりを掉つて、

「註文通り、金子でござる、」

「成程、穿當てましたね。」

「穿當てました。海の中でも紅色の鱗は目覺ましい。土を穿つて出る水も、然ういふ場合には鮒より、黄色より、青い色より、其の紅色が一番見る目を驚かせます。

はて、何んであらうと、親仁殿が屈くなつて、もう二三度穿り擲げると、がつくり、うつろになつたので、山の腹へ附着いて、恁う覗いて見たさうにござる。」

十一

「大蛇が顎を開いたやうな、眞紅な土の空洞の中に、づぼらとした黑い塊が見えたのを、鍬の先で掻出して見ると――蛇で。

蓋が打缺けて居たさうでございますが、其處からもどろ〳〵と、其の丹色に底濁んで光のある粘土やうのものが充滿。

別に何んにもありませんので、親仁殿は情氣もなく打覆して、最う一個あつた、それも蛇で、庚の方へ縱に二ッ並んで居たと申します――さあ、此の方が眞物でござつた。

開けかけた蓋を慌てゝ脱へて、きよろ〳〵と其處等詞したさうでございますよ。

傍に居て覗き込んで居た、自分の小兒をさへ、睨むやうにして、じろりと見ながら、何う悠々と、肌なぞを入れて居られませう。

素肌へ、貴下、嬰兒を負ふやうに、それ、脱いで置いたぼろ半纏で、しつかりくるんで、背負上げて、がくつく硬を、鍬を杖にどッこいなぢや。默つて居ろよ、何んにも言ふな、蛇と誰にも饒舌るでねえぞ、と言ひ聽けて、内へ歸つて、

納戸を閉切つて暗くして、お佛壇の前へ趺を敷いて、其處へざく〳〵と裝上げた。尤も年が經つて薄黑くなつて居たさうでありますが、其の晩から小屋は何んとなく暗夜にも明るかつた、と近所のものが話でござつて。

極性な朱でござつたらう、ぶちまけた甕允滿のが、時ならぬ曼珠沙華が咲いたやうに、山際に燃えて居て、五月雨になつて消えましたとな。

些と日數が經つてから、親仁どのは、村方の用達かたん〳〵、東京へ參つた序に芝口の兩換店へ寄つて、汚い煙草入から煙草の新だらけなのを一枚だけ、そつと出して、幾千に買はつしやる、と當つて見ると、いや抓んだ爪の方が黄色いくらゐでござつたに、正のものとて爭はれぬ、七兩ならば引替へにと言ふのを、もッと氣張つてくれさつせえで、とう〳〵七兩一分に替へたのがはじまり。

そちこち、氣長に金子にして、やがて船一艘、古物を買ひ込んで、海から舊炭の荷を廻し、追々材木へ手を出しかけ、船の數も七艘までに仕上げた時、すつぱりと賣物に出して、さて、地面を買ふ、店を擴げる、普請にかゝる。

土豪が棟ると、山の貸元になつて、坐つて居て商賣が出來るやうになりました、高利は貸します。

どかとした山の林が、あの裾になつては、店さきへすく〳〵と並んで、いつの間にか金を殘しては何處へか參る。

其の筈でござるて。

利のつく金子を借りて山を買ふ、木を伐りかけ、資本に支へる。こゝで材木を拵當にして、又借りる。すぐに利がつく、又伐りかゝる、資本に支へる、又借りる、利でござらう。借りた方は精々と樹を伐り出して、貸元の店へ材木を並べるばかり。追つかけられて見切つて賣るのを、安く買ひ込んで又備ける。行つたり、來たり、家の前を通るものが、金子を置いては失せるでありますと。

妻子眷屬、一時にどし〳〵と殖えて、人は唯、天狗が山を飲むやうな、と舌を卷いたでありまするが、蔭ぢや――其の――鉾を杖で胴震ひの一件をな、はゝゝゝ、此方人等、其の、も一ッの甕の朱の方だつて、手を押つけりや血になるだ、なぞと、ひそ〳〵話を遣るのでござつて、一然う云ふ人たちは又可い鹽梅に穿當てないものですよ。」

と額を見合はせて二人が笑つた。

「よくしたものでございます。いくら腰して居ることでも何處を何うして知れますかな。

いや、それに就いて、」

出家は思出したやうに、

「恁う云ふ話がございます。其の、誰にも言はな、と堅く口留めをされた齊之助といふ小兒が、(父親は野良へ行つて、穴のない天保錢をドシコと背負つて歸らしたよ。)

……如何でござる、はゝゝはゝ。」

「なるほど、穴のない天保錢。」

「其の穴のない天保錢が、當主でございます。多額納稅議員、玉脇齊之助。令夫人おみを厳、其の歌をかいた美人であります、如何でございます、貴下、」

十二

「先づお茶を一ッ。御約束通り溢柔でござつて、碎にお茶毒もありませんかはりには、がらんとして自然に片づいて居ります。お寛き下さい。秋になりますると、これで町へ遊うございますかはりには、栗柿に事を缺きませぬ。鳥を追つて柿を取り、高音を張ります聽を振かして、栗を落してなりと落上げませうに。

まあ、何よりもお樂に、」

と裂裝をはづして釘にかけた、障子に耕花の

客人が言ふには、

（二三間あを置いて、おなじやうな浴衣を着た、帯を整然と結んだ、女中と見えるのが附いて列りましたよ。

唯すれ違ひざまに見たんですが、目鼻立ちのはつきりした、色の白いことゝ、唇の紅さツたらありませんでした。

盛装と云ふ姿だのに、海水帽をうつむけに被つて――近所の人でゞもあるやうに、無造作に見えましたつけ。むかう、然うやつて下を見て帽子の廂で日を避けるやうにして來たのが、眞直に前へ出たのと、顔を見合はせて、兩方へ避ける時、濃い睫毛から瞳を涼く睜いたのが、雪舟の筆を、紫式部の硯に染めて、濃淡のぼかしをしたやうだつた。

何んとも言へない、美しさでした。

いや、恁う云ふことをお話します、私は鳥羽繪に背て居るかも知れない。

さあ、御飯を頂いて、柄相應に、月夜の南瓜畑でも又見に出ませうかね。）

爾吧は貴下、唯それだけの事で。

翌日また散歩に出て、同じ時分に庵室へ歸つて見えましたから、私が串戯に、

（今日は曇つた所爲か見えませんでした。）

それから二三日經つて、

（まだお天氣が直りませんな。些と涼しすぎるくらゐ、御歩行には宜しいが、矢張雲がくれでござつたか。）

（否、源氏の題に、小松橋といふのはありませんが、今日はあの橋の上で、）

（それは、おめでたい。）

などゝ笑ひまする。

（まるで人違ひをしたやうに粹でした。私が是から橋を渡らうと云ふ時、向うの袂へ、十二三を頭に、十歳ぐらゐのと、七八歳ばかりのと、男の兒を三人連れて、其中の小さいのゝ肩を片手で敲きながら、上から覗き込むやうにして、莞爾して橋の上へかゝつて來ます。

どんな婦人でも、淡しがりきうな、すなほな、房りした花見巻で、薄お納戸地に、ちら〳〵と庸の透いたやうな、何んの中形だか浴衣がけで、それで、きちんとした衣紋附。

紹でせう、朱色と白とを打合はせの、模様は一寸分らなかつたが、お太鼓に結んだ、白い方が、腰帶に當つて水無月の雪を抱いたやうで、見る目に、ぞッとして擦れ違ふ時、其の人は、忘れた形に手を乗れた、其の兩手は力なさゝうだつたが、剛にぶる〳〵と肩が搖れたやうでした、傍を通つた男の氣に襲はれたものでせう。

通り過ぎると、どうしたのか、我を忘れたやうに、私は、あの、低い欄干へ、腰をかけて了つたんです。抜けたのだなぞと言つては不可ません。下は川ですから、あれだけの流でも、落ちようもんなら其切です――淵や瀬でないだけに、救助船とも喚かれず、又叫んだ處で、人は串戯だと思つて、笑つて見殺しにするでせう、泳を知らないから、）

と言つて苦笑をしなさつたつけ……それが眞實になつたでございます。

何うしたことか、此の戀煩に限つては、傍のものは、あは〳〵、笑つて見殺しにいたします。

私はじめ串戯半分、ひやかし旁々、今日は例のは如何で、などゝ申したでございます。

これは、貴下でも然やうでありませう。」

然れば何んと答へよう、喫んでた煙草の灰をはたいて、

「ですかな……どうも、これだけは眞面目に介抱は出來かねます。姫が煩ふのだと、乳母が始末をする仕來りになつて居りますがね、男の

影法師、今物語の朱にも似て、破日を暖く燃ゆる肌、法衣をなぶる風情である。

庵室から打仰ぐ、石の階子は梢にかゝつて、御堂は屋根のみ浮いたやう、緑の雲にふつくりと沈んで、山の裾の、緣に迫つて萌憑なれば、あま下る蚊帳の外に、部持つとしもなき二人、煙らぬ火鉢のふちかけて、ひら〳〵と蝶が來る。

「御堂の中では何んとなく氣もあらたまります。此處でお茶をお入れ下すつた上のお話ぢや、結構過ぎますほどですが、あの歌に別れて來たので、何んだかなどり惜い心持もします。」

「けれども、石段だけも、嗣郷な御本尊へは路が近うなつてございますから、はゝはゝ。

實の處佛の前では、何か私が自分に慣慄でもしまするやうで心苦しい。此處でありますと大きに寛ぐでございます。

師のかげを七尺去ると最うなまけの通りで、困つたものでありますわ。

其處で客人でございます。――

日頃のお話ぶり、行爲、御容子な、」

「どういふ人でした。」

「それは申しますまい。私も、盲目の加覗きよりもそッと近い、机覗きで、讀んでおいでなさつた、書物などの、お話も同つて、何をなさる力ぢやと言ふ事も存じて居りますが、縁交に書いてあることさへ、無味に饒舌ると問遊ひます。

故人をあやまり傳へてもなりませず、何か評をするやうにも當りますから、唯々、かのな、鄙人との模様だけ、お物語しませうで。

一日吧方、極暑のみぎりでありました。濱の散歩から歸つてござつて、（和尚さん、些と海へ行つて御覽なさいませんか、綺麗な人が居ますよ。）

（はゝあ、どんな、貴下、）

（あの松原の砂路から、小松橋を渡ると、急にむかうが遠目金を嵌めたやうに圓い海になつて富士の山が見えますね、）

これは御存じでございませう。」

「知つて居ますとも。毎日のやうに遊びに出ますもの、」

「あの橋の取附きに、松の樹で取廻して――松原はずつと河を越して廣い洲の林になつて居りますな――而して庭を廣く取つて、大玄關へ石を敷詰めた、素ばらしい門のある邸がございませう。あれが、それ、玉脇の住居で。

實はあの方を、東京の方がなさる別荘を眞似て造つたでありますが、主人が交際ずきで頻と客をしまする處、いづれ海が、何よりの呼物でありますに。此の久能谷の方は、些と足場が遠くなりますから、すべて、見得裝飾を向うへ持つて參つて、小松橋が本宅のやうになつて居ります。

其處で、去年の夏頃は、御新姐、申すまでもない、そちらに居たでございます。

で其の――小松橋を渡ると、急に遠目金を覗くやうな圓い海の硝ずへ――ぱつと一杯に映つて、とき色の服の姿が浪の青いのと、巌の白い中へ、薄い虹がかゝつたやうに、美しく靡いて來たのがある。……

と言はれたは、飽ち、それ、玉脇の……でございます。

しかし、其時はまだ戯だか本人も御存じなし、聞く方でも分りませんので。どういふ別荘でありました、と串戯にな、團扇で煽ぎながら聞いたでございます。

客人は浴水帽を脱いだばかり、未だ部屋へも上らず、其の縁側に腰をかけながら。

（誰方か尊いくらゐでした。）

十三

一大分氣高く見えましたな。

は困りますな。

そんな時、其の川で沙魚でも釣つて居たかつたですね。」

「はゝゝ、是はをかしい。」

と田家は興ありげにハタと手を打つ。

十四

「是はをかしい、釣といへば丁ど其時、向う詰の岸に踞んで、ト釣つて居たものがあつたでござる。橋詰の小店、荒物を商ふ家の亭主で、身體の痩せて引締つたには似ない、挙の緩い男で、因果とのべつ釣をして、はだけて居ませう、眞にあぶなッかしい形でな。

派名を一厘土器と申すでござる。天窓の眞中の兀工合が、狆然ですて ―― 川端の一厘土器 ―― これが欄時も釣つて居ました。

庵室の客人が、唯今申す欄干に腰を掛けて、おくれ毛越にはら〳〵と靡いて通る、雪のやうな襟脚を見送ると、今、小橋を渡つた處で、中の十歳位のがぢやれて、其の腰へ抱き着いたので、白魚といふ指を反らして、輕く其の小兒の背中を打つた時だつたと申します。

（お坊ちやま、お坊ちやま、）

と大聲で呼び懸けて、

（手巾が落ちました、）と知らせたさうでありますが、件の土器厳も、何は振蟬ふ氣で、粹な後姿を見送つて居たものと見えますよ。

（やあ、）と言つて、十二三の一番上の兒が、駈けて返つて、橋の上へ落して行つた白い手巾を拾つたのを、懐中へ突込んで、默つて又飛んで行つたさうで。小兒だから、耐儀も挨拶もないでございます。

御新姐が、禮心で顔だけ振向いて、眉へ、頭。をつけるやうに、唇を少し曲げて、其の涼い目で、熱と此方を見返つたのが取遮へたものらしい、私が詐の客人と、びつたり出會つたでありませう。

引込まれて、はッと魂を返したが、其ッ切。御新姐の方は見られなくつて、傍を向くと貴下、一厘土器が怪訝な顔色。

いや最う、しつとり冷汗を拭いたと言ふ事、

――こりや成程。極がよくない。

局外のものが何んの氣もなしに考へれば、愚にもつかぬ事なれど、色氣があつて御覽じろ。第一、野良聲の調子ッぱづれも可笑しい處へ、自分主人でもない餘所の小兒を、坊やとも、あの兒とも言ふにこそ、へつらひがましい、お坊ちやまは不見識の行止り、申さば器量を下げた話。

今一方からは、右の土器厳にも小恥かしい次第でな、他人のしんせつで手柄をしたやうな、變な羽目になつたので。

御本人、然うとも口へ出して言はれませなんだが、それから何んとなく鬱ぎ込むのが、傍目にも見えたであります。

四五日、引續つてござつたほどで。

後に、何も彼も打明けて私に言ひなさつた時の話では、しかし又其の間遮が緩くなつて、今度出會つた時は、何んとなく爾方で挨拶でもするやうになりはせまいか。然らすれば、どんなにか嬉しからう、本望ぢや、と思はれたさうな、逢ひと申すはおそろしい、情ないものでござる。世間大德の禹跡も、これほどなことはないでございます。

三度目には御本人、」

「又、出會つたんですかい。」

と聞くものも待ち構へる。

「今度は反對に、濱の方から歸つて來るのと、濱へ出ようとする御新姐と、例の出口の處で遇つたと言ひます。

大分最う薄暗くなつて居ましたさうで……土用あけからは、目に立つて日が詰ります處へ、

一度は一度と、散歩のお歸りが遅くなつて、蚊遣りでも我慢が出來ず、私が此處へ蚊帳を釣つて潜込んでから、歸つて見えて、晩飯も最う、なぞと言はれるさへ折々の事。

爾時も、早や黄昏の、とある、人氣、朧ながら月が出たやうに、見違へない其人と、思ふと、男が五人、中に主人も居たでありませう。婦人は唯御新姐一人、それを取卷く如くにして、どやどやと些と急足で、浪打際の方へ通つたが、其の人數ぢや、空頼めの、餘所ながら目禮處の屈ぎかい、貴下、其の五人の男と云ふのが、」

十五

「眉の太い、怒り鼻のがあり、額の廣い、顎の尖つた、下目で睨むやうなのがあり、仰向けざまになつて、頬杖の中へ、煙も出さず葉卷を突込んで居るのがある。くるりと尻を引捲つて、扇子で叩いたものもある。どれも浴衣がけの下司は可いが、其の中に淺黄の兵兒帯、紺目をぶらりと二尺ぐらゐ、こぶらの邊までぶら下げたのと、緋縮緬の投帯をぐる〳〵巻きに脚高は沙汰の限、前のは御自分ものであらうが、投帯の先生は、酒の上で、小間使のを分捕の次第らしい。

此が、不思議に客人の氣を惡くして、入相の浪も物凄くなりかけた折からなり、彼の、赤鬼青鬼なるものが、かよわい人を冥土へ引立てて行くやうで、思ひなしか、引狭まれた御新姐は、何んとなく物寂しい、快からぬ、滅入つた容子に見えて、ものあはれに、命がけにでも其奴等の中から救つて遣りたい感じが起つた。家庭の樣子も啓々知れたやうで、氣が揉める、と言はれたのでありますが、貴下、これは無理ぢやて。

地獄の絵に、天女が天降つた處を描いてあつて御覽なさい。餓鬼が救はれるやうで羨かろ。蛇が、つかはしめぢやと申すのを聞いて、財天を、嘘、お氣の毒な、嘘お氣味が惡からうと思ふものはありますまいに。迷ひぢやね。」

散策子は是に少しく腕組みした。

「しかし何ですよ、女は、自分の惚れた男が、別嬪の女房を持つてると、嫉妬らしいやうですがね。男は反對です、」

と聊か論ずる口吻。

「はゝあ、」

「男は然うでない。惚れてる婦人が、小野小町花、大江千里月といふ、對句通りになると安心します。

唯今の、其の淺黄の兵兒帯、紺縮緬の投帯と來ると、些と考へねばならなくなる。耶蘇教の信者の女房が、主キリストと抱かれて寝た夢を見たと言ふのを聞いた時の心地と、回々教の魔神になぐさまれた夢を見たと言ふのを聞いた時の心地とは、蛇とそれは違ひませう。

どつち路、嬉しくない事は知れて居ますがね、前のは、先づ〳〵と我慢が出來る、後のは、堪忍がなりますまい。

まあ、そんな事は措いて、何んだつて又、然う言ふ不愉快な人間ばかりが其の夫人を取巻いて居るんでせう。」

「其處は、玉脇がそれ鍬の柄を杖に支いて、ぼろ牛蒡に引くるめの一件で、あゝ遺つて大概な親族も及ばん暮しをして、交際にかけては鍬金を惜まんでありますが、情ない事には、遺方が遺方ゆゑ、身分名譽ある人は寄つきませんで、悲哉其段は、如何はしい連中ばかり。」

「お待ちなさい、成程、然うすると其の夫人と言ふは、どんな身分の人なんですか。」

出家はゐらためて、打頷き、且つ嘆して、

「其處でございます。御新姐はな、年紀は、さて、誰が目にも大略は分ります、先づ二十三四、それとも五六かと言ふ處で、」

「それで三人の母様？　十二三のが頭ですかい。」
「否、どれも實子ではないでございます。」
「まゝッ兒ですか。」
「三人とも先妻が產みました。此の先妻についても、まづ、一くさりのお話はあるでございますが、それは爲事ゆゑに申さずとも宜しかろ。二三年前に、今のを迎へたのでありますが、此處でありますよ。
何處の生れだか、育ちなのか、誰の娘だか、妹だか、皆目分らんでございます。貸して、かたに取つたか、出して買ふやうにしたか。落魂れた華族のお嬢樣やと言ふのもあれば、分散した大所の娘御だと申すのもあります。然うかと思ふと、箔のついた藝妓に違ひないと申すもあるし、豪いのは高等淫賣の上りだらうなどと、甚しい沙汰をするのがどざつて、丁と底知れずの池に棲む、ぬしと言ふものゝやうに、素性が分らず、つひぞ知つたものもない樣子。」

十六

「何にいたせ、私なぞが通りすがりに見懸けましても、何んとも當りがつかぬでございます。勿論又、坊主に鑑定の出來よう筈はなけれども、な。其の眉のかゝり、目つき、愛嬌があると申すではない。口許なども潔として、世間を一つ言ふやうには思はれぬが、唯何んとなく賢げに、憂も無常も知り拔いた風に見える。身體つきにも顏つきにも、情が滴ると言つた狀ぢや。
憂ひ惑ふものならば、馬士でも船頭でも、われら坊主でも、無下に振切つて邪險にはしさうもない。假令戀はかなへぬまでも、然るべき返歌はありさうな。帶の結目、袂の端、何處へ一寸障つても、情の露は男の骨を溶解かさずと言ふことなし、と申す風情。
然れば、氣高いと申しても、天人神女の俤ではなくて、姬路のお天守に赫の袴で燈臺の下に何やら書を繙く、それ露が滴るやうに嫻雅なと言うて、水道の水で洗ひ髮ではござらぬ。人跡絕えた山中の溫泉に、唯一人雪の膚を泳がせて、丈に餘る黑髮を絞るとかの、それに背まして。
惑はせるより、懷しがらせるより、一目見た男を魅する、力廣大。少からず、地獄、極樂、婆婆も身に附纏うて居さうな婦人、從うて、罪も報も淺からぬげに見えるでございます。
處へ、迷うた人の事なれば、淺黃の帶に赫の投帶が、牛頭馬頭で、逢魔時の浪打際へ引立てゝでも行くやうに思はれたのでありませう——私どもの客人が——然う云ふ心持で御覽なさればこそ、其後は玉脇の邸の前を通がかり。……
濱へ行く町から、横に折れて、背戶口を流れる小川の方へ引廻した蘆垣の邊から、松林の幹と幹とのなかへ、擦から肩のあたり、くつきりとした耳許が際立つて、帶も裾も見えないのが、浮出したやうに眞中へあらはれて、後前に、是も腦から上ばかり、彼時は男が三人、一ならびに松の葉とすれ〳〵に、しばらく桔梗苅萱が靡くやうに見えて、段々低くなつて隱れたのを、何か、自分との事のために、離座敷か、座敷牢へでも、送られて行くやうに思はれた、後前を引挾んだ三人の漢の首の、兇惡なのが、確に其の意味を語つて居たわ。最う是切、未來まで逢へなからうかとも思はれる、と無理なことを言ふのであります。
さ、是もぢや、玉脇の家の客人だち、主人まじりに、御新姐が、庭の築山を遊んだと思へば、それまでどありませうに。
とう〳〵表通だけでは、氣が濟まなくなつたと見えて、前申した、其の背戶口、擧手のなの、川を一つ隔てた小松原の奥深く入り込んで、うろつくぞうになつたさうで。
玉脇の持地ぢやありますが、此の松原は、野開きにいたしてござる。中には汐入の、一寸大きな池もあります。一面に靑草で、これに松の影がかさなつて、唯今頃は蔭、夏は常夏、秋は萩、眞個に幽邃な處、些と行らしつて御覽じろ。」
「薄暗い處ですか、」
「昼のやうではありません。眞蒼な處であります。本でも御覽なさりながらお歩行には、至極宜しいので、」
「蛇が居ませう、」
と唐突に尋ねた。
「お嫌ひか。」
「何とも、どうも、」
「否、何の因果か、あのくらゐ世の中に嫌はれるものも少たうござる。
しかし、氣をつけて見ると、あれでもしをらしいもので、路端などを我は顏で伸してる處を、人が參つて、熟と視めて御覽なさい。見返しますがな、縮りが怨さうに鎌首を垂れて、向うむきに羞含みますよ。憎くないもので、はゝゝはゝ、矢張心があります。」
「心があられては何困るぢやありませんか。」
「否、腥氣を嫌ふと見えまして、其の池のまはりには些とも居りません。邸には此頃ぢや、其の魅するやうな御新姐も留主なり、穴はすかすかと眞黑に、足許に蛇の巢になつて居りましても、蟹の住居、落ちるやうな憂慮もありません。」

十七

「客人は、其の穴さへ、白鷺鷺の目とも見えたでありませう。
池をまはつて、川に臨んだ、玉脇の家造を、何か、御新姐のためには牢獄でどもあるやうな考へでどざるから。
さて、潮のさし引ばかりで、流れるのではありません、どんより鼠色に淀んだ岸に、浮きもせず、沈みもやらず、末始終は碎けて鮠鮒にもなりさうに、何時頃のか五六本、丸太が浸つて居るのを見ると、あゝ、切組めば組になる。繋合はせば筏になる。然るに、綱も棹もない。戀の淵は是で渡らねばならないものか。
生身では渡られない。靈魂だけなら乘れようものを。あの、樹立に包まれた木戶の中には、其の人が、と是を爪立つたりなんぞして。
蝶の目からも、餘りふは〳〵して見えたでどざらう。小松の中をふらつく自分も、何んだか其の、眉から上ばかりに、裾も足もなくなつた心地、日中の妙な蝙蝠ぢやて。
懷中から本を出して、

蟬光高雖照紗窓、
花房夜搗紅守宮、
象口吹香髭毳吸、
七星挂城閉漏板、
窓入罕疊殿影低、
寂寥簾額著霜寢、

えゝ、何んでも此處は、鈴が鈴閣の下に月に鳴く、魏の文帝に寵せられた甄夫人が、後におとろへて幽閉されたと言ふので、鎭阿甄。とあつて、それから、

夢入家門上沙渚、
天河落處長洲路、
願君光明如太陽、

妾を放て、然うすれば、魚に騎し、波を攝いて去らむ、と云ふのを微吟して、思はず、襟にはら〳〵と涙が落ちる。目を瞬つて、其の水中の木材よ、いで、浮べ、鰐ふつて木戶に迎へよ、と呟むばかりに瞻めたのでどざるさうな。些と尋常事でありませんな。
詩は唐詩選にでもありませうか。」

「どうですか。えゝ、何んですつて――夢に家門に入つて沙漠に上る。魂が沙漠をさまよつて歩行くやうね、天河落處、長洲路、あはれぢやありませんか。

それを聞くと、私まで何んだか、其の婦人が、黙閉されて居るやうに思ひます。

それから何うしましたか。」

「どうと申して、段々頭がこけて、目に皆し目が窪んで、顔の色が愈々悪い。

或時、大奮發ぢや、と言うて、停車場前の床屋へ、顔を剃りに行かれました。其の時だつたと申す事で。

頭を洗ふし、久しぶりで、些心持も爽になつて、ふらりと出ると、田舎には荒物屋が多いでございます、紙、煙草、蚊遣香、勝手道具、何んでも屋と言つた店で。床店の筋向うが、矢張其の荒物店であります處、戸外へは水を打つて、軒の提灯には未だ火を點さぬ、溝石から往来へ簾臺を跨がせて、差向ひに將棋を行つて居ます。端の歩が附木、お定りの奴で。

用なしの身體ゆゑ、客人が其處へ寄つて、路傍に立つて、兩方とも矢鱈に飛車角の取替へと、ころり〳〵差遣へる毎に、ほい、ほい、と言ふ勇ましい懸聲で。おまけに一人の親仁なぞは、鳥々樂が行水の間、引渡されたものと見えて、小兒を一人胡坐の上へ抱いて、雁首を俯向けに銜へたまゝ、待てよ、どつこい、と言ふで銜へたまゝ、煙管。

毎に、煙管が打附りさうになるので、抱かれた兒は、親仁より、餘計に顔に皺を寄せて、雁首を狙つて取らうとする。火は附いて居ないから、火傷はさせぬが、夢中で取られまいと振動かす、小兒は手を出す、飛車を逃げる。

よだれを垂々と垂らしながら、古めた！　とばかりで矢庭に對手の王將を引掴むと、大きな口をへの字形に結んで見て居た赭ら顔で、眷高の、胸の大きい禿門が、鐵挺のやうな親指で、いきなり勝つた方の鼻つ頭をぐいと摑んで、豪いぞ、と引伸ばしたと思召せ、はゝゝはゝ。」

十八

「大きな、ハツクサメをすると煙草を落した。顔こツつりで小兒は泣き出す、負けた方は笑ひ出す、溌と何んかと一緒でござらう。鼻をつまんだ禿門、苦々しき顔色で、指を持餘した、靈梅な。

これを機會に立去らうとして、振返ると、荒物屋と葭簀一枚、隣家が間に合はせの郵便局で。其處の門口から、すらりと出たのが例の其人。汽車が着いたと見えて、馬車、車がら〳〵と五六臺、それを見に出たものらしい、郵便局の軒下から往來を透かすやうにした、目が、ぱつたり客人と出會つたでありませう。

心ありさうに、然うすると直ぐに身を引いたのが、隔ての葭簀の陰になつて、顔を背向けもしないで、其處で向直つて此方を見ました。

軒下の身を引く時、目で引つけられたやうな心持がしたから、此方も又葭簀越に。

關時は、總髪の銀杏返で、瑠璃の五分珠の一本差、髪の所爲か、いつもより眉が長く見えたと言ひます。浴衣ながら帶には黄金鎖を掛けて居たさうでありますが、搖れて其の音のするほど、此方を透すのに胸を動かした、顔がさ、葭簀を横にちら〳〵と霞を引いたかと思ふ、是に眩くばかりになつて、思はず一寸會釋をする。

向うも、伏目に俯向いたと思ふと、リン〳〵と貴下、高く響いたのは電話の報知ぢや。

是を持つて居たでございますな。

すぐに電話口へ入つて、姿は隠れましたが、淺間ゆゑ、よく聞える。

（はあ、私。あなた、餘りですわ。餘りですわ。何うして來て下さらないの。怨んで居ますよ。あの、あなた、夜も寝られません。はあ、夜中に汽車のつくわけはありませんけれども、それでも今にもね、來て下さりはしないかと思つて。

私の方はね、もうね、一寸……どんなに離れて居りましても、あなたの聲はね、電話でなくつても聞えます。あなたには通じますまい。

どうせ、然うですよ。それだつて、こんなにお待ち申して居る、私の爲ですもの……氣をかねてばかりいらつしやらなくても宜しいわ。些とは不義理、否、父さんやお母さんに、不義理と言ふこともありませんけれど、ね、私は生命かけて、屹とですよ。今夜にも、寝ないでお待ち申しますよ。あ、あ、たんと、そんなことをお言ひなさい、どうせ寝られないんだから可うございます。怨みますよ。夢にでもお目にかゝりませうね。否、待たれない、待たれない……）

お道か、お光か、女の名前。

（……みいちやん、然やうなら、夢で逢ひますよ。）――

きり〳〵と電話を切つたて。」

「へい、」

と思はず聞惚れる。

「其日は歸つてから、豪い元氣で、私はそれ、涼しさやと言つた句の通り、縁から足をぶら下げる。客人は其處の井戸端に焚きます据風呂に入つて、湯をつかひながら、露出しの裸體談話。

其方と、此方で、高聲でな。尤も隣近所はござらぬ。かけかまひなしで、電話の假聲まじりか何かで、

（やあ、和尚さん、梅の青葉から、湯氣の中へ緑を引くのが、月影に光つて見える、蜘蛛が下りた、）

と大氣燄ぢや。

（喝采々々、今夜お忍か。）

（勿論、）

と答へて、頭のあたりをざぶ〳〵と、仰いで天に愧ぢざる顔色でありました。が、日頃の行ひから察して、如何に、思死をすればとて、苟も主ある婦人に、然ういふ不料簡を出すべき仁でないと思ひました、果せる哉。

冷奴に紫蘇の實、白瓜の香の物で、私と取膳の飯を上ると、帶を緊め直して、

（もう一度そこいらを。）

いや、これはと、ぎよつとしたが、垣の外へ出られた姿は、海の力へは行かないで、それ、其の石段を。」

一面の日當りながら、蝶の羽の動くほど、山の草に薄雲が輕く靡いて、檜から透すと、峰の方は暗かつた、餘り、暖さが過ぎたから。

十九

降らうも知れぬ。日向へ蛇が出て居る時は、雨を持つといふ、來がけに二度まで見た。

で、雲が被つて、湿氣が湿つた所爲か、笛太鼓の囃子の音が山一ツ越えた彼方と思ふあたりに、蛙が喞くやうに、遠いが、手に取るばかり、然も沈んでうつゝの音樂のやうに聞えて來た。謡で蝦蟇の出來た蓄音器の如く、且つ遙に響く。

それまでも、何かそれらしい音はしたが、極めて散漫で、何の聲とも纏まらない。村々の祭、柱、戸障子、勝手道具などが、日永に退屈して、のびを打ち、欠伸をする氣勞かと思つた。未だ晝前だのに、――時々牛の鳴くのが入交つて――時に笑ひ興ずるやうな人聲も、動かない、靜かに風に傳はるのであつた。

フト耳を澄ましたが、直ぐに出家の言になつて、

「大分町の方が賑ひますな。」

「祭禮でもありますか。」

「これは停車場近くにいらつしやると、承りましたに、つい御近所でございます。

停車場の新築開き。」

如何にも一月ばかり以前から取沙汰した今日は當日。規模を大きく、建直した落成式、停車場に舞臺がかゝる、東京から俳優が來る、村のものの茶番がある、餅を撒く、昨夜も夜通し騒いで居て、今朝來がけの人通りも、よけて通るばかりであつたに、はたと忘れて居たらしい。

「まつたくお話に聞惚れましたか、此方が里離れて閑靜な所爲か、此方とも氣が附かないで居りました。實は餘り騒々しいので、そこを逃げて參つたのです。しかし降りさうになつて來ました。」

出家の額は仰向けに扇を滑つて、

「ねんばり一濕りでございませう。地雨にはなりますまい。何、又、雨具もござる。芝居を御見物の思召がなくば、まあ御戯りなすつて。

あの音もさ、面白可笑しく、此方も見物に參る氣でもござると、ぢつと落着いては居られない程、浮いたものでありますが、さて恁う、かけかまひなしに、遠ざかつて居りますと、世を一ッ隔てたやうに、寂しい、陰氣な、妙な心地がいたすではありませんか。」

「貴僧ですね。」

「昔、井戸を掘ると、地の下に犬鶏の鳴く音、人聲、牛車の軋る音などが聞えたといふ話があります。それに似て居りますな。

峠から見る、霧の下だの、晴の浪打際、ぼうと灯が映る處だの、恁やうに山の腹を向うへ越した地の裏などで、聞きますのは、をかしく人間業でないやうだ。夜中に聞いて、狸囃子と言ふのも至極でございます。

いや、それに、就きまして、お話の客人でありますが、」

と、茶を一口急いで飲み、さしおいて、

「さて今申した通り、夜分に此の石段を上つて行かれたのでありまして。

しかし此は情に激して、發奮んだ仕事ではなかつたのでございます。

恁ゃうやつて、此の庵室に馴れました身には、石段はつい、通ひ廊下を縱に通るほどな心地でありますからで。客人は、堂へ行かれて、柱板敷へひら〳〵と大きくさす月の影、海の果には入日の雲が燒殘つて、ちら〳〵眞紅に、黄昏過の渺茫とした、水も山も唯一面の大池の中に、其の軒端洩る夕日の影と、消え殘る夕燒の雲の片と、紅蓮白蓮の咬亂れたやうな眺望をなさつたさうな。これで御法の緡に同じい、御堂の緣を離れさへなさらなかつたら、海に溺れるやうなことも迚らなんだでございませう。

爰に希代な事は——

堂の裏山の方で、頻に、其の、笛太鼓、囃子が聞えたと申す事——

唯今、それ、聞えますな。あれ、あれとは、まるで方角は違ひます。」

と出家は法衣でづいと立つて、扇から指を出して、御堂の山を左の方へぐいと指した。立ち方の唐突なのと、急なのと、目前を塞いだ靄染に、一天する靄を流すかと、袖は障子を包んだのである。

二十

「堂の前を左に切れると、空へ拔いた隧道のやうに、兩端から突出ました巖の間、樹立を滑つて、裏山へかゝるであります。

兩方谷、海の方は、山が切れて、眞中の路を汽車が通る。一方は一谷落ちて、それからそれへ、山又山、次第に峰が重なつて、段々雲霧が深くなります。處々、山の尾が樹の根のやうに集づて、廣々とした青田を抱へた處もあり、炭

焼小屋を包んだ處もございます。

其處で、此の山傳ひの路は、堰の上を高い堤防を行く形、時々、鳥や白帆の見晴しへ出ますばかり、あとは生繁つて晝暗で、今時は、然までにもありませぬが、草が繁りますと、分けずには通られません。

谷には鶯、峰には目白四十雀の囀つて居る處もあり、紺青の巖の根に、春は菫、秋は龍膽の咲く處。山清水がしと〳〵と湧く徑が藥研の底のやうで、兩側の裾捿を跨いで通るなど、ものゝ小半道踏分けて參りますと、其處までが一峰で。それから崖になつて、郡が違ひ、海の趣もかはるのでありますが、其頃の土に、たとへて申さば、此の御堂と背中合はせに、山の尾へ凭つかゝつて、彼是大佛ぐらゐな、石地藏が無手と胡坐してござります。それがさ、石地藏と申し傳へるばかり、餘程のあら刻みで、まづ坊主形の自然石と言うても宜しい。妙に御顔の尖つた處が、拜むと凄うござつてな。

堂は形だけ殘つて居りますけれども、勿體ないほど大破いたして、密と參つても床なぞずぶずぶと踏拔きますわ。屋根も柱も蜘蛛の巣のやうに狼藉として、これは又境内へ足の入場もなく、堰へかけて倒れてな、でも建物があつた跡ぢや、見霽しの廣場になつて居りますから、これから山越をなさる方が、うつかり其處へござつて、唐突の山佛に膽を潰すと申します。

其處を山繰きの留りにして、向うへ降りる路は、又此の石段のやうなものではありません。わづかの間も九十九折の坂道、嶮しい上に、畝か石を入れたあとのあるだけに、爪立つて飛々に這ひ下りなければなりませんが、此の坂の兩方に、五百體千體と申す數ではない。それはそれは數へ切れぬくらゐ、いづれも一尺、一尺五寸、御丈三尺といふのはない、小さな石佛がすく〳〵並んで、最も長い年月、路傍へ轉げたのも、倒れたのもあつたでありませうが、さすがに跪ぐものはないと見えます。もたれなりにも櫛の齒のやうに揃つてあります。

是について、何かいはれのございましたことか、一々女の名と、亥年、午年、幾歳、幾歳、年齢と彫りつけてございましてな、何時の世にか、諸國の婦人たちが、單つて、心願を籠めたものでございませう。處で、雨露に黑髮は霜と消え、袖振も昔と變つて、影ばかり殘つたが、お面の細く尖つた處、以前は女體であつたらうなどゝいふ、いや女體の地藏といふはありませんが、扨て然う聞くと、なほ氣味が惡いではございませんか。

「えゝ、つかぬことを申したやうでありますが、客人の話について、些と考へました事がございる。客人は、それ、其の山路を行かれたので——此の觀音の御堂を離れて、」

「成程、其の何んとも知れない、石像の處へ、」

と胸を伏せて顔を見る。

「いや〳〵、其處までゞはありません。唯其の山路へ、堂の左の、巖間を拔けて出たものでございます。

トいふのが、手に取るやうに、囃の音が聞えたからで。

直き其の谷間の村あたりで、騒いで居るやうに、トン〳〵と山腹へ響いたと申すのでありますから、一寸裏山へ廻りさへすれば、足許に瞰下ろされますやうな勘定であつたので。客人は、高い處から見物をなさる氣でござつた。

入口はまだ月のたよりがございます。樹の下を、草を分けて參りますと、處々窓のやうに山が切れて、其處から、松葉搔、枝拾ひ、じねんじよ穿が谷へさして通行する、下の村へ續いた路のある處が、彼方此方に幾干もございます。

それへ出ると、何處でも廣々と見えますので、最初左の濱庇、今度は右の茅の屋根と、二三個

處、其切目へ出て、覗いたが、何處にも、祭禮らしい處はない。海は明く、谷は煙つて。」

二十一

一けれども、其の囃子の音は、草一叢、樹立一誡出さへすれば、直き見えさうに聞えますので。二足が三足、五足が十足になつて段々深く入るほど――此處まで來たのに見ないで歸るも殘惜しい氣もする上に、何んだか、舊へ歸るより、前へ出る方が路も明いかと思はれて、些と急足になると、路も大分上りになつて、ぐつと伸上るやうに、思ひ切つて眺晴な中を、草を拂つて、身を退いて高い處へ。ぼんやり薄明るく、地ならしがしてあつて、心持、墓地の幟張の中でゞもあるやうな、平な丘の上へ出ると、月は曇つて了つたか、それとも海へ落ちたかといふ、一方は今來た路で向うは暗、谷か、それとも濱邊かは、判然せぬが、底一面に靄がかゝつて、其の靄に、ぼうと遠方の火事のやうな色が映つて居て、鑄でも焼いて居るかと、底澄んで赤く見える。其の邊に、太鼓が聞える、笛も吹く、ワアといふ人聲がする。

如何にも賑かさうだが、さて何處とも分らぬ。客人は、其の瞰臨とした頂に立つて、境は接しても、美濃近江、人情も風俗も皆違ふ寝物語の里の祭禮を、此處で見るかと思はれた、と申します。

其上、宵宮にしては些と賑か過ぎる、大方本祭の夜？　それで人の出盛りが通り過ぎた、餘程夜更らしい景色に祝めて、しばらく茫然としてゞざつたさうな。

ト何んとなく、心寂しい。路も餘程歩行いたやうな氣がするので、うつとり草臥れて、最う歸らうかと思ふ時、其の火氣を包んだ靄が、恁う風にでも動くかと覺えて、谷底から上へ、裙あがりに次第に色が濃うなつて、向うの山かけて映る工合が直き目の前で燃して居る景色――尤も靄に包まれながら――

其處で、何か見極めたい氣もして、其の平地を眞直に行くと、まづ、それ、山の腹が覗かれましたわ。

これはしたり！　祭禮は谷間の里からかけて、此處が其のとまりらしい。見た處で、薄くなつて段々に下へ灯影が濃くなつて次第に賑かになつて居ます。

矢張同一やうな平な土で、客人のござる丘と、向うの丘との中に其の形になつた場所。爪尖もゞらず、靜に安々と下りられた。

處が、其の形の、一方はそれ祭禮に積く谷の路でございませう。其の谷の方に寄つた疊なら八疊ばかり、油が厭く染んだ體に、草がすつぺりと禿げました。」

といひかけて、出家は。瀬戸物の火鉢を、緣の方へ少しずらして、俯向いて手で疊を仕切つた。

「これだけな、赤地の出た上へ、何か恁うぼんやり蹲つたものがある。」

ト足を崩して兎角して膝に手を置いた。

思はず、外の方を見た散策子は、雲の稍軒端に近く迫るのを知つた。

「手を上げて招いたと言ひます――ゆつたりと――行くともなしに前へ出て、それでも間二三間隔つて立停まつて、見ると、其の蹲つたものは、頭も上げないで俯向いたまゝ、股引やうのものを穿いて居る、草色の太い胡坐かいた膝の脇に、差置いた、拍子木を取つて、カチ〳〵と鳴らしたさうで、其の音が何者か齒を喰合はせるやうに響いたと言ひます。

然うすると、」

「はあ、はあ、」

「薄汚れた帆木綿めいた破穴だらけの幕が開いたて、」

「幕が、」

「然やう。向う山の腹へ引いてあつたが、矢張靄に見えて居たので、其ものゝ手に、綱が引いてあつたと見えます、蹲つたまゝで立ちもせんので。

確んだ淺い横穴ぢや。大きかつたといひますよ。正面に幅一間ばかり。尤も、此の邊には一寸々々然ういふのを見懸けます。背戸に近い百姓屋などは、漬物桶を置いたり、青物を活けて重寶がる。で、幕を開けたからには其れが舞臺で。」

二十二

「成程、然う思へば、舞臺の前に、木の葉がばらばらと散ばつた中へ交つて、投錢が飛んで居たらしく見えたさうでございます。

幕が開いた――と、まあ、言ふ體でありますが、拠唯淺い、局い、宵みだけで。何んの飾つけも、道具だてもあるのではござらぬ。何か、身體もぞく〳〵して、偸り見て居たくもなかつたさうだが、自分を見懸けて、はじめたものを、他に誰一人居るではなし、今更歸るわけにもなりませんやうな羽目になつたとか言つて、懷中の紙人に手を懸けながら、茫乎見て居たと申します。

また、陰氣な、湿つぽい音で、コツ〳〵と拍子木を打違へる。

矢張其のものゝ手から、ずうと絲が繋がつて居たものらしい。舞臺の左右、山の腹へ斜にかかつた、一幅の白い靄が同じく幕でございました。むら〳〵と兩方から舞臺際へ引寄せられると、蟹が渦くやうに疊まれたと言ひます。

不細工ながら、窓のやうに、箱のやうに、黑い横穴が小さく一ツづゝ三十五十と一個並べに仕切つてあつて、其の中にづらりと婦人が並んで居ました。

坐つたのもあり、立つたのもあり、片膝立てたじだらくな姿もある。稀の長襦袢ばかりのもある。頬のあたりに血のたれて居るのもある。縛られて居るのもある、一目見たが、それだけで、遠くの方は、小さくなつて、團になつて、唯頬ばかり谷間に白百合の咲いたやう。

慄然として、逃げもならない處へ、またコンコンと拍子木が鳴る。

すると貴下、谷の方へ撥いた、其何番目かの仕切の中から、ふらりと外へ出て、一人、小さな婦人の姿が、音もなく歩行いて來て、やがて其の舞臺へ上つたでございますが、其處へ來ると、並の大きさの、しかも、すらりとした春丈になつて、しよんぼりした肩の處へ、恁う、頤をつけて、熟と客人の方を見向いた、其の美しさ！

正しく玉脇の御新姐で。」

二十三

一寢衣にぐる〳〵と扱帶を卷いて、霜のやうな跣足、其まゝ向うむきに、舞臺の上へ、崩折れたやうに、ト膝を曲げる。

カンと木を入れます。

釘づけのやうになつて立竦んだ客人の背後から、背中を撞つて、づゝと出たものがある。黑い影で。

見物が他にも居たかと思ふ、と然うではない。其の影が、よろ〳〵と舞臺へ出て、御新姐と背中合はせにぴつたり坐つた處で、此方を向いたでございませう、顏を見ると自分です。」

「えゝ！」

「それが客人御自分なのでありました。

で、私へお話に、

（眞個なら、其處で死なゝければならんのでした、）

と言つて歎息して、眞蒼になりましたつけ。

何うするか、見て居たかつたさうです。勿論、肉は躍り、血は湧いてな。

しばらくすると、其の自分が、稍身體を捻じ向けて、恍々と御新姐の後姿を見入つたさうで、指の尖で、薄色の寝衣の上へ、恁う山形に引いて、下へ一ツ、△を書いたでございますな三角を。

見て居る胸はヒヤ〳〵として冷汗がびつしよりになる。

御新姐は唯首垂れて居るばかり。

今度は四角、□、を書きました。

其の男、――即客人御自分が。

御新姐の膝にかけた指の尖が、わな〳〵と震へました……とな。

三度目に、○、圓いものを書いて、線の端がまとまる時、颯と地を拂つて突へ抉るやうな風が吹くと、谷底の灯の影がすつきり冴えて、鮮かな海か、海の色か、と見る耳許へ、ちやら〳〵と鳴つたのは、投錢と木の葉の摺れ合ふ音で、くる〳〵と廻つた。

氣がつくと、四五人、山のやうに背後から押被さつて、何時の間にか他の見物が出來たて。

爾時、御新姐の顔の色は、こぼれかゝつた艶、かなおくれ毛を透いて、一人美しくなつたと思ふと、あの其の口許で莞爾として、うしろざまにたよ〳〵と、男の足に背をもたせて、膝を枕にすると、黒髪が、ずる〳〵と仰向いて、白な胸があらはれた。其の重みで男も倒れた、舞臺がぐん〳〵ずり下つて、はッと思ふと舊の土。

峰から谷底へかけて哄と聲がする。そこから夢中で駆け戻つて、蚊帳に寝た私に縋りついて、

（水を下さい。）

と言うて起された、が、身體中疲だらけで、夜露にずぶ濡でありますの。

それから曉かけて、一切の戯話。

翌日は一日寝てござつた。午すぎに女中が二人ついて、此の御堂（参詣なさつた御新姐の姿を見て、私は慌てゝ、客人に知らさぬやう、暑いのに、貴下、此の障子を閉切つたでございますよ。

以來、あの柱に、うたゝ寝の歌がありますので。

客人はあと二三日、石の唐櫃に籠つたやうに、我と我を、手足も縛るばかり、謹んで引籠つてござつたし、私も亦油斷なく見張つて居たでございますが、貴下、聊か目を離しました備の隙に、何處か姿が見えなくなつて、木樵が來て、黄昏頃、

（私、今、來がけに、彼處さ、蛇の矢倉で見かけたよ、）

と知らせました。

客人は又其晩のやうな芝居が見たくなつたのでございませう。

死骸は海で見つかりました。

蛇の矢倉と言ふのは、此の裏山の二ッ目の裾に、水のたまつた、むかしからある横穴で、わッといふと、おう――と底知れず奥の方へ十里も廣がつて響きます。水は海まで續いて居ると申傳へるでありますが、如何なものでございますかな。」

雨が二階家の方からかゝつて來た。音ばかりして草も濡らさず、裾があつて、路を通ふやうである。美人の靈が誘はれたらう。雲の黒髪、桃色衣、菜種の上を蝶を連れて、庭に來て、陽炎と並んで立つて、しめやかに窓を覗いた。

春晝後刻

二十四

此雨は間もなく霽れて、庭も山も青き天鵞絨に繰花の刺繍ある霞を落した。何んの餘波やら、庵にも、座にも、袖にも、菜種の薫が染みたのである。

出家は、さて日が出口から、寒山の其の蛇の矢倉を案内しよう、と老實やかに勸めたけれども、此の際、觀音の御堂の背後へ通り越す心持はしなかつたので、挨拶も後日を期して、散策子は、やがて庵を辭した。

差當り、出家の物語について、何んの思慮もなく、批評も出來ず、感想も陳べられなかつたので、言はれた事、話されただけを、不殘鶏呑みにして、天窓から詰込んで、胸が膨れるまでになつたから、獨り靜に歩行きながら、消化して胃の腑に落ちつけようと思つたから。

對手も、出家だから仔細はあるまい、（然やうなら）が些と唐突であつたかも知れぬ。

處で、石段を背後にして、行手へ例の二階を置いて、吻と息をすると……、

「轉寂に……」

と先づ口の裏で云つて見て、小首を傾けた。

杖が魔なので腕の處へ搖り上げて、引包んだ其の袖ともに腕組をした。菜種の花道、藤の外の引込みには引立たない野郎姿、雨上りで照々と日が射すのに、薄く一面にねんばりした足許、辷つて轉ばねば可い。

「慰しき人を見てしより……夢てふものは、」

と一寸顔を上げて見ると、左の崖から椎の樹が横に出て居る――遠くから視めると、これが石段の根を仕切る線なので、――庵室は最う右手の背後になつた。

見たばかりで、すぐに又、

「夢と言へば、これ、自分も何んだか夢を見て居るやうだ。やがて目が覺めて、あゝ、轉寂だつたと思へば夢だが、此のまゝ、覺めなければ夢ではなからう。何時か聞いた事がある、狂人と眞人間は、唯時間の長短だけのもので、風が立つと時々波が荒れるやうに、誰でも一寸々々は狂氣だけれど、直ぐ、風ぎになつて、のたりのたりかなで濟む。もしそれが靜まらないと、浮世の波に乘つかつてる我々、ふら〳〵と胴が搖れる、木靜まらむと欲すれども風やまずと來た日にや、船に醉ふ、其の浮世の波に浮んだ船に醉ふのが、立處に狂人なんだと。

危險々々。

ト來た日にや夢も又同一だらう。目が覺めるから、夢だけれど、いつまでも覺めなけりや、夢ぢやあるまい。

夢になら戀人に逢へると極れば、こりや一層夢にして了つて、世間で、誰某は？　と尋ねた時、はい、とか何んとか言つて、蝶々二つで、ひら〳〵なんぞは惜つたものだ。

庵室の客人なんざ、今聞いたやうだと、夢てふものを頼み切りにしたのかな。」

と考へが道草の蝶に誘はれて、ふは〳〵と玉の緒が菜の花ぞひに伸びた處を、風もないのに、颯とばかり、横谷から雪の腕、耕の櫛で、つと爪尖を反らして足を踏伸ばした姿が、鼠黒な馬に乘つて、蒼空を飄然と飛び、帽子の廂を掠めるばかり、大波を乘つて、一跨ぎに、紅の虹を躍り越えたものがある。

はたと、これに空想の前途を遮られて、舞いて

心付くと、赤棘蛇のあとを過ぎて、機を織る婦人の小家も通り越して居たのであつた。

音はと思ふに、きりはたりする聲は聞えず、山越えた停車場の笛太鼓、大きな時計のセコンドの如く、胸に響いてトゝンと鳴る。

筋向ひの垣根の際に、此方を待ち受けたものらしい、鍬を杖いて立つて、莞爾ついて、のつそりと親仁あり。

「はあ、もし今歸らせえますかね。」

「や、先刻は。」

二十五

其の莞爾々々の細めまゝ、鍬を離した手を揉んで、

「何んともハイ御しんせつに言はつせえて下せえやして、お麻様で、私、えれえ手柄して禮を聞いたでござりやすよ。」

「別に迷惑にもならなかつたかい。」

と悠々として云つた時、少なからず風采が立上つて見えた。勿論、對手は件の親仁だけれど。

「迷惑處ではござりましねえ、かさねん〳〵禮を言はれて、私大く鍬有がられました。」

「ぢや、むだにならなかつたかい、お前さんが始末をしたんだね。」

「竹ン尖で壓へつけてハイ、山の根つこさ藪の中へ棄てたでどぜえます。女中たちが殺すなと言ふけえ。」

「その方が心持が可い、命を取つたんだと、そんなにせずともの事を、私が訴人したんだから、怨みがあれば、此方へ取付くかも分らずさ。」

「はゝはゝ、且那様の前だが、矢張お好きでは、はねえでがすな。奥に居た女中は、蛇がと聞いただけでアレソレ打騒いで戸障子へ當つただよ。」

私先づ庭口から入つて、其處さ藤側で案内して、それから臺所口に行つて彼方此方探索のした處、何か、お前様御勘考さ違はねえ、湯殿の西の隅に、べいら〳〵舌さあ吐いとるだ。

思つたより大うがした。

寄生め。われさ行水するだら、蛙飛込む古池とは云ふべ行けさ。化粧部屋覗きをつて白粉つけてどうしるだい。白鷺にでも押惚れたかと、ぐいとなやして動かさねえ。どうしべいな、長アくして思案のして居りや、遠くから足の尖を爪立つて、お殺しでない、打棄つておくれ、御新姐は病氣のせゐで物凄氣にしてなんねえから、と女中たちが口を揃へて云ふもんだでね、藝もねえ、殺生するにや當らねえでがすから、藪蔭へ潛らして退けました。

御新姐は、氣分が勝れねえとつて、二階に寢てござらしけえ。

今しがた小雨が降つて、お天氣が上ると、お前様、雨よりは大きい紅色の露がぽつたり〳〵する、あの桃の木の下の許さ、背戸口から御新姐が、紫色の蝙蝠傘さして出てござつて、（爺やさん、今ほどは難有う。其の眼なものゝ居た事を、通りがかりに知らして下すつたお方は、巌殿の方へおいでなすつたと云ふが、未だお歸りになつた様子はないかい。）ッて聞かしつた。

（どうだかね、私、内方へ參つたは無との間たし、雨に駈出しても來さつしやらねえもんだで、未だ歸らつしやらねえでごぜえませう。

それとも身輕でハイずん〳〵行かつせえたもんだで、山越しに名越の方さ出さつしやつたかも知れましねえ。）言うたらばの。

（お見上げ申したら、よくお禮を申して下さいよ。）ッてよ。

其の溝さ飛越して、其路を、」

垣の外の此方と同一通筋。

「ハイぶらり〳〵、谷戸の方へ、行かしつけえ。」

と言ひかけて身體ごと、此の巌殿から櫪原へ出口の方へ振向いた。身の擧動が仰山で、然も用ありげな素振だつたので散策子もおなじく其方を。……歸途の渠には恰も前途に當る。

「それ見えるでがさ。の、彼處さ土手の上にござらつしやる。」

錦の帶を解いた樣な、嫵めかしい草の上、雨のあとの薄霧、山の裾に靄靄く中に一張の紫大きさ月輪の如く、はた蓮の花束に似たるあり。紫羅傘と書いていちはちの花、字の通りだと、それ美人の持物。

散策子は一目見て、早く既に其の靄の端の、ひた〳〵と來て膚に絡ふのを覺えた。

彼處と此方と、言ひ知らぬ、春の景色の繋がる中へ、蘚のやうな親仁の手、無骨な指で、指して、

「彼處さ、それ、傘の陰に蔭んでござる。はゝはゝ、禮を聞かつせえ、待つてるだに。」

二十六

横に落した紫の傘には、あの紫苑に來る、黄金色の昆蟲の翼の如き、煌々した日の光が射込んで、草に輝くばかりに見える。

其の蔭から、しなやかな裳が、土手の翠を左右へ殘して、淑もなしに、よろけ縞のお召縮緬で、嬌態よく仕切つたが、油のやうにとろりとした、雨のあとの路との間、あるかなしに、細い裾先が柔かくしつとりと、内端に掻込んだ足袋で留まつて、其處から褄梓の友染か、豐かに膝まで掘かれた。雪駄は一ッ土に脱いで、片足はしなやかに、草に曲げて居るのである。

前を通らうとして、我にもあらず立淀んだ。

散策子は、下衆廻と賭物して、鬼が出る字治橋の夕暮を、唯一騎、東へ打たする思がした。

恁く近づいた從者は、伴の紫の傘を小脇に、土手へかけて悠然と腦に投げた、艶にして凄い耕の袴に、小波寄する微な撃さへ與へなかつたにもかゝはらず、此方は一ッ胴震ひをして、立直つて、我知らず扇を弊やかすと、杖をぐいと振つて、九字を切りかけて、東々と通つた。

路は、あはれ、鬼の脱いだ其の沓を跨がねばならぬほど狭いので、心から、一方は海の方へ、一方は櫪原の山里へ、一方は來し方の巌殿になる、久能谷の此の出口は、恰も、ものゝ撞木の形。前は一面の麥畑。

正面に、青麥に對した時、散策子の面は恰も醉へるが如きものであつた。

南無三寶靡がかゝつた。それ、言はぬことではない。

「……」

一散に逃げもならず、立停まつた渠は、馬の尾に油を塗つて置いて、鷲掴みの掌を上り拔けなんだを口惜く思つたらう。

「私、」

と振返つて、

「ですかい、」と言ひつゝ一目見たのは、頭禿に齒當なるものではなく、日の光射す紫のかげを籠めた御は、凡帳に宿る月の影、雲の鬢、薔薇の星、丹花の唇、芙蓉の眼、柳の腰を草に縋つて、鼓草の花に浮べる狀、虚空にかゝつた裝である。

白魚のやうな指が、一寸、紫紺の半襟を引き合はせると、美しい瞳が動いて、

「失禮を……」

と唯莞爾する。

「はあ、」と言つた切、腰のまはり、通路を見て置くのである。

「貴下お呼び留め申しまして、」

とふつくりとした胸を上げると、やゝ凭れかかつて土手に寢るやうにして居た麥を前へ。

「はあ、何、」

眼正直な瞰をして、

「私ですか、」と突とぼける。
「貴下のやうなお妻だ、と聞きましてございます。先刻は、眞に御心配下さいまして、」
徐ら、雪のやうな白足袋で、脱ぎ棄てた雪鼠を引寄せた時、友染は一層はら〳〵と、模様の花が、佛に立つて、ぱッと紛南奇の薫がする。
美女は立直つて、
「お孫様で災難を、」
と襟首を見せてつむりを下げた。
彌時獨武者、杖をわきばさみ、兜を脱いで、
「えゝ、何んですかな、」と曖昧。
美女は親しげに笑ひかけて、
「ほゝゝ、私は最う災難と申します、災難ですわ、貴下。彼が座敷へでも入りますか、知らないで居て御覽なさいまし、當分家を明渡して、何處かへ參らなければなりませんの。鎮側に然うなりましたら、どうしませう。お庇様で助りましてございますよ。難有ら存じます。」
「それにしても、私と極めたのは、」
と思ふことが思はず口へ出た。
是は些と調子はづれだつたので、聞き返すやうに、
「えゝ、」

二十七

「先刻の、あの青大將の事なんでせう。それにしても、よく私だと云ふのが分りましたね、驚きました。」
と鼻柱の遮構で、駒の頭を立直すと、なほ打笑み、
「そりや知れますわ。こんな田舎ですもの。而して御覽の通り、人通りのない處ぢやありませんか。
貴下のやうな方の出入は、今朝ッからお一人しかありませんもの。丁と存じて居りますよ。」
「では、あの爺さんにお聞きなすつて、」
「否、私ども石垣の前を通りがかりの時、二階から拝みました。」
「ぢやあ、私が青大將を見た時に、」
「貴下のお妻が桶におなり下さいましたから、彌時も、眼なものを見ないで濟みました。」
と少し打傾いて懐しさう。
「ですが、貴女、」とうつかりいふ、
「はい？」
と促すやうに言ひかけられて、ハタと行詰つたらしく、杖をコッ〳〵と畳一ッ、唇を引締めた。

追つかけて、
「何んでございますか、聞かして頂戴。」
と婉然とする。
慌て氣味に狼狽つきながら、
「貴女は、貴女は氣分が惡くつて寝ていらつしやるんだ、と云ふぢやありませんか。」
「あら、こんなに甲羅を干して居りますものを。」
「へい、」と、綱は目を睜つて、あゝ、我ながらまづいことを言つた赤色。
美女は其の顔を差覗く風情して、瞳を斜に衝と流しながら、華奢な掌を輕く頬に當てると、紅がひらりと搦む。
腕の雪を拂ふ音、さら〳〵と衣摺れして、
「鎮側は、寝て居ましたの……」
「何んですッて、」
と苦笑。
「でも彌時は寝て居やしませんの。貴下起きて居たんですよ。あら、」
と稍調子高に、
「何を言つてるんだか分らないわねえ。」
諷々しく云ふと、急に胸を反らして、すッきりとした耳許を見せながら、顔を反向けて俯向いたが、其まゝ身體の平均を保つやうに、片足

をうしろへ引いて、立直つて、
「否、寝て居たんぢやなかつたんですけども、貴下のお妻を拝みますと、急に心持が惡くなつて、それから寝たんです。」
「これは酷い、酷いよ、貴女は。」
棄て身に衝と寄り進んで、
「ぢや、青大將の方が增だつたんだ。だのに、頻々呼留めて、災難を免れたとまで事を誇大にして、禮なんぞおつしやつて、元來、私は餘計なお世話だと思つて、御婦人ばかりの御仕居だと聞いたにつけても、愈々極が惡くつて、此處だつて、貴女、こそ〳〵逃げて通らうとしたんぢやありませんか。それを大袈裟に禮を言つて、極を惡がらせた上に、妻とは何事です。幽靈ぢやあるまいし、心持を惡くする妻と云ふがありますか。圖體とか、狀とか云ふものですよ。其の私の圖體を見て、心持が惡くなつたは些と烈しい。それがために寝たは、殘酷ぢやありませんか。
要らんおせつかいを申上げたのが、見苦しかつたら然うおつしやい。此お關所をあやまつて通して頂く――勸進帳でも讀みませうか。それでいけなけりや仕方がない。元の巖巖へ引返して、山越で出奔する分の事です。」
と逆寄せの決心で、然う言つたのをキッカケに、どかと土手の草へ腰をかけたつもりの處、負けまい氣の、魔ものゝ顔を見詰めて居たので、横ざまに落しつける菅の腰が据らず、床几をづつて、づるりと大地へ。
「あら、お危い。」
と云ふが早いか、呆いばかり目の前へ、霞を抜けた極彩色。さそくに友染の膝を亂して、綺ひもなくはらりと折敷き、片手が踏み拔いた下駄一ッ前壺を押して寄越すと、扶け起すつもりであらう、片手が薄色の手巾ごと、ひらめいて芬と薫つて、優しく男の背にかゝつた。

二十八

南無觀世音大菩薩……助けさせたまへと、散策子は心の裏、陣備も身構もこれにて粉になる。
「お足袋が泥だらけになりました、直き其處でござんすから、一寸おいすがせ申しませう。お脱ぎ遊ばせな。」
と指をかけようとする爪尖を、慌しく引込ませるを拍子に、體を引いて、今度は大丈夫に、背中を土手へ寝るばかり、ぱたりと腰を懸ける。暖い草が、ちりげもとで赫とほてつて、汗びつしよりと、まつかな顔をして且つ目をきよろつかせながら、
「構はんです、構はんです、こんな足袋なんぞ。」
ヤレ又落語の前座が言ひさうなことを、とヒヤリとして、溺と纏を定めて見ると、美女は舷飛んだ杖を拾つて、しなやかに兩手でついて、悠々と立つて居る。
羽織なしの引かけ帶、ゆるやかな袷の着こなしが、いまの身じろぎで、片前下りに友染の紅句ひこぼれて、水色縮緬の扱帶の端、やゝずり下つた風情さへ、杖には似合はないだけ、恰も人質に取られた形――可哀や、お主の身がはりに、戀の重荷でへし折れよう。
「眞個に濟みませんでした。」
又候先を越して、
「私、どうしたら可いでせう。」
と思ひ案ずる目を半ば閉ぢて、屈託らしく、盲目が歎息をするやうに、ものあはれな裝して、
「うつかり飛んだ事を申上げて、私、そんなつもりで言つたんぢやありませんわ。
貴下のお妻を見て、それから心持が惡くなりましたつて、言通りの事が、もし眞個なら、

どうして口へ出して言へますもんですか。貴下のお妻を見て、それから心持が悪く……」

再び口の裏で繰返して見て、

「おほゝ、まあ、大概お察し遊ばして下さいましなね。」

と樂にさし寄つて、袖を土手へ敷いて凭れるやうにして並べた。春の草は、其肩のあたりを悪に仕切つて、二人の裾は、足許なる蓼畠に臨んだのである。

「然う云ふつもりで申上げたんでござんせんことは、よく分つてますぢやありませんか。」

「はい、」

「ね、貴下、」

「はい、」

と無意味に合點して、顔くと、未だ心が濟まぬらしく、

「言とがめをなすつてさ、眞個にお人が悪いよ。」

と異に猶む。

聊か辯ぜざるべからず、と横に見向いて、

「人の悪いのは貴女でせう。私は何も言とがめなんぞした覺えはない。心持が悪いとおつしやるからおつしやる通りに伺ひました。」

「そして、腹をお立てなすつたんですもの。」

「否。恐縮をしたまでです。」

「其處は貴下、お察し遊ばして下さる處ぢやありませんか。

言の葉もございますわ。朝顔の葉を御覽なさいまし、表はあんなに薄つぺらなもんですが、裏はふつくりして居りますもの……裏を聞いて下さいよ。」

「裏だと……お持ちなさいよ。」

えゝ、といきつぎに目を瞑つて、仰向いて一呼吸ついて、

「心持が悪くなつた反動なんだから、私の妻を見ると、それから心持が善くなつた――事になる――可い加減になさい、馬鹿になすつて、」

と緑めつける。但し笑ひながら。

清い目で屹と見て、

「むづかしいのね？　どう言へば恐うおつしやつて、貴下、弱いものをおいぢめ遊ばすもんぢやないわ。私は烟つて居るんぢやありませんか。」

草に手をついて膝をずらし、

「お聞きなさいましよ、まあ、」

と恍惚したやうに笑を含む口許は、鐵漿をつけて居はしまいかと思はれるほど、婀娜めいたものであつた。

「まあ、私に、懇しい懐しい方があるとしませうね。可うございますか……」

二十九

「懇しい懐しい方があつて、そしてどうしても逢へないで、夜も寐られないほどに思ひ詰めて、心も亂れゝば氣も狂ひさうになつて居りますものが、せめて骨たお方でもと思ふのに、此頃は恐うやつて此處等には東京からおいでなすつたらしいのも見えません處へ、何年ぶりか、幾月越か、フト然うらしい、骨たる妻をお見受け申したとしましたら、貴下、」

と手許に丈のびた影のある、土筆の根を摘み試み、

「爾時は……、而して何んですか、切なくつて、あとで臥つたと申しますのに、爾時は、どんな心持でと言つて可いのでございませうね。

矢張、あの、厭な心持になつて、と云ふほかはないではありませんか。それを申したんでございますよ。」

一言もなく……しばらくして、

「ぢや、然う云ふ方がおあんなさるんですね、」

と傍に一方へ切拔けようとした。

「御存じの癖に。」

と、伏兵大いに起る。

「えゝ、」

「御存じの癖に。」

「今お目にかゝつたばかり、お名も何も存じませんのに、どうしてそんな事が分ります。」

うたゝ寐に懇しき人を見てしより、其の、みを、と云ふ名も知らぬではなかつたけれども、夢のいはれも聞きたさに。

「それでも、私が氣疾をして居ります事を御存じのやうでしたわ。先刻、」

「それは、何、あの畑打ちの爺さんが、蛇をつかまへに行つた時に、貴女はお二階に、と言つて、一寸御煙草を漏らしただけです。それも唯御氣分が悪いとだけ。

私の形を見て、お心持が悪くなつたなんぞつて事は、些とも話しませんから、知らう道理はないのです。但禮をおつしやるかも知れんと云ふから、其奴は困つたと思ひましたけれども、此處を通らないぢや歸られませんもんですから。怨うと分つたら穴へでも入るんだつけ。お目にかゝるのぢやなかつたんです。しかし私が知らないで、二階から御覽なすつただけは、そりや仕方がない。」

「まだ、あんな事をおつしやるよ。然うお疑ひなさるんなら申しませう。貴下、此のまあ麗かな、樹も、草も、血があれば湧くんでせう。朱の色した日の光にほか〳〵と、土も人膚のやうに暖うござんす。竹があつても暗くなく、花に陰もありません。燃えるやうにちら〳〵咲いて、水へ散つても朱塗の杯になつてゆる〳〵流れませう。海も眞蒼な酒のやうで、空は、」

と白い掌を、膝に仰向けて打仰ぎ、

「椽の油のやう。とろ〳〵と、曇もないのに淀んで居て、夢を見ないかと勸めるやうですわ。山の形も柔かな天鵞絨の、ふつくりした括枕に似て居ます。其方此方陽炎や、絲遊がたきしめた濃いたきものゝやうに靡くでせう。雲雀は鳴かうとして居るんでせう。鶯が、遠くの方で、低い處で、此方にも里がある、樂しいよ、と鳴いて居ます。何不足のない、申分のない、目を瞑れば直ぐにうと〳〵と夢を見ますやうな、此の春の日中なんでございますがね、貴下、これをどうお考へなさいますえ。」

「どうと言つて、」

と言に連れられた春の其の日中から、瞳を美女の妻にかへした。

「貴下は、どんなお心持がなさいますえ、」

「……」

「お樂みですか。」

「はあ、」

「お嬉しうございますか。」

「はあ、」

「お賑かでございますか。」

「貴女は――」

「私は心持が悪いんでございます、丁度貴下のお妻を拜みました時のやうに、」

と言ひかけて吻と小さなといき、人質の彼の杖を、斜に兩手で膝へ取つた。情の海に棹す妻。思はず腕組をして黙と見る。

三十

「此の春の日の日中の心持を申しますのは、夢をお話しするやうで、何んとも口へ出しては言へませんのね。何うでせう、此のしんとして寂しいことは。矢張、夢に賑かた處を見るやうではございますまいか。二歳か三歳ぐらゐの時に、乳母の背中から見ました、祭禮の町のやうにも思はれます。

何爲か、秋の暮より今、此の方が心細いんですもの。それで居て汗が出ます、汗ぢやなくつて恐う、あの、吸かさで、心を絞り出されるやうですわ。苦しくもなく、切なくもなく、血

を絞られるやうですわ。柔かな木の葉の実で、骨を抜かれますやうではございませんか。こんな時には、肌が荒けるのだつて言ひますが、私は何んだか、水になつて、其の溶けるのが消えて行きさうで涙が出ます、涙だつて、悲しいんぢやありません、然うかと言つて嬉しいんでもありません。

あの貴下、叱られて出る涙と慰められて出る涙とござんすのね。此の春の日に出ますのは、其の慰められて泣くんです。矢張悲しいんでせうかねえ。おなじ寂しさでも、秋の暮のは自然が寂しいので、春の日の寂しいのは、人が寂しいのではありませんか。

あゝ遣つて、田圃にちらほら見えます人も、秋のだと、しつかりして、てん〳〵が景色の寂しさに負けないやうに、張合を持つて居るんでせう。見た處でも、しよんぼりした脚にも氣が入つて居るやうですけれど、今しがたは、すつかり魂を抜き取られて、ふは〳〵浮き上つて、あのまゝ、鳥か、蝶々にでもなりさうですね。

心細いやうですね。

吸い、優しい、柔かな、すなほな風にさそはれて、萩草の花が、ふつと、綿になつて消えるやうに魂がなりさうなんですもの。極樂と云ふものが、アノ確に目に見えて、而して死んで行くと同一心持なんでせう。

樂しいと知りつゝも、情ない、心細い、輒りのない、悲しい事なんぢやありませんか。

而して涙が出ますのは、悲しくつて泣くんでせうか、甘えて泣くんでせうかねえ。

私はずた〳〵に切られるやうで、胸を掻きむしられるやうで、そしてそれが痛くも痒くもなく、日當りへ桃の花が、はら〳〵とこぼれるやうで、長閑で、麗で、美しくつて、其で居て寂しくつて、雲のない空が頼りのないやうで、蜂の野が砂原のやうで、前生の事のやうで、目の前の事のやうで、心の内が言ひたくッて、言はれなくッて、焦ッたくッて、口惜くッて、いら〳〵して、じり〳〵して、其くせぼッとして、うつとり地の底へ引込まれると申しますより、空へ抱き上げられる朧梅の、何んとも言へない心持がして、それで寝ましたんですが、貴下、」

小雨が晴れて日の照るやう、忽ち麗なおもちして、

「恁う申しても矢張お氣に障りますか。貴下のお妻を見て、心持が惡くなつたと言ひましたのを、未だ許しちや下さいませんか、おや、貴下何うなさいましたの。」

身動ぎもせず聞き澄んだ散策子の茫然とした目の前へ、紅白粉の烈しい流が眩い日の光で渦いて、くる〳〵と廻つて居た。

「何んだか、私も變な心持になりました、ああ、」

と掌で目を押つて、

「で、其處でお休みになつて、」

「はあ、」

「夢でも御覽になりましたか。」

思はず口へ出したが、言ひ直した、餘り唐突と心付いて、

「然う云ふお心持でうたゝ寝でもしましたら、どんな夢を見るでせうな。」

「矢張、貴下のお妻を見ますわ。」

「えゝ、」

「此處に恁うやつて居りますやうな。ほゝほほ。」

と言ひ知らずあでやかなものである。

「いや、申戴ほよして、其の貴女、戀しい、慕はしい、而してどうしても、最う逢へない、とお言ひなすつた、其の方の事を御覽なさみでせうね。」

「其の貴下に背た、」

「否さ、」

此處で顔を見合はせて、二人とも拗つて居た草を同時に棄てた。

「成程、寂としたもんですね、どうでせう、此の閉きは……」

頂の松の中では、頻に目白が囀るのである。

三十一

「又此の櫪原と云ふんですか、山の裾がすくすく出張つて、大きな怪物の土地の神が海の方へ向つて、天地に開いた口の、奥齒へ苫代田麥畠などを、引銜へた形に見えます。谷戸の方は、恁う見た處、何んの影もなく、春の日が行渡つて、些と曇があればそれが霞のやうな、長閑な景色で居ながら、何んだか厭な心持の處ですね。」

美女は身を震はして、何故か嬉しさうに、

「あゝ、貴下も其の厭な心持をおつしやいましたよ。ぢや、もう私も其のお話をいたしましても差支へございませんのね。」

「可うございます。はゝゝはゝ。」

ト一寸更まつた容子をして、うしろ見られる趣で、其の二階家の前から路が一畝り、矮い菊屋の、屋根にも葉にも一面の、椿の花の紅の中へ入つて、菜畠へ纔に顯れ、苫代田で又絶えて、遙かに山の裾の翠に溶うて、濁つた灰汁の色をなして、ゆつたりと向うへ通じて、左右から突出た山でとまる。櫪原の奥深く、蒸し上るやうに低く霞の立つあたり、背中合せが修車場で、其の腹へ笛太鼓の、異樣に響く音を籠めた。其處へ、遙かに隧を通はせ、しばらく茫然とした風情であつた。

「然うですねえ、はじめは、まあ、心持、彼の邊からだらうと思ふんですわ、聲が聞えて來ましたのは、」

「何んの聲です？」

「はあ、私が臥りまして、枕に髮をこすりつけて、聞えて、あせつて、焦れて、つく〳〵口惜くつて、身がしびれるやうな、骨が溶けるやうな、心持で居た時でした。先刻の、あの雨の音、さあつと他愛なく軒へかゝつて通りましたのが、丁度彼處あたりから降り出して來たやうに、寝て居て思はれたのでございます。

あの修車場の囃子の音に、何時か氣を取られて居て、それだからでせう。今でも修車場の人ごみの上へだけは、細い雨がかゝつて居るやうに思はれますもの。未だ何處にか雨氣が殘つて居りますなら、向うの霞の中でせうと思ひますよ。

と、其細い、嫋な、空を通るかと思ふ雨の中に、圖太い、底力のある、そして、さびのついた纏辛聲を、腹の底から押出して、

（えゝ、えゝ、えゝ、何ひます。お話はお驚染の東京世渡草、商人の假聲物眞似。先づ神田邊の事でございまして、えゝ、大家の店前にございます。夜のしら〳〵明けに、小僧さんが門口を掃いて居りますると、納豆、納豆――）

と申して、情ない調子になつて、

（えゝ、お御酒を頂きまして聲が續きません、助けて遣つておくんなさい。）

と厭な聲が、流れ星のやうに、尾を曳いて響くんでございますの。

私は何んですか、悚然として寝床に足を縮めました。しばらくして、又其の（えゝ、えゝ、）と云ふ變な聲が聞えるんです。今度は些と近くなつて。

それから段々あの櫪原の家を向ひ合ひに、飛び飛びに、千鳥にかけて一軒一軒、何處でもおなじことを同一ところまで言つて、お錢をねだりますんでございますがね、暖い、ねんばりした雨も、其の門附の足と一緒に、向うへ寄つ

たり、此方へよつたり、ゆる〳〵歩行いて来ますやうです。

其の納豆納豆――と云ふのだの、東京と云ふのですの、店前だの、小僧が門口を掃いて居る處だと申しますのが、何んだか懐しい、兩親の事や、生れました處なんぞ、昔が思ひ出されまして、身體を煮られるやうな心持がして我慢が出來ないで、掻卷の襟へ食ひついて、しつかり胸を抱いて、そして恍惚となつて居りますと、やがて、些と强く雨が來て當ります時、内の門へ參つたのでございます。

（えゝ、えゝ、えゝ、）

と言ひ出すおやございませんか。

（お話はお馴染の東京世波草、商人の假聲物真似。先づ神田邊の事でございまして、えゝ、大家の店さきでございます。夜のしら〳〵あけに、小僧さんが門口を掃いて居りますと、納豆納豆――）

とだけ申して、

（えゝ、お御酒を頂きまして聲が續きません、助けて遣つておくんなさい。）

と一分一厘おなじことを、おなじ調子で云ふんですもの。私の門へ來ましたまでに、遠くから丁度十三度聞いたのでございます。」

三十二

「女中が直ぐに出なかつたんです。

（ねえ、助けておくんなさいな、お御酒を頂いたもんだからね、聲が續かねえんで、えへ、えへ、）

厭な喉なんぞして、

（遣つておくんなさいよ、飲み過ぎて切ねえんで、助けておくんなさい、お願えだ。）

と言つて、獨言のやうに、貴下、

（遣り切ねえや、）ツて、いけ太々しい容子つたらないんですもの。其處らへ、ペッペッ唾をしつかけて居さうですわ。

小銭の音をちやら〳〵とさして、女中が出さうにしましたから、

（光かい、光や、）

と呼んで、二階の上り口へ來ましたのを、押し留めるやうに、床の中から、

（何んだね、）

と自分でも些と尖々しく言つたんです。

（門附でございます。）

（藝人かい！）

（はい、）

ツて吃驚して居ました。

（不可いよ、遣つちや不可ない。藝人なら藝人らしく藝をして錢をお取り、と然うお言ひ。出來ないなら出來ないと言つて乞食をおし。なぜ又自分の藝が出來ないほど酒を呑んだ、と言つてお遣り。いけ酒亞々々尖禮ちやないか。）

とむら〳〵として、どうしたんですか、じりじり胸が煮え返るやうで掻めつけますと、竊と覗音を忍んで、光やは、二階を下りましたつけ。

お恥しうございますわ。

甲高かつたさうで、よく下まで聞えたと見えます。表二階に居たんですから。

（何んだつて、）

と門口で喰つてかゝるやうな聲がしました。枕をおさへて起上りますと、女中の聲で、御病氣なんだからと、こそ〳〵云ふが聞えました。

嗚るやうに、

（病人なら病人らしく死ん了へ。治るもんなら治つたら可からう。何んだつて愚圖ついて、煩つて居るんだ。）

と赭顔なのが白い齒を剝き出して云ふやうです。はあ、そんな心持がしましたの。

（おゝ、死んで見せようか、死ぬのが何も、）と

つゝと立つと、ふら〳〵して床を放れて倒れました。段へ蒲團を投げ出して、欄干につかまつた時、雨がさつと暗くなつて、私はひとりで泣いたんです。其れッ切、聲も聞えなくなつて、門附は何處へ參りましたか。雨も上つて、又明い日が當りました。何んですかねえ、十文字に小兒を引背負つて跣足で歩行いて居る、四十恰好の、頑丈な、綸に描いた、赤鬼と言つた形のものゝやうに、今感うやつてお話をします内も考へられます。女中に聞いたのでもございませんのに――

又最う寢床へ倒れッ切になりませうかとも存じましたけれども、然うしたら氣でも違ひさうですから、ぶら〳〵日向へ出て來たんでございます。

否、はじめてお目にかゝりました貴下に、こんなお話を申上げまして、最う氣が違つて居りますのかも分りませんが、」

と言ひかけて、心を纏めて見詰めたらしい、目の色は美しかつた。

「貴下、眞個に未來と云ふものはありますものでございませうか知ら。」

「……」

「もしあるものと極りますなら、地獄でも極樂でも構ひません。逢ひたい人が其處に居るんなら。さつさと其處へ行けば宜しいんですけれども、」

と土筆のたけの指白う、又うつゝなげに草を摘み、摘み、

「屹と然うと極りませんから、もしか、死んで其れッ切になつては情ないんですもの。其くらゐなら、生きて居て思ひ惱んで、煩つて、段々消えて行きます方が、幾干か增だと思ひます。忘れないで、何時までも、何時までも、」

と言ひ〳〵抜き取つた草の葉をキリ〳〵と白齒で噛んだ。

トタンに、慌しく、男の膝越に衝とのぼした袖の色も、帶の影も、緑の中に濃くなつて、活々として蓮葉なものいひ。

「いけないわ、人の惡い。」

散策子は答へに窮して、實は草の上に位置も構はず投出された、オリイブ色の上表紙に、とき色のリボンで封のある、ノオトブックを、つまさぐつて居たのを見たので。

三十三

「此方へ下さいよ、厭ですよ。」

と端へかけた手を手帳に捺へて、麥畠へ眞正面。話をわきへずらさうと、青天白日に身構へつゝ、

「歌がお出來なさいましたか。」

「ほゝほゝ、」

と唯笑ふ。

「繪をお描きになるんですか。」

「ほゝほゝ。」

「結構ですな、お樂しみですね、些と拜見いたしたいもんです。」

手を放したが、附着いた肩も退けないで、

「お見せ申しませうかね。」

あどけない狀で笑ひながら、持直してばらばらと男の帶のあたりへ開く。手帳の枚頁は、此の人の手に恰も蝶の翼を重ねたやうであつたが、鉛筆で描いたのは……

一日見て散策子は着くなつた。

大小濃薄亂雜に、半ばかきさしたのもあり、歪んだのもあり、震へたのもあり、やめたのもあるが、○と□△ばかり。

「ね、上手でせう。此處等の人達は、貴下、玉脇では、繪を描くと申しますとさ。此の上手へ出ちや、何時までも恁うして居ますのに、唯居ては、谷戸口の番人のやうでをかしうございますから、いつかッからはじめたんですわ。

太層評判が宜しうございますから……何ですよ、此頃に絵具を持出して、草の上で風流の店びらきをしようと思ひます、犬した寫生ぢやありませんか。

此の圖いのが海、この三角が山、此の四角いのが田圃だと思へばそれでもようございます。それから○い奴にして、□い胴にして、△に坐つて居る、今戸焼の鉢様だと思へばそれでも可うございます、袴を穿いた殿様だと思へばそれでも可いでせう。

それから……水中に物あり、筆者に問へば知らずと答ふと、高慢な狐色をしても可いんですし、名を知らない死んだ人の戒名だと思つて拝んでも可いんですよ。」

やう〳〵聲が出て、

「戒名」

と口が利ける。

「何、何んと云ふんです。」

「四角院丸々三角居士と。」

いひながら土手に胸をつけて、袖を草に、太腿のあたりまで、友染を敷亂して、すらりと片足片袴を泳がせながら、から内へ抛込むやうにして、鉛筆ですら〳〵と其の三體の祕密を記した。

テン〳〵カラ、テンカラと、耳許に太鼓の音。二人の外に人のない世ではない。アノ梯の、燃え落ちるやうに、向うの茅屋へ、續いてぽた〳〵と溢れたと思ふと、菜種の路を葉がくれに、眞黄色な花の上へ、ひらりと彩つて出たものがある。

茅屋の軒へ、鶏が二羽舞上つたのかと思つた。

二個の頭、獅子頭、高いのと低いのと、後になり先になり、縺れる、狂ふ、花すれ、葉ずれ、菜種に、と見るとやがて足許から其方へ續く青麥の畠の端、玉脇の門の前へ、出て來た連獅子。

汚れた萌黄の裁着に、泥草鞋の乾いた埃も、霞が麥にかゝるやう、志して何處へ行く。早其の太鼓を打留めて、急足に近づいた。いづれも子獅子の角兵衛大小。小さい方は八ッばかり、上は十三――四と見えたが、すぐに久能谷の出口を突切り、紅白の牡丹の花、はつと俯に立つばかり、ひらりと前を行き過ぎる。

「お待ち、」

と聲をかけて美女は起直つた。今の麥を其のまゝに、雪駄は獅子の蝶を飛ばして、土手の草に横坐りになる。

ト獅子は紅の切を掴いて、二つとも、立つて頭を向けた、

「あゝ、あの、兒たち、お待ちなね。」

テン〳〵〳〵、大きい方がトンと當てると、太鼓の面に塵が飛んで、ぶる〳〵と細に躍る。

「アリヤ」

小獅子は路へ橋に反つた、のけ様の頭ぶつくりと、二かは目に紅を潮して、口許の可愛らしい、色の白い兒であつた。

三十四

「おほゝゝ、大層勉強するわねえ、まあ、お待ちよ。あれさ、そんなに苦しい思ひをして引くりかへらなくとても可いんだよ、可いんだよ。」

と壓へつけるやうに云ふと、ぴよいと立直つて頭の堆く大きく突出た、紅の花の扇の下に、くるッとした目を睜つて立つた。

ブル〳〵ッと、跡を引いて太鼓が止む。

美女は膝をずらしながら、帶に手をかけて、捻り上げたが、

「お待ちよ、今お錢を上げるからね、」

手帳の紙へはしり書して、一枚手許へ引切つた、其のまゝ獅子をさし招いて、

「おいで〳〵、あゝ、お前ね、これを持つて、

其の角の二階家へ行つて取つておいで。」

留守へ雷ひつけた爲替と見える。

後隠せに散策子は袂へ手を突込んで、

「細いのならありますよ。」

「否、可らざるんすよ、さあ、兒や、行つて來な。」

撥を片手で引つかむと、恐る〳〵差出した手を素疾く引込め、とさかをはらりと振つて行く。

「さあ、お前此方へおいで、」

小さな方を勝許へ。

きよとんとして、ものも言はず、袴を呑んだ人形のやうな狐を、凝と見て、

「幾歳なの、」

「八歳でござえス。」

「母さんはないの、」

「角兵衛に、そんなものがあるもんか。」

「お前は知らないでもね、母様の方は知つてるかも知れないよ、」

と街と手を袴越に白くかける、とぐいと引寄せて、横抱きに抱くと、獅子頭はぱくりと仰向けに地を拂つて、草鞋は高く反つた。鶏の羽根の飾には、柳子の葉を吹く風が渡る。

「貴下、」

と落着いて見返つて、

「私の兒かも知れないんですよ。」

トタンに、つるりと腕を辷つて、獅子は、倒にトンと返つて、ぶる〳〵と身體をふつたが、けろりとして突立つた。

「えへゝゝゝ、」

此處へ勢よく兄獅子が引返して、

「頭いたい、頭いたい。」

二つばかり天窓を掉つたが、小さい方の背中を突いて、チンと又撥を當てる。

「可いよ、そんなことをしなくつても、」

と裳をずりおろすやうにして止めた額と、未だ摑んだまゝの大な銀貨とを互に見較べ、二個ともとぼんとする。時に朱盆の口を開いて、眼を輝すものは何。

「其のかはり、ことづけたいものがあるんだよ、待つておくれ。」

と其の○□△を樂書の餘白へ、鉛筆を眞直に取つてすら〳〵と春の水の條くさまに走らした假名は、かくれもなく、散策子に讀得られた。

君とまたみるめおひせば四方の海の水の底をもかつき見てまし

散策子は思はず海の方を乾と見た。波は平かである。青麥につゞく紺青の、水平線上雲一山。

富士の影が渚を打つて、ひた〳〵と薄く被さる、藍色の西洋館の棟高く、二三羽鳩が羽ばたをして、ゆるく手巾を掉り動かす狀であつた。

小さく坐んで、幼い方の手に其の(ことづけ)を渡すと、ふッくりした頬で、合點々々をすると見えたが、いきなり二階家の方へ行かうとした。

使を頼まれたと思つたらしい。

「おい、其方へ行くんぢやない。」

と立入つたが聲を驚けた。

美女は莞爾して、

「唯持つて行つてくれゝば可いの、何處へッて當はないの。落したら其處でよし、失くしたら其ッ切で可いんだから……唯心持だけなんだから……」

「ぢや、唯持つて行きや可いのかね、奥さん、」

と聞いて頷くのを見て、年紀上だけに心得顔で、危つかしさうに仰向いて吟嘗した風で居る幼い方の、獅子頭を背後へ引いて、

「こん中へ入れとくだア、奴、大事にして持とッんねえよ。」

獅子が並んでお辞儀をすると、すた〳〵と駆け出した。後自浪に海の方、紅の母衣翻翻として、青麥の根に霞み行く。

三十五

さて半時ばかりの後、散策子の妻は、一人、彼處から鳩の舞ふのを見た、濱邊の藍色の西洋館の傍なる、砂山の上に顯れた。

其處へ來ると、浪打際までも行かないで、太く草臥れた狀で、ぐッたりと先づ足を投げて腰を卸す。どれ、貴女のために（ことづけ）の行方を見屆けませう。連獅子のあとを追つて、と云ふのをしほに、未だ我儘が言ひ足りず、話相手の欲しかつたらしい美女に對して、袂を分つたが、獅子の飛ぶのに足の續くわけはない。

一先づ歸宅して寢轉ばう と思つたのであるが、久能谷を離れて街道を見ると、人の潮を造つて、停車場へ押懸ける勢しさ。中には最う此處停から假寐をつかつて行く肝俠がある、淺黄の襟絆を膚脫いで行く女房がある、其の演劇の恐しさ。大江山の段か何か知らず、迚も町へは寄附かれたものではない。

で、路と一緒に、人通りの横を切つて、田圃を抜けて來たのである。

正面にくぎり正しい、雪白な霞を召した山の女王の[illegible]しますばかり。見渡す限り海の色。濱に引上げた船や、谷や、馬秣のやうに散ばつたかじめの如き、いづれも海に對して、我は顔をするのではないから、罔より躾れた日を遮りはせぬ。

且つ人一人居なければ、眞晝の樣な月夜とも思はれよう。長閑さはしかし野にも山にも增つて、あらゆる白砂の、儚い霧に似て居る。

鳩は蒼空を舞ふのである。ゆつたりした浪にも誘はれず、風にも乘らず、同一處を――其の友は館の中に、こと〳〵と畔を踏んで、くゝと啼く。

人は恁う云ふ處に、恁うして居ても、鵠の雲霞の霽れぬ事は、寂られぬ會と相違はない。

徒らに砂を握れば、くぼみもせず、高くもならず、他愛なくほろ〳〵と崩れると、又傍からもり添へる。水を掬むやうなもので、掬ればはら〳〵とたゞ貝が出る。

渚には敷滿ちたが、何んにも見えない處でも、總に砂を分ければ貝がある。未だ此の他に、何が住んで居ようも知れぬ。手の屆く近い處が然うである。

水の底を搜したら、栗がためにこがれ死をしたと言ふ、久能谷の庵主の客も、其處に健在であらうも知れぬ。

否、健在ならばと云ふ心で、君と其みるめおひせば四方の海の、水の底へも潛らうと、（ことづけ）をしたのであらう。

此の歌は、平安朝に聲名一世を壓した、田かりける童に襖をかりて、あをかりしより思ひそめてき、とあこがれた情に感じて、奥へと言ひて呼び入れけるとなむ……名媛の作と思ふ。

言ふまでもないが、手帳に此をしるした人は、御堂の柱に、うたゝ寂の歌を樂書したとおなじ玉脇の妻、みを子である。

深く老ふるまでもなく、庵の客と玉脇の妻との間には、不可思議の感應で、夢の契があつたらしい。

男は眞先に世間外に、はた世間のあるのを知つて、空想をして實現せしめむがために、身を以て直ちに幽冥に趨いたものゝやうであるが、婦人は未だ半信半疑で居るのは、それとなく胸中の鬱悶を漏らした、未來があるものと定り、靈魂の行末が極つたら、直ぐにあとを追はうと言つた、言の端にも驅れて居た。

唯其有耶無耶であるために、男のあとを追ひもならず、生長らへる效もないので。

そゞろに門附を怪しんで、冥土の使のやうに感じた如きは幾分か心が亂れて居る。意氣張づ

くで死んで見せようにと到つては、益々惱亂のほどが思ひ遣られる。

又一面から見れば、門附が談話の中に、神田邊の店で、江戸樂の夜あけがた、小僧が門を掃いて居る、納豆の聲がした……のは、其の人が生涯の東雲頃であつたかも知れぬ。――やがて暴風雨となつたが――

兎に角、（ことづけ）は何うならう。玉脇の妻は、以て未來の有無を占はうとしたらしかつたに――頭陀袋にも納めず、帶にもつけず、袂にも入れず、角兵衛が其の獅子頭の中に、封じて去つたのも氣懸りになる。代替りしてきらめくものを掴ませて、のッつ反ッつの苦患を見せない、上花主のために、商賣冥利、隱一大切な處へ、偶然受取つて行つたのであらうけれども。

あれがもし、鳥にでも攫はれたら、思ふ人は虛空にあり、と信じて、夫人は羽化して飛ぶであらうか。いや〳〵羊が食ふまでも、角兵衛は再び引返して其音信は傳へまい。

從つて砂を崩せば、從つて手にたまつた、色々の貝殼にフト目を留めて、

君とまたみる日おひせば四方の海の……

と我にもあらずロずさんだ。

更に答へぬ。

もし又うつせ貝が、大いなる水の心を語り得るなら、渚に敷いた、いさゝ貝の花吹雪は、いつも私語を絶えせぬだらうに。されば幼兒が拾つても、われらが砂から掬り出しても、這個もの、いはぬは同一である。

小貝を其處で捨てた。

両して横ざまに砂に倒れた。腰の下はすぐになだれたけれども、辷り落ちても埋れはせぬ。

しばらくして、其の半眼に閉ぢた目は、斜めに鳴鶴ケ岬まで線を引いて、其の半ばと思ふ點へ、ひら〳〵と燃え立つやうな、不知火にはつきり覺めた。

とそれは獅子頭の緋の母衣であつた。

二人とも出て來た。濱は鳴鶴ケ岬から、小坪の崎まで、人影一ッ見えぬ處へ。

停車場に演劇がある、町も村も引つぶるつて誹が角兵衛に取合はう。あはれ人の中のぼうふらのやうな忙しい稼業の兒たち、今日はおのづから閑なのである。

二人は此處でも後になり先になり、脚絆の足を入れ違ひに、頭を組んで白浪を被ぐばかり浪打際を歩行いたが、やがて其の大きい方は、五六尺清を放れて、目影時の如く散亂れた、かじめの中へ、草鞋を突出して休んだ。

小獅子は一層活潑に、衝と浪を追ふ、颯と追はれる。其光景、ひとへに人の兒の戯れるやうには見えず、嘗て孤兒院の兒が此處に來て、一種の監督の下に、遊んだのを見たが、それとひとつで、浮世の浪に揉み立てられるかといぢらしい。但其の頭の獅子が怒り狂つて、たけり戰ふ勢である。

勝では可い！

ト草鞋を脱いで、跣足になつて横歩行をしはじめた。あしを濡らして遊んで居る。

大きい方は仰向けに母衣を敷いて、膝を小さな山形に寢た。

磯を横ッ飛の時は、其の草鞋を脱いだばかりであつたが、やがて脚絆を取つて、膝まで入つて、靜かに立つて居たと思ふと、引返して袴を脱いで、今度は衣類をまくつて腰までつかつて、二三度寄と潮をはねたが、又ちよこ〳〵と取つて返して、頭を舟形退け、衣類を脱いで、丸裸になつて一文字に飛込んだ。陽氣はそれでも可かつたが、泳ぎは知らぬ兒と見える。唯勢よく、水を逆に刎ね返した。手でなぐつて、足で踏むを、海水は細妻のやうに幼兒を包んで其の左右へ飛んだ。――雫ばかりの音もせず――獅

子はひとへに嬰兒になつた、白光は頭を撫で、綠波に胸を抱いた。何等の寵兒ぞ、天地の大きな懷で赤湯を浴びるよ。

散策子はむくと起きて、ひそかに其の幸福を祝するのであつた。

あとで聞くと、小兒心にもあまりの嬉しさに、此一幅の春の海に對して、報恩の志であつたといふ。一旦出て、濱へ上つて、裏た麵子の肩の處へしやがんで居たが、對手が起返ると、濡れた身體に、頭だけ取つて麵子を被いだ。

それから更に水に入つた。些と出過ぎたと思ふほど、分けられた波の脚は、二線長く崑く尾を引いて、小麵子の袂は伊豆の岬に、ちよと小さな點になつた。

濱に居るのが胡坐かいたと思ふと、テン、テン、テンテンツ、テンテンテン、波に丁と打込む太鼓、油のやうな海面へ、綾を流して、響くと同時に、水の中に立つたのが、一曲、頭を倒に。

これに肚めいたものであらう、啊呀忌はし、よみぢの（ことづけ）を籠めたる麵子を、と見る内に、幼兒は見えなくなつた。

未だ浮ばぬ、

太鼓が止んで、濱なるは棒立ちになつた。

砂山を慌しく一文字に駈けて、此方が近いた時、どうしたのか、脱ぎ捨てた袴、着物、脚絆、濕草の乾びた狀の、あらゆる記念と一緒に、太鼓も泥草鞋も一まとめに引かゝへて、大きな渠は、砂煙を上げて町の方へ一散に逃げたのである。

浪はのたりと打つ。

ハヤ二三人駈けて來たが、いづれも高聲の大笑ひ、

「馬鹿な奴だ。」

「馬鹿野郎。」

ボク〳〵と來た巡査に、散策子が、縋りつくやうにして、一言いふと、

「角兵衛が、はゝゝ、然うぢやさうで。」

死骸は其の日終日見當らなかつたが、翌日しらしらあけの引潮に、去年の夏、廊室の客が溺れたとおなじ鳴鵜ケ岬の岩に上つた時は二人であつた。顏が玉のやうな乳房にくつついて、緋母衣がびつしより、其雪の肌にからんで、一人は美にして艷であつた。玉脇の妻は驚魂の行方が分つたのであらう。

然らば、といつて、土手の下で、分れ際に、やゝ遠ざかつて、見返つた時——其紫の深張を帶のあたりで横にして、少し打傾いて、黑髮の頭おもけに見送つて居た姿を忘れぬ。どんなに潮に亂れたらう。渚の砂は、崩しても、積る、くぼめば、たまる、雪もせぬ。たゞ美しい骨が出る。貝の色は、日の紅、渚の雪、浪の綠。

花見風俗（雨雲會席上）

（卷頭に）

大正三年五月

紺地に茶の竪縞一枚小袖、緋の紋縮緬の長襦袢、共に到丈にして袖長し。極薄いタリームに枝垂れ褄を經濟しの半襟、青磁色に銀で縫分けの手綱染の帶、白木の雨刻の駒下駄。襟脚雪の如く白く、緋鹿子の肌襦袢の襟微かに見ゆ。キリゝとした仇な姿、細面。

右正に危く見染め申、餅所、下町の娘花見の風俗。

——編花金堂卷十五より

婦系圖（前篇）

鯛、比目魚

一

「素顏に口紅で美しいから、其の色に紛ふけれども、可愛い音は、唇が鳴るのではない。お蔦は、皓齒に酸漿を含んで居る。……」

馬鹿の細君は丁度（二十）と見えるが三だとサ、其の年紀で酸漿を鳴らすんだもの、大概素性も知れたもんだ、」と四邊近所は官員の多い、屋敷町の夫人達が風說をする。

既に昨夜も、神樂坂の緣日に、櫻草を買つた次手に、可いのを選つて、晝夜帶の間に挾んで歸つた酸漿を、隣家の娘——女學生に、一ッ上げませう、と言つて、そんな野蠻なものは要らないわ！　と刎ねられて、利いた風な、と口惜がつた。

面當てと云ふでもあるまい。恰も其の隣家の娘の居間と、垣一ッ隔てた此の臺所、腰障子の際に、懷手で佇んで、何だか所在なさゝうに、頭に酸漿を鳴らして居たが、不圖銀杏返のほつれた鬢を傾けて、目をぱつちりと開けて何かを聞澄ますやうにした。

コロ〳〵コロ〳〵、クウ〳〵コロ〳〵と鞠がする。唇の鳴るのに連れて。

一寸吹留むと、今は寂寞として、其の聲が止まつて、ぽッと腰障子へ暖かな春の日は當るが、軒を傳ふ猫も居らず、雀の影もさゝぬ。

鼠かと思つたさうで、斜に棚の上を見遣つたが、鍋も釜も箱もかたりとも云はず、古新聞が又がさりともせぬ。

四邊を見ながら、うつかり酸漿に齒が觸る。と其の幽な音にも直ちに應じて、コロ〳〵。少し心着いて、續けざまに吹いて見れば、透かさずクウ〳〵、調子を合はせる。

聞き定めて、

「おや、」と云つて、一段下流の板敷へ下りると、お蔦と云ふ女中が、今しがた此處から駈け出して、玄關の來客を取次いだ草履が一ッ。そんざいに黑い裏を見せて引くり返つて居るのを、白い指で一寸直し、素足に引掛け、がたり腰障子を左へ開けると、十時過ぎの太陽が、向うの井戸端の、柳の上から斜つかけに、過く射込んで、俎の上に揃へた、蔓蘿草の根を、紅に照らしたばかり。

多分は其だらう、口實倒をするのは、と當りをつけた御用聞きの酒屋の小僧は、何處にも隱れて居るのではなかつた。

肩を聳めながら、其蘇恍惚した、迫らない顏色で、今度は口ずさむと言ふよりも故と試みにタ、と舌の尖で音を入れる。響に應じて、コロコロと行つたが、此方は一吹きで捺へたのに、先方は發奮んだと見えて、コロ〳〵コロ。

これを聞いて、屈んで、板へ敷く半纏の裾を掻取り、膝に挾んだ下交の裾を內端に、障子屋から肩を乘出すやうにして、つい目の前の、下水の溜りに目を着けた。

もとより、溝板の蓋があるから、ものゝ形は見えぬけれども、優い連彈は正しく其の中。

笑を含んで、クウ〳〵と吹き鳴らすと、コロコロと拍子を揃へて、近づいただけ音を高く、調子が冴えてカタ〳〵カタ〳〵

「蛙だね。」

と莞爾した、其の唇の紅を染めたやうに、酸漿を指に取つて、衣紋を卿く掛ちながら、

「憎らしい、お源や……」
来て御覽、と呼ばうとして、聲が出たのを、腦へて酸漿を又吸つた。
ククと吹く、カタ〳〵、ククと吹く、カタカタ、蝶々の羽で三味線の調をうつかと思はれつゝ、靜かに長くる春の日や、お蔦の袖に二三寸。
「おう、」と突込んで長く引いた、遠くから威勢の可い聲。
來たのは江戸前の魚屋で。

二

此處へ、臺所と居間の隔てを開け、茶菓子を運んで、二階から下りたお源といふ、小柄の可い島田の女中が、逆上せたやうな顏色で、
「奥樣、魚屋が參りました。」
「大きな聲をおしでないよ。」
とお蔦は振向いて低聲で窘め、お源が背後から通るやうに、身を開きながら、
「聞えるぢやないか。」
目配せをすると、お源は莞爾して俯向いたが、ほんのり紅くした顏を勝手口から外へ出して路地の中を目迎へる。
「奥樣は？」
と其の顏へ、打着けるやうに聲を懸けた。又是が其の（おう。の調子で響いたので、お源が氣を揉んで、手を振つて腦へた處へ、盤臺を肩にぬいと立つた魚屋は、渾名を（め組）と稱へる、名代の芝ッ兒。
半纏は薄汚れ、腹掛の色が褪せ、三尺が捻ぢれて、股引は縮んだ、が、盤臺は美しい。
いつもの向鯔卷が、四五日陽氣がほか〳〵するので、ひしやげ帽子を運の葉かぶり、些とも涼しさうには見えぬ。例によつて飲こしめした、朝つから赤ら顏の、とろんとした目で、お蔦が其處に居るのを見て、
「おいでなさい、奥樣、へゝゝへゝ。」
「お止しつてば、氣障ぢやないか。お源もまた、」
と指の尖で、袋を一寸掻きながら、袖を女中の肩に當てゝ、
「お前も矢張言ふんだもの、半纏着た奥樣が、江戸に在るものかね。」
「だつて、ねえ、めのさん。」
とお源は袖を捻抜けて、組板の前へ蹲む。
「それぢや御新造かれ。」
「そんなお錢はありやしないわ。」
「ぢや、おかみさん。」
「あいよ。」
「へッ、」
と一ッ胸でしやくつて笑ひながら、盤臺を下ろして、天秤を立掛ける時、菠薐草を摘へて居る、お源の背を上から見て、
「相かはらず大な尻だぜ、臺所充滿だ。串戲ぢやねえ。目量にしたら、凡そ何のくれえ掛るだらう。」
「お前さんの腦ぐらゐ掛ります。」
「あゝ云ふ口だ。はゝはゝ、奥さんのお仕込みだらう。」
「めの字、」
「えゝ、」
「二階にお客さまが居るぢやないか、奥樣はおよしと言ふのにね。」
「おつと、然うか、」
ぺろ〳〵と舌を吸つて、
「何だつて、日蔭ものにして置くだらう、こんな實のある、氣前の可い……」
「値切らない、」
「鐵個によ、所帶持の可い姉さんを。分らない且ぢやねえか。」
「可いよ。私が承知して居るんだから、」
と眦の切れたのを伏目になつて、お蔦は襟に頤をつけたが、慎ましく、しをらしく、且

つ温やかに見えたので、め組もおとなしく頷いた。
お源が横向きに口を出して、
「何があるの。」
「へ、野暮な事を聞くもんだ。相變らず旨えものを食はして遣るのよ。默つて入物を出しねえな。」
「はい、はい、どうせ無代價で頂戴いたしますものでございます。めのさんのお魚は、現金にも月末にも、つひぞ、お代をお取り遊ばしたことはございません。」
「皮肉を言ふぜ。何てつたつて、お前は何うせ無代價で頂くもんぢやねえか。」
「大きに、お世話、御主人樣から頂きます。」
「あれ、見ぞ、島田を搖つ居ら。」
「一寸、番頭いがみあつて居ないでさ。お源や、お客樣に御飯が出さうかい。」
「如何でございますか、婦人の方ですから、そんなに、お手間は取れますまい。」

三

「だつてお前、急に歸りさうもないぢやないか。」
とぶつて、め組の蓋を掃つた盤臺を差覗くと、鯛の濁色輝いて、廣重の繪を見る風情、柳の影は映らぬが、河岸の朝の月影は、未だ其の鱗に消えないのである。
組板をポンと渡すと、目の下一尺の鮮紅、反を打つて飜然と乘る。
とろんこの目には似ず、キラリと出刃を眞名箸の構に取つて、
「刺身かい、」
「然うね、」
とお蔦は、半纏の袖を合はせて、一寸俯く。
「焼きねえ、昨日も刺身だつたから……」
と腰を入れると腕の冴、颯と吹いて、鱗がぱら〳〵。
「汝手に少々お焼きなさいますなぞも又、へゝへゝ、お宜しうございませう。御婦人のお客で、お二階ぢや大層お話が持てますさうでございますから。」
「憎樣。お客は且那樣のお友達の母樣でございます。」
めの字が鯛をおろす形は、何時見ても凛々可い、と評判の手つきに見惚れながら、お源が引取つて口を入れる。
えらを一突き、ぐいと放して、
「四んだな。何時かの新ぎれぢやねえけれど、めの公體が廻り過ぎたい。」
「然ういや、めの字、」
とお蔦は片手を懐に、するりと辷る黑繻子の襟を引いて、
「過日頼んだ、河野さん許へ、其の後廻つて呉れないッて言ふぢやないか、何うしたの？」
「むゝ、河野ッて、何かい、あの南町のお邸かい。」
「あゝ、何故か、魚屋が來ないッて、昨日も内へ來て、且那に然う言つて居なすつたよ。行かないの、」
「行かねえ。」
「貴側に、」
「行きませんとも！」
「なぜさ、」
「何故ッて、お前、あん默ア、」
お源が慌しく、
「めのさん、」
「何だ。」
「めのさんや。お前さん一寸、お二階に來ていらつしやるのは其の河野さんの母樣ぢやないか、氣をお着けな。」
軟子をすつぽり龜の子錬みで、
「ホイ阿彌陀佛、へい、彼處にや隱居ばかりだと思つたら……」

「否ね、つい一昨日あたり故郷の靜岡からおいでなすつたんですとさ。私がお取次に出たら河野の母でございます、とおつしやつたわ。」
「だから、母様が見えたのに、おいしいものが無いッて、河野さんが言つて居なすつたのさ、お前、」
「おいしいものが聞いて呆れら。へい、而して靜岡だつてね。」
「あゝ、」
「と御維新以來、江戸ッ兒の親分の、慶喜樣が行つて居た處だ。第一、恐くも申すめの公も、江戸城を明渡しの、落人を極めた時分、二年越居た事がありますぜ。
馬鹿にしねえ、大親分が居て、それから私が居た土地だ。大概江戸ッ兒になつてさうなもんだに、又何うして、あんな獣が居るんだらう。
聞きねえ。
過日もね、お前、眞鯛はお前、一軒かけ離れて、彼處へ行くのは荷なんだけれども、些とボカと來たし、佳い魚がなくッて困るッて言ひなさる、廻つてお上げ、とお前さんが口を利くから、チョッ蔦ちやんの言ふこつた。
艇を達引け、と二三度行つたわ。何ぢやねえか、一度お前、おう、先公、居るかいッて、景氣に呼んだと思ひねえ。」
お蔦は莞爾して、
「せんこうッて誰のこつたね。」
「内の、お友達よ。河野さんは、學士だとか、學者だとか、先生だとか言ふこつたから、一ッ奉つて呼んだのよ。」
と鰹をぱつさり。

四

「可いぢやねえか、お前、先公だから先公よ。何も野郎とも兄弟とも言つたわけぢやねえ。」
と庖丁の尖を危くこしして、鼻の下を引擦つて、
「すると何だ、肥滿のお三どんが、ぶつちやうを面をしやあがつて、且那樣とか、先生とかお言ひなさい、御近所へ聞えます、と吐しただらうぢやねえか。
えゝ、そんなに奉られたけりや三太夫でも抱へれば可い。口に稅を出すくらゐなら、憚んながら私あ酒も喫はなけりや魚も賣らねえ。お源ちやんの前だけれども。おつと恐うした處は、お尻の方だ。」
「そんなに、お邪魔なら退けますよ。」
お源が俎板を直して向直る。と面を合はせて、
「はゝゝゝはゝ、今日あ、」
「何かい、それで腹を立つて行かないのかい。」
「其處はお前さんに免じて肝の蟲を鎭へつけた。明日も廻つたがね、今度は言樣が尙ほ氣に食はねえ。
今日は最うお菜が出來たから要らないよサ。合點なるめえぢやねえか。私が前ふ魚だつて、品に因つちや好嫌えは當然だ。ものを見てよ、其上で欲しくなきや止すが可い。喰ひたくもねえものを勿體ねえ、お困合ひに買ふにや當りやせん、食もたれの曖なんぞで、せゝり箸をされた日にや、第一魚が可哀相だ。
此方はお前、河岸で一番首を討取る氣組みで、佳いものを仕入れても、一ッおいしく食はせて遣らうと、汗みづくで駈附けるんだ。醜女が情人を探しはしめえし、最う出來たよで斷られちや、間尺に合ふもんぢやねえ。ね、蔦ちやんの前だけれど、」
「今度は私が背後を向かうか。」
とお蔦は、下に居る女中の上から、向うの櫛へ手を伸ばして、摺鉢に伏せた目笊を取る。
「そらよ、此方が且の分。こりやお源坊のだ。奥樣はあらが可い、煮るとも潮にするともして、天窓を囓りの、目球をつるりだ。」

「私は天窓を囓るのかい。」
お蔦は莞爾して、め組に其の笊を持たせながら、指の尖で、涼しい鯛の目を一寸當る。
「ワン〳〵に言ふやうだわ、何だねえ、失禮な。」
とお源は桶杓で、がたりと手桶の底を汲む。
「田舍もめ、河野の耶へ鞍替しろ、朝飯に牛はあつても、鯛の目を食つた犬は昔から江戸にや無えんだ。」
「はい、はい、」
手桶を引立てゝ、お源は腰を切つて、出て、溝板を下駄で鳴らす。
「あれ、邪險にお踏みでない、私の情人が居るんだから。」
「情人がね。」
「へい、」
と言つたばかり、此方は忙がしい瓶色で、女中は聞棄てにして、井戸端へかた〳〵行く。
「溝の中に、はてな。」
印半纏の腰を落して、溝板を見當に指しながら、ひしやげた朝子をくるりと廻して、
「髮つてますね。」
「見せようか。」
「是非お目に懸りてえね。」
「お待ちよ、」
と日笊は流へ。お蔦は立直つて腰障子へ手をかけたが、溝の上に脊伸をして、今度は氣構へて勿體らしく酸漿をクウと鳴らすと、言合せたやうにコロ〳〵コロ。
「ね、可愛いだらう。」
カタ〳〵カタ！
「蛙だ、蛙だ。はゝはゝ、此奴ア可い。成程蔦ちやんの情人かも知れねえ。」
「朧月夜の色なんだよ。」
得意らしく澄ました顏は、柳に對して花やかである。
「畜生め、邦んで遣れ。」
と好事に蹲込んで、溝板を取らうとする、め組は手品の玉手箱の蓋を開ける手つきなり。
「お止しよ、逃げるから、」
と言ふ處へ、しとやかに、階子段を下りる音。トタンに井戸端で、ざあと鳴つたは、柳の枝に風ならず、長閑に釣瓶を覆したのである。

見知越

五

擦いてドン〳〵和略に下りたのは、名を主稅といふ、當家、星瀬の主人で、直ぐに玄關に聲が聞える。
「失禮、河野さんに……又……お遊びに。然やうなら。……」
格子戸の音がしたのは、客が外へ出たのである。個時、お蔦の留めるのも聞かないで、溝なる連彈を見屆けようと、矢庭に其蓋を拂つため組は、蛙の形も認めない先に、お蔦がすつと身を退いて、腰障子の蔭へ立隱れをしたので、あゝ、落人でもないに氣の毒だ、と思つて、客は那樣人間だらうと、格子から今出た處を透かして見る。と其處で一つ腰を屈めて、立直つた束髮は、前刻から風說のあつた、河野の母親と云ふ女性。
黑の紋羽二重の紋着羽織、些と丈の長いのを襟を詰めた後姿。倅が學士だ先生だと言ふのでも、大略知れた年紀は爭はれず、髮は薄いが、櫛に照々と艶が見えた。
脊は高いが、小肥に肥つた肩の稍怒つたのは、妙齡には御難だけれども、此の位な年配で、服裝が可いと成が備はる。それに焦茶の肩掛をしたのは、今日あたりの陽氣には聊か御荷物だらうと思はれるが、是も近頃は身嗜の一ッで、貴婦人方は、蒲團が過ぎても強ばさるゝ。

直ぐに御歩行かと思ふと、まだ其から兩手へ手袋を嵌めたが、念入りに片手づゝ手首へぐつと扱いた時、襟祥の裏の紅いのがチラリと翻る。

年紀のほどを心づもりに知つため・組は、其のちら〳〵を一目見ると、や、火の粉が飛んだやうに、ヘッと顔を窘めた處へ、

「まだ、花道かい？」

とお葛が低聲。

「附際々々、」

と最う一息め・組の首を縮める時、先方は格子戸に立かけた蝙蝠傘を手に取つて、又鋏會釋がある。

「思入れ澤山だ。いよう！」

おつと其の口を塞いだ。聲は固より聞えまいが、此方に人の居るは知れたらう。

振返つて、額の廣い、鼻筋の通つた顔で、屹と見越した、目が光つて、其まゝ悠々と路地を町へ。——勿論勝手口は通らぬのである。め・組はつか〳〵と二足三足、

「おや〳〵おや、」

調子はづれな聲を放つて、手を擡げて花乎となる。

「何らしたの。」

「可訝しいぜ。」

と急に威勢よく引返して、

「彼が、今のが、其の、河野ッてえのゝ母親かね、確岡だつて、故郷あゝ、」

「あゝ。」

「家は新者ぢやねえか知らん。はてな。」

「何うした、め・組。」

とむざうさに臺所へ現はれた、二十七八の小薩張したのは主税である。

「へゝゝへゝ、」

滿面に笑を含んだ、め・組は蓮葉帽子の中から、夕映のやうな顔色。

「お早うござい。」

「何が早いものか。最う午飯だらう、何だ御馳走は、」

と覗込んで、

「はゝあ、鯛だな。」

「鯛とおつしやいよ、見ッともない。」

とお葛が笑ふ。

「他の魚屋の商ふのは鰯さ、め・組のに限つちや鯛よ、なあ、めい公。」

「違えねえ。」

「だつて、貴郎は柄にないわ、主公樣は大人しく鯛魚とおつしやるもんです、ねえ、めのさん。」

「違えねえ。」

主税は色氣のない大息をついて、

「何にしろ、あゝ腹が空いたぜ。」

「然うでせうッて、寢坊をするから、まだ朝御飯を食らないもの。」

「違えねえ、確にアリヤ、」

と、め・組は路地口へ伸上る。

六

「大分御執心のやうだが、何うした。」

と、め・組の其の素振に目を着けて、主税は空腹だと云ふのに。……

「後髪に惚れたのかい。おい、最う可い加減なお婆さんだぜ。」

「だつて貴郎にやお婆さんでも、め・組には似合ひな年紀ごろだわ。ねえ、一寸、」

「へゝゝ、違えねえ。」

「よく、（違えねえ。）を云ふ人さ。」

「だから、確だらうと思ふんでさ。」

と呟いて獨りで飲込み、仰向いて天秤棒を取りながら、

「且那、」

「己ら御免だ。」と主税は懐手で一ッ肩を搖る。

「え、何を。」

「文でも届けてくれぢやないか。」

「御串戯。否さ、串戯は止して今のお客は直ぐに南町の家へ歸りさうな樣子でしたかね。」

「むゝ、ずッと歸ると言つたつけ。」

「膳有え、」

頬をぴつしやり。

「後を慕つて、おゝ然うだ、と遣れ。」

「行くのかい、河野さんへ。」

「一寸ね、」

「ぢや可いけれど。貴郎、」

と主税を見て莞爾して、

「めい公がね、又我儘を云つて困つたんですよ。お邸風を吹かしたり、お惣菜並に扱ふから、河野さんへは最う行かないッて。折角お頼まれなすつたものを、貴郎が困るだらうと思つて、是から意見をしてやらうと思つた處だつたのよ。」

「然うか。」

と何故か、主税は氣の無い返事をする。

「御覽なさい。然うすると急にあの通り。眞個に氣が變るつちやありやしない。まるで猫の目ね。」

「遊えねえ、猫の目の犬の子だ。どつこい忙がしい。」

と荷を上げさうにするのを見て、

「待て、待て、」

「澤山よ。貴郎の分は三切あるわ。まだ昨日の殘つてるぢやありませんか。めのさん、可いんだよ。此の人にね、お前の盤臺を覗かせると、皆欲しがるンだから……」

「これ、」

且那樣苦い顔で、

「端近で何の事たい、野良猫に扱ひやあがる。」

「だつ……て、」

「め・組も默つて笑つてる事はない、何か言へ、惣菜の妨害をする婦だ。」

「背かないよ、めの字、澤山なんだから、」

「まあ、お前、」

「否、澤山、大事な所帶だわ。」

「驚きますな。」

「私、最う障子を閉めてよ。」

「め・組、此の體だ。」

「へゝゝ、此奴ばかりや犬も食はねえ、いや、四寸づゝ食りまし。」

「おい、待てと云ふに。」

「さつさとおいでよ、魚屋のやうでもない。」

「いや、遺恨がねえ。」

と天秤棒を心にして、め・組は一ッくるりと廻る。

「お菜のあとねだりをするんぢや、ないと云ふに。」

と笑ひながらお葛を睨んで、

「なあ、め・組。」

「えゝ、」

「これから河野へ行くんだらう。」

「三枚並で駈付けまさ。」

「それに就いてだ、一寸、此處に話が出來た。」

七

「其の、河野へ行くに就いてだが、」

と主税は何か、言淀んで、

「何は、」

お葛に目配せ、

「茶はないのか。」

「お茶ッて？　有りますわ。ほゝほゝ、まあ、人に叱言を云ふ癖に、貴郎こそ端近で見ッともないぢやありませんか——ありますわ——さあ、彼方へ行らつしやい。」

と上らうとする臺所に、主税が立塞がつて居るので、袖の端を一寸突いて、

「さあ、」

め・組は威勢よく、

「へい、跡は明晩……ぢやねえ、翌の朝だ。」
「待ちなッてば、」
「可いよ、めのさん。」
「はて、何うしたら、」と首を振る。
「お前たちは、」
と主税は呆れた顔で呵々と笑つて、
「相應に氣が利かないのに、早飲込だからこんがらがつて仕様がない。め・組も又、さんざ油を賣つた癖に、急にそは〳〵せずともだ。まあ、待て、己が話があると言へば。
其處でだ……お茶と申すは、冷たい……」
と口へつけて、指で飲む眞似。
「と行る一件だ。」
「め・組に……」
「澤山だ、澤山だ。私なら、」
と聲ばかり澤山で、俄然として蜂の腰、龍の口、させ、飲まうの構へになる。
「不可ません、最う飲んでるんだもの。此の上煽らして御覽なさい。また過日のやうに、一寸艇豪を預つとくんねえ、か何かで、」
お蔦は半纏の袖を投げて、婀娜に醉ッぱらひを、拳固で見せて、
「其ッ切、五日の間行方知れずになつ了ふ。」
「且那、恁うなると項きてえね、人間は依怙地なもんだ。」
「可いから、己が承知だから、」
「ぢや、め・組に附合つて、これから遊びにでも何でもおいでなさい。お腹が空いたつて私、知らないから。さあ、其處を退いて頂戴よ、通れやしないわね。」
「あゝ、もし〳〵、」
主税は身を躱して通しながら、
「御立腹の處を重々恐縮でございますが、お・永手に、手前にも一杯、同じく冷いのを。」
「知りませんよ。」
とつゝと入る。
「且も、ゆすり方は素人ぢやねえ。なか〳〵馴れてら、」
最う飲みかけたやうなもの言ひで、腰障子から首を突込み、
「今度八丁堀の私の内へ遊びに來ておくんなせえ。一番私がね、噂々左衛門に酒を強請る呼吸と云ふのをお目にかけまさ。」
「女房が寄せつけやしまい、第一吃驚するだらう、己なんぞが飛込んぢや、猪ぐらゐに。所がはれば品かはるだ。なあ、め・組。」
と下流へかけて板の間へ、主税は鼠を掛け込んで、
「處で、些と申しかねるが、今の河野の一件だ。」
「何です、且、」
と吃驚するほど顔色。
「お前さんや、奥様で、私に言ひ憎いつて事はありやしねえ、又私が承つて困るつて事もねえぢやねえかね。
噂々を貸せとも言ひなさりやしめえ、厚い話が。何又御使ひ道がありや御用立て申します。」
「打附けた話は恁うだ、南町は些と君には遠廻りの處を、是非廻つて貰ひたいと云ふもんだから、家内で口を利いて行くやうになつたんだから、此處が些と言ひ憎いのだが。今云つた、其れ、虎合の合はない處だ。
今來た、あの母親も、何の後のつて云つて居るからな、最う彼家へは行かない方が可いぜ。心持を惡くしてくれちや困るよ。又何だ、其内に一杯奢るから。」
とまめやかに言ふ。

八

皆まで聞かず、め・組は力んで、
「誰が、誰があんな許へ、私ア今も、だから然う云つてたんで、頼まれたッて行きやしねえ。」
「處が、又何か氣が變つて、三枚並で駈附ける

なぞと云ふからよ。」
「そりや、何でさ、えゝ、一寸其の氣になりや成ッたがね、商ひになんか行くもんか。あの母親ッて奴を冷かしに出かける肚でさ。」
「給う云ふ料簡だから、お前、南町御構ひになるんだわ。」
と盆の上に茶呑茶碗……不心服な二人分……焼海苦にはい〳〵は心意氣ながら、極めて恭しからず押附ものに粗雑に持つて、お蔦が臺所へ退れて、
「お客様は、め・組の事を、何か文句を言つたんですか。」
「文句は此方にあるんだけれど、言分は先方にあつたのよ。」
と盆を受取つて押出して、
「さあ、茶を一つ飲み給へ。時に、お茶菓子にも言分があるね、最う些と何うか腹に溜りさうなものはないかい。」
「貴郎のやうに意地汚ではありません。め・組は何にも食べやしないのよ。」
「食べやしねえばかりぢやありませんや、時々、此の所爲で食べられなくなる厭ぎだ。へゝへゝ、」
と帽子を上へ拔上げると、元氣に鼠の鐵を伸ばして、がぶりと一口。鶴鍋の尾の如く、左の人指をひよいと剣ね、ぐいと首を据ゑて、べろべろと舌鼓る。
主税はむしやりと海苔を頬張り、
「め・組は可いが己の方さ、何とも以て大変腹の所だから。」
「ですから御飯になさいなね、種々な事を言つて、お掘飯を拵へろつて言ひかねやしないんだわ。」
「實は……」と茫爾々々、
「其の氣なきにしもあらずだよ。」
「可い加減になさいまし、め・組は商賣がありますよ。疾くお話しなさいなね。」
「然う、然う。いや、可い氣なもんです。」
と絲瓜を一つ搗でゝ、
「其の言分と云ふのは、恁うだ。何うも、あの魚屋も可いが、門の外から(おう)と怒鳴り込んで、(先公居るか。)は困る。此間も御隠居をつかまへて、此奴あ婆さんに食はして遣れば、如何にも飲りです。内ぢやかえんに知己がある やうで、信に近所へ極が惡い。それに、聞けば蕎麦屋稲合なんぞへ、主に出入りをするんださうだから、娘たちの爲にもならず、第一家庭の亂れです。また風説によると、あの、魚屋の出入をする家は、何處でも工面が惡いつて事たから、かた〳〵折角、お世話を願つたさうだけれど、宜しいやうに、貴下から……と先づ雑と恁うよ。」
め・組より、お蔦が呆れた顔をして、
「わざ〳〵其の斷りに來なすつたの。」
「然うばかりぢやなかつたが、まあ、それも一ッはあつた。」
「仰山だわねえ。」
「些と仰山なやうだけれど、お邸つき合ひのお勝手口へ、此の男が飛込んだんぢや、小火ぐらゐには吃驚したらう。馴れない内は時々火事かと思ふやうな騒で怒鳴り込むからな、こりや世話をしたのが無理だつた。め・組怒つちや不可い。」
「分つた……」
と唐突に膝を叩いて、
「且那、的切然うだ。だから、私ア遊えねえッて云つたんだ。彼奴、兒・狀持だ。」
「えゝ—」
何としたか、主税、茶碗酒をふらりと持つた手が、キチンと極る。
「兒・狀持え？」とお蔦も袖を抱いたのである。
め・組は、何處か當なしに眼むやうに日を据ゑて、

「それを、私ア、私ア其をね、ウイ、丁と知つてるんだ。知つてるもんだから、だもんだから。……」

九

「ウイ、だから私が出入つちゃ、どんな事で墓露ようも知れねえと云ふ肚だ。此方あ臺所までだから、些とも氣がつかなかつたが、先方ぢや奥から見懸けたもんだね。」昨日頃靜岡から出て來たつて、今も葛ちやんの話だつけ。

狀あ見やがれ、もつと先から來て居たんだ。家風に合はねえも、近所の外聞もあるもんか、笑かしやあがら。」

と大きに氣勢ふ。

「何だ、何だ、兒狀とは。」

「あの、河野さんの母樣がかい。」

とお葛も眞顏で呼つた。

「彼でなくつて、兒狀持は、誰なもんかね。」

「ほほゝ、貴郎、眞面目で聞くことはないんだわ。め・組の云ふ兒狀持なら、あの令夫人が如、彼見えて、内々大福餅がお好きだぐらゐなもんですよ。お彼岸にお萩餅を拵へたつて、自分の女房を敵のやうに云ふ人だもの。ねえ、然うだらう。めの字、何か甘いものが好きなんだらう。」

「いづれ、何か隱喰ひさ、盗人上戸なら味方同士だ。」

「へゝ、其通り、隱喰ひにや隱喰ひだが、喰つたものがね、」

「何だ、」

「馬でさ。」

「馬だと……」

「旅俳優かい。」

「否、馬丁……貞減つて……馬丁でね、私が靜岡に落ちてた時分の依友達、旦那が戰爭に行つた留守に、ちよろりと嘗めたが、病着で、曖の出るほど食つたんだ。」

主税は思はず乘出して、酒もあつたが元氣よく、

「眞倒か、め・組、眞倒かい。」

と事を好んだ聞きやうをする。

「嘘よ、貴郎、あの方たちが、那樣ことがあつて可いもんですか、めの字、滅多なことは云ふもんぢやありません、外の事と違ふよ、お前、」

「あれ、串戲ぢやねえ。是が嘘なら、私の鋼は場違だ。えゝ、旦那、河野の本家は靜岡で、鑿者だらうね。そら、御覽じろ、河野ッてえから氣がつかなかつた。門に大な榎があつて、役邸と云や、お前、興津江尻まで聞えたもんだね。

今見りや、此處を出た客てえのは、役邸の奥樣で、其馬丁の情婦だ。

だから私ア、冷かしに行つて遣らうと思つたんだ。嘘にも眞倒にも、兒があらあ、兒が。ああ。」

又一口がぶりと遣つて、はり〳〵を噛んだ齒をすゝつて、

「ねえ、大勢小兒がありませう。」

「南町の學士先生も其の一人、何でも兄弟は大勢ある。八九人かも知れないよ、いや、眞倒なら驚いたな。」

「おゝ、待ちねえ、其の先生は幾歳だね。」

「六か、七だ。」

「二十とだね、すると其上か、それとも下かね。どつち道其の人ぢやねえ、何でも馬丁の因果のたねは婦人なんだ。いづれ緣附いちや居るだらうが、これほど確な事はねえ。私ア特別で心得てるんで、誰も知つちや居ますめえよ。知らぬは亭主ばかりなりぢやねえんだから、御存じは魚屋惣助（本名）ばかりなりだ。

はゝはゝ、下郎は口のさがねえもんだ。」

ぐいと唇を撫でた手で、ポカリと茶碗の蓋をした。

「危え、危え、冷かしに行く處ぢやねえ。飯汁と此奴だけは、命がけでも留められねえんだから、あの人のお酌でも頂き兼ねねえ。軍醫の奥さんにお手のもので、毒藥裝られちゃ大變だ。だが、何だ、旦那も知らねえ顏で居ておくんねえ、兎角町内に事なかれだからね。」

「あゝ、お前も最うおいでじない。」

「行くもんか、行けつたつてお斷りだ。お斷り、へゝゝ、お斷り、」

と茶碗を捻くる。

「厭な人だよ。仕樣がないね、さあ、茶碗をお出しなね。」

「おゝ、」

と何か考へ込んだ、主税が急に顏を上げて、

「最う些と精しく其の話を聞かせないか。」

井戸端から、婦人の風が切れて來たかと、お源が一文字に飛込んだ。

「旦、旦那樣、あの、何が、あの、あの〳〵、」

矢車草

十

お源の其の慌しさ、駈けて來た呼吸づかひと、早口の急込に眞赤になりながら、直ぐに臺所から居間を突切つて、取次ぎに出る手廻しの、襷を外すのが肩を脱ぐやうな身閑えで、

「眞砂町の、」

「や、先生か。」

眞砂町と聞いただけで、主税は素直に突立ち上る。お葛はさそくに身を躱して、ひらりと壁に附着いた。

「否、お孃樣でございます。」

「孃的、お妙さんか。」

と訝ふと齊しく、まだ酒のある茶碗を置いた燈盆を、飛上る足で蹴覆して、羽織の紐を引摑んで、横飛びに臺所を消えようとして、

「赤いか、」

お葛を見向いて面を撫でると、涼い瞳で、それ見たかと云ふ目色で、

「誰が見ても……」と、ぐつと落着く。

「嬉つた。」と頭を壓へる。

「朝湯々々、」と莞爾笑ふ。

「軍師なる哉、諸葛孔明。」といひ棄てに、ばたばたどんと出て行つたは、玄關に迎へるのである。

ふら〳〵とした目を据ゑて、未だ未練にも茶碗を放さなかつた、め・組の惣助、滿面の笑に崩れた、とろんこの相格で、

「いよう、天人。」と向うを覗く。

「不可いよ、」

と強く云ふ、お葛の聲が屹としたので、きよとんとして立つ處を、横合からお源の手が、ちよろりと其の執心の茶碗を掻攫つて、

「失禮だわ。」

と睨めつける。天下大變、吃驚して、默つて天秤の下へ滑ると、ひよいと盤臺の眞中へ。向うの板塀に肩を寄せたは、遠くから路を開く心得、する〳〵と是も出て行く。

最う、玄關の、格子が開きさうなものだと思ふと、音もしなければ、靴もせぬので、お葛が、

「御覽、」と目配せする。

覗くは失禮と控へたのが、遁腰で水口から目ばかり出したと思ふと、反返るやうに引込んで、

「大變でございます。お臺所口へ入らつしやいます。」

「えゝ、此方へ、」

と裾を摑くと、何と思つたか突を望み、破風から出さうにきり〳〵と手繰つて、引窓をカタリと閉めた。

「あれ、奥樣。」

「お前、そのお盆なんぞ、早くよ。」と釣鐘にでも隠れたさうに、肩から居間へ飜然と飛込む。

驚いたのはお源坊、擂鉢となつて、唯くるくると働く目に、一目瞬くと見たばかりで、意氣地なくぺた〳〵と坐つて、傍に恐入つてお辭儀をする。

「御免なさいよ。」

と優しい聲、はッと花持る留南奇の薫に、お源は恍惚として顔を上げると、帶も、袂も、衣紋も、扱帶も、花いろ〳〵の立姿。まあ！紫と、水淺黄と、白と、紅咲き重なつた、矢車草を片袖に、月夜に孔雀を見るやうな。

め組が鯔返した流汁の溝渠も是がために水淺んで、霞をかけたる蒼空が、底美しく映るばかり。先祖が乙姫に戀歌して、恋る處に流された、鮒の兒よ、いでや、柳の袂に似た、君の袖に縋れかし。

妙子は、有名な獨逸文學者、なにがし大學の教授、文學士酒井俊藏の愛娘である。

父様は、此の家の主人、早瀬主税には、先生で大恩人、且つ御主に當る。さればこそ、纏樣と聞くと齊しく、朝から臺所で冷酒のぐい煽り、魚屋と茶碗を合はせた、其の舉動魔の如きが、立處に影を潛めた。

来だそれよりも内證なのは、引窓を閉めたため、勝手の暗い……其の……誰だか。

十一

妙子の手は、矢車の花の色に際立つて、温柔な葉の中に、枝を一寸持替へながら、

「こんなものを持つて居ますから、此方から、」

と間違つくお源に氣の毒さう。ふつくりと優しく微笑み、

「お邪魔をしてね。」

「何ういたしまして、最う寔なしでございまして、」と雑巾を引掴んで、

「あれ、お召ものが、」

と云ふ内に、吾妻下駄が可愛く並んで、白足袋薄く、藤色の裾を捌いて、濃いお納戸地に、淺黄と赤で、撫子と水の綢珍の帶扉、向う風みに水瓶へ、花菖蒲の瞥と、リボンの色が、蝶々の翼薄黄色に、ちら〳〵と先づ映つて、矢車を活込むと、五彩の鷺は一入である。

「此處に置かして頂戴よ。まあ、お酒の香がしてねえ、」と手を放すと、擽々となる矢車草より、蒸ばかりも玉に染む、顔醉ひて桃に似たり。

「御覽なさい、矢車が酔つてふら〳〵するわ。」

と郭もなく莞爾する。

お源はどぎまぎ、

「えゝ、酒屋の小僧が、ぞんざいたものでございますから。」

「一寸、溢したの。矢張惡戯な小僧さん！犬にばつかり弄つて居るんでせう、私ン許のも同一よ。」

一廉社會觀のやうな口ぶり、說くが如く言ひながら、上に上つて、片手に其まで持つて居た、紫の風呂敷包、眞四角なのを差置いた。

「お裾が汚れます、お嬢樣。」

「否い、可いのよ、」

と裾は上げても、袖は板の間に觸くのであつた。

「あの、お惣菜になすつて下さい。」

「どうも恐れ入ります。」

「旨くはありませんよ、どうせ、お手製なんですから。」

少し途切れて、

「お内ですか。」

「はい、」

「主税さんは……あの旦那樣は、」

と言ひかけて、急に氣が着いたか、

「まあ、何うしたの、嗜いのねえ。」

成程、其處までは水口の明が取れたが、奥へ

行く道は暗かつた。

「も、仕樣がないのでございますよ。厭個に、あら、何うしませう。」

とお源は飛上つて、慌てゝ引窓を、くるり、かたり。颯と明るく虹の幻、娘の肩から矢車草に。

御時臺所へ落着いて顔を出した、主人の主税と、妙子は面を見合はせた。

「驚かして上げませうと思つたんだけれども。」

と、笑つて、串戯を言ひながら、瓶なる花と對丈に、其處に娘が蹲居るので、渠は謹んで板に片手を支いたのである。

「驚かしちや、私厭ですよ。」

「ぢや、何故那樣水口からなんぞお入んなさいます。丁と玄關へお出迎ひをして居るぢやありませんか。」

「それでもね、」

と愛々しく打傾き、

「お惣菜なんか持込むのに、お玄關からぢや大業ですもの。それに、あの、花にも水を遣りたかつたの。」

「綺麗ですな、まあ、お源、どうだ、綺麗ぢやないか。」

「厭個にお綺麗でございますこと。」と、是は妙子に見惚れて居る。

「同じく頂戴が出來ますんで？」

「何うしようか知ら、お茶を食るんなら可いけれど、お酒を飲むんぢや、可哀相だわ。」

「え、酒なんぞ。」

「厭な、おほゝ、主税さん、飲んでるのね。」

「はゝ、はゝ、さ、まあ、二階へ。」

と遁出すやうな。後へする〳〵衣の香。階子段の下あたりで、主税が思出したやうに、

「成程、今日は日曜ですな。」

「どうせ、然うよ、（日曜）が遊びに來たのよ。」

十二

二階の六疊の書齋へ入ると、机の向うへ引附けるは失禮らしいと思つたさうで、火鉢を座中へ持つて出て、床の間の前に坐蒲團。

「どうぞ、お敷きなさいまし。」

主税は、更つて、慇懃に手を支いて、

「まあ、よく入らつしやいました。」

「はい、」とばかり。長年内に居た書生の事、隨分、我儘も言つたり、甘えたり、勉强の邪魔もしたり、惡口も言つたり、喧嘩もしたり。帽子と花瞥の中であつた。が、さて恁うなると、心は同一」でも兵子帶と扱帶ほど隔てが出來る。主税も其の扱にすれば、お嬢さんも晴がましく、顔の色とおなじやうな、手巾を便りにして、変と一緒にひら〳〵と動かすと、疊に陽炎が燃えるやうなり。

「御無沙汰を致しまして濟みません。奥樣もお變りがございませんで、結構でございます。先生は相變らず……飲酒りますか。」

「誰か、と同一やうに……矢張……」と莞爾。落着かない坐りやうをして居るから、火鉢の角へ、力を入れて手を掛けながら、床の掛物に目を反らす。

主税は頻に手を當てゝ、

「いや、恐縮。ですが今日のは、こりや遊上せますんですよ。前刻朝湯に參りました。」

「父樣もね、矢張朝湯に醉ふんですよ。不思議だわね。」

主税は胸を据ゑた體に、兩膝にぴたりと手を置き、

「平に、奥樣には御内分。貴女又、早瀬が朝湯に醉つて居たなぞと、お話をなすつては不可ませんよ。」

「厭個に貴郎の半分でも、父樣が母樣の言ふことを肯くと可いんだけれど、學校でも皆が評判をするんですもの、人が惡いのはね、利の事を（お酌さん。なんて冷評すわ。」

「結構ぢやありませんか。」
「厭だわ、私は。」
「だつて、貴女、先生がお嬢さんのお酌で快く御酒を召食れば、それに越した事はありません。後に其の筋から御褒美が出ます。養老の瀧でも何でも、昔から孝行な人物の親は、大概酒を飲みますものです。貴女を「お酌さん。」なぞと云ふ奴は、親のために燒芋を調へ、牡丹餅を買ひ……お茶番の孝女だ。」
と大に樂つて笑ふと、妙子は恩めしさうな目で、可愛らしく見たばかり。
「私は、最う歸ります。」
「御串戲をおつしやつては不可ません。これから其の燒芋だの、牡丹餅だの。」
「えゝ、私はお茶番の孝女ですから。」
「先あ、御褒美を差上げませう。」
と主税が引寄せる茶道具の、其處等を視めて、
「お客樣があつたのね。お邪魔をしたのぢやありませんか。」
「否、最う歸つた後です。」
「厭な人ね！」
と唐突に澄まして云ふ。
「見たんですか。」
「見やしませんけれど、御覽なさいな。お茶臺に茶碗が伏つて居るぢやありませんか、お茶臺に茶碗を伏せる人は、貴下嫌だもの、父樣も。」
「天晴れ御鑑定、本阿彌で入らつしやる。」と急須子をあける。
「誰方なの？」
「御存じのない者です。河野と云ふ私の友達……來て居たのは其母親ですよ。」
「河野ね？　主税さん。」と妙子はふつくりした前髪で打傾き、
「學士の方ぢやなくつて、」
「知つていらつしやるか。」と茶筒にかけた手を留めた。
「其の母樣と云ふのは、四十餘りの、あの、若造りで、一寸お化粧なんぞして、細面の、鼻筋の通つた、何だか權式の高い、遊つて？」
「眞個。何うして貴女、」
「私の學校へ、參觀に。」

新學士

十三

一昨日は母樣が來て御厄介でした。」
と、今夜主税の机の際に、河野英吉が、未だ洋服の膝も崩さぬ前から、
「君、困つたらう、母樣は僕と違つて、威儀堂々と云ふ風で嚴肅だから、はゝは、」
と肩を搖つて、無邪氣と云へば無邪氣、餘り底の無さ過ぎるやうな笑方。文學士と肩書の名刺と共に、新しいだけに美しい若々しい髭を押揉んだ。些と目立つばかり口が大いのに、似合はず聲の優しい男で。氣焰を吐くのが愚痴のやうに聞きなされる事がある。尤も、何を爲るにも、腦、德とだけ標を數へれば濟む身分。貧乏は知らないと云つても可いから、愚痴になるわけはないが、自分の親を、其の年紀で、友達の前で、呼ぶに母樣と以てするのでも大略解る。酒に醉はずにアルコホルに中毒るやうな人物で。
年紀は二十七。從五位勳三等、前の軍醫監、同姓英臣の長男、七人の同腹の中に英吉ばかりが男子で、姉が一人、妹が五人、其の中緣附いたのが三人で。姉は靜岡の本宅に、然る醫學士を婿にして、現に病院を開いて居る。
南町の邸は、細君さんが監督に附いて、英吉が主人で、三人の妹が、それ〴〵學校に通つて居るので、既に緣組みした令孃たちも、皆其處から通學した。別家のやうで且つ學問所、

家嚴は是に桐楊塾と題したのである。漢詩の啥がある軍醫だから、何等か桐楊の出處があらう、但し其義審ならず。
英吉に問ふと、素面を飲むやうな事を云ふ。枝も榮えて、葉も繁ると云ふのだらう、松柏も古いから、其處で桐楊だと。
說を爲すものあり、曰く、桐楊の桐は男兒に較べ、楊は令孃たちに擬へたのであらう。漢皇重色思傾國……楊家女有、と同一字だ。道理こそ佳美人であると、それ或は然らむ。が男の方は、桐に鳳凰、とばかりで出處が怪しく、花骨牌から出たやうであるから、遂に孰方も信にはならぬ。
休題、南町の桐楊塾は、監督が祖母さんで、同窓が嬢たちで、更に俤る處が無いから、天下泰平、家内安全、鳳凰は舞ひ次第、英吉は遊び放題。在學中も、兩桐はじめ烏金の絕倍で、屢々かいがいに及んだのみか、卒業も二年ばかり後れたけれども、首尾よく學位を得たと聞いて、親たちは先づ占めた、びきであをたんの攝みだと思ふと、手八の蒔直しで夜泊の、豊流連。細母さんの命を承けて、妹達から注進櫛の齒を撥くが如し。で、意見かた〳〵然るべき嫁もあらばの氣構で、此度母親が上京したので、妙子が通ふ女學校を參觀したとぞ云ふにつけても、意のある處が解せられる。
「何うだい、君、窮屈な思ひをしたらう。」
親が參つて、嘸御迷惑、と惡氣は無い挨拶も、母樣で、威儀で、嚴粛で、窮屈な思ひを、と云ふから、何と豪いか、恐入つたらう、と極めつけるが如くに聞える。
例の調子と知つて居るから、主税は別に氣にも留めず、勿論、恐入る必要も無いので、
「姑に持たうと云ふんぢやなし、些とも窮屈な事はありません。」
机の前に鐵拐胡坐で、悠然と煙草を輪に吹く。
「しかし、君、其の自から、何だらう。」
と其の何だか、火箸で灰を引掻いて、
「僕は窮屈で困る。母樣が如彼だから、自から樣を正すと云つたやうな工合でね。……直の妹なんざ、隨分脫兎の如しだけれど、母樣の前ぢや殆ど處女だね。」
と髭を捻る。

十四

「で、何かね、母樣は、」
と主税は笑ひながら、故と同一やうに母樣と云つて、煙管を敲き、
「しばらく御無沙汰なんですかい。」
「一月ぐらゐ居るかも知れない、あゝ、」と火鉢に凭掛る。
「ぢやあ當分謹慎だね。今夜なぞも、是から眞直にお歸りだらう、何處へも廻りやしますまいな。」
「うふゝ、考へてるんだ。」と又灰に棒を引く。
「相變らず辛抱が出來ないか。」
「うむ、何、然うでも無い。母樣が可愛がつてくれるから、來て居る間は内も愉快だよ。賊がぢやあるし、料理が上手だからお菜も旨いし、君、昨夜は妹たちと一所に西洋料理を奢つて貰つた、僕は七皿喰つた。はゝは、」
と火箸をポンと灰に投げて、仰向いて、頭杖ついて、片足を高になる。
「御馳走と云へば内へ來るめ組だが、」
皆まで聞かず、英吉は突放したやうに、
「ありや君、最う來なくつても可いよ。餘り失禮な奴だと、母樣が大變感情を害したからね、君から斷つてくれ給へ。」
と眞面目で云つて、衣兜から手巾をそゝくさ引張出し、口を拭いて、
「どうせ東京の魚だもの、誰のを買つたつて新鮮しいのは無い。偶に盤臺の中で躰ねてると

思や、蛆で蠢くか、然うでなければ比目魚の下に、手品の鯖が泳いでるんだと、母様が然う云つたつけ。」

め組が聞いたら、立廻に汝の一命覺束ない、事を云つて、けろりとして、

「静岡は口の奢つた、旨いものを食ふ處さ、汽車の辨當でも試給へ、東海道一番だよ。」

主税は何處までも毫のある坊ちやんにして、途はない氣で、

「いや、何か、手前どもで、め組のものを召食つて、大層御意に叶つたから、是非寄越してくれと誰かゞ仰有るもんだから取あへず差立てたんだ。御家風を存じないでもなかつたけれども、承知の上で、君が斷つてと云つたから、」

「僕は構はん。僕は構はんが、あの調子だもの、祖母さんや妹たちは固よりだ。故郷から連れて來て居る下女さへ吃驚したよ。母様は、僕を呼びつけて談じたです。あんなものに朋輩呼はりをされるやうな惡い事をしたか。其處等の藝妓にや、魚屋だの、酒鉾屋の職人、蕎麦屋の出前持の客が有ると云ふから、お前、何處ぞで一座でもおしだらう、とね、叱られたです。

僕は何、彼は通りもんです。早瀬の許へ行つても、同一、今日は旨えものを食はせて遣らう。居るか、と云つた調子です、と云つたら、母様が云ふにや、當然だ、早瀬ぢや、細君……」

と云ひかけて、ぐつと支へたが、ニヤリとして、

「君、僕は饒舌りやしないよ。僕は決して饒舌らんさ。祕密で居ることを知つてるから、君の不利益になるやうな事は云はないがね、妹たちが知つてるんだ。何處かで聞いて來てたもんだから、ついね、」

と氣の毒さう。

「まあ、可い、そんな事は構はないが、僕と懇意にしてくれるんなら、最う些と君、遊蕩を控へて貰ひたいね。

昨日も君の母様が來て、つく〳〵若様の不始末を慚痴るのが、何だか僕が取卷きでもして、わッと浮かせるやうぢやないか。

高利を世話をして、口錢を取る。酒を飲ませて、お流、頂戴。切々内へ呼び出しちや、花骨牌でも撒きさうに思つてるんだ。何の事はない、美少年錄のソレ何だつけ、安保箭五郎直行さ。甚しきは美人局でも遣りかねないほど輕蔑して居ら。母様の口ぶりが、」

と稍其の調子が強くなつたが、急に事も無げな冗戯口。

「えゝ、隊長、些と謹んでくれないか。」

「母様の來て居る内は謹慎さ。」

と灰を掻きまはして、

「其の代り、西洋料理七皿だ。」と火鉢をバタリ。

十五

「ぢやあ色氣より食氣の方だ、何だか自棄に食ふやうぢやないか。しかし、まあ其で濟みや結構さ。」

「濟みやしないよ、七皿のあとが、一銚子、玉子に海苔と來て、おひけと成ると可いんだけれど、矢張一人で寝るんだから、大きに足が突張るです。それに母様が來たから、些とは小遣があるし、二三時間駈出して行つて來ようかとも思ふ。何うだらう、君、迷惑をするだらうか。」

と甘えるやうな身體つき、座蒲團にぐつたりして、横合から覗いて云ふ。

「何が迷惑さ。君の身體で、御自分お出かけなさるに、些とも迷惑な事はない。迷惑な事はないが……」

「否、處が今夜は、君の内へ來たことを、母様が知つてるからね。今のやうな話ぢや、又君が引張出したやうに、母様に思はれようかと、心配をするだらうと云ふんだ。」

「お疑ひなさるは御勝手さ。癪に障ればつたつて、恐い事、何あるものか、君の母親が何だ？」

と云ひかけて、語氣をかへ、

「然う云つて了へば、實も蓋もない。痛くない腹を探られるのは、僕だつて厭だ。それにしても早瀬へ遊びに行くと云ふ君に、よく故障を入れなかつたね。」

「うむ、そりや彼です、君に逢はない内は疑つて居ないでもなかつたがね、」

敢て臆面は無い容子で、

「昨日逢つてから、然うした人ぢやないやうだ、と頷いて居た。母様はね、君、目が高いんだ、所謂士を知る明ありだよ。」

「ぢや、何か、士を知る明があつて、それで、何か、然うした人ぢやないやうだ、（やうだ。）と未だ疑があるのか。」

「だつて唯一面識だものね、三四度交際つて見給へ。丁と分るよ、五度とは言はない。」

「何も母様に交際ふには當らんぢやないか。せめて年増でゞもあればだが、最う婆さまだ。」

と横を向いて、微笑んで、机の上の本を見た。何の書だか酒井藏書の印が見える。鼠砂町から借用のものであらう。

英吉は、火鉢越に覗きながら、其の段は見るでもなく、

「年紀は取つてるけれど、未だ見た處は若いよ。君、婦人會なんぞちや、後委を時々姉と見遣へられるさ。

で、何だ、然うやつて人を見る明が有るもんだから、婚の選擇は殘らず母様に任せてあるんだ。取當てるよ。君、内の姉の婚にした醫學士なんざ大當りだ、病院の立派になつた事を見給へな。」

「僕なんざ御選擇に預れまいか。」

と氣を、其の書物に取られたか、木に竹を接いだやうな事を云ふと、以ての外眞面目に受けて、

「君か、君は何だ、學位は持つちや居らんけれど、獨逸のいけるのは僕が知つてるからね。母様の信用さへ得てくれりや、何だ。え、君、妹たちには、固より評判が可いんだからね、色男、はゝは、」

と他愛なく身體中で笑ひ、

「だつて、如何する。階下に居るのを、」

背後を見返り、

「湯かい。見えなかつたやうだつけ。」

主税は堪へず失笑したが、向直つて話に乘るやうに、

「まあ、可い加減にして、疾く一人貰つちや何うだ。人の事より御自分が。然うすりや澄蕩も留みます。安保箭五郎惡い事は言はないが、何うだ。」

「むゝ、其の事だがね。」

とぐつたりして居た胸を起して、又手巾で口を拭いて、何爲か、縞のずぼんを揃へて、丁と畏まつて、

「實は其の事なんだ。」

「何が其の事だ。」

「矢張其の事さ。」

「いづれ其の事だらう。」

「えゝ、知つてるのか。」

「些とも知らない、」

と煙管を取つて、

「いや、眞面目に〳〵、何か、心當りでも出來たかね。」

緣談

十六

時に河野が其の事と言へば、孰れ婦に遊ひないが、早瀬は何時も此の人から、其の敢紅拾紫、

聲を鳴かしたり、蝶を弄んだりの件に就て、いや、あゝ云つたが是は何と、恁う申したが其は如何。無心をされたが何うしたものか、成るべくは斷りたい、斷つたら嫌はれようか、嫌はれては甚だ不好い。一體無人でありながら金子をくれろは變な工合だ、妙だよ。其の意志のある處を知るに苦む、などゝ、とり〳〵紅をさして、蚯蚓までも突附けて、意見？　を問はれるには恐れて居る。

誘るに西洋料理七皿を以てする、式の如き若樣であるから、冷評せば眞に受ける、打樂つて置けば惰げる、はぐらかしても乘出す。勢ひ可い加減にでも返事をすれば、卽ち期せずして遊蕩の顧問になる。辭からず惜まされて、自分にお蔗と云ふ弱點があるだけ、人知れず冷汗が習であつたから、其の事なら最う聞くまい、と手强く念を入れると、今夜はすぼんの膝を畏つただけ大眞面目。尤も厠染の相談も串戲ではないのだけれども。特に更つて、つひにない事、もぢ〳〵して、

一實はね、母樣も云つたんだ、君に相談をして見ろと。

「緣談だね、眞面目な。」

珍らしさうに顏を見て、

「母樣から御靡膽りで、僕に相談と云ふ緣談の口は、當時心當りが無いが。あゝ、」

と輕く膝を叩いた。

「隣家のかい。むゝ、彼は別嬪だ。一寸高慢ぢやあるが、其のかはり學校はなか〳〵出來るさうだ。」

英吉は小兒のやうに頭を振つて、

「うゝむ、違ふよ。」

「違ふ。ぢや誰だい。」

と落着いて呼ねると、慌てゝ衣兜へ手を突込み、肩を高うして、一ツ搖つて、

「眞砂町の、」

「眞砂町!?」

と聞くや否や、鸚鵡返しに力が入つた。床の間にしつとりと露を被いだ矢車の花は、燈の明を餘所に、嗄か過ぎて障子を透した、富士見町あたりの大空の星の光を宿して、美しく活つて居る。

見よ、河野が座を、斜に避けた處には、昨日の補の香を留めた、友染の花も、綾の霞も、疊の上を滑えないのである。

眞砂町、と聞返すと齊しく、蛇と其の座に目を注いだが、驚破と謂はゞ身を以て、影をも守らむ意氣組であつた。

英吉は又火氣を突支棒のやうにして、押立尻をしながら、火鉢の上へ乘掛つて、

「あの、酒井ね、君の先生の。彼處に娘があるんだね。」

「あるさ、」と云つたが、餘り取つても着けないやうで、我ながら冷かに聞えたから、

「知らなかつたかな、君は。隨分其の方へかけちや、脫落はあるまいに。」

「洋燈臺下暗しで、（と大に酒落れて、）薩張氣が付かなかつた。君ン許へも一寸々々遊びに來るんだらう。」

「お成りがあるさ。僕には御主人だ。」

「ぢや一度ぐらゐ逢ひさうなものだつた。」

何か殘惜く、かごとがましく、不平さうに謂つたのが、何故見せなかつた、と詰るやうに聞えたので、早瀨は石を突流す如く、

「緣が無かつたんだらうよ。」

「處がありません、はゝは、」と、こゝで又相好とともに足を扇して、ぐたりと横坐りになつて、

「思ふに逢はずして思はざるに……ぢやない。向うも來れば僕も來るのに、此家で逢ひさうなものだつたが、然うでなくつて君、學校で見たよ。あゝ、あの人の行く學校で、妙子さんの行く學校で。」

と、何だか話に乘らないから、看みかけて云つた。妙子、と早や名の此の男に知られたのを、早瀨は其の人のために恥辱のやうに思つて、不快な色が眉の根に浮んだ。

「如何して、學校で、」

と此際故と呼ねたのである。母子で參觀したことは、最う心得て居たのに。

十七

「如何も恁うも無いさ。母樣と二人で參觀に出掛けたんだ。數頭は僕と同窓だからね。先にから來て見い、來て見い、と云ふけれど、觀の方ぢや大した評判の無い學校だから、馬鹿にして居たが驚いたね。勿論五年級にや佳いのが居ると云つたつけが、」

「ぢやあ其の數頭、就鈎人も遣るんだな。」

と香尖三分で切附けたが、一向に感じないで、

「遣るさ。其のかはり待合や、何かぢや、僕の方が媒酌人だよ。」

「怪しからん。黑と白との、待て？　海老茶と緋縮緬の交換だな。いや、可い面の皮だ。づらりと並べて選取りにお目に掛けます、小格子の風だ。」

一可いぢやないか、學校の目的は、良妻賢母を造るんだもの、生理の講義も聞かせりや、媒酌もしようぢやあないか。」

と此の人にして大警句。早瀨は恐入つた體で、

「成程、」

「勿論人を見て爲るこつた、いくら就酌人をすればッて、人毎に許しやしない。其處は地位もあり、財產もあり、學位も有るもんなら、」

と自若として、自分で云つて、意氣頗る昂然爲で、

「講堂で良妻賢母を拵へて、丁と父兄に渡す方が、雙方の利益だもの。數頭だつて、其處は考へて居るよ。」

「で何かね、」

早瀨は斜に聞き直つて、

「其處で僕の、僕の先生の娘を見たんだな。」

「あゝ、然も首席よ。出來るんだね。而して見た處、優美で、品が良くつて、愛嬌がある。澤山ない、滅多にないんだ。高級三百餘色なし。照陽殿裏第一人だよ。恰も可、學校も照陽女學校さ。」

と冷えた茶をがぶりと一口。浮かれの體とおいでなすつて、

「はは、僕ばかりぢやない、第一母樣が氣に入つたさ。彼なら河野家の嫁にしても、まあ〳〵……恥かしくない、と云つて、數頭に尋ねたら、酒井妙子と云ふんだ。一寸、數員室で立話をしたんだから、委しいことは追てとして、其日は歸つた。

すると昨日、母樣が此處へ訪ねて來たらう。歸りがけに、飯田町から見附を出ようとする處で、腕車を飛ばして來た、母衣の中ののがそれだッたつて、矢車の花を。」

と言ひかけて、床の間を凝と見て、

「あゝ、是だ〳〵。」

ひよいと腰を擡げて、這身にぬいと手を伸ばした樣子が、一本引拔きさうに見えたので、

「河野！」

「えゝ、」

「それから。おい、肝心な處だ。フム、」

乘つて出たのに引込まれて、卜居直つて、

「あの砂埃の中を水際立つて、駈け拔けるやうに、そりや綺麗だつたと云ふのだ。立留つて見送ると、此の内の角へ車を下ろしたらう。

徐々引返したんです、母樣がね。休んで居た車夫に、今のお孃さんは貴中の家へですか。へい、然やうで、と云ふのを聞いて歸つたのさね。」

と早口に饒舌つて、
「美人だれえ。君、」とゆつたり顔を見る。
「ト遣つた工合は、僕が美人のやうだ、順だ。結婚なんぞ申込んぢや、」と笑ひながら、大に諷するかの如く云つて、丁と肩を突いて、
「浮氣ものめ。」
「浮氣ぢやない、今度ばかしや大眞面目だがね、君、何うかなるまいか。」
又甘えるやうに、顔を正的に差出して、頤を支へた指で、頬に忙しく絶を捻る。
早瀬はしばらく默つたが、思はず拱いて居た腕を解くと、背後ざまに机に凭、片手を緊乎と膝に支いて、
「貰ふさ。」
「え。」
「お貰ひなさい。」
「くれやうか。」
「話によつちや、くれませう。」
「後纏者ぢやないんだね。」
「勿論後纏者ぢやあない。」
「ぢや、まあ、話は出來るとして、」と、澄まして云つて、今度は心ありげに早瀬の顔を。
「だが、何たよ、私ア、」と云つた調子が變つて、
「媒酌人は斷るぜ、照陽女學校の教頭ぢやないんだから。」

十八

然うすると英吉が、豫て心得たりの態度で、媒酌人は勿論、然るべき人をと云つたのが、其許如きに勸まるものかと、輕んじ賤しめたやうに聞えて、
「そりや、いざとなりや、教育界に名望のある道學者先生の叔父もあるし、又父様の幕下で、現下其筋の顯職にある人物も居るんだけれど、其の君、媒酌人派に遣つてくれるんだけれど、」
と手を揣へて、火鉢の上へ突出して、じり〻を立てるまでに、
と逃み、
「先方の身分も確めねばならず、妙子、(と最う呼棄てにして)の品行の點もあり、まあ、學校は優等としてだね。酒井は飲酒家だと云ふから、遺傳性の懸念もありだ。其は大丈夫としてからが、あゝ云ふ美しいのには有り勝だから、肺病の憂があつてはならず、酒井の親族關係、妙子の交友の如何、其處等を一ッ委しく聞かして貰ひたいんだがね。」
主税は項りかねて、ぱり〳〵と烏府の中を突崩した。此の嗅いのに、河野が兩手を翳すほど、火鉢の火は消えかゝつたので、彼は炭を繼がうとして横向になつて居たから、背けた顔に稍妻の如く因いた額の筋は見えなかつたが、
「最う一度聞かう、何だつけな。先方の身分?」
「うむ、先方の身分さ。」
「獨逸文學者よ、文學士だ……大學教授よ。知つてるだらう、私の先生だ。」
「むゝ、そりや分つてるがね、妙子の品行の點もあり、」
「それから、」
「遺傳さ、」
「肺病かね、」
「親族關係、交友の如何さ。何、友達の事なんぞ、大した條件では無いよ。結婚をすれば、處女時代の交際は自然に疎くなるです。其に母様が嚴しく襲ればゝ、其の方は心配はないが、むゝ、未だ要點は財產だ。が、酒井は困つて居やしないだらうか。誰も知つた俠客風の人間だから、人の世話をすりや、つい物費も少くない。其上にや、評判の飲酒家だし、遊ぶ方も盛だと云ふし、借金は何うだらう。」
主税は默つて、茶を注いだが、强ひて落着いた容子に見えた。
「何かね、持參金でも望みなのかね。」
「馬鹿を謂ひ給へ。妹たちを藩附けるに、此方

から持參はさせるが、僕が結婚するに、苟も河野の世子が持參金などを望むものか。
君、僕の家ぢや、何だ、女の兒が一人生れると、七夜から直ぐに積立金をするよ。それ立派に支度が出來るだらう。結婚してからは、其の利息が化粧料、小遣と成らうと云ふんだ。自然嫁入先でも輻が利きます。尤も其の金子を、婚の名に書き替へるわけぢやないが、河野家に於てさ、一人々々の名にして保管してあるんだから、例へば婚が多日月給に離れるやうな事があつても、忽ち破綻を生ずる如き不面目は無い。
云ふ圓滿な家庭になつて居るんだ。で前方の財產は望ぢやないが、餘り困つて居るやうだと、親族の關係から、つい迷惑をする事に成つちや困る。娘の緣で、一時借用なぞと云ふのは有りがちだから。」
「酒井先生は江戸兒だ!」
と唐突に一喝して、
「神田の祭禮に叩き賣つても、娘の緣で借りるもんかい。河野!」
と屹と見た目の鋭さ。眉を昂げて、
「艶があつたり、本を讀んだり、お互の交際は窮屈だ。撰倒すのを野蠻と云ふんだ。」
お菊は湯から歸つて來た。艶かな濡髮に、梅花の匂馥郁として、濡子の襟の烏羽玉にも、香ばしの暗がりへ入ると、二階は常ならぬ聲高で、お源の出迎へる氣勢もない。
石鹸を卷いた手拭を持つたまゝで、竊と階子段の下へ行くと、お源は扉に附着いて、一心に聞いて居た。

十九

「先生が酒を飲まうと飲むまいと、借金が有らうと無からうと、大きなお世話だ。遺傳が、肺病が、品行が何だ。當方からお給事をしようと云ふんぢやなし、第一欲しいと仰有つたつて、差上げるやら、平に御免を被るやら、其邊も分らないのに、人の大切な令孃を、裸體にして檢査をするやうな事を聞くのは、無禮ぢやないか。
私あ第一、河野、世間の宗教家と稱ふる奴が、吾々を捕へて、罪の兒だの、救つて遣るのと、商賣柄好きな事を云ふ。藥屋の廣告は構はんが、しらきちやうめんな人間に向つて罪の子とは何んだい。本人は兎も角も、其の親たちに對して怪しからん言種だと思つてるんです。
今君が疑問に及んだ、先生の令孃の身許檢べの條件が、唯の一ケ條でもだ、河野英吉氏の意志から出たのなら、私は最う學者や紳士の交際は御免蒙る。其のかはりだ、半襟着の附合ひになつて撲倒すよ。はゝはゝ、えい、おい、」
と調子が碎けて、
「母様の指揮だらう、一々。私は恁うして懇意にして居るからは、君の性質は知つてるんだ。君は惚れたんだらう、一も二もなく妙ちやんを見染めたんだ。」
「うゝ、まあ……」と對手の血相もあり、もぢもぢする。
「惚れてよ、可愛い、可憐いものなら、何故命がけになつて貰はない。
結婚をしたあとで、不具にならうが、肺病にならうが、また其の肺病がうつつて、其がために共々倒れようが、そんな事を構ふもんか。
まあ、何は措いて、嫁の内の財產を云々するなんざ、不埒の至だ。萬々一、實家の親が困窮して、都合に依つて無心合力でもしたとする。可愛い女房の親ぢやないか。自分にも親なんだぜ、餘裕があつたら勿論貢ぐんだ。無ければ賺る。が、人情なら三杯食ふ飯を一杯づゝ分けるんだ。着物は下着から脱いで遣るのよ。」
と思ひ入つた體で、煙草を持つた手の尖がぶ

るぶると震へると、對手の河野は一向氣にも留めない樣子で、唯上の空で聞いて首だけ乘れて居たが、却つて襖の外で、思はずはら〳〵と落涙したのはお蔦である。

何の話？　と聲の勵しいのを憚つて、階子段の下で窺と聞くと、緣談でございますよ、とお源の答へに、えゝ、且那の、と湯上りの颯と上氣した頰の色を變へたが、否、河野樣が御自分の、と聞いて、まあ、と呆れたやうに莞爾して、忍んで段を上つて、上り口の次の室の三疊へ、欄干を攀つて拔足で、兩方へ開けた襖の隙へ入つたのを、兩人には氣が付かずに居るのである。

と河野は自分には勢のない、聞くものには强合のない口吻で、

「だが、母さんが、」

「母樣が何だ。母樣が娶ふんぢやあるまい、君が女房にするんぢやないか。例でも其の遺方だから、いや、緣談にかゝつたの、見合をしたの、と屢々聞かされるのが一々勘定はせんけれども、雜と三十ぐらゐあつた。其の內、君が、自分で斷つたのは一ツもあるまい。皆母さんが惡う云つた、叔父さんが、あゝだ、父さんが、それだ、と藤蔓を附けちや破談だ。

君の一家は、凡そ何のくらゐな御門閥かは知らん。河野から緣談を申懸けられる人下の婦人は、いづれも恥辱を蒙るやうで、豫て不快に堪へんのだ。

昔の國主大名が繪姿で搜せば知らず、そんな御註文に應ずるのが、えゝ、河野、何處にだつてあるものか。」

と果は歎息して云ふのであつた。河野は急に景氣づいて、

「何、無いことはありやしない。そりや有るよ。君、僕ン許の妹たちは、誰でも其註文に應ずるやうに仕立てゝあるんだ。

揃つて容色も好、又不思議に皆別嬪だ。知つてるだらう。生れたての嬰兒の時は、隨分、をかしな、色の黑いのもあるけれど、母さんが手しほに掛けて、妙齡にするまでには、兎も角も十人並以上になるんだ、ね、然うぢやないか。」

主稅は返す言もなく、是には否應なく頷かされたのである。蓋し事實であるから。

一家一門

二十

「それから、財產は先剌も謂つた通り、一人一人に用意がしてある。病氣なり、何なりは、父樣も兄も本職だから注意が屆くよ。其他は萬事母樣が預かつて襲けるんだ。

好緣は別として、此方で他に求める條件だけは、丁と此方にも整へてあるんだから、强ち身勝手ばかり謂ふんぢやない。

けれども、品行の點は、疑へば疑へると云ふだらう。其處はね、性理上も辯酌をして、徐々色氣が、と思ふ時分には、妹たちが、未だ未だ自分で、男を何うの惡うのと云ふ惡智慧の出ない先に、親の鑑定で、婿を見附けて授けるんです。

否も應も有りやしない。衣服の柄ほども文句を謂はんさ。謂はない營だ、何にも知らないで授けられるんだから。しかし間違ひはない、其處は母さんの目が高いもの。」

「すると何かね、婿を選ぶにも、凡そ其の條件が滿足に解決されないと不可んのだね。」

「勿論さ、だから、皆圓滿に遺つとるよ。第一の姉が醫學士さね、直の妹の緣附いて居るのが、理學士。其の次のが工學士。皆食ひはぐれはないさ。……今又話のある四番目のも醫學士さ、」

「妙に選取つて揃へたもんだな。」

「應、其は父樣の主義で、兄弟一家一門を揃へて、天下に一階級を形造らうと云ふんだ。成るべくは、銘々夫々の敎入も、一番の姉が三百圓なら、次が二百五十圓、次が二百圓、次が百五十圓、末が百圓と云つた工合に長幼の等差を整然と附けたいと云ふわけだ。

先づ行はれて居る、今の處ぢや。而して其の子、其の孫、と次第に此の社會に於ける地位を向上しようと云ふのが理想なんです。例へば、今の代が學士なら、其の次が博士さ、大博士さね。君。

謂つて見れば、貴族院も、一家族で一黨を立てることが出來る。內閣も一門で組織し得るやうにと云ふ遠大の理想があるんだ。又幸に、父樣にや孫も八九人出來た。姪を引取つて敎育して居るのも三四人ある。着々として歩を進めて居る。何でも妹たちが人才を引着けるんだ。」

人事ながら、主稅は白面に紅を潮して、

「ぢや、君の妹たちは、皆學士を釣る餌だ。」

「餌でも可い、構はんね。藤原氏の爲だもの。一人や二人犧牲が出來ても可いが、そりや大丈夫心配なしだ。親たちの目は曇りやしない。

次第々々に地位を高めようとするんだから、

「可才俊才、傑物は不可。然う云ふのは時々失敗を遺る。望む處は凡才で間違ひの無いのが可いのだ。正々堂々の陣さ、信玄流です。小豆長光を驅して旗下へ切込むやうなのは、快いは快なりだが、永久持重の策にあらず……

其の理想に於ける河野家の僕が中心なんだらう。其の中心に據らうと云ふ妻なんだから、大に愼重の態度を取らんけりや成らんぢやないか。詰り一家の女王なんだから、」

河野は、渠が所謂正々堂々として設くこと一條。其の理想に於ける根ざしの深さは、此の男の口から言つても、例の愚痴のやうに聞えるのや、其の落着かない腰には似ない、殆ど動かすべからざる、確乎としたものであつた。

「いや、能く解つた。成程其の主義ぢや、人の娘の體格檢査をせざあなるまい。しかし私は眼だ！　私の娘なら斷るよ、例ひ御試驗には及第を致しましても、」

と冷かに笑ふと、河野は人物に肯ず、此には傲然として、信ずる處ある如く、合點んだ笑ひ方をして、

「でも、條件さへ通過すれば、僕は娶ふよ。はゝゝ、屹と貰ふね、おい、一本貰つて行くぜ。」

と脫兎の如く、豫て計つて居たやうに、此時ひよいと立つと、肩を斜に、衣兎に片手を突込んだまゝ、急々と床の間に立向うて、早や手が掛つた、花の矢車。

片膝立てゝ、颯と色をかへて、

「不可いよ。」

「何故かい？」

と澄まして見返る。主稅は、稍々あせつた氣味で、

「何故と云つて、」

「はゝはゝ、其處が、肝心な處だ、と母樣が云つたんだ。」

と突立つたまゝ、ニヤリとして、

「早瀨、君が何うかして居るんぢやないか、ええ、おい、娘子を。」

二十一

冷か、熱か、匕首、寸鐵にして、英吉の其の舌の根を留めようと急つたが、咽喉に針を吐く能はずして、主稅は默つて拳を握る。

英吉は、此處ぞ、と土俵に仕切つた形で、片手に花笠の菫を引摑み、片手で髭を捻りながら、目をぎろ〳〵と……俱呀えない光で、

「だらう、君、筒井筒振分髮と云ふんだらう。其なら然う云ひ給へ、僕の方にも又手加減があ

るんだ、何うだね。」

信太流の敵が、却つて此の奇兵を用ゐたにも係らず、主税の答へは車懸りでも何でもない、極めて平凡なものであつた。

「怪しからん事を云ふな、串戯とは違ふ、大切なお嬢さんだ。」

「其の大切のお嬢さんを何うかして居るんぢやないか、其とも心で思つてるんか。」

「怪しからん事を云ふなと云ふのに。」

「ぢや確かい。」

「御念には及びません。」

「そんなら何も、然う我が河野家の理想に反對して、人が折角聞かうとする、妙子の容子を視さんでも可いぢやないか。話が纏まりや、其の人にも幸福だよ、河野一黨の女王になるんだ。」

「幸か、不幸か、そりや知らん、が、私は厭だ。一門の繁榮を望むために、娘を何にするの、嫁の體格檢査をするの、と云ふのは眞平御免だ。惚れたからは、癩でも肺病でも構はんのでなくつちや、妙ちやんの相談は決してせん。勿論お嬢は瑕のない玉だけれど、露出しにして河野家に御覽に入れるのは、平相國清盛に招かれて月が蛾を出すやうなものよ。」と馬か云ひ得て濃い煙草を吹と吐いたは、正に恁の如く、山の端の朧氣ならむ趣であつた。

「なら可い、君に聞かんでも餘所で聞くよ。」

と案外また英吉は廉立つた樣子もなく、爭や勝てりの態度で、

「しかし緣起だ、こりや一本貰つて行くよ。妙子が御持參の花だから、」

「……」

「君が何うと云ふ事も無いのなら、一本二本惜むにや當るまい、こんなに澤山あるものを、」

「……」

「失敬、」

あはや拔き出さうとする。と床しい人香が、はつと襲つて、

「不可ませんよ。」と半纏の襟を扱きながら、お蔦が襖から、すつと出て、英吉の肩へ手を載せると、階段けるやうに振向く處を、入違ひに床の間を背負つて、花を庇つて膝をついて、

「厭ですよ、私が活けたのが臺なしになります。」

と嫣然として一笑する。

「だつて、だつて君、突込んであるんぢやないか、池の坊も遠州もありやしない。些とぐらゐ拔いたつて、敢てお手前が崩れると云ふでもないよ。」

とさすがに手を控へて、側の衣兜へ突込んだが、お蔦の目前を、(子を提ろ、子提ろ。)の體で、靴足袋で、どたばた、どたばた。

「はい、これは柳橋流と云ふんです。柳のやうに房々活けてありませう、ちやんと流儀があるぢやありませんか。」

「嘘を吐き給へ、まあ可いから、僕が他込んだ花だから。」

主税は火鉢をぐつと手許へ。お蔦はすらりと立つて、

「だつて最う主のある花ですもの。」

「主がある！」と目を瞬る。

「えゝ、ありますとも、主税と云つてね。」

「それ見ろ、早瀬、」

「何だ、お前、」

「否、貴下、此の花を引張るのは、私を口說くのと同一譯よ。主があるんですもの。さあ、引張つて御覽なさい。」

と寄ると、英吉は一足引く。

「さあ、口說いて頂戴、」

と寄ると、英吉は一足引く。微笑みながら擦り寄るたびに、たじ〳〵と退つて、やがて次の間へ、もそりと出る。

道學先生

二十二

月の十二日は本郷の藥師樣の緣日で、電車が通るやうに成つても相かはらず賑かな。書肆文求堂を最う些と富坂寄の大道へ出した露店の、如何はしい道具に交ぜて、ばら〳〵古本がある中の、表紙の除れた、けばの立つた、端揃の甚い、三世相を開けて、煙ぼつたカンテラの燈で見て居る男は、是は、早瀨主税である。

何の事ぞ、汚井先生の蕭陶で、少くとも外國語を以て家を爲し、自腹で朝酒を呼る者が、今更如何なる必要があつて、前世の鬱鬱たり、鬼々たるを懸念する？

尤も學者だと云つて、天氣の好い日に淺草をぶらついて、奥山を見ないとも限らぬ。爾時如何なる必要があつて、玉乘の看板を觀ると云ふ、奇問を發するものがあれば、其の者愚ならずんば狂に近い。蠟屋の前を通つて、好ひ匂がしたと云つても、直ぐに隣の茶清屋へ駈込みの、箸を持ちながら嗅ぐ事をしない以上は、逡巡して、伊勢屋だとは言憎い。

主税とても、唯通りがゝりに、露店の古本の中にあつた三世相が目を遮つたから、見たばかりだ、と言へば其までである。けれども、渠は目下謎かの緣談について、配慮しつゝあるのではない歟。然も開けて見て居る處が――夫婦相性の事――は棄置かれぬ。

且つ其の孤色が、紋付の羽織で、袍の厚い内君と、水兵服の坊やを連れて、別に一人抱いて、鮨にしようか、汁粉にしようか、と歩行つて居る紳士のやうな、平和な、樂しげなものではなく、主税は何か、思ひ屈した、沈んだ、憂はしげな色が見える。

好男子世に處して、屈託さうな面色で、露店の三世相を繰るとなると、柳の下に掌を見せる、鬼卦の亡者と大差はない、迷ひは寧ろそれ以上である。

所以ある哉、主税の其の面上の雲は、河野英吉と床の間の矢車草……お妙の花を爭つた時、お蔦の機智で、柔能く强を制することを得たのから、早や其の影が懸つたのであつた。爾時は お蔦の機智で、柔能く强を制することを得たのだから、何なら、いや、女房は持つべきものだ、と莞爾ひで、祝杯を擧げかねないのが、冴えない顏をしながら、湯は込んで居たか、と聞いて、フイと出掛けた樣子も、其緣談を聞いた耳を、水道の水で洗はむと欲する趣があつた。

本來だと、朋友が先生の令孃を娶りたいに就いて、下聽に來たものを、聞かせない、と云ふも依怙地なり、料簡の狹い話。二才らしく又何も、娘がくれた花だと云つて、人に惜むにも當らない。此の筆法を以てすれば、情婦から來た文殼が紛込んだと云ふので、紙屑買を迫懸けて、慌てゝ盜賊と怒鳴り彼ねまい。此方の人措いて下さんせ、と洒落にも躾めて然るべき者までが、其折から、一寸留女の格で早瀨に花を持たせたのでも、河野一家に對しては、お蔦さへ、如何の感情を持つかゞ明かに解る。

其は英吉と、内の人の結婚に對する意見の衝突の次第を、練の藪で聽取つた所爲もあらう。

然うでなくつても、惚れさうな藝妓はないか、新學士に是非と云つて、逢引きさうな朋輩はないか、と煩く尋ねるやうな英吉に、厭なこつた、良人が手を支いてものを言ふ大切なお嬢さんを、とお蔦は唯それだけでさへ引退る。處へ、幾條も幾條も家中の緣の綠は兩親で元緊をして、颯さらりと鵜飼に溺いて、娘たちに浮世の波を潜らせて、愛を先達と鮎を呑ませて、ぐツと手許へ引手繰つては、咽喉をキウの、獲物を占め、一門一家の繁昌を企むやうな、ソンな都作の計へお嬢さんを嫁られるもんか。

否、私が背かないわ、とお蔦をつかまへて談ずる處へ、熱い湯だつた、と幾干か氣色を直して、がたひし、と隣つて來た主稅に、一寸お前さん、大丈夫なんですか、とお蔦の方が念を入れたほどの勢。

二十三

何が大丈夫だか、主稅には唐突で、卽座には合點しかねるばかり、お蔦の方の意氣込が凄じい。

まだ、取留めた話ではなし、唯學校で見初めた、と眼らしく云ふ。其も、戀には丸木橋を渡つて落ちてこそ然るべきを、石の橋を叩いて、杖を支いて渡らうとする緣談だから、其處等聽合はせて歩行く中に、誰かの口で水を注せば、直ぐに川留めの洪水ほどに目を廻してお流れになるだらう。

漸然、何爲か、母子連で學校へ觀に行つた、と聞いただけで、お妙さんを觀世物にし、又爲れたやうで癪に障つた。然し物にはなるまいよ、と主稅が落着くと、否、私は心配です。何處を何う聞き廻つたつて、あの、お嬢さんに難癖を着けるものはありません。いづれ眞砂町樣へ言入れるに違ひますまい。それに河野と云ふ人が、他に取柄は無いけれど、唯難もしいのが押の强いことなんですから、一押二押で、惡くすると出來ますよ。出來るやうな氣がしてならない。私は何だか最うお妙さんが、べろ〳〵と嘗められる夢を見て、今夜にも寢て居て魘されさうで、お可哀相でなりません。貴郎油斷をしちや駄ですよ、と云つた——お蔦の方が、其晩毛蟲に附着かれた夢を見た。何時も河野の其の眉が似て居ると思つたから。——

尤も河野は、綺麗に細眉にして居たが、剃りづけませぬやう、と父樣の命令で、近頃太くして居るので、毛蟲ではない、臥蠶である。然るに此の不生產的の美人は、蠶の世を利するを知らずして、毛蟲の眉ふべきを恐れて居た、不心得と言はねばならぬ。

で、お蔦は、何ひ貴郎が、其癖、內々お妙さんに岡惚をして居るのでも可い、河野に添はせるくらゐなら、貴郎の令人夫にして私が追出される方が一層增だ、とまで極端に排斥する。

此の異體同心の無二の味方を得て、主稅も何となく賴母しかつたが、撰て風は何處を吹いて居たか、半月ばかりは、英吉も例になく顏を見せなかつた。

と一日、

[illegible]氏は居らるゝかね。」

應燈のやうな、然うかと云つて間違ひの無いやうな訪れ方をして、お源に名刺を取次がせた者がある。

主稅は、しかゝつて居た飜譯の筆を留めて、請取つて見ると、一寸心當りが無かつたが、どんな人だ、と聞くと、あの、瘡痕のおあんなさいます、と一番疾く目についた人相を言つたので、直ぐ分つた。

本名坂田禮之進、通り名をアバ大人、譏か早口な男がタの字を落した、ゆつくり言へばアバタ大人、執方でも能く通る。通りが可ければと言つて、源名を名刺に書くものはない。手札は立派に、坂田禮之進……傍へ羅馬字で、L. Sakata.

卽ち匿々の道學者先生である。

渠の道學は、宗教的ではない、倫理的、寧ろ男女交際的である。とともに、其の瘡痕と、細君が若うして且つ美であるのを以て、處々の講堂に於ても、演說會に於ても、番に聞えた君子である。

謂ふまでもなく道德圓滿、但其の細君は三度目で、前の二人とも若死をして、目下のが又顏色が近來、蒼い。

と云つて敢て君子の德を傷けるのではない、

が、要のない お饒舌をするわけではない。夫人は、自分にも二度まで夫人を殺しただけ、邊の數の三々九度、三度の松風、さゝんざの二十七度で、婚姻の事には馴れてござる。

處へ、名にし負ふ道學者と來て、天下此の位信用すべき媒妁人は少いから、奚も越も隔てなく口を利いて巧く纏める。從うて諸家の聞門に出入すること頻繁にして、時々眼らしい！ と云ふ風說を聞く。其の袖を曳いたり、手を握つたりするのが、所謂男女交際的で、此の男の餘德であらう。尤も出來た論はない。蓋し爲ざるにあらず能はざるなりでも何でも、道德は堅固で通る。於戲乎、品行方正、御媒妁人でも食つて行かれる……

二十四

道學先生の、其の坂田禮之進であるから、少くともめ組が出入りをするやうな家庭？ へ顏出しをする筈がない。と一度は怪んだが、偶然河野の叔父に、同一道學者何某の有るのに心付いて、主稅は思はず眉を寄せた。

諸家お出入りの媒妁人、或意味に於ける地者稼の冠たる大家、扨は、と早やお妙の事が胸に應へて、先づ兎も角も二階へ通すと、年配は五十ばかり。推しものゝ疫痕は一日見て氣の毒な程で、然も黑い。字義を以て論ずると月下氷人でない、庵下炭燒であるが、身體よく、カラアが白く、磨込んだ顏が照々と光る。地の透く髮を一筋梳に整然と櫛を入れて、髭の尖から小鼻へかけて、ぎら〳〵と油ぎつた處、如何にも內君が病身らしい。

扨て、お初にお目に懸りまする、如何でごわりまするか、益々御飜譯で、と嗽食ふに困つて切々稼ぐだらう、と謂はないばかりな言を、けろりとして世辭に云つて、衣兜から御殿持の煙草入、薄色の鐵の派手な鹽瀨に、鐵扇かづらの浮織のある、近頃行はるゝ洋服持。何處のか媒妁人した御樣女の贈物らしく、貴つた時の移香を、今恁く中古に草臥れても同一香の香爪で、追かけ追かけ香はせてある持物を取出して、氣になるほど爪の伸びた、湯が嬉らしい手に、短い延の銀煙管、何か目出度い薄つぺらな彫のあるのを控へながら、先づ一ツ奥齒をスッと吸つて、寬然と構へた處は、生命保險の勸誘も出來さうに見えた。

甚だ突然でごわりまするが、酒井俊藏氏合續の儀で……ごわりまして、と又スッと齒せゝりをする。

それ、えへん！ と云へば灰吹と、諸國鎭力第一義に有るけれども、何にも御馳走をしない人に、假ひ嗅が葱臭からうが、干蟹の纖維が挾つて居さうであらうが、お楊枝を、と云ふは無禮に當る。

其處で、止むことを得ず、むず〳〵する口を堪へる下から、直ぐに、スッと又候風を入れて、でごわりまするに就いて、恁ぞうな事は、餘り正面から申入れまするよりと、考へることでごわりまする……と搔つまんで謂へば、自分は未だ一面識も無いから、門生の主稅から紹介をして貰ひたいと言ふのである。

南無三、橋は渡つた、何時の間にか、お妙は試驗濟の合格になつた。

今は表向に緣談を申込むばかりに爲たらしい。其に、自分に紹介を求めるのは、英吉に反對した廉もあり、主稅は面當をされるやうに撰つたく思つたばかりか、少からず敵の機敏に、不意打を食つたのである。

否、お斷り申しませう、英吉君に難癖のある譯ではないが、河野家の理想と言ふものが根も葉も凋げて氣に入らない。餘所で紹介をお求めなさるなり、又酒井先生は紹介の有り無しで、客の分陽をするやうな人ではないから、—直接にお話しなすつて、御樣があれば纏る分、心

に謂しとしない事に、名刺一枚御荷擔は申兼ぬる、と若武者だけに逃つてかゝると、其分は百も合點で、戰場往來の古兵。

取りあへず、スースーと齒をすゝつて、ニヤニヤと笑ひかけて、何か合機お身の上に就いて、下聽をするのが、御贊成なかつたとか申すことでごわりましたな。御設に因れば、好いた女なら娼妓でも（と少しおまけをして、）構はん、死なば諸共にと云ふ。いや、人生意氣を重んず、（ト齒をすゝつて）で、ごわりまするが、世間もあり親もあり……

と是から道學者の面目を發揮して、何野のために其の理想の、道義上完美にして非難すべき點の無いのを說くこと數千言。約半日にして一先づ日暮前に立歸つた。雜と半日居たけれども、飯時を避けるなぞは、さすがに馴れたものである。

二十五

客が來れば妻を隱すお葛が內に居るほどで、道學先生と太刀打して、議論に勝てよう道理が無い。主稅の意氣づくで言ふことは、唯禮之進の齒ですゝられるのみであつたが、厭なものは厭だ、と城を枕に討死をする態度で、少々自棄氣味の、酒井先生へ紹介は斷然、お斷り。

其處を一つお考へ直されて、と言を殘して歸つた後で、アバ大人が嫁約では病の事。とお妙の顏が蒼くなつて殺されでもするやうに、酒も飲まないで屈託をする、とお葛はお葛で、かくまつてあつた姬君を、輦を合圖に首討つて渡せ、と懸合はれたほどの驚き加減。可愛い夫が可惜しがる大切なお主の娘、成らば身替りにも、と云ふ逆上せ方。凡てが淨瑠璃の三の切を手本だが、憎くはない。

さあ、貴郎、然うしていらつしやる處ではありません、早く眞砂町へおいでなすつて、先生が何なら奧樣まで、あんな許へは御相談なさいませんやうに、お輕みなさらなくッちや不可ません。一寸、羽織を着換へて、と肩筒をがたりと引いて、アゝ、しばらく御無沙汰なすつた、明日め組が參りますから、何ぞお土產をお持ちなさいまし、先生は薩張したものがお好きだ、と云ふし、彼奴が片思ひになるやうに鮪が丁度可い、と他愛もない。

藁談の前へ立つて、軽口なんぞ言ふことは、唯禮之進の齒ですゝられるのみであつたが、厭なものは厭だ、と城を枕に討死をする態度で、少々自棄氣味の、酒井先生へ紹介は斷然、お斷り。

馬鹿を云へ、藁談の前へ立つて、軽口なんぞ言ふことは、唯禮之進の齒ですゝられるのみであつたが、厭なものは厭だ、と城を枕に討死をする態度で、少々自棄氣味の、酒井先生へ紹介は斷然、お斷り。

利かうものなら、己の方が勘當だ、そんな先生でないのだから、と一言にして斷ねられた、柳橋の策不被用焉。

又考へて見れば、道學者の說を持たずとも、河野家に不都合はない。英吉とても、唯些とだらしの無いばかり、其に結婚すれば自然治まる、と自分も云へば、然もあらう。人の前で、母樣と云はうが、父樣と云はうが、道義上敢て差支はない、却つて結構なくらゐである。

其の是を辯ずる所以は……曰く……言ひ難しだから、表向きは何處へも通らぬ。

困つたな、と腕を組めば、困りましたねえ、とお葛も鬱ぐ。

此處へ大なる禍言を齎し來つたのはお源で。

手廻りの使ひに遣つたのに、大分後れたにもかゝはらず、水口の戸を、がたひし勢よく、唯今歸りました、あの、御新造樣、大丈夫でございます。

明後日出來るのかい、とお葛がきりもりで夏の掛卷に、と思つて古浴衣の染を拔いて形を置かせに遣つてある、紺屋へ催促の返事か、と思ふと、然うでない。

此の忠義ものは、二人の憂を憂として、紺屋から歸りがけに、千載もの、風呂敷包を持つたまゝ、內の前を一度通り越して、見附へ出て、土手際の賣卜者に占て貰つた、と云ふのであつた。

對手は學士の方ですつて、それまで申して占

て貰ひましたら、迚も緣は無い斷念めものだ、と謂ひましたから、私は嬉しくつて、三錢の見料へ白銅一つ發奮みました。可い氣味でございますと、獨りで喜んでアハアハ笑ふ。

まあ、嬉しいぢやないか、よく、お前、お孃さんの年なんか知つて居たね、と云ふと、勿怪な顏をして、否、誰方のお年も存じません。お葛は腑に落ちない容子をして、賣卜者は、年紀を聞きやしないかい。えゝ、聞きましたから私の年を謂つて遣りました。

當然よ、對手が學士でお前ぢや、と切りかねて主稅が云ふのを聞いて、目を睜つて、しばらくして、えゝ！　口惜いと、臺所へ逃込んで、賣卜屋の奇生め、どた〳〵どた。

二人は顏を見合せて、漸々に笑が出た。

すぐにお葛が、新しい半襟を一掛繪に遣つて、其の晩は市が榮えたが。

二三日經つて、兎も角、其れとなく、お妙がお持たせの重箱を返しかた〳〵、土產ものを持つて、主稅が眞砂町へ出向くと、半憎、先生はお留守、令夫人は御墓參、お妙は學校のひけが遲かつた。

二十六

假に其の日、先生なり奧方なりに逢つた處で、緣談の事に就いて、兎角う謂ふつもりでなく、又言はれる筋でもなかつたが、久濶振ではあり、誰方も留守と云ふのに氣拔けがする。今度來た玄關の書生は馴染が薄いから、卷莫の吸殼彈山な火鉢を頻に突着けられても、興に乘る話も出ず。しかし此の一兩日に、坂田と云ふ道學者が先生を訪問はしませんか、と尋ねて、來ない、と聞いただけを取柄。土產ものを包んで行つた風呂敷を疊みもしないで突込んで、見ッともないほど袂を膨らませて、花乎して歸りがけ、其の橫町の中程まで來ると、早瀨さん御機嫌宜しう、と頗興に馴々しく聲を懸けた者がある。

玄關に居た頃から馴染の車屋で、見ると障子を橫にして眺い日當りを遮つた帳場から、ぬい、と顏を出したのは、酒井へお出入りの其の車夫。

應と立停まつて一言二言交す矢手に、主稅は不圖心付いて、もしや此頃、先生の事だの、お嬢さんの事を聞きに來たものはないか、と聞くと、月はじめにモオニングを着た、瘦瘦のある立派な且那が。

來たか！　（い、、お目出たい話なんだからこそとばかり樣子を聞かせな、とおつしやいましてね。終にや、き樣、お伴をするだらう、懸りつけの醫者は何處だ、とお尋ねなさいましたつけ。

臺所から、筒袖を着た女房が、ひよつこり出て來て、おやまあ早瀨さん、と笑ひかけて、否、やどでも此處が御來公と存じましてね、最う最う賞めて賞めて賞め拔いてお聞かせ申しましてございますよ。お孃樣も近々御緣が極りますさうで、おめでたう存じます、えへゝ、と燥いだ。

餘計な事を、と不興な顏をして、不愛想に別れたが、何も車屋へ搜りを入れずともの事だ。又其にしても、モオニング着用は何事だと、苦々しき一方ならず。

曲角の濱物屋、此處等へも探偵が入つたらうと思ふと、筋向ひのハイカラ造りの煙草屋がある。此の亭主もベラ〳〵お饒舌をする男だが、同じく申上げたらう、と通りがゝりに睨むと、腰かけ込んだ學生を對手に、其の又金齒の目立つ事。

內へ歸ると、お葛はお葛で、其の晩出直して、今度は自分が賣卜の前へ立つと、此の緣は屹と結ばる、と易が出たので、大きに鬱ぐ。

尤も賣卜者も如才はない。お源が行つたのに

較べれば、容子を見ただけでも、お蔦の方が輔
ばるに違ひはないから。
一日措いて、主殺が自分産まれの然る學校の
授業を濟まして歸つて來ると、門口にのそりと
立つて、頤をなでながら、じろ〳〵門札を視め
て居たのが、坂田禮之進。
早や此處から面をスーと吸つて、先刻からお
待ち申して――は些と變だ。
扨は誰も物申に應ふるものが無かつたのであ
らう。女中は外出で？　お蔦は隱れた。――
無人で失禮。さあ、何うぞ、と先方は編上靴で
手間が取れる。主殺は氣早に靴を脱いで、編紐
紛に、突然二階へ駆上る。段の下の扉の蔭から、
そりやこそ且那樣。と、によつと出た、お源を見
ると、取次に出ないも道理、勝手働きの玉襷、
長刀小脇に掻込んだりな。高箒に手拭を被せた
のを、柄長に構へて、逆上せた顔色。
馬鹿め、と喰出して飛上る後から、稍あつて、
道學先生、のそり〳〵。
二階の論判一時に餘りけるほどに、雷樣の
時の用心の線香を芬とさせ、居間から顯はれた
のはお蔦で、艾はないが、禁眼は心ゆかし、
片手に煙草を一撮。拔足で玄關へ出て、禮之
進の靴の中へ。此の燃草は利が可かつた。嬌と
煙が、むら〳〵と立つ狼煙を合圖に、二階から
降りる氣勢、騰然路地へお蔦が逃込むと、未だ
其の煙は消えないので、雜水を撒きかけて此の
一藝に見惚れたお源が、さつしたりと、手でし
やくつて、ざぶりと掛けると、をかしな皮の鬼
がして、其處等中水だらけ。

二十七

夫れ熟々、史を按ずるに、城なり、陣所、戰
場なり、軍は歸の出る方が大概敗ける。此の
日、道學先生に對する語學者は勝利でなく、禮
之進の靴は名譽の負傷で、揭々と引摩げた。
所以如何となれば、お猴とあれば最早紹介は
求めますまい。其のかはりには、當方から酒井
家へ申入れまする、此の緣談に就きまして、貴
方から先生に向つて、河野に到する御非難をな
されぬやう。御意見は御意見、感情問題は別と
して、是だけはお願ひ申したいでごわりまする
が、と嬋曲に言ひは言つたが、露骨に遣つたら、
邪魔をする勿であるから、御懸念無用と、男ら
しく判然答へたは可いけれども、要するに釘を
刺されたのであつた。
禮之進の方でも、酒井へ出入りの車夫まで搜
を入れた程だから、其の分は隨分手が廻つて、
從つて、先生が主殺に對する信用の點も、情愛
のほども、子の如く、弟の如きものであるこ
とへ分つたので、先んずれば人を制すで、ぴ
たりと其の口を塞へたのであらう。
禮口は決して利かない、と早瀬は自分も言つ
たが、又此の門生の口一ッで、見事、禮る緣も
破ることは出來たのだつたに。
此處で賽は河野の手に在矣。兎も角もソレ勝
負、丁か半かは酒井家の意志の存する處に因
るのみとぞ成んぬる。
先生が不承知を言へばだけれども、諾、とあ
れば其まで。お姉は河野英吉の妻になるのであ
る。河野英吉の妻にお姉がなるのである與。
お蔦さへ、夢慮ふより寧ろ口惜がつて、ヤイ
ヤイ騒ぐから、主殺の、とつおいつは一通りで
はない。何は措いても、餘所ながら眞砂町の樣
子を、と思ふと、元來お蔦あるために、何となく
疳持つ足、思ひなしで敷居が高い。
で何となく遠のいて、漸々二日前に、久しぶ
りで御機嫌窺ひに出た處。惡くすると、最う禮
之進が出向いて、緣談が姑まつて居さうな中へ、
急に足近くは我ながら氣が咎める。
愚圖々々すれば、貴郎例に似合はない、きり
きりなさいなね――とお蔦が歯痒がる。
勇を鼓して出掛けた日が、先生は、來客があ

つて、お話中。玄關の書生が取次ぐ、と（この
次、來い）は、ぎよつとした。さりとては曲がな
い。內證のお蔦の事、露顯にでも及んだかと、
まさかとは思ふが氣怯れがして、奥方にも一寸
挨拶をしたばかり。其の挨拶を受けらるゝ時の
奥方が、嬋然として針仕事の、氣高い、奥床し
い、懷しい姿を見るにつけても、お蔦に思較
べて、愈々後暗さに、あとねだりを被成らない
なら、久しぶりですから一銚子、と莞爾して仰
せある、優しい顏が、眩しいやうに後退して、
いづれ又、と逃出すが如く歸りしなに、お客は
誰？……と竊と玄關の書生に當つて見ると、坂
田禮之進、嘘、止んぬる哉。
しばらくは早瀬の家內、火の消えたる如しで、
憂慮しさの餘り、思切つて、更に眞砂町へ何つ
たのが、即ち巖師の緣日であつたのである。
些と、恐怖の形で、先づ玄關を覗いて、書
生が燈下に讀書するのを見て、又お邪魔に、と
頭から遠慮をして、扨て、先生は、と尋ねると、
前刻御外出。其樣は、と云ふと、少々御風邪
の氣味。それでは、お見舞に、と奥に入らうと
する緣側で、女中が、唯今すや〳〵と御寢になつ
ていらつしやいます、と云ふ。
悄々玄關へ戻つて、お鑑さんは、と取つて置
きの輯みの綱を引いて見ると、是は、以前泰公
して居た女中で、四谷の方へ緣附いたのが、一
年ぶりで無沙汰見舞に來て、一晩御厄介になる
筈で、お夜食が濟むと、奥方の仰に因り、お
鑑さんのお伴をして、巖師の緣日へ出たのであ
つた。
それでは私も通の方を、いづれ後刻、と是
を機に。出しなに又念のために、其後、坂田と
云ふのは來ませんか、と聞くと、アバ大人です
か、と書生は早や渾名を覺えた。はゝゝ、來ま
したよ。今日の午後。

男金女土

二十八

主殺は、禮之進が早くも二度の魁を働いたの
に、少なからず後先を制せられたのと――搗て
加へてお蔦の一件が暴露たために、先生が太
く感情を損ねられて、故とにも然う爲れる與、
と思はれないでもない――玄關の疊が冷く堅
いやうな心持とに、屈託の腕を拱いて、其處
ともなく横町から通へ出て、件の漬物屋の前
を通ると、向う側が唯ある大構の邸の黑板塀
で、此間しばらく、三方から緣日の空が取圍ん
で押搖がす如く、きら〳〵と星がきらめいて、
それから富坂をかけて小石川の樹立の梢へ暗く
なる、一寸人足の途絶え處。
東へ、西へ、と置場處の間數を示した標杙が
仄白く立つて、車は一臺も無かつた。眞黑な溝
の緣に、野を焚いた跡の濕つたかと見える磯風
呂敷を開いて、式の如き小灯が、夏になつても是
ばかりは蟲も寄るまい、明の果敢なさ。三東五
東附木を並べたのを前に置いて、手を支いて、
縺れ髮の頸清らかに、襟脚白く、女房がお辭儀
をした、仰向けになつて、踏反つて、泣寐入りに
寐入つたらしい嬰兒が懷に、膝に縺つて六歳
ばかりの男の子が、指を銜へながら往來をきよ
ろきよろと視める背後に、母親の其の背に凭れ
かゝつて、四歳ぐらゐなのが最う一人。
一陣風が吹くと、委も店も吹き消されさう
で哀な光景。浮世の影繪が鬼の手の機關で、月
なき辻へ映るのである。
然りながら、緣日の神佛は、寒露の降る中なら
ず、恁る處にこそ、影向して、露になつれそ、夜
風に堪へよ、と母子の上に袖笠して、遠音に觀世
ものゝ囃子の聲を打聞かせ給ふらむよ。
健在なれ、御身等、今若、牛若、生立てよ、
と竊に河野の一門を呪つて、主殺は秋から憂然

と登する松の葉を投げて、足疾く其の前を通り過ぎた。

不圓例の燃草屋の金齊の亭主が、箱火鉢を前に、腕を反らせて、煙管を逆に吸口でぴたり戸外を指して、ニヤリと笑つたのが目に留くと同時に、四五人店前を塞いだ書生が、此方を見向いて、八の字が崩れ、九の字が分れたかと一同に立腹いで、よう、と聲を懸ける、萬歳、と云ふ、叱、と應へた者がある。

向うの眞砂町の原は、眞中あたり、火定の濟んだ跡のやうに、寂しく中空へ立つ火氣を包んで、黒く輪になつて人集り。寂寞した其の原のへりを、此の時通りかゝつた女が二人。

主税は一目見て、胸が騒いだ。右の方のが、お妙である。

リボンも飄も單に白く、かすりの羽織が夜の靄に、ちら〳〵と蝶が行交ふ歩行ぶり、紅ちらめく袖は長いが、不踏着の麥は、年も二ツ三ツ長けて大人びて、愛らしいよりも艶麗であつた。

風呂敷包を左手に載せて、左の方へ附いたのは、大一番の圓髷だけれども、花簪の下になつて、脊が低い。渾名を鮎と云つて、ちよんぼりと目の丸い、頬に見上げ皺の夥多しい婦で、主税が玄關に居た頃勤めた女中どん。

心懸けの好い、實體もので、身が定まつてからも、恁うした御機嫌うかゞひに出る、忠、お主の娘に引添うて、身を固めて行く態の、其の圓髷の大きいのも、恁る折から輒もしい。

燃草屋の店でくる〳〵ばち〳〵、一打ばかりの眼球の中を、仕切つて、我身でお妙を遮るやうに、主税は鏡中へ立つたから、偖り人目に立つので、此方から逃んで出て、聲を掛けるのは憚づて差控へた。

而してお妙が氣が付かないで、すら〳〵と行過ぎたのが、主税は何となく心寂しかつた。つい前の年までは、自分が、如彼して附いて出たに。

とリボンが靡いて、お妙は立停まつた。

肩が離れて、大きな白足袋の色新しく、附木を賣る女房のあはれな灯に近いたのは圓髷で。實直ものゝ丁寧に、屈み腰になつて手を出したは、志を惠んだらしい。親子が揃つて額づいた時、お妙の手の巾着が、羽織の紐の下へ入つて、麥は辻の暗がりへ。

書生たちは、そろ〳〵と燃草屋の軒を出て、青しく星を仰いだのである。

二十九

○男金女土大に吉、子五人か九人あり衣食滿ち富貴にして——

男金女土こそ大吉よ

衣食みち〳〵……

と歌の方も衣食みち〳〵のあとは、虫蝕と、雨染みと、摺剝けたので分らぬが、上に、裳平と小町のやうなのが對向ひで、前に土器を捻へると、萬歳烏帽子が五人ばかり、づらりと狩伏した處が描いてある。如何樣にも大吉に相違ない。

主税は、お妙の背後姿を見送つて、風が染みるやうな懷手で、俯向き勝ちに藥師堂の方へ歩行いて來て、愛に露店の中に、三世相がひつくりかへつて、是見よ、と言はないばかりなのに目が留まつて、漫に手に取つて、相性の處を開けたのであつた。

其の英吉が、金の性、お妙が、土性であることは、豫めお蔦が美しい指の節から、寅卯戌亥と繰出したものである。

半吉でもある事か、大に吉は、主税に取つて、一向に芽出度くない。勿論、如何に迷へば、と云つて、三世相を氣にするやうな男ではないけれども、自分は兎に角、先生は言ふに及ばずながら、奥方は何うかすると、一白九紫を口にされる。同じ相性でも、始わるし、中程宜し

からず、未覺束なしと云ふ緣なら、幾干か破談の方に頼みはあるが……衣食滿ち滿ち富貴……は嘸つた。

あみならず、子五人か、九人あるべしで、平家の一門、藤原一族、愈よ天下に蔓らむずる根ざしが見えて容易でない。

既に過日も、現に今日の午後にも、禮之進が推參に及んだ、と云ふきつさきなり、何となく、此の緣、纏まりさうで、一方ならず氣に懸る。

あゝ、先生には言はれぬ事、奥方には遠慮をすべき事にしても、今しも原の前で、お妙さんを見懸けた時、袂を懸けて呼び留めて、もし河野の話が出たら、私は厭、とおつしやいよ、と一言いへば可かつたものを。

大道で話をするのが可厭しければ、其邊の西洋料理へ、と云つても構はず、鳥居の中には藪蕎麥もある。さしむかひに云ふではなし、圓髷も附添つた、其の女中とても、長年の、犬鷹朋輩の間柄、何の遠慮も仔細も無かつた。

お妙さんが又、あの日で笑つて、お小遣はあるの？　とは冷評しても、何處かへ連れられるのを厭味らしく考へるやうな間ではないに、ぬかつたことをしたよ。

なぞと取留めもなく思ひ亂れて、凝と其の大吉を瞰めて居ると、次第々々に插畫の殿上人に髭が生えて、忽ち尻尾のやうに足を投げ出したと思ふと、横倒れに、小町の膝へ凭れかゝつて、でれ〳〵と溶けた顏が、河野英吉に、寸分違はぬ。

「且那如何でございます。えへゝ、」と、かんてらの灯の藍から、氣味の悪い唐突の笑聲は、當露店の亭主で、目を細うして、額で脫んで、

「大分御意に召しましたやうで、えへゝ。」

「幾干だい。」

とぎよつとした主税は、空で値を聞いて見た。

「然うでげすな。」

と古帽子の庇から透かして、搗めつゝ、

「二十錢にいたして置きます。」と天窓から十倍に吹懸ける。

硝時かんてらが煽る。

主税は思はず三世相を落して、

「高價い！」

「お品が少うげして、へゝゝ、當節の九星早合點、陶宮手引草など、云ふ活版本とは違ひますで、」

「何だか知らんが、散々汚れて引懸ぎれて居るぢやないか。」

「でげすがな、繪が整然として居りますでな、插繪は秀麗齋貞秀で、是や三世相かきの名人でげす。」

と出放題な事を云ふ。相性さへ惡かつたら、主税は二十錢の其二倍でも敢て惜くはなかつたらう。

「偖り高價いよ。」と立ちかける。

「お幾干で？　えゝ、且那。」

と引据ゑるやうに脈へて云つた。

「半分か。」

「へい。」

「其だつて廉くはない。」

三十

亭主は膝を抱いて反身になり、禪の問答持つて來い、と云ふ高慢な額色で、

「半價値は酷うげす。植木屋だと、ぢやあ鉢は要りませんか、と云つて手を打つんでげすがな。書だけ引剝して差上げる譯にも參りませんで。何うぞ一番御奮發を願ひてえんで。五錢や十錢、且那方にや何だけの御散財でもありやしません。へゝゝへゝ、」

「一體高過ぎる、無法だよ。」

と主税は其の言種が憎いから、從々買ふ氣は出なくなる。

「でげすがな、これから切通の坂を一ツお下り

になりや、五兩と十兩は飛ぶんでけせう。其處で以て、へゝゝ、相性は聞きたし年紀は祕したしなんて寸法だ。えゝ、旦那、三世相は御覽に御求め下さいな。」

愈々むつとして、

「要らない。」と、又立たうとする。

「ぢや最う五錢、五百、たつた五錢。」

片手を開いて、肱で肩癖の手つきになり、ばもばらと主税の目前へ揉み立てる。

憤然として衝と立つた。主税の肩越しにきらりと飛んで、かんてらの煙つた明を切つて玉の如く、古本の上に異彩を放つた銀貨があつた。

同時に、

「要るものなら買つて置け。」

と鍵のある、澄とした聲がかゝつた。

主税は思はず身を窘めた。帽子を拂つて、は、と手を下げて、

「先生。」

露店の亭主は這出して、慌てゝ古道具の中へ手を支いて、片手で銀貨を壓へながら、きよとんと見上げる。

茶の中折帽を無造作に、黒地に茶の千筋、平お召の一枚小袖。黒斜子に丁子巴の三つ紋の羽織、紺の無地獨上博多の帶腰すつきりと、片手を懐に、裕短な袖を投げた風采は、丈高く痩せぎすな肌に粹である。然も上品に衣紋正しく、黒八丈の襟を合はせて、色の淺黒い、鼻筋の通つた、目に恐ろしく威のある、品のある、眉の秀でた、但其の口許はお妙に肖て、嬰兒も懐くべく無量の愛の含まるゝ。

一寸見には、彼の令嬢にして、其の父ぞとは思はれぬ。令夫人は許嫁で、お妙は先生が未だ金銭であつた頃の若木の花。夫婦の色香を分けたのである、とも云ふが……

酒井は何處か小酌の歸途と覺しく、玉樹一人緣日の四邊を拂つて彳んだ。又何時か、人足も稍々此の邊に疎になつて、藥師の御堂の境内のみ、其中空も汗するばかり、油燈が低く、露店の大傘を壓して居る。

會釋をして纏に擦げた、主税の顔を、其の威のある目で屹と見て、

「少いものが何だ、端錢を彼是人中で云つて居る奴があるかい、見つともない。」

と言ひ棄てゝ、直ぐに歩を移して、少し肩の昇つたのも、霜に堪へ、雪を忍んだ、海の樹振は潔い。

呆氣に取られた顔をして、亭主が、づゝと乘出しながら、

「へい。」

とばかり怯えるやうに差出した三世相を、ものをも言はず引攫んで、追縋つて跡に附くと、早や五六間前途へ離れた。

「何うも恐入ります。えゝ、何、別に入用なのぢやないのでございますから、はい、」

と最初の一喝に怯氣々々ものの、申譯らしく獨言のやうに言ふ。

酒井は、すらりと懐手のまゝ、斜めに見返つて、

「用らないものを、何だつて價を來くんだ。素見すのかい、お前は、」

「……」

「素見すのかよ。」

「えゝ、別に、」と俯向いて怨めしさうに、三世相を揉み、且つ捻る。

少時して、酒井は不圖歩を停めて、

「早瀬。」

「はい。」

と此の返事は嬉しさうに聞えたのである。

三十一

名を呼ばれるさへ嬉しいほど、久闊懸違つて居たので、いそ〳〵懐しさうに擦寄つたが、續いて云つた酒井の言は、太く主税の胸を刺した。

た。

「何處へ行くんだ。」

是で突放されたやうになつて、思はず後退りすること三尺半。

此の前の、原一つ越した横町が、先生の住居である。其方に向つて行くのに、從つて歩行くものを、「何處へ行く。」は情ない。散々の不首尾に、云ふ事も、しどろになつて、

「散歩でございます。」

「故々、此處の緣日へ出て來たのか。」

「否、實は……」

と聊か取附くことが出來た……

「先刻、御宅へ伺ひましたのですが、御留守でございましたから、後程に又參りませうと存じまして、其間此の邊にぶらついて居りました。先生は、」

酒井がづゝと歩行き出したので、たじ〳〵と後を慕うて、

「何方へ？」

「俺か。」

「ずつとお歸宅でございますか。」

知れ切つたやうな事を、つなぎだけに尋ねると、此の答へが又案外なものであつた。

「俺は、何だ、是からお前の處へ出掛けるんだ。」

「えゝ！」と云つたが、何は措いても夜が明けたやうに勇み立つて、

「ぢや、あの此方から……角の電車へ、」と自分は一足引返したが、慌てゝ又先へ出て、

「お車を申しませうか。」

とそは〳〵する。

「水道橋まで歩行くが可い。あゝ、酔醒めだ。」

と、衣紋を搦つて、ぐつと袖口へ突込んだ、引緊めた腕組になつたと思ふと、林檎の綺麗な、芭蕉實の芬と薫る、姫の眞蒼な、明い水菓子屋の角を曲つて、猶豫はず衝と横町の暗がりへ入つた。

下宿屋の丸斯は遠し、顔が見えないから幾千か物が云ひよくなつて、

「奥さんが、お風邪氣でいらつしやいますさうで、不可ませんでございます。」

「逢つたか。」

「否、すや〳〵お寐だと、承りましたから、御遠慮申しました。」

「妙は居たかい。」

「四谷へ緣附いて居ります、先のお光をお連れなさいまして、緣日へ。」

「然うか、嬢が出歩行くやうぢや、大した御容態でも無しさ。」

と少し言が弱らいで來たので、主税は吻と呼吸を吐いて、はじめて持扱つた三世相を懐中へ始末をすると、亭岐殿坂の下口で、急な不意打。

「お前の許でも皆健康か。」

又冷りとした。内には女中と……自分ばかり、（皆健康か。）は尋常事でない。漠然、よもや、と思ふから、其の（皆）を解早であらう、と自分でも疑つて、

「はい？」

と、聞直したつもりを、酒井が其まゝ聞流して了つたので（然やうでございます。）と云ふ意味になる。

で、安からぬ心地がする。突當りの砲兵工廠の夜の光景は、樂天的に視めると、尚鳥の花盛を幻燈で中空へ顯はしたやうで、森々と、森々、響が、吾妻橋を渡る事かと聞爲さるゝが、悲觀すると、煙が黄に、炭が黑い。

通りかゝる時、蒸氣が眞白な瀧のやうに横ざまに流つて路を塞いだ。

やがて、水道橋の袂に着く——酒井は其の雲に覆して、悠々として、早瀬は霧に包まれて、ふら〳〵して。

無言の間、吹かして居た、香の高い卷莫を、煙の縮んだまゝ、ハタと其處で酒井が棄てると、茶氣は、こゝで露になつて、ジューと火が消える。

萠黄の光が、ぱら〳〵と晴に散ると、炬の如く輝く燈が、人を乘せて街と外濠を流れて來た。

電車

三十二

河野から酒井へ申込んだ、其の緣談の事の發では無いが、同じ此の十二日の夜、道學者坂田禮之進は、渠が、主なる發企者で且つ管事である處の、男女交際會――又の名、家族懇話會――委しく註するまでもない、其の向の夫婦が擬組か、一處に相會して、飲んだり、食つたり、饒舌つたり……と云ふと尾籠になる、紳士貴婦人が互に相親睦する集會で、議政治に涉ることは少ないが、宗教、文學、美術、商劇、音樂の品定めが其處で成立つ。現代に於ける思潮の淵源、天堂と食堂を兼備へて、薔薇薫じ星の輝く美的の會合、とあつて、おしめと礫を念頭に置かない倶しであるから、留守では、芋が焦げて、小兒が泣く。町内迷惑な……其の、男女交際會の軍用金、諸處から取集めた百有餘圓を、馴染の會席へ支拂ひの用があつて、夜、モオニングを着て、扨て電燈の明い電車に乘つた。

「アバ大人ですか、ハ、、今日の午後。」と酒井先生方の書生が主稅に告げたのと、案ずるに同日であるから、其の編上靴は、一日に市中の何のくらゐに足跡を印するか料られぬ。御苦勞千萬と謂はねばならぬ。

走哲曰く、時は黄金である。そんな風潰しをしないでも、交際會の會費なら、其場で請取つて直ぐに拂ひを濟ましたら好さゝうなものだが、一先づ手許へ引取つて、更めて夫子自身を勞するのは？　知らずや、此の勘定の時は、席料なしに、其家の何とか云ふ姉さんに、茶の給仕をさせて無錢で手を握るのだ、と云つたものがある。世には演劇の見物の幹事をして、其を餘に、俳優と接吻する貴婦人もあると云ふから。

尤も是は、嘘であらう。が、會費を衣兜にして、電車に乘つたのは事實である。

「えゝ、込合ひますから御注意を願ひます。」

禮之進は提革に掴りながら、人と、車の動搖の都度、成るべく操りのポンチたらざる態度を保つて、而して、乘合の、肩、頬、耳などの透間から、痘痕を散らして、日を配つて、鬢、瞥、庇、目つきの色々を、膳の上の箸休めの氣で、ちびり〳〵と獨的の格。あゝ、江戸兒は此の味を知るまい、と乘合の婦の移香を、樂みさうに、鼻をスーと遣つて、片手で頭を撫でて居たが、車掌の其の御注意に、はと心付くと、俄然として、慄然として、膚寒うして、腰が輕い。

途端に引込めた、年紀の少い半纏着の手ッ首を、卽座の冷汗と取つて置きの脇汗で、ぬらめいた手で、夢中に確乎と引掴んだ。

道學先生の德孤ならず、隣に掏摸が居たさうな。

「……」

と、わなゝいて、氣が上づつて、唯睨む。

對手は手拭も被らない職人體のが、ギックリ、髮の搖れるほど、頭を下げて、

「御免なすつて、」と蹙むやうに哀憐を乞ふ目づかひをする。

「出、出しをらう、」

と震へ聲で、

「馬鹿！」と一つ睨めつけた。

「何うぞ、御免なすつて、眞平、へい……」

と革に縋つたまゝ、ぐつたりと成つて、惰氣返つた職人の狀は、消えも入りたいとよりは、寧然羅を恥ぢて、自分で惱つたやうである。

「コリャ、」と又怒鳴つて、滿面の痘痕を蠕かして、堪へず、握拳を擧げて其の横頰を、ハタと撲つた。

「あ、痛く、」

と横に身を反らして、泣聲になつて、

「酷、酷うございますね……且那、ア痛々、」

最一つ拳で、勝誇つて、

「酷いも何も要つたものか。」

映と立上る多人數の影で、月の前を黑雲が走るやうな電車の中。大事に革鞄を抱きながら、車掌が甲走つた早口で、

「御免なさい、何ですか、何ですか。」

三十三

カラアの純白な、髮をきちんと分けた紳士が、職人體の半纏着を引捉へて、出せ、出せ、と喚いて居るからには、其間の消息一目して瞭然たりで、車掌も些とも猶豫はず、無手と曲者の肩を握つた。

「降りろ――さあ、」

と一ツしやくり附けると、革を離して、階段と犯れかゝる。半纏着に又犯れ懸かるやうになつて、三人揉重なつて、車掌臺へ壓されて出ると、先から、がらりと扉を開けて、把手に手を置きながら、中を覗込んで居た運轉手が、チリン無しに丁度其處の停留所に車を留めた。

御嶽山を少し進んだ一ッ橋通を右に見る邊で、此街鐵は、是から御承知の如く東明館前を通つて兩國へ行くのである。

「少々お待ちを……」

と車掌も大事件の肩を摑まへて居るから、急いて、四五人押込まうとする待合はせの乘組を制しながら、後退りに身を反らせて、曲者を釣身に出ると、兩手を突張つて禮之進も續いて、どたり。

後からぞろ〳〵と七八人、我勝ちに見物に飛出たのがある。事ありと見て、乘らうとしたのも其のまゝ足を留めて、押取卷いた。二人ばかり婦も交つて。

外へ、其の人數を吐出したので、風が透いて、すつきり透明になつて、行儀よく乘合の膝だけは揃ひながら、思ひ〳〵に從向いて、硝子戸から覗く中に、片足膝の上へ投げて、丁子巴の羽織の裾を組合はせて、茶の其の中折を額深く、ふら〳〵坐睡りをして居たらしい人物は、酒井俊藏であつた。

けれども、禮之進が今、外へ出たと見ると同時に、明かに其の兩眼を睜いた瞳には、一點も睡さうな曇が無い。

惟ふに、乘合ひの藤ではあつたが、禮之進に目を着けられて、例の（益々御繕譯で。）を前置きに、（就きましては御緣女儀、）を場處柄も介はず辯じられよう恐があるため、計略玆に出たのであらう。但其の緣談を嫌つたと云ふ形跡は聊も見當らぬが。

「攫られたのかい。」

「はい、」

唯見ると、酒井の向ひ合はせ、正面を右へ離れて、丁度其の曲者の立つた袖下の處に主稅が居て、恁く答へた。

「何でございますか、騒ぎです。」

先生の前で、立騒いでは、と控へたが、門生が澄まし込んで冷淡に膝に手を置いて居るにも係らず、酒井はヅッと立つて、春高く車掌臺へ出かけて、此處にも立淀む一團の、彌次の上から、大路へ飛を出した……時であつた。

主客顚倒、曲者の手がポカリと飛んで、禮之進の痘痕は碎けた、火の出るやう。

「猿唐人め。」

あらう事か、あつと顔げたを腰へて退る、道學者の襟飾へ、斜かひに肩を突懸けて、横押にぐいと押して、

「何だ、何だ、何だ、何だと？　掏摸だ、盗賊だと？　クソを喰へ。ナニ其の、用意和のやうな汝が面を甜めろい！　さあ、何處に私が汝の紙入を掏つたんだ。

此方あ又、串戯ぢやねえ。込合つてる中たから、汝の足でも踏んだんだらう、と思つてよ。足ぐれえ踏んだにしちゃ、怒りやうが御大層だが、面を見りや、踉と大した違えは無えから、ははゝ、」

と夜の大路へ笑が響いて、

「汝の方ぢや、面を踏まれた分にして、怒りやがるんだ、と斷念めてよ。難有く思へ、日露取のお職人様が月給取に謝罪つたんだ。

何、川來た規則だか知らねえが、股ッたア出すなッてえ、肥満つた乳母どんが焦れッたがりやしめえし、肥味ッたらしい言分だが、其奴も承知で乗ってるからにや、他様の足を踏みや、引摺下される御法だ、と往生してよ。」

と、車掌にひよこと頭を下げて、

「へいこら、と下りて遣りや、何だ、掏摸だ。掏摸たア何でえ。」

又禮之進に突懸る。

三十四

「掏られた、盗られたッて、幾干ばかり臺所の小遣をごまかして来やあがつたか知らねえけれど、汝が其の面で、何うせなけなしの小遣だらう、落しつこはねえ。

へん、鈍漢。何の道、掏られたにや違えはねえが、汝が其の間抜けな風で、内から此處までを蔭口が有るもんかい、疾くの昔にちよろまかされて居やあがつたんだ。

さあ、お目通りで、着物を引掉つて神田兒の肩合を見せて遣らあ、汝が口説く歸ぢやねえ。から、見たつて目の潰れる憂慮はねえ、安心して切立の褌を拝みやあがれ。

えゝ怨う、念晴しを浸ました上ぢや、汝、何うするか見ろ。」

「やあ、風が變つた、風が變つた。」

と酒井は快く活に云つて、原の席に歸つた。

車掌臺からどや〳〵と客が引込む、直ぐ後へ——見張員に事情を通じて、事件を引渡したと思はれる——車掌が勢なく戻つて、がちやりと提革鞄を一つ揺つて、チヽンと遣つたが、まだ殘惜さうに大路に半身を乗出して人だかりの混々搭むのを、通り過ぎ狀に見て過む。

と錦帶橋の月の景色を、長谷川が大道具で見せたやうに、づらりと繋つて係留して居た幾つとない電車は、大通を廻り舞臺。事の起つた車内では、風説とりゞ〳〵。

あれは掏摸の術でございます。はじめに恐入つて居た樣子ぢや、確に梁をしたに違ひませんが、最う電車を下りますまでには同類の狀へすつこかしにして、證據が無いから逆捻ぢを遣るでございます、と小商人風の一分別ありさうなのが其の同伴らしい前垂掛に云ふ。此方では法然天窓の隱居樣が、七度搜して人を疑へぢや、滅多な事は謂はれんもので、なう。

然うおつしやれば、あの掏られた、と言ひなさる洋服を着た方も、をかしな御仁でございますよ。此娘の貴下、（と隣に腰かけた、孫らしい、豐肌した娘の膝を叩いて、）嘗へ、貴下、立つて居て一寸々々手をお觸りなさるでございます。御仁體が、御仁體なり、此の娘が恥かしがつて、お止しよ、お止しよ、と申しますから、何をなさる、と口まで出ましたのを堪へて居たのでございますよ。お止しよ、お祖母さんと、其の娘は又同じことを爰で云つて、ぽうと紅くなる。

法然天窓は苦笑ひをして……後からせゝるや

ら、前からは毛の生えた、大な足を突出すやら……など、淨瑠璃にもあつて、なう、昔、此の登り下りの乗合船では女子衆が怪しからず迷惑をしたものぢやが、電車の中でも遣りますか、なう、結句、掏摸よりは困りものぢやて。

駄目でさ、だつてお前さん、いきなり引摺り下ろして了つたんだから、それ、ばら〳〵一緒に大勢が飛出しましたね、よしんばですね、同類が居た處で、疾くの前、何處かへ、すつ飛んで居るんですから手係りはありやしません。然うで無くつて、一人も乗客が散らずに居りや、私達だつて關合ひは抜けませんや。巡査が來て、一應檢べるなんぞッて事に成りかねません。えゝ、後は何うなるッて、お前さん、掏摸は現行犯ですからね、證據が無くつて、知らないと云や、其までゝさ。又眞側に掏られたんだか何だか知れたもんぢやありません、どうせ間抜けた奴なんでさあね、と折革鞄を抱へ込んだ、何處かの中小僧らしいのが、隣合つた田舍の親仁に、尻上りに辯じたのである。

孰れ道學先生のために、祝すべき事ではない。

敢て人の憂を見て喜ぶやうな男では無いが、然りとて差當り如彼した中の禮之進のために、其の憂を憂として悲むほどの君子でも無からう。惡くすると、（狀を見ろ。）ぐらゐは云ふらしい主税が、風向きの惡い大人の風説を、耳を澄まして聞き取りながら、太く憂はしげな面色で。

實際、藤込んで居るのは何爲樂。

なく、主税を睨むが如くにして居ることを。

三十五

働くも道理、然うして電車の動くまゝに身を任せては居るものゝ、主税は果して何處へ連れらるゝのか、雲に乗せられたやうな心持がするのである。

尤も、藥師の繰日で一所になつて、水道橋から外濠線に乗つた時は、仰せに因つて飯田町なる、自分の住居へ供をして行つたのであるが、元來其の夜は、霧店の一喝と言ひ、途中の容子と言ひ、酒井の調子が凜として厳しくつて、豫て恩威並び行はるゝ師の君の、其の恩に預かれさうではなく、罰利生ある親分の、其の罰の方が行はれさうな形勢は、言はずともの事である。

つたから、電車でも片隅へ蹙んで、徒倖其處でも乗客が込んだ、人塵に成つて、眩い大日玉の光から、瓢を躱して免れて居たは可いが、さて、神樂坂で下りて、見附の橋を、今夜に限つて、高い處のやうに、危つかしく渡ると、件の寶卜者の行燈が、眞黒な石垣の根に、狐火かと見えて、急に土手の松風を聞く邊から、徐々足許が覚束なくなつて、心も暗く、吐胸を支いたのは、お蔦の儀。

偏に御目玉の可恐しいのも、何を祕さう繻子の帶に極つたのであるから、是より門口へかゝる……敢て、のろけるにしもあらずだけれども、自分の覚音は、聞覚えて居る。

其の覚音が、他の覚音と共に、浸まして音信れゝば、（お歸んなさい。）で出て來るは定のもの。分けて、お妙の事を、やきもき氣を揉んで居る處。其が爲に怎うして出向いた、眞砂町の樣子を聞き度さに、殊に、似たもの夫婦の聲、信玄流の沈剪の方では無いから、隠分鮮然と露れ兼ねない。

いざ、露れた場合には……と主税は冷汗にたつて、胸が躍る。

生憎例のやうに話もしないで、づか〳〵酒井が歩行いたので、兎角う云ふ間もなかつた、早や我家の路地が。

堪りかねて、先生と、呼んで、女中が寝て居ますと失禮ですから、一足！　と云ふが疾いか、

（お先へ）、は身體で出て、横ッ飛びに駈け抜ける内も、あゝ、我ながら拙い言分。

（待て！　待て！）

それ、扉が掛つた。

酒井は其處で足を留めた。

屹と立つて、

（曾から寐るやうな内へ、邪魔をするは氣の毒だ。他へ行かう、一緒に來な。）

で路が變つて、先生の爲るまゝ、鶯に擬はれたやうな思ひで乘つたのが、此の兩國行——

なか〳〵道學者の風說に就いて、善惡ともに、自から思慮を回らすやうな僉裕とては無いのである。

電車が萬世橋の交叉點を眞直ぐに貫いても、鶯は翼を納めぬので、さては此のまゝ隅田川へ流罪ものか、輕くて本所から東京の外へ追放に成らうも知れぬ。

と艱念の眼を閉ぢて首垂れた。

「早瀨、」

「は、」

「降りるんだ。」

一場展開した廣小路は、二階の燈と、三階の燈と、店の燈と、街路の燈と、著に、萌黃に、紅に、寸隙なく鏤められた、綾の幕ぞと見る程に、八重に往來ふ人影に、忽ちすゝと引分けられ、さら〳〵と風に連れて、鈴を入れた幾千の輝く鞠と成つて、八方に投げ交はさるゝかと思はれる。

こゝに一際夜の雲の濃やかに絳の色を重ねたのは、隅田へ潮がさすのであらう。水の影か、星が閃く。

我が酒井と主稅の袤は、此の廣小路の二點となつて、淺草橋を渡果てると、宮貴寵が瓦人の如く、仁丹が城の如く、相對して角を仕切つた、横町へ、斜めに入つて、磨硝子の軒の燈籠め、蝋かしく寂寞して、ちら〳〵と雪の降るやうな數ある中を、蓑を着た狀して、忍びやかに行くのであつた。

柏家

三十六

やがて、貸切と書いた紙の白い、其の門の柱の喧い、敷石の趣と明い、靜肅としながら幽なやうに、三味線の音が、チラ〳〵水の上を流れて聞える、一軒大構の料理店の前を通つて、三つ四つ軒燈籠の影に送られ、御神燈の灯に迎へられつゝ、地の濡れた、軒に甍ある、其の横町の中程へ行くと、一條朧な露地がある。

藝妓家二軒の扉間で、透かすと、奥に海棠で描いたやうな、竹垣が見えて、涼しい若葉の梅が一木、月はなければ、風情を知らせ顔にすつきりと立むと、向ひ合つた板塀越に、青柳の忍び袤が、おくれ毛を櫛へた窓で、すら〳〵と靡いて居る。

梅と柳の間を潛つて、酒井は其の竹垣について曲ると、處から何となく羽織の背の娉嫋めくのを、隣家の背戸の、低い石燈籠が卜踊んだ形で差覗く。

主稅は四邊を見て立つたのである。

先生が其の肩の聲えた、懷手のまゝ、片手で不精らしく丁々と枝折戸を叩くと、ぱた〳〵と覺音聞えて、綾の雨戸が細目に開いた。

と洒手な友染の模樣が透いて、眞圓な顔を出したが、燈なしでも、其の切下げた前髪の下の、くるッとした目は屬く。隔ては一重で、つい目の前の、丁字巴の紋を見ると、莞爾々々と笑ひかけて、默つて引込むと、又ぱた〳〵ぱた。

程もあらせず、何處かでねぢを壓したと見える、其の小座敷へ、電燈が颯と點くのを合圖に、中脊で褄ぎすな、二十ばかりの細面、薄化粧して眉の鮮明な、口許の引緊つた藝妓烏田が、

並らしい堅氣づくり。給ぜしやんと、前垂がけ、褄を取るのは知らない風に、庭下駄を引掛けて、二ッ三ッ飛石を傳うて、カチリと外すと、戸を押してづッと入る先生の背中を一ッ、默言で、はたと打つた。是は、此の柏屋の如さんの、小芳と云ふものゝ妹分で、綱次と聞えた流行妓である。

「大層な要害だな。」

「物騷ですもの。」

「些とは貯蓄つたか。」

と粗雜に廊下へ上る。先生に從うて、浮かぬ顔の主稅と入違ひに、綱次は、あとの戸を閉めながら、

「お珍らしいこと。」

「……」

「蔦吉姐さんはお連者？」と小さな聲。

主稅はヒヤリとして、ついに無い、ものをも言はず、恐れた顔をして、一寸脫んで、竊と上つて、開けた障子へ身體は入れたが、敷居際へ畏まる。

酒井先生、座敷の眞中へぬいと突立つたまゝで——其時茶がゝつた庭を、雨戸で消して入り來る綱次に、

「何うだ、色男が雛出したやうに見えるか。」

とづッと胸を張つて見せる。

「私には解りません、姐さんにお見せなさいまし、今に歸りますから、」

「然う日前が利かないから、お茶を挽くのよ。當節は女學生でも、今頃は内にや居ない。些と日比谷へでも出かけるが可い。」

「憚樣、お座敷は宵のロだけですよ。」

と袤見の前から座蒲團をするりと引いて、床の間の横へ置した。

「さあ、早瀨さん。」と、最う一枚。

主稅は膝の傍へ置いたまゝ也。

女染の羽織を着たのが、店から火鉢を抱へて來て、膝と一所に、お大事のものゝやうに据ゑると、先生は引跨ぐ體に胡坐の膝へ挾んで、口の邊を一ッ撫でゝ、

「敷きな、敷きな。」

と主稅を見向いた。

「はい、」

とばかりで、其の目玉に射られるやうで堅くなつて何處も見ず、面を背けると端なく、重箱筍の前なる袤見。此處で流る柳の髮は長からう、其の袤見の丈が高い。

三十七

「お敷きなさいなね、貴下。此家へ入らつしやりや、先生も何もありはしません、御遠慮をなさらなくつても可いんですよ。」

と意氣、文學士を呑む。此の女は、主稅が整絲として居るのを、氣の毒がるより、寧ろ自分の方が、爲に窮屈を感ずるので。

其舞、先生には、却つて、遠慮の無い樣子で、肩を並べるやうにして支膝で歩りながら、火鉢の灰をならして、手で其の絲をスッと扱く。

「茶を一ッ、熱いのを。」

と酒井は今のを聞かない振で、

「それから酒だ。」

綱次は入口の低い襖を振返つて、ト拜む風に、雪のやうな手を竦く。

「自分で起て。少いものが、不精を極めるな。」

「厭ですよ。ちやんと番をして居なくつては。姐さんに言ひつかつて居るんだから。」

と言ひながら、人懷かしげに莞爾して、

「ねえ、早瀨さん。」

「で、ございますかな。」と漸々膝去り出して、遠くから、背を圓くして伸上つて、腕を出して、卷莫に火を點けたが、お蔦が物指を當てた補粹の袖が見えたので、氣にして、慌てゝ、引込める。

「些と透かさないか、籠るやうだ。」

「縫御ですか。」
「うゝむ、」
と頭を振つたので、すつと立つて、背後の肱掛窓を開けると、辛うじて、雨落だけの濕を残して、鬱しい、忍返しのある、然も貴新しい黒板塀が見える。
「見物しても御覽なさいよ。」
と主税を振向いて又笑ふ。
酒井が覗と、其の塀を視めて、
「一面の杉の立樹だ、森々としたものさ。」
と擽つて、獨りで笑つた。
「しかし山焼の跡だと見えて、鉋黒は酷いな。俺もゆく〳〵は此家へ引取られようと思つたが、裏が建つて、川が見えなくなつたから分別を變へたよ。」
其處へ友染がちら〳〵来る。
「お出花を、早く、」
「はあ、」
「熱くするんだよ。」
「これ、小兒ばつかり使はないで、些と立つて食ふものゝ心配でもしろ。民は何うした、彼は可い。小老實に働くから。今に踊つたら是非酌をさせよう。あの、愛嬌のある處で。」
一えんなに、若いのが好なら、御内のお蘭さんが可いんだわ。ねえ早瀬さん。」
是には早瀬も答へなかつたが、先生も苦笑した。
「妙も近頃は不可くなつたよ。奥方と目配せを爲合つて、兎角跳子をこぎつて不可ん。第一酌をしないね。學校で、(お酌さん。)と云ふさうだ。小兒どもの癖に、相應に皮肉なことを云ふもんだ。」
「貴郎には小兒でも、最うお嫁入盛ぢやありませんか。何うかすると、此地へも入らつしやる、學校出の方にや、酒井さんの天女が、何のと云つちや、あの、厭いでおいでなさるのがありますわ。」
「あの、嬰兒をか、何處の坊やだ。」
「あら、あんなことを云つて。此方の早瀬さんなんかでも、丁度似合ひの年紀頃ぢやありませんか。」
と何でもなう云つて退けたが、主税は懐中の三世相とともに胸に支へて向いた。
「其の蟹、當人は嫁入と云や鼠の繪だと思つて居るよ。」
と云ひかけて莞爾として、
「むゝ、是は、猫の前で危い話だ。」
と横顔へ煙を吹くと、
「引抓いてよ。」と手を挙げたが、思ひ出したやうに座を立つて、
「何うしたんだらうねえ、電話は、」と呟いて出ようとする。
「おい、阿婆は？」
「最う寐ました。」
「いや、老人は然う有りたい。」
座の白ける間は措かず、綱次はすぐに引返して、
「姉さんは、最う先方は出たさうですわ。」
云ふ間程なく、矢を射るやうな腕車一臺、からからと門に着いたと思ふと、
「唯今！」と車夫の聲。

三十八

「然うかい。」
と……意味のある優しい聲を、一寸謎かに靡けながら、一枚の襖音なく、すらりと開いて入つたのは、座敷歸りの小芳である。
瓜顔の、鼻の準整な、目の柔和しい、心ばかり面窶がして、黒髪の多いのも、世帶を知つたやうで奥床しい。眉の稍濃い、生際の可い、洗ひ髪を引詰めた毬髪の銀杏返に、すつきりと櫛の齒が通つて、柳に雨の鬢の涼しさ。撫肩の衣紋つき、少し高目なお太鼓の帶の後姿が、

恰も袂見に映つたれば、水のやうに透通る細長い月の中から抜出したやうで氣高いくらゐ。成程此の婦の母親なら、藝者家の阿婆でも、早寐を爲よう、と頷かれる。
「まあ、よく入らしつてねえ。」
と主税の方へ挨拶して、微笑みながら、濃い茶に鶴の羽小紋の紋着二枚袷、藍氣鼠の半襟、白茶地に翁和子の博多の丸帶、古代模様の色縮緬の長襦袢、慎ましやかに、酒井に引添うた風采は、方支へなく頭が下るが、分けて其の夜の首尾であるから、主税は丁寧に手を下げて、
「御機嫌宜う。」と會釋をする。
爾時、先生惚然として、
「燕者に挨拶を爲る奴があるか。」
是に一言句あるべき處を、姉さんは柔順しいから、
「お出花が冷くなつて、」
と酒井の呑さしを取つて、いそ〳〵立つて、開けてある肱掛窓から、晴い雨落へ、ざぶりと覆すと、斜めに見返つて、
「大な湯覆しだな、お前ン許のは。」
「あんな事ばかり云つて、」
と、主税を見て莞爾して、白齒を染めても似合ふ年紀、少しも浮いた樣子は見えぬ。
それから、小芳は伏目になつて、二人の男へ茶を注いだが、此處に居れば其の役目の、綱次は車が着いた時、さあお歸りだ、と云ふとともに、はら〳〵座敷を出たのと知るべし。
酒井は輕く襟を直いて、
「其處で、御馳走は、」。
「綱次さんが承知をしてます。」
「また寄鋼だらう、白瀧澤山と云ふ。」
「何うですか。」
と横目で見て、嬉しさうに笑を含む。
「いづれ不漁さ。」
と打棄るやうに云つたが、向直つて、
「早瀬、」と呼んだ聲が更まつた。
「えゝ。」
「先刻の三世相を見せろ。」
一仔細なくては成らぬ樣子があるので、ぎよつとしながら、斷むべき數ではない。……柏家は天井裏を掃除しても、こんなものは出まいと思はれる、薄汚れたのを、電燈の下に、先生の手に、もぢ〳〵と奉る。
引取つて、ぐいと開けた、氣が入つて膝を立てた、顔の色が厳しくなつた。と見て膽を冷したのは主税で、小芳は何の氣も着かないから、晴々しい面色で、覗込んで、
「心當りでも出來たんですか。」
不答。煙草の喫さしを灰の中へ邪險に突込み、
「何は、何うした。」
と唐突に聞かれたので、小芳は慌忙したやうに、酒井の顔を視めると……
「彼よ、一寸意氣な、清元の旨い、景氣の可い、」
いひ〳〵本を引返して、
「拠帶で、鏡に向つた處は、繪のやうだと云ふ評判の……」
と凝と見られて、小芳は引入れられたやうに、
「蔦吉さん。」
と云つて、喫ひかけた煙管を忘れる。
主税は天窓から悚然とした。
「彼は何うした。」
「え、」
「他は薩張山手になつて容子を知らんが、相變らず繁昌か。」

三十九

小芳は我知らず、(あゝ、何うしよう。)と云ふ暗が、主税の方へ流るゝのを、無理に堪へて、酒井を睨つた顔が震へて、

「葛吉さんは最う落籍ましたさうです。」
と言はせも果てずに、
「(さうです。)は可怪しい。近所に居ながら、知らん奴があるか、判然言へ、落籍たのか！」
「はい、」と伏目になつたトタンに、優しげな睫毛が、何うかなさいよ。」と、主税の顔へ目配せする。
酒井は、主税を見向きもしないで、悠々とした調子に成り、
「そりや可い事をした、泥水稼業を留めたのは芽出度い。で、何處に居る、當時は……よ？」
「私はよく存じませんので……あの、何處か深川に居るんですつて。」
「深川？　深川と云ふ人に落籍されたのか、川向うの深川かい。」
「……」
「何うだよ、おい、知らない奴があるか。お前、仲が好くつて、姉妹のやうだと云つたぢやないか。姉妹分が落籍たのに、其の行先が分らない、べら棒があるもんかい。
姉さんとか、小芳さんとか云つて、先方でも落籍祝ひに、赤飯ぐらゐ配つたらう、お前食つたらう、其奴を。
落立だとか、好い色だとか云つて、喜んでよ。此方からも、イの切手の五十錢ぐらゐ祝つたらう。小遣帳に記してゐるだらう。其の婦の行先が知れない奴があるものか。
知らなきゃ馬鹿だ。尤も、已のやうな素一歩と腐合はうと云ふ料簡方だから、はじめから悄怜でないのは知れてるんだ。馬鹿は構はん、何うせ、藝者だ、世間並ぢやない。藝者の馬鹿は構はんが、薄情は不可んな！　薄情は。薄情な奴は俺ら眞平だ。」
「何時、私が、薄情な、」
と口惜しく乾となる處を、酒井の鋼幕が烈しいので、悄れて聲が霜んだのである。
「薄情でない！　薄情さ。懇意な婦の、居處を知らなけりや薄情ぢやないか。」
「だつて、貴郎。だつて、先方でも、つい音信をしないもんですから、」
「先方が音信をしなくつても、お前の薄情は帳消は出來ん。何故此方から尋ねんのだ。こんな稼業だから、暇が無い。行通はしないでも、居處が分らんぢや、近火は何うする！　火事見舞に町内の頭も遣らん。そんな伸よしがあるものか、薄情だよ、水臭いよ。」
姉さんの震へるのを見て、身から出た主税は堪りかねて、
「先生、」
と呼んだが、心ばかりで、此の聲は口へは出なかつた。
酒井は耳にも掛けないで、
「濟まん事さ、俺も他人でないお前を、薄情者には爲たくないから、居處を教へて遣らう。堀の内へでも參詣る時は道順だ。煎餅の袋でも持つて尋ねて遣れ。おい、葛吉は、當時飯田町五丁目の早瀬主税の處に居るよ。」
眞著になつて、
「先生、」
「早瀬！」
と一聲乾となつて、膝を向けると、疾風一陣、黒雲を捲いて、三世相を飛ばし來つて、主税の前へ磯と落した。
眼の光射るが如く、
「見ろ！　野郎は、素裸のすッとこ被よ。婦は編笠を着て三味線を持つた、其の門刑の繪のある處が、お前たちの相性だ。
はじめから承知だらう。今更本郷くんだりの俺の細張内を胡亂ついて、三世相の盗人覗きをするにや當るまい。
其の間抜けさ加減だから、蹶店の亭主に馬鹿にされるんだ。立派な土百姓に成りやあがつたな、田舎漢め！」

四十

主税は漸々、其も喉が乾くか、かすれた聲で、
「三世相を見て居りましたのは、何も、そんな、そんな譯ぢやございません……」とだけで我が綻かぬ。
「無譯でも頼まれたか、前世は牛だとか、午だとか。」
と串戯のやうな警抜な訣問が出たので、聊か言が引立つて、
「否、實は其の何でございまして。其の、此間中から、お纖さんの御緣談がはじまつて居ります、と聞きましたもんですから、」
小芳は縞と酒井を見た。此の間でも初に聞いた、お姐の緣談と云ふのを珍らしさうに。
「はゝあ、ぢや何か、姐と、河野英吉との相性を檢べたのかい。」
果せる哉、禮之進が運動で、先生は早や平家の公達を御存じ、と主税は、折柄も、我身も忘れて、
「はい、」と云つて、思はず先生の顔を見ると、瞼が潤と暗く成るまで、眉の根がじりゝと寄つて、
「大きに、お世話だ。酒井俊藏と云ふ父親と、歴然とした、謹、夫人の名。)と云ふ母親が附いて居る姐の緣談を、門附風情が何を知つて、周章てなさんな。
僭上だよ、無禮だよ、閣當り！
お前が、男世帶をして、いや、菜が不味いとか、女中が蒸豆腐ばかり食はせるとか、愚痴つた、と云つて、可いか、此の間持つて行つた重詰なんざ、姐が獨活を切つて、奥さんが煮たんだ。お前達ア道具の無い内だから、勿體ない、一度先生が目を通して、綺麗に裝つてあるのを、重箱のまゝ、蓋婦とせゝり箸なんぞしやあがつて、粹松にや叶はないとか、何とか、薄情意氣な事を言つたらう。
よく、其の悪姑が喚喉に詰つて、頓死をしなかつたよ。
無禮千萬な、未だ其の上に、姐の緣談の邪魔をすると云ふは何事だ。」
と大喝した。
主税は思はず居直つて、
「邪魔を……私、私が、邪魔なんぞいたしますものでございますか。」
「邪魔をしない！　邪魔をせんものが、緣談の事に就いて、坂田が已に紹介を頼んだ時、お前何故其を斷つたんだ。」
「……」
「何故斷つた？」
「あんな、道學者、」
「道學者が何うした。結構さ。道學者はお前のやうな夫でない、畜生ぢやないよ。何か、お前は先方の河野一家の理想とか、主義とかに就いて、不服だ、不贊成だ、と云つたさうだ。不服も不贊成もあつたものか。人間並の事を云ふな。畜生の分際で、用過ぎた奴だ。
第一、汝のやうな間違つた料簡で、先生の心が解るのかよ！　お前は不贊成でも已は贊成だ、お前は不服でも已は心服だか――知れるかい。
何の彼のと、故障を云つて、(御門生は、令嬢に思召しがあるのでごわりませう。)と坂田が齒を吸つて、合點んで居たが、何うだ。」
「えゝ！　あの、猩猩が、」
と色をかへて戰いた。主税は両も黙々と汗を流して、
「他の事とは違ひます、聞棄てに成りません。私は、私は、是は、更めて、坂田に談じなければ成りません。」
「何だ、坂田に談じる？　坂田に談じるまでもない。已が然う思つたら何うするんだ、先生が、

然う思つたら何とするよ。」
「誰が、先生、そんな事。」
「否、内の玄關の書生も云つた、坂田が己の許へ來たと云ふと、お前の目の色が違ふさうだ。車夫も云つた、車夫の女房も云つたよ。（誰か奴の事を聞きに來たものはないか。）と云つて、お前、車屋でまで聞くんださうだな。恥しくは思はんか、大きな恵をしやあがつて、海鼠の生えた面を、何處まで曝して歩行いて居るんだ。」
と火鉢をぐい〳〵と擦つて。

四十一

「彼方へ蹈々、此方へ蹈々、狐の憑いたやうに、俺の近所を、葛西街道にして、肥料桶の臭を嗅せるのは何處の奴だ。
何か、聞きや、河野の方で、奴の身體に探搜を入れるのが、不都合だとか、不意氣だとか言ふさうだが、」
嘘、禮之進が皆饒舌つた……
「意氣も不意氣も土百姓の知つた事かい。これ、河野はお前のやうな狐憑ぢやないのだぜ。
學位のある、立派な男が、大切な嫁を褒るのだ。念を入れんで何うするものか。檢査するのは當然だ。藝者を嫁々にするんぢやない。
また己の方ぢや、探搜を入れて貰ひたいのよ。
さあ、何處でも非難を爲て見ろ、と裸體で見せて差支への無いやうに、己と、誠とで育てたんだ。
何が可恐しい？　何が不平だ？　何が苦しい？　己は、張等の檢べるのより、お前が其處等をまごつく方が何のくらゐ迷惑か知れんのだ。
假令んば、奴等に、身元檢べを爲れるのが迷惑とする、寵に障るとなりや、己が丁と心得てる。此の指一本、奴の身體を祓した日にや、按摩の勢振ほど道學者輩が杖を突張つて押寄せて、垣根きを造つたつて、黒子一點も見せやしない、誰だと思ふ、おい、己だ。」
と又乾と見て、
「何爲、泰然と落着拂つて、いや、其はお芽出度いと云つて、觀まれた時、紹介をせん。癪に障る、野暮だ、とぶつ道學者に、ぐッと首根ッ子を壓へられて、（早瀬氏は是がために、些と手負猪でごわりましてな。）なんて、尊をすゝらせるんだ。
乃鹿野郎！　俺ら弟子は幾干でもある、が小兒の内から手前に置いて、飴ン棒までねぶらせて、妙と同一内で育てたのは、汝ばかりだ。其の子分が、道學者に冷かされるやうな事を、何爲するよ。
（世間に在るやつでごわります。何犬に手を噛まれると申して。以來あの御門生には、令嬢お氣を着けなさらんと相成りませんで。）坂田が云つたを知つてるか。
馬鹿野郎、これ、」
と迫つた調子に、藝愛が龍つて、
「然ほどの純的でも無かつたが、天晴よ。先生の目を眩まして、毒婦なんぞ引摺込む狐が當つて、魔が魅したんだ。
嫁入前の大事な娘だ、そんな狐の惡いた口で、向後妙の名も言ふな。
生意氣に道學者に難癖なんぞ着けやあがつて、汝の面當にも、娘は河野英吉にたゝッ奥れるから然う思へ。」
「貴郎、」
と小芳が顔を上げて、
「早瀬さんに、どんな仕損ひが、お有んなすつたか存じませんが、決して、お内や、お嬢さんの……（と聲が襲つて、）お爲惡かれ、と思つてなすつたんぢやござんすまいから、」
「何だ。爲惡かれ、と思はん奴が、何故藝者を引摺込んで、師匠に對して申譯のないやうな不埒を働く。第一お前も、」
稲妻が西へ飛んで、

「同黙だ、共謀だ、同罪だよ。おい、藝者を何だと思つて居る。戯入に新橋を見た素丁稚のやうな難有いもんだと思つて居るのか。馬鹿だから、己が不便を掛けて置きや、増長して、酒井は藝者の情婦を難有がつてると思ふんだらう。高慢に口なんぞ突出しやがつて。傍向いて居れ。」
はつと首垂れたが、目に涙一杯。
「そんな、貴郎、難有がつてるなんのッて、」
「難有くないものを、何故俺の大事な弟子に爲吉を取持つたんだい！」
主税は手を支いて摺つて出た。
「先、先生、姉さんは、何にも御存じぢやございませんし、其は、お目違ひでございまして、」
と大呼吸を胸で吐くと、
「黙れ！　生れてから、俺ら、目違ひをしたのは、お前達二人ばかりだ。」

四十二

「お言葉を反しますやうでございますが、」
主税は小芳の自分に對する情が仇になりさうなので、あるにもあられず据身になつて、
「誰が然う云ふことをお耳に入れましたか存じませんが、藝者が内に居りますなんて飛んだ事でございます。矢張、あの坂田の奴が、怪しからぬ事は客の靴へ炙を据ゑるのさへ祓し了されないで、（恐るべき家庭でごわります。）と道學者に言はれるやうな、薄つぺらな奴等が、先生の目を抜かうなぞと、天下を覗むやうな叛逆を企てるな。
惡事を爲るならするやうに、最つと手際よく立派に遣れ。見事に己を間抜けにして見ろ。同じ叱言を言ふんでも、其點だけは恐入つたと、鼻毛を算まして讃めて遣るんだ。三下め、先生の目を盗んでも、お前なんぞのは、たか〳〵駈出の出しの「タッシェン、ディーブ」だ。」
是は、（攫徒）と云ふ事ださうである。主税は折れるやうに手をハッと支いた。
「恐入ったか、何うだ。」
「ですが、全く、其の、そんな事は……」
「無い？」
「……」
「藝者は内に居ないと云ふのか。」
「はい。」
「靡靡の如く、
「歸れ！」
小芳が思はず肩を容める。
「早瀬さん、私、私ぢや、」
と麗が消えて、小芳は紋羽の袖其まゝ、眉も

殘さず面を蔽ふ。

「いや、愛想の盡きた虹蟲め、往生際の惡い丁稚だ。そんな、しみつたれた奴は盜賊だつて風上にも置きやしない、酒井の前は恐れ多いよ、歸れ！

これ、姦通にも事情はある、親不孝でも理窟を云ふ。前座のやうな情實でもあつて、一旦内へ入れたものなら、猫の兒の始末をするにも、鯉節はつきものだ。談を附けて、手を切らして、綺麗に捌いて遣らうと思つて、お前の許へ行くつもりで、百と、二百は、懷中に心得て出て來たんだ。

此段に成つても、未だ、あゝ、心得違ひをいたしました。先生よしなに、とは言ひ得ないで、祕し隱しをする料簡ぢや、汝が家を野天にして、婦とさかつて居たいのだらう。それで身が立つなら立つて見ろ。口惜しくば、おい、恁うやつて馴染の藝者を惱に置いて、弟子に劍突をくはせられる、己のやうな者に成つて出直して來い。

さあ、歸れ、歸れ、歸れ！　汚はしい。歸らんか。此の座敷は己の座敷だ。己の座敷から退出すんだ。歸らんか、野郎、歸れと云ふに、其處を起たんと蹴殺すぞ！」

「あれ、お謝罪をなさいまし。」と小芳が裾に、おろ〳〵する。

主税は、辟けよ、と身を揉んで、

「小芳さん、お取なしを願ひます。」と熟と瞻めて色が變つた。

「奥さんに、奥さんに、お願ひなさいよ、」

四十三

「何を、奥さんに願めだい、默れ。誰が藝者の取持なんぞ爲ると思ふか。先刻も云ふ通り、芳、お前も同類だ、同類は同罪だよ。早瀨を叩出した後ぢや己が追出る、お前とも是切だから、然う思へ。」

と言はるゝまゝに、忍び音が、聲に出て、肩の震へが、袖を搖つた。小芳は幼いものゝ如く、あはれに頭を掉つて、腰々をするのであつた。

「姉さん、」

と思込んだ額を擡げた、主税は臉を引搦つて、元氣附いたやうな調子ばかりで、一向取留の無い樣子、しどろに成つて、

「貴女は、貴女は御心配下さいませんやうに……先生、」

と更めて、兩手を支いて、息を切つて、

「申譯がございません。飛んだ連累でお在んなさいます。何うぞ、姉さんには、そんな事をおつしやいません樣に、私を御存分になさいまして。」

「存分にすれば蹴殺すばかりよ。」

と吐出すやうに云つて、はじめて、豪かに煙を吸つた。

「ぢや恐入つたんだな。

内に萬吉が居るんだな。

最う陳じないな。」

「心得違ひをいたしまして……何とも申しやうがございません。」

と嘆と息を吐いたと思ふと、聲が霑む。

最早罪に伏したので、今までは執成すことも出來なかつた小芳が、此處ぞ、と見計つて、初心にも、袂の先を爪さぐりながら、

「大目に見てお上げなすつて下さいまし。萬吉さんも仇な氣ぢやありません。決して早瀨さんのお世帶の不爲に成るやうな事はしませんですよ。一生懸命だつたんですから。あんな派手な妓が落籍ぼどころぢやありません、貴郎、着換も無くしてまで、借金の方をつけて、夜逃げをするやうにして落籍たんですもの。

堅氣に世帶が持てさへすれば、其の内には、世間でも、商賣したのは忘れませうから、早瀨さんの御身分に障るやうなこともございますまい。

最う此の節ぢや、洗濯ものも出來るし、單衣ぐらゐ縫へますつて、此の間も夜晩く私に逢ひに來たんですがね。」

と柳娜な涙聲に成つて、

「羽織が無いから日中は出られない、と拗ねたやうに云ふのがねえ、どんなに嬉しさうだつたでせう。其に土地馴れないのに、臆病な妓ですから、早瀨さんが恁うやつて留守にして居なさいます、今頃は、どんなに心細がつて、戸に附着いて、土間に立つて、歸りを待つて居るか知れません、私あ其を思ふと……」

と吟色の、臉を染めて、淺く歷へた縞袢の袖口。月に露添ふ頬を見て、主税もはら〳〵と落涙する。

「世迷言を言ふなよ。」

と膽もなく、喪氏が涙を斥けて、

「早瀨何うだ、別れるか。」

「行處もございませんし、仕樣が無いんでございますから、先生さへ、お見免し下さいますれば、私の外聞や、そんな事は。世間體なんぞ。」と牛云つて唾が乾く。

「否、不可ん、許しや爲ないよ。」

「然う仰有つて下さいますのも、世間を思つて下さいますからでございます。最う、私は、自分だけでは、決心をいたしまして、世間には、隨分一人前の腕を待つて居ながら、財産を當に經費子に成りましたり、汝が勝手に嫁にすると申して、人の妻の格檢査を早みましたり、」

と赫となつて、此の時やゝ血の色が眉宇に浮んだ。

「女學校の教師をして、媒妁をいたしましたり……それよりか、拾人の無い、社會の遺失物を内へ入れます方が、同じ不都合でも、罪は淺からう と存じまして。其も決して女房になんぞ、爲ますわけではございません。一生日蔭もの、下女同樣に、唯内證で置いて遣りますだけのことでございますから。」

「血迷ふな。腕があつて解養子に成る、女學校で見合をする、そりや勝手だ、己の弟子ぢやないんだから。其のかはり藝者を内へ入れる奴も弟子ぢやないのだ、分らんか。」

四十四

折から食卓を持つて現れた、女房の其の愛々しいのは、座の恰も吹荒んだ風の跡のやうな趣に對して、散り殘つた歸花の風情に見えた。輝く電燈の光さへ、眉の對手や空に月一つ、で光景が凄じい。

一言も物いはぬ三人の口は、一度にパアと云つて驚かさうと、我がために、はた開く閉されて居るやうに思つて、友禪は簪の花とともに、堅く成つて膝を据ゑて、浮上るやうに立つて、小刻に襖の際。

川千鳥が其處まで通つて、チリチリ、と音が留まつた。杯洗、鉢肴などを、ちよこ〳〵運んで、小じんまりと綺麗に並べる中も、朝さんは、唯火鉢を些とずらしたばかり、情れて俯向いて、成らば直ぐに、頭が打つのを厭へたさうに、火箸に置く手の白々と、白けた容子を、立際に打俯いで、熟と見て出ようとする時、

「食ふものは此だけか。」

と酒井は笑みを含んだが、此際、天窓から鹽で食ふと、大口を開けられたやうに感じたさうで、襖の藍で慄然と萎んで壁の暗さに消えて行く。

慌てゝ、あとを閉めないで行つたから、小芳が心付いて立たうとすると、すると〳〵と裾を捌いて、慌しげに來たのは綱次。

唯今の注進に、ソレと急いで、銅壺の爐を引提いて、長火鉢の前を衝と立ち狀に來た。

前掛とはがらりと變つて、銀お納戸地に、白の角通しの縮緬、かはり色の袈裟を拂つて、上下到の袷の襲、黑繻珍に金茶で菖蒲を織出し

た丈帶、緋縮子の長襦袢、「冷く縮んだ雪の腕で、猫撫ふ色なく、持つて來た銚子を向けつつ、

「お酌、」

冴えた音を入れると、驚めほうと立つ、猫の上の陽炎に、電氣の光が和いで、臘々と春に返る。

「未だ宵の口かい。」

「柏家だけではね。」と愛嬌する。

「遠慮なく出懸けるが可い、然し猥褻だな。」

「あら、何故？」

「十一時過ぎてからの座敷ぢやないか。」

「御免なさいよ、苦界だわ。ねえ、早瀬さん、さあ、めしあがれよ、ぐうと、」

「否、最う、」

主税は猪口を視むるのみ。

「お察しなさいよ。」

と先生に又お酌をして、

「御贔屓の民子ちやんが、大江山に捕まへられて居ますから、助出しに行くんだわ。渡邊の綱次なのよ。」

「道理こそ、鍛ず子のガ製だ。」

「鍛のやうに、根が出過ぎはしなくつて。姉さん、」

と横に手を觸る。

「否、」

と云つて、言の内に、（そんなに心配をおしでない。）の意味が籠る。綱次は、（安心）の體に、腕を一寸軽く擦でゝ、直ぐにあとから、」

「おいしいものが、直ぐにあとから、」

「綱次姉さん、また電話よ。」

と廊下から鞠妓の聲。

「あい、あい、彼方でも御用とおつしやる。では、直き行つて來ますから、貴下歸つちや、厭ですよ、民ちやんを連れて來て、一所に又お汁粉をね。」

酒井は默つて頷いた。

「早瀬さん、御緩り。」

と行く春や、主税は其さへ心細さうに見送つて、先生の目から面を背ける。

酒井は、杯を、つゝと默し、

「早瀬、近う寄れ、最つと、」

と遣ませ、肩を聳かして此と見て、

「さあ、一ッ遣らう。何うだ、別離の杯にするか。」

「……」

「其とも歸を思切るか。芳、酌いで遣れ、おい、何うだ、早瀬。これ、酌いでやれ、酌がないかよ。」

銚子を擧げて、猪口を取つて、二人は顔を合せたのである。

四十五

爾時、眼光相妻の如く左右を射て、

「何を愚圖々々して居るんだ。」

「私がお願ひでござんすから、」と小芳は胸の躍るのを、片手で密と壓へながら、

「兎も角も今夜の處は、早瀬さんを歸して上げて下さいまし。而して能く考へさして、更めてお返事をお聞きなすつて下さいましな、後生ですわ、貴郎。」

ねえ、早瀬さん、然うなさいよ。先生も、こんなに仰有るんですから、貴下も能く御分別をなさいまし、此處は私が身にかへてお預り申しますから。よ……」

と促されても立ちかねる、主税は後を慮ふのである。

「葛吉さんが、どんなに何したつて、私が知らない顔をして居れば可かつたのですけれど、思ふ事は誰も同一だと、私、」

と燃に頭深く、迫つた呼吸の早口に、

「身につまされたもんだから、遂々こんな事にして了つて、元はと云へば……」

「そんな、貴女が惡いなんて、そんな事があるもんですか。」

と酒井の前を庇ふ氣で、肩に力味を入れて云つたが、穏いて言はうとする、

（貴方がお世話なさいませんでも……）の埒下は、怪しからず、と心着いて、ハッと又小さくなつた。

「否、私が惡いんです。ですから、後で叱られますから、貴下、兎も角もお歸んなすつて……」

「成らん！　此の場に及んで分別も緣瓜もあるかい。こんな馬鹿は、助けて返すと、歸を逃れて駈落を爲かねない。短兵急に首を壓へて叩き斬つて了ふのだ。

早瀬。」

と苛々した音調で、

「是も非も無い。さあ、たとへ俺が無理でも情はん、無情でも差支へん、歸が惡んでも、泣いても可い、憧れ死に死んでも可い。先生の命令だ、切れつ了へ。

俺を棄てる奴、歸を棄てる奴。

むゝ、此の他に言句はないのよ。」

（何うだ）と頤で言はせて、悠然と天井を仰いで、くるりと背を見せて、ドンと食卓に肱をついた。

「歸を棄てます。先生。」

と判然云つた。其處を、酌をした小芳の手の調子と、主税の猪口と相觸れて、カチリと鳴つた。

「幾久しく、お杯を。」と、ぐつと飲んで日を寡いだのである。

「其方の、其方の熱い方を。――最う一杯、最う一ッ。」

と立續けに、五ッ六ッ。ぽッと酒が色に出ると、懷中物を懷へ、紋織の紐を引懸けて、づゝと立つた。

「早瀬は盃を乾かしてから外へ出ろ。」

小芳はひたと、酒井の肩に、前髪の附くばかり、後に引添うて縋り狀に、

「お歸んなさるの。」

「誰が病氣よ。」

と自分で雨戸を。

「其は不可ませんこと。」と緣側に、水際立つてはらりと取つた、陽田の春の空色の袱。力なき小芳の足は、カラリと庭下駄に音を立てたが、枝折戸の未だ開かぬほど、主税は座をずらして、障子の脇に成つて、忙しく卷莫を吸ふのであつた。

二時ばかり過ぎてから、主税が柏家の枝折戸を出たのは、やがて一時に近かつたらう。爾時は蛾さんはじめ、綱次と最う一人の其の民子と云ふ、牡丹の花のやうな若いのも、一所に三人で路地の角まで。

「お互に辛抱するのよう。」と酒氣のある派手な聲で、主税を送つたのは綱次であつた、ト同時に梟は蛾さんと、手を緊乎と取り合つた。

時に、涙りした横町の、唯ある軒燈籠の白い明と、板塀の黑い影とに挾つて、平くなつて居た、頬被をした傳法が、一人、後先を揃して、密と出て、五六歩行過ぎた、早瀬の背後へ、……拔足で急々。

「もし、」

「……」

「先刻ア何うも。よく助けて下すつたねえ。」

と頬かむりを取つた顔は……禮之進に捕まつた、電車の中の、其の半纏着。

誰が引く袖

四十六

土曜日は正午までゞ授業が濟む――教室を出

る娘たちで、照陽女學校は一齊に温室の花を籠の空に開いたやう、淑と麗な日を浴びた色香は、百合よりも芳しく、杜若よりも紫である。

年上の五年級が、最後に靜々と出揃つて、最う是で忘れた花の一枝もない。四五人がちらほらと、式臺へ出驕る中に、妙子が居た。

阿嬢は、就中活潑に、大形の紅入友染の袂の端を淺色の八ツ口から飜然と掉つて、何を急いだか飛下りるやうに、靴の尖を揃へて、トンと土間へ出た處へ、小使が一人ばた〳〵と草履穿で急いで來て、

「あゝ酒井樣。」

と云ふ。優等生で、此の容色であるから、寄宿舍へ出入りの諸商人も知らぬ者は無いのに、別けて壓巣の翁樣ゆゑ、いづれ菖蒲と引き煩はずに名を呼んだ。

「はゝい。」

と振向くと、小使は小腰を屈めて、

「教頭樣が少し御用でござります。」

「私に、」

「一寸お出で下さりまし。」

「あら、何でせう、」

と友達も、吃驚したやうな顏で眺すと、出口に一人、脚下臥を揃へて一人、一人は日傘を開け掛けて、其邊の辻まで一所に歸る、お定まりの道連が、齊しく三方からお妙の袖を贈つて默つた。

此の段は、豫め教頭が心得さしたか、翁樣が又、其處等の口が衾しいと察した氣轉か。

「何か、お父樣へ御託づけものがございますで。」

「まあ、然う、」

と莞爾して、

「待つてゝ下すつて？」と三人へ、一度に黑目勝なのを傷して見せると、言合せた樣に、二人まで、胸を撫で下して、ホゝゝと笑つた——お腹が空いた——と云ふ事ださうである。

お妙はずん〳〵小使について廊下を引返しながら、怒つたやうな顏をして、振向いて同じやうに胸の許を撫つて見せた。

「應接室でございますわ。」

教員室の前を通ると、背後むきで、丁寧に、風呂敷の鐵を伸して、何か包みかけて居たのは習字の教師。向うに御樣に寢て、兩眦を空に、後脚を引搔むやうにして椅子にかゝつて居たのは、數學の先生で。看護婦のやうな服裝で、やうど聲高に笑つた婦は、言はずとも、體操の師匠である。

行きがゝりに目についた、お妙は直ぐに俯し目になつて、コト〳〵覺音が早くなつた。階子段の裏を抜けると、次の次の、應接室の扉は、半開きに成つて、ペンキ塗の硝子戶入の、大書棚の前に、卓子に向つて二三種新聞は見えたが、それではなしに、背文字の金の燦爛たる、新しい洋書の中ほどを開けて讀む、天窓の、照々光るのは、當女學校の教頭、倫理と英文學受持……の學士、宮畑閑耕。同じ文學士河野英吉の親友で、待合では世話に成り、學校では世話をする（蝦茶と鼠縮緬の交換だ。）と主枕が慎つた一人である。

此の編の記者は、教頭氏、君に因つて、男性を形容するに、留南奇の薫馥郁としてと云ふ、創作的文字を愛に挾み得ることを感謝しよう。勿論、其の香の、二十世紀であるのは言ふまでもない。

お妙は、扉に半身を隱して留まる。小使は其のまゝ向うへ行過ぎる。

閑耕は、キラリ日金を向けて、じろりと見ると、目を細うして、髭の尖をピンと立てた、頤が圓い。

「此方へ、」

と鷹揚に云つて、再び澄まして書見に及ぶ。

お妙は扉に附着いたなりで、入口を左へ立つて、本の包みを抱いたまゝ、しとやかに會釋をしたが、敢て其よりは進まなかつた。

「此方へ。」と無造作なやうに、今度は書見のまゝ聲をかけたが、落着かれず、又ひよいと目を上げると、其の發奮で目金が躍る。

頬杖へ兩手をぴつたり、慌てゝ目金の柄を、鼻筋へ挿込むと、睫毛を脚へ込んで、蠶いて、指の爪を滑らして、瞼を擦つて、

「は、は、は、」と無意味な笑方をしたが、向直つて眞面目な顏で、

「何うですな。」

四十七

最う僕へ來さうなものと、閑耕教頭が再び、じろりと見ると、お妙は身動きもしないで、然と立つて、萬たけた眉が、雲の生際に浮いて見えるやうに伸向いて居るから、威勢に怖ぢて、頭も得上げぬのであらう、いや、然もあらむ、と思ふと……然うでない。酒井先生の令孃は、笑を含んで居るのである。

其は、其は愛々しい、仇氣ない微笑であつたけれども、此の時の教頭には、素直に言ふ事を肯いて、御前へ侍はぬだけに、人の惡い、與し易からざるものがあるやうに思はれた。で、言い顏をして、

「酒井さん、此處へ來なくちや不可んですよ。」

時に教頭胸を反らして、卓子をドンと拳で叩らすと、妙子はつゝと歩ましく進んで、差向ひに面を合はせて、其のふつくりした二重瞼を、驚する色なく、圓く睜つて、

「御用ですか。」

と云つた風采、云ひ知らぬ品威が籠つて、閑耕は思ひかけず、はつと照らされて俯向いた。

教場でこそあれ、二人だけで口を利くのは、抑々生れて以來最初である。が、是は教場以外では如何なる場合にても、然うであらうも計られぬ。

はて、教頭ほどの者が、こんな譯ではない筈だが、と更めて疑の目を擧げると、吞もすらりとして椅子に居る我を仰ぐよ、酒井の瞳は依然として氣高いのである。

「酒井さん……」

扉の用處が、倫理を講ずるやうには行かぬ。明瞭が釘つて震へがあるので、四邊を眴したが、暖いて、手巾で擦つて、湯も水も有るのでない、其處で、

「小ゥ使いゝ、」と怒鳴つた。

「へ——い、」

と謹んだ返事が響く。教頭は是に因つて、大に其の威嚴を恢復し得て、勢に乘じて、

「貴嬢に聞く事があるのですが、

「はい。」

「參謀本部の飜譯を爲て、未だ學校なども獨逸語を持つて居ますな——早瀨主稅——と云ふ、彼は、貴嬢の父樣の弟子ですな。」

「えゝ、然う……」

「で、貴嬢の御宅に置いて、修業をおさせなすつたさうだが、一體彼の幾歳ぐらゐの時からですか。」

「知りません。」

と素氣なく云つた。

「知らない？」

と沙な顏をして、顏でお妙を見上げて、

「知らないですか。」

「えゝ、前にからですもの。內の人と同一ですから、何時頃からだか分りませんの。」

「貴嬢は幾歳ぐらゐから、交際をしたですか。」

「……」

と默つて教頭を見て、然も不思議さうに、

「交際つて、私、眼ねえ。早瀨さんは內の人なんですもの。」と打微笑む。

「内の人。」
「えゝ、」と猫撫はず頷いた。
「貴嬢、然う云ふ事を言つては不可ますまい。彼を「内の人」だなんと云ふと、御廟殺をはじめ、貴嬢の名譽に關はるでせうが、あゝ」
と口を開いてニヤリとする。
お妙はツンとして横を向いた、眼に優しい怒が漲つたのである。
閑は、其の背けた顔を覗込むやうにして、眉を曲げ、眼を叩きながら、鼻の尖に、へゝん、と笑つて、
「あんな者と、貴嬢交際するなんて。藝者を細君にして居ると云ふぢやありませんか。はしい。怪しからん不行儀です。實に學者の體面を汚すものです。然う云ふ者の家へ貴嬢出入りをしては成りません。知らない事はないのでせう。」
如子は何にも言はなかつたが、はじめて眦しさうに瞬きした。
小使が來て、低頭して命を聞くと、教頭は頤で教へて、
「何を、茶をくれい。」
「へい。」
一北處を閉めて行け、寄宿生が覗くやうだ。」

四十八

扉が閉ると、教頭身体を扇して、仰向けに笑ひ懸けて、
「まあ、お掛けなさい、其處へ。貴嬢の爲に成らんから、云ふのだよ。」
故々立つて突着けた、椅子の緣は、袂に觸れて、其の一袖を動かしたけれども、お妙は規則正しいお答禮をしただけで、元の横向きに立つて居る。
「早瀬の事はまだ〳〵、其處ぢやないですが、」と直ぐに又眉を顰めて、讀じつけるやうな調子に變つて、
「酒井さん、早瀬は、ありや罪人だね、我々は其の名を口にするさへ怖るべき惡漢ですね。」
とのッそり手を伸ばして、卓子の上に散ばつた新聞を拾ひながら、
「貴嬢、今日のA……新聞を見んのですか。」
一言聞くと、顔と瞼を紅にして、おまは友染の襟ぐるみ袂の端を堅く握つた。
「見ませんか、」
と問返した時、教頭は傲然として、卓子に頤杖を支く。
「えゝ、」とばかりで、お妙は向いて、瞬きしつゝ、涙眼をするのであつた。

「別に、一大事に關して早瀬は父様の許へ、頃日に參つた事はないですかね。或は何か貴嬢、聞いた事はありませんか。」
小さな聲だつたが判然と、
「否」と云つて、袖にいた風呂敷包の紫を、皓齒で噛んだ。此の時、此の色は、瞼の其の朱を奪うて、寂しく白く見えたのである。
「行かん筈はないでせうが、貴嬢、知つて居て、未だ私の前に、祕すのぢやないかね。」
「存じませんの。」
と頭を掉つたが、いたいけに、拗ねたやうで、且つくどいのを如さゝう。
「ぢや、まあ、知らないと爲て。其から、お話するですがね。早瀬は、彼は、攫徒の手傳ひをする、市着切の片割のやうな男ですぞ！」
簪の花が颯として色がらえたか氣が滅つて、屹と、教頭を見向いたが、其の目の遣場、無さうに、向うの壁に充滿の、倩なる全世界の地圖の、サハラの沙漠の有るあたりを、淸い瞳がうろ〳〵する。
「勿論早瀬は、其がために、分けて規律の正しい、參謀本部の方は、此の新聞が出ない先に辭職、免官に、成つたです。是は其の攫徒に遭つた、當人の、御存じぢやらうね、坂田國之進氏、

彼の方の耳に第一に入つたです。
で、見ないんなら御覽なさい。外の二三の新聞にも記いてあるですが。此のA……が一番悪しい。」
と蒲鉾いて向うへ開いて、三の面を指で教へて、
「此處にありますが、お讀みなさい。」
「歸つて、私、内で聞きます。」と云つた、唇の花が戰いだ。
「は、は、は、貴嬢、（内の人）だなんと云つたから、極が悪いかね。何、知らないんなら宜しいです。私は貴嬢の名譽を思つて、注意のために云ふんだから、能くお聞きなさい。歸つて聞いたつて駄目さね。」
と太く偉つた語氣を帶びて、
「父様は、自分の門生だから、十に八九は經すですもの。何で眞相が解りますか。」
コツ〳〵廊下から剝啄をした者がある。と、教頭は、ぎろりと目金を光らしたが、反身に伸びて、
「カム、イン、」と猫撫はずに答へた。
此の剝啄と、カム、インは、餘りに呼吸が合過ぎて、恰も豫て言合せてあつたものゝやうである。

則ち扉を細目に、先づ七分立の寫眞の如く、孤から半身を突入れて中を覗いたのは河野英吉。自地に晶模樣の堅ネクタイ、金剛石の針留の光つただけでも、天窓から爪尖まで、其日の扮裝想ふべしで、髮から油が滴けさう。
早や得も言はれぬ悅喜の面で、
「やあ、」と扉を懸けると、入違ひに、後をドーン。
扉の彈きは、ぶる〳〵と、お妙の細い靴の尖に傳はつて、搖らめく胸に、地圖の大西洋の波が煽る。

四十九

「失敬、失敬。」
と叫と持上げて、浮かせ氣味に物馴れた風で、河野は教頭と握手に及んで、
「やあ、失敬、」と云ひながら、お妙の背後から、横顔をじろりと見る。
河野の調子の發奮んだほど、教頭は冷かな位に落着いた態度で、
「何處の歸りか。」
「大學（と力を入れて、）の圖書館に檢べものをして、其から練養軒で午飯を食うて來た。是から又H博士の許へ行かねばならん。」
と忙しさうに肩を掉つて、

「君」と故と低聲で呼んで、「此方は……」
「生徒――」と見下げたやうに云ふ。
「はあ、」
「ミス澤井と云ふ、」と横を向いて邪び笑を遣る。
「うむ、眞砂町の酒井氏の、」
と首を伸ばして、分つたやうな、分らぬやうな、見知越のやうな、で、無いやうな、其邊あやふやなお妙の顔の見方をしたが、
「君、紹介して吳れ給へ。」
「學校で、紹介は可厭しからう。」
「だつて最う教場ぢやないぢやないか。」
「其では、」と眞に餘儀なさゝうに、さて、厳格に、
「酒井さん、過般も參觀に見えられた、是は文學士河野英吉君。」
同じ文字を露した大形の名刺の芬と薫るのを、疾く用意をして居たらしい、ひよいと抓んで、蚤いこと、お妙の袖摺れに出さうとするのを、揃い！と目で留め、教頭は鼻で嘲して、小鼻へ掛けて揉み上げ揉上げ揉んだりける。
英吉は眼を睜つて、急いで其の名刺と共に、兩手を衣兜に突込んだが、斜めに眼を掉るよと見れば、ちよこ〳〵歩行きに、ぐるりと地圖を

背負つて、お妙の眞正面へ立つて、最一つ肩を揺んで、手の汗を、ずぼんの横へ擦りつけて、清めた氣で、くの字形に腕を出したは、短兵急に握手の積か、唯見ると、捺がぬ黒髪に自然と四邊を拂はれて、

「やあ、はゝはゝ、失敬。」

と英吉大照れに成つて、「後ざまに退つて（おお、神よ。）と云ひさうな態に成り、

「お遊びに入らつしやい、妹たちが、學校は遊ひますが、皆貴女を知つて居るのですよ。はあ……」

と獨りで頷いて、大廻りに卓子の端を廻つて、どたりと、腹迫ひになるまでに、擡げた新聞の上へ乘懸つて、

「何を話して居たのだい。」

數頭を一寸見れば、閑靜は額で睨めつけ、苦色顰して、其の行過を眺めながら、

「實は、今、酒井さんに忠告をして居る處だ。」

お妙は色を又染めた。

「あゝ、早瀬か。」

「然うだとも！　えゝ、酒井さん……」

默つて居るから、

「酒井さん！」

「はゝい、」と聲がふるへて聞える。

「貴嬢知らんのならお聞きなさい。頃日の事ですが、今もゐつた、坂田禮之進氏が、兩國行の電車で、百聞ばかり攫徒に掏られたです。取られたと思ふと、氣が着いて、直に其奴を引摑へて、車掌とで引摺下ろしたまでは、恐入つて冷却して居た其の攫徒がだね、忽ち烈火の如くに猛り出して、坂田氏をなぐつた壓ぎだ。」

「捩られたつてなあ、大人、氣の毒だつたよ。」

「災難とも。で、何です。巡査が來たけれども、何の證據も畢らんもんで、其の場は其ッ切で、坂田氏は何の事はない、打たれ損の形だつたんだね。お聞きなさい——貴嬢。

證據は無かつたが、怪むべき風體の奴だから、其筋の係が、其奴を附廻して、同じ夜の午前二時頃に、淺草橋邊で、フトした拍子に附いて取押へると、今度は袱紗に包んだ紙入ぐるみ、手も着けないで、坂田氏の盜られた金子を持つて居たんだ。

ねえ、貴嬢。拘引して嚴重に檢べたんだね。何處へ其まで隱して置いたか。先刻は無かつた紙入を、と云ふ事になる……と、です。」

「他まで慎重に數頭が云ふと、英吉が輕勿しく、

「妙だ、妙だよ。妙さなあ。」

五十

「攫徒の名も新聞に出て居るがね、何とか小僧萬太と云ふんだ。其奴の白狀した處では、電車の中で掏つた時、大不出來しに打攫つて、往生をしたんだが、對手が面を撲つたから、羯に障つて堪らないので、丁度袖の下に俯向いて居た男の袖口から、早業で其の紙入をずらかし込んで、最う古めた、と其處で逆捻に捻ぢたと云ふんだね。

處で、まゝ直しの仕事でもしたいものだと、柳橋邊を、晩く成つてから胡亂ついて居ると、うつかり出會つたのが、先刻、紙入を辷らかした男だから、金子は何う成つたらうと思つて、掴まつたら其迄だ、と惡度胴で當つて見ると、道理で袖が重い、と云つて、はじめて、氣が着いて、袂を探して其の紙入を出して呉れて、しかし、一旦此方の手へ渡つたもんだから、よく攫徒仲間が遣ると云ふ、小包にでもして、其筋へ出さなくつちや不可んぞ、と念を入れて渡してくれた。一所に交番へ來い！　とも云はずに、すつきりした其人へ義理が有るから、手も附けないで突出すつもりで、一先づ木賃宿へ歸らうとする處を、御用に成りました。唯た一時でも善人に成つて憎とした處だつたから掏つたんで、

彼人を持つた時なら、淺草橋の腰手を蹈んで、富貴鑑の屋根へ飛んでも、且那方の手に合ふんぢやないと、太い樂を並べた。太い奴は太い奴として。

酒井さん。其の攫徒の、袖の下に成つて、坂田氏の紙入を預つたと云ふ男は、誰だと思ひますか、ねえ、是が早瀬なんだ。」

と數頭は椅子をずらして、卓子を輕く打つて、

「何うです、貴嬢が聞いても變だらうが。

其ぢや、直き其の關係者にも當りがついて、早瀬も確か一二度警察へ呼ばれた筈だ。しかし其の申立てが、攫徒の言に符合するし、早瀬も些とは人に知られた、然るべき身分だし、何は置いても、名の聲いた貴嬢の父樣の門下だ、と云ふので、何の仔細も無く濟むにや濟んだ。

眞砂町の御宅へも、此の事に附いて、刑事が出向いたさうだが、そりや悔つて新聞にも書かず、御兩親も貴嬢には聞かせんだらう。

で、飛んだ災難で、早瀬は參謀本部の謀官も辭した、と新聞には慥よく出してあるが、そへて御豐なさい。

同じ電車に乘つて居て、坂田氏が掏られた事を其の騷ぎで知らん筈がない。知つて居てだね、紙入が自分の袂に入つて居る事を……まあ、假に攫徒に聞かれるまで氣がつかなんだにしてからがだ、愈々分つた時、面識の有る坂田氏へ逃さうとはしないで、ですね、」

河野にも言を分けて、

「直接に攫徒に渡して遣るも如何なもんだよ。何よりもだね、そんな盗賊とひそ〳〵話をして……公然とは出來んさ、いづれ密々訊さう。」

誰も否とは云はんのに、獨りで嵩にかゝつて、

「紙入を手から手へ譲渡を爲るなんて、そんな、不都合な、後唱い。」

「だがね、」

と一寸々々、新聞を見るやうにしては、お妙の顔を伺ひ〳〵、據があらぬ方を向いて、今は流眄もしなくなつたので、果は遂慮なく視めて居たのが、なえた樣な神を出して、

「坂田が疑ふやうに、攫徒の同類だと云ふ、そんな事は無いよ。君、」

「何うともゝへん。酒井氏の内に居たと云ふだけで、誰の子だか素性も知れないんだと云ふぢやないか。」

「父上に……聞い……頂戴。

とお妙は口惜しさうに、あはれや、うるみ靡して云つた。

二人密と目を合せて、苦々しげに數頭が、

「敢て然う云ふ探索をする必要は無いですがね、よしんば何事も揃いて問はんとして、少くとも攫徒に同情したに遊ひない、然うだらう。」

「そりや彼の男の主義かも知れんよ。」

「主義、危險極まる主義だ。で、要するにです、酒井さん。あゝ云ふ者と交際をなさると云ふと、先づ貴嬢の名譽、續いては此の學校の名譽に係りますから、以來、口なんぞ利いては成りません。宜しいかね。危險だから近寄らんやうになさい、何をするか分らんから、あんな奴は。」

お妙は氣を張つめむと鄭むる如く、熱と瞋る地圖を的に、目を睜つて、先刻から何んなに堪へたらう。得ばず涙ぐむと、最うはら〳〵と露になつて、紫の包にこぼれた。あはれ主税をして見せしめば、ために命も惜むまじ。

五十一

いや、學士二人驚いた事。

「貴嬢、何うしたんだ。」

と數頭が椅子から突立つた時は、お妙は婦から確乎握つた袂を其まゝ、白羽二重の胴襦袢の

筒袖の貼を開く、本の包に袖を重ねて、肩をせめて揉込むばかり額を伏せて、聲は立てずに泣くのであつた。

「えゝ、何うして泣くです。」

靴音高く傍へ寄ると、河野も慌しく立つて來て、

「泣いちゃ不可ませんなあ、何も悲しい事は無いですよ。」

「けれども、君の話振が此と穏でなかつたよ。だから誤解をされたんだ。貴嬢泣く事はありません、」

と密と肩に手を掛けたが、お妙の振拂ひもしなかつたのは、泣入つて、知らなかつた所為であつたに……

河野英吉嬉しさうな顔をして、

「さあ、機嫌を直してお話しなさい。」と云ふ時、きよと〳〵目で、お妙の伸向いた玉の頸へ、横から徐々と顔を寄せて、リボンの花結びに一寸觸れて、じた〳〵と軀身を戰かしたが、教頭は見て見ぬ振の、謂へらく、今夜の會計は河野持だ。

途端にお妙が身動をしたので、躰飛ばされたやうに、がたりと退る。

「最う歸つても可いんですか。」

と額を隠したまゝお妙が云つた。是には返す言もあるまい。

「可いですとも！」

と教頭が言ひも果てぬに、身を捻つたなりで、禮もしないで、つか〳〵と出さうにすると、がたと靴を鳴らして、教頭は及腰に追つかけて、

「貴嬢内へ歸つて、父様にこんな事を話しては不可んですよ。貴嬢の名譽を重んじて忠告をしただけですから、ね、宜いですかね、ね。」

急いた聲で賺すが如く、額を附着けて云ふのを聞いて、お妙は立留まつて、おとなしく頷いたが、（許す。）の態度で、然も優しかつた。

「あゝ」と、安堵と溜息を一所にして、教頭は室の眞中に、花乎と突立つ。

河野の袋が、横ざまに飛んで、あたふた先へ立つて扉を開いて控へたのと、擦違ひに、お妙は御と抜けて、額に當てた袖を落した。

雨を帶びたる海棠に、廊下の埃は鎭まつて、正午過の早や蔭になつたが、打向ひたる式臺の、戸外は麗な日なのである。

ト押重つて、木の實の生つた狀に額を並べて、齊しくお妙を見送つた、四ツの髮の粘り加減は、蚰蜒の遺ふにこそ。

眞砂町の家へ歸ると、玄關には書生が居て、送迎ひの手數を掛けるから、いつも素通りにして、横の木戸をトンと押して、水口から廊へ廻つて、縁側へ飛上るのが例で。

さしむき今日あたりは、飛石を蹈んだまゝ、母樣御飯、と遣つて、何ですね、唯今も言はないで、と躾められさうな處。

然うではなかつた。

例の通りで、廊へ入ると、母樣は風邪が長引いたので、最う大抵は快いが、未だ些と寒氣がする肩つきで、寢着の上に、縞の羽織を羽織つて、珍らしい櫛卷で、面窶れがした上に、色が拔けるほど白くなつて、品の可いのが鄙かしい。

寢床の上に端然と坐つて、膝へ捲卷の襟をかけて、其の日の新聞を讀む――半面が柔かに蒲團に敷いて居る。

これを見ると、何うしたか、お妙は飛石に突据ゑられたやうに成つて、立留まつた。

美しい袂の影が、座敷へ通つて、母樣は心着いて、

「遅かつたね。」

「えゝ、お友達と作文の相談をして居たの。」

優しくも教頭のために、腹案があつたと見えて、淀みなく返事をしながら、何となく力なさうに、靴を脱ぎかける處へ、玄關から夾の茶の間へ、急いで來た覺束で、襖の外から、書生の聲。

「お嬢さんですか、今日の新聞に、切抜きをなすつたのは。」

紫

五十二

お茶寅さら〳〵、大好な鯵の新切で御飯が濟むと、硯を一枚、房楊枝を持添へて、袴を取つたばかり、くたびれるほど固く卷いた扱帶に手拭を挾んで、金盥をがらん、と提げて、黒塗に萌葱の綿天の褄の立つた、薄の曲つた、女中の毫所穿を、雪の素足に突掛けたが、紗足袋を脱いだまゝの裾短なのを此も介意はず、水口から木戸を出て、日の光を浴びた狀は、踊舞臺の鹽汲に似て非なりで、藤間が新案の（羊飼。）と云ふ姿。

お妙は玄關傍、生垣の前の井戸へ出て、乾いては居たが乏りのある井戸流へ危氣も無く其の曲つた下駄で乗つた。女中も居るが、母樣の躾が可いから、最う十一二の時分から廂につ いたものだけは、人手には掛させないので、此處へは馴染で、水心があつて、つい去年あたりまで、土用中は、遠慮なしにから〳〵と汲み上げて、釣瓶へ唇を押附けるので、井筒の紅梅は葉になつても、時々花片が浮ぶのであつた。直に桃色の穂を出して、袂を投げて滑らした、惜氣の無い二の腕あたり、柳の架の散るよと見えて、井戸繩が走つたと思ふと、金盥へ入れた硯の上へ颯とかゝる、水が紫に、暈が散つた。

宿電を洗ふ氣で、楊枝の房を、水指を制れて拐りはじめたが、何を焦れたか、ぐいと引斷るやうに邪險である。

ト構内の長屋の前へ、通動に出る外、餘り着て來た事の無い、珍らしい背廣の拵裝、何だか衣兜を脇らまして、其の上暑中でも持つたのを見慣けぬ、蝙蝠傘さへ携へて、早瀬が前後を詞しながら、悄然として入つて來たが、梅の許なるお妙を見る……

「おゝ、」

と慌しい、懐しげな聲をかけて、

「お嬢さん。」

お妙は其まで氣がつかなかつた。呼ばれて、手を留めて主殺を見たが、水を汲んだ名殘か、頬の色がほんのりと、物いはぬ目は、露や、玉や、凡そ聲なく言なき世の其等の、美しいものより美しく、歌よりも心が籠つた。

「又、水いたづらをして居るんですね。」

と額を視めて元氣らしく、呵々と笑ふと、柔しい瞳が脱むやうに動き止まつて、

「金魚ぢやなくつてよ。硯を洗ふの。」

「あゝ、成程。」

と始めて金盥を覗込んで俯向いた時、人知れず目をしばたゝいたが、然あらぬ體で、

「御清書ですかい。」

「否、あの、綺なの。あの、上手な。明後日學校へ持つて行くのを、是から描くんだわ。」

「御手本は何です、姉樣の額ですか。」

「嘘よ、そんなものぢや無いわ。あゝ、」

と慌狼して、躍りで頷いて、

「もつと可いもの、杜若に八橋よ。」

「から衣きつゝ馴れにしと云ふんですね。」

と云ひかけて悲然たり。

お妙は何の氣もつかない、流手な面色して、

「まあ、何時覺えて、一寸、感心だわねえ。」

「可哀相に。」

と苦笑ひをすると、お妙は眞額で、

「だつて、主税さん、先年私の誕生日に、お酒に酔つて唄つたぢやありませんか。貴下は、淺くとも清き流れの方よ。顧倒の歌は柄に無いの。」

とつけ〳〵云ふ。

「いや、恐入りましたよ。（ト一寸額に手を當てゝ、）先生は？」と更めて聞くと、心ありげに頷いて、

「居てよ、二階に。」（おいでなさいな。）を色で云つて、萬たく垣から、二階を振仰ぐ。

主税は忽ち思ひついたやうに、

「お嬢さん、」と云ふや否や、蝙蝠傘を抜出す如く、井の柱へ押倒して、麦藁に、上衣を片腕から脱きかけて、

「久しぶりで、私が洗つて差上げませう。」と、脱いだ上衣を、井戸側へ突込むほど引掛けたと思ふと、お妙がものを云ふ間も無かつた。手を早や金盥に突込んで、

「貴嬢、其の房楊枝を。——淺くとも清き流れだ。」

五十三

「あら、亂暴ねえ。一寸、まだ釣瓶から雫がするのに、こんな處へ脱ぐんだもの。」

と軟めるやうに云つて、お妙は上衣を引取つて、露に白い小腕で、羽二重で結へたやうに、胸へ、薄色を拋いたのである。

「貴嬢は、先生のやうに繊性で、袂の中も、井戸端へ持出して、さあ〳〵水を使ふんだから、恁うやつて洗ふのにも心持は可いけれども、其の代り手を摩だらけにするんです。爪の間へ染みた日にや、一寸ぢや取れないんですからね。」

「厭ねえ、恩に被せて。誰も頼みはしないんだわ。」

「恩に被せるんぢやありません。爪紅と云つて、貴嬢、紅をさしたやうな美しい手の先を毫なしになさるから、だから云ふんです。矢張私が居た時分のやうに、お玄關の書生さんにして貰ひなさいよ。

あゝ、是は、」

と片頬笑みをして、

「餘り上等な墨ではありませんな。」

「可いわ！　どうせ安いんだわ。最う私がするから可くつてよ。」

「手が墨だらけになりますと云ふのに。貴嬢そんな邪險な事を云つて、私の手がお身代に立つて居る處ぢやありませんか。」

「それでもね、恁うやつてお召物を持つて居る手も、隨分、隨分〳〵と力を入れて、微笑んで、」

「ほゝゝ、梨日又日曜ね、貴郎の許へ遊びに行つてよ。」

水に映つた主税の色は、颯と薄墨の暗くなつた。あはれ、仔細あつて、飯田町の家は最う無かつたのである。

「入らつしやいましとも。」

と勢込んで、思入つた語氣で答へた。

「あの、庭の白百合は最う咲いたの。」

「……」

「此の間行つた時、未だ蕾が堅かつたから、早く咲くやうに、おまじなひに、私、フヲ〳〵とふくらまして來たけれど、」

と云ふ口吉こそ、ふくらむなりけれ。主税の背は、搾木にかけて絞つたのである。

ト見て、お妙が言はうとする時、からりと開いた格子の音、玄關の書生がぬつと出た。心づけても言ふことを肯かぬ、羽織の紐を結ばずに長くさげて、大跨に歩行いて來て、

「早瀬さん、先生が、」

二階の廊下は日の上の、先生は最う御存じ。

「は、唯今、」

と袂は見えぬ二階へ返事をするやうにして、硯を手に掛る、急いで立つと、上衣を開いて、背反へ廻つて、足駄穿いたが到丈に、肩を抱くやうに着せかける。

「やあ、是は、是は何うも。」

と骨も碎くる背に被いで、戰くばかり身を揉むと、

「意地が惡いわ、突張るんだもの。あら、憎らしいわねえ。」

と身動ぎに眉を顰めて——長屋の窓からお饒舌の媽々の顔が出て居るのも、路地口に野良猫が、のつそり居るのも、書生が無念さうに其羽織の紐をくる〳〵と廻すのも——一向氣にもかけず、平氣で着せて、襟を壓へて、爪立つて、

「厭な、どうして、こんなに雲脂が生きて？」

五十四

主税が大急ぎで、ト引挾まるやうになつて、格子戸を滑つた時、手をぶらりと下げて見送つたお妙が、無邪氣な恐び笑。

「まあ、粗匆かしいこと。」

寛に硯を持つて入つて、其の柄に引掛けた中折帽を忘れた。

後へ立淀んで、此方を視めた書生が、お妙の其の笑顔を見ると、崩れるほどにニヤリとしたが、側の羽織の紐を輪形に掉つて、格子を叩きながら、のそりと入つた。

誰も居なくなると、お妙は其の二重瞼をふつくりとするまで、最う、（其の速力を以てすれば。）主税が上つたらしい二階を見上げて、横歩行きに、井の柱へ手をかけて、伸上るやうにして居た。やがて、柱に背をつけて、くるりと向をかへて笑れると、學校から歸つたなりの袂を取つて、振をはらりと手前へ返して、眦毛の濃くなるまで熟と見て、袷と唐縮緬友染の長襦袢のかさなる袖を、ちゆう〳〵たこかいなと算へるばかりに、丁寧に引分けて、深いほど手首を入れたは、内心人目を忍んだつもりであるが、此の所作で餘計に目に着く。

但瑞力が充氣ないから、未だ覗いて居る件の長屋窓の女房の目では、おや〳〵細蟹か、鞠か、もしそれ豌豆だ、と思つた、が、然うで無い。

引出したのは、細長い小さな紙で、字のかいたもの、はて、怪しからんが、心配には及ばぬ——新聞の切抜であつた。

然ればこそ、學校の應接室でも、頻に袂を氣にしたので、是に、主税——到ぬ田の百有餘圓を掏つた……掏摸に關した記事が、細に一段ばかり有ることは言ふまでもない。

お妙は、今朝學校へ出掛けに、女中が味噌汁

迷惑してよ。」

「相變らずだ。（と獨言のやうに云つて、）ですが、何ですね、近頃は、大層御勉强でございますね。」

「何うしてね？　主税さん。」

「だつて、明後日お持ちなさらうと云ふ繪を、最う今日から御手廻しぢやありませんか。」

「翌日は日曜だもの、遊ばなくつちや、」

「あゝ日曜ですね。」

と雫を拂つた、硯は孤も映りさう。熟と見て振仰いで、

「其の、衣兜にあります、其の半紙を取つて下さい。」

「主税さん。」

「はあ、」

「ほゝほゝ。」と唯笑ふ。

「何が、可笑しいんです。え、顔に墨が刷ねましたか。」

「否、ほゝほゝ、」

「何ですてば、」

「あのね、」

「はあ。」

「もしかすると……」

「えゝ、えゝ。」

を裝つて來る間に、膳の物へ轉んだやうになつて、例に因つて三の面の星讀と云ふのをすると、「獨語學者の掏摸。」と云ふ、幾分か挑發的の標題で、主税の其の事が出て居たので、持ちかへて、見直したり、引繰つたり、疊んだり、太く氣を揉んだ樣子だつたが、ッンと怒つた顏をしたと思ふと、お盆を差出した女中と入違ひに、洋燈棚へついと起つて、剪刀を袖の下へ秘して來て、四邊を睨して、ずぶりと入れると、書取つた千代紙なり、めつきり裁縫は上達なり、見事な手際でチョキ〳〵チョキ。

母樣は病氣を勤めて、二階へ先生を起しに行つて、貴郎、貴郎と云ふ折柄。書生は玄關どたんばたん。女中は丁度、凄所の何かの湯氣に隱れたから、爾時は誰も知らなかつたが、知れずに濟みさうな事でもなし、又これだけを切取つても、主税の迷惑は隱されぬ、内へだつて、新聞は外に二三種も來るのだけれども、そんな事は不關焉。

で、教頭の說くを待たずして、お姉は一切を知つて居たので、話を聞いて驚くより、無念の涙が早かつたのである。

と書生は又、内々はがき便見たやうなもの へ、投書をする遺樂があつて、今日あたり出さうな處と、床の中から手ぐすねを引いたが、寢坊だから、奥へ先樣に成つたのを、あとで飛附いて見ると、恰も其裏へ、目的物が出る筈の、三の面が一小間切拔いてあるので、落膽したが、いや、此の惡戯、蟻的に極つたり、と怨恨骨髓に徹して、いつもより歸宅の遲いのを、玄關の障子から睨め透して待構へて、木戸を入つたのを追かけて詰問に及んだので。爾時のお姉の返事と云ふのが、あゝ、私よ。と沒ましたものだつた。

其を又ひとりで此處で見直しつゝ、半ば過ぎると、日を外らして、多時思入つた風であつたが、ばさ〳〵と引裂いて、くるりと丸めてハタと向う見ずに投り出すと、最一ッの柱の許に、其の蝙蝠傘に掛けてある、主税の中折帽へ留まつたので、

「憎らしい。」と顏を赤めて、眉ね飛ばして、帽子を取つて、袖で、ばたゝ〳〵と埃を拂つた。

書生が、すつ飛んで、椅子を出て、何處へ急ぐのか、お姉の前を通りかけて、

「えへゝゝ。」

爾時お姉は、主税の蝙蝠傘を引抱へて、

「何處へ行くの。」

「車屋へ大急ぎでございます。」

「あら、父上はお出掛け。」

「否、車を持たせて、アバ大人を呼びますので、はゝは。」

はなむけ

五十五

媒約人は宵の口、燈火を中に、酒井とさしむかひの坂田禮之進。

「唯今は御使で、殊にお腕車をお遣はしで恐縮にごわります。實はな、一寸私用で外出をいたし居りましたが、俗に彼の、蟲が知らせるとか申すやうな儀で、何か、心急き、歸宅いたしますると、門口に腕車がごわりまして、來客かと存じましたれば、いや、」と額を撫でゝ笑ふのに前齒が露出。

「はゝはゝ、卽ち御持せのお腕車、早速間に合ひました。實に好都合と云つて宜しいので、是と申すも、偏に御緣のごわりまする兆でごわりまするな、はあ、」

酒井も珍らしく威儀を正して、

「お呼立て申して失禮ですが、家内が病氣で居ますんで、」と、手を伸して、卷莫をぐつ、と拔く。

「時に、如何でごわりまするな、御令室御病氣は。御勝れ遊ばさん事は、先達ての折も何ひましてごわりましてな。河野でも承り及んで、英吉君の母なども大きにお案じ申して居ります。何う云ふ御容體でいらつしやりまするか、私も其の、甚だ心配を仕りまするので、はあ、」

「別に心配なんぢやありません。肺病でも癲病でも無いんですから。」

と先生聲拔なことを云つて、俯向きざまに、灰を掃つたが、左手を袖口へ掻込んで胸を張つて煙を吸つた。禮之進は、畏つたずぼんの膝を、張肱の兩手で二つ叩いて、スーと云つたばかりで、斜めに酒井の顏を見込むと、

「たかゝ〳〵風邪のこぢれです。」

「其の風邪が萬病の原ぢや、と謀でも申すことでごわりまするが、事實でな。何分御注意なさらんと成りません。」

と妙に白けた顏が、燈火に赤く見えて、

「では、然やうに御病中でごわりましては、御緣女の事に就きまして、御令室と來だ御相談下さります間もごわりませんので？」

と重々しく素引きかけると、酒井は事も無げな口吻。

「いや、相談は爲ましたよ。」

「はゝあ、御相談下さりましたか。其は、」と頤を揉んで、スーと云つて、

「御令室の思召は如何でごわりませうか。實はな、恁やうな事は、打明けて申せば、貴下より御令室の御意向が主でごわりまするで、其の御言葉一ッが、如何でごわりますが、英吉君の母も、此のけがましうごわりまするより、寧ろ、黃道吉日御返事……と申しまするより、唯今以て、東京に逗留いたしをば待ちまして、東京に逗留いたして居りまする次第で。はあ。御令室の御言葉一ッで、」

と、意氣込んで、スーと忙しく啜つて、

「何か、私までも、其を承りまするに就いて、此のな、胸が疼くでごわりまするが、」

と熟と見据ゑると、酒井は半ば目を閉ぢながら、

「他ならぬ先生の御口添ぢやあるし、何つた通りで、河野さんの方も申分の無い御家です。實際、願つてもない良緣で、因より彼是異存のある筈はありませんが、但不束な娘ですから、」

「否、否、」

と頭を掉つて、大に發奮み、

「飛んだ事でごわります、怪しかりませんな、河野英吉夫人を、不束などゝ御意なされますると、親神の貴下のお口でも、坂田禮之進聞棄てに相成りません、はゝはゝ。で、御承諾下さりますかな。」

「家内は大喜びで是非とも願ひたいと言ひますよ。」

時に禍に害と當つた、柔な衣の氣勢があつた——其は次の座敷からで——先生の二階は、八疊と六疊二室で、其の八疊の方が書斎であるが、愛に坂田と相對したのは、壇から上口の六疊の方。

禮之進は又額に手を當て、

「いや、何とも。私大願成就仕りましたやうな心持で。お庇を持ちまして、痘痕が榮えるでごわりまする。は、はゝ、」

道學先生が、自から其の醜を唱ふるは、例として話の臍まつた時に限るのであつた。

五十六

望んでも得難き良緣で異存なし、とあれば、此の緣談は最う纏つたものと、今までの緩慢に因つて、道學者は爾か心得るのに、酒井が其の氣骨稜々たる姿に似ず、悠然と構へて、煙草の煙を長々と續ける工合が、何うも未だ話の

切目では無さゝうで、是から一物あるらしい、底の方の擦つたさに、禮之進は、日一日行歩き廻る、ほとぼりの冷めやらぬ、紳足袋の裏が何となく生熱い。

歩つた跡をもぢ〳〵さして、

「えゝ、御令室が御快諾下されましたと成りますると、貴下の思召は。」

些とも猶豫はずに、

「私に言句のあらう筈はありません。」

「はあ、成程、」と乗かゝつたが、未だ荷が濟まぬ。是で決着しなければ成らぬ譯だが……

「しますると、御當人、紗子様でごわりまするが。」

「娘は小兒です。箸を持つて、婿をはさんで、アンとお聞き、と補めて遣るやうな縁談ですから、否も應もあつたもんぢやありません。」

と小丸みに灰を落したが、直ぐに又煙草にする。

道學先生、堪りかねて、手を拍り、膝を抓つて、

「では、御兩親はじめ、御嬢女にも、御得心下されましたれば、直ぐ結納と申すやうな御相談は如何なものでごわりませうか。義は急げでごわりまするで。」と講義の外の格言を提出した。

「先生、其處ですよ。」と灰吹に、づいと、つ込む。

「成程、成程、就きまして、何か、別條が。」

「火有り。」と調子が碎けて、「私どもは順ふ處の御縁であるし、彼にも彼是は申させません。無論ですね、お前、河野さんの嫁に成るんだ。はい、と云ふに問違ひはありませんが、他に最う一人、貴下からお話し下すつて、承知をさせて頂きたいものがあるんです。何うでせう、其の者へ御相談下さるわけに參りませうか。」

「お易い事で。何でごわりまするか、執方ぞ、御親類でもおあんなさりまするならば、直ぐに此の足で駈着けましても宜しう存じまするで。えゝ、御姓名、御住所は何とおつしやる？」

「住居は飯田町ですが、」

と云ふ時、先生の肩がやゝ聳えた。

「早瀬ですよ。」

「御門生。」と、吃驚する。

「掬摸一件の男です。」と意味ありげに打微笑む。

禮之進、苦り切つた顏色で、

「へゝい、其は又、何う云ふ次第でごわりまするか、唯御門生と承りましたが、何ぞ深しき理由でもおありなさりますと云ふ……」

「理由も何にもありません。早瀬は如に惚れて居ます。」と澄まして云つた、酒井俊藏は世に聞えたる文學士である。

道學者はアッと狼狽、目を圓かにして口をつぐむ。

「實の親より、當人より、ぞッこん惚れてる人の意向に從つた方が一番間違ひが無くつて宜しい。早瀬が此の縁談を結構だ、と申せば、直ぐに如を差上げますよ。面倒は入らん。先生が立處に手を曳いて、河野へ連れてお出でなすつて構ひません。早瀬が不可い、と云へば、斷然お斷りをするまでです。」

默つては居られない。

「しますると、其の、」

と少し顏の色も變へて、

「御門生は、紗子様に……」と、あとは他人でも聊か、言ひかねて憚つたのを、……酒井は平然として、

「惚れて居ますともさ。同一家に我儘を言合つて一所に育つて、それで惚れなければ何うかして居るんです。尤も其の惚方――愛――はですな、兄妹のやうか、從兄妹のやうか、其とも師弟のやうか、主從のやうか、小說のやうか、傳奇のやうか、其處は分りませんが、惚れて居るにや違ひないのですから、私は、親、伯父、叔

母、諸親類、友達、失禮だが、御親的人、そんなものゝ口に聞いたり、意見に從つたりするよりは、一も二もない、早手廻しに、如の縁談は、惚れてる男に任せるんです。如何でせう、先生、至極妙策ぢやありませんか。其ともまた酒飲みの料でせうか。」

と串戲のやうに云つて、一寸口切つたが、道學者の呆れて口が利けないのに、抑被せて、

「陸蟹と然うして下さい。」

五十七

「貴下、えゝ、お言葉ではごわりまするが、スー」と如の肩むぢかりに吸つて、禮之進、ねつねつ、……

「然やういたしますると、門生早瀬子が令嬢を愛すると申して、親一結婚をいたしたいと云ふやうな場合に於きましては……でごわりまする……其の邊は如何お訓ひなされまする思召でごわりまするな。」

「厭手にさせます。」と先生言下に答へた。

是に又少なからず甘かされて、

「しまするとふと、貴下は自由結婚を御賛成で。」

「否、」

「はあ、如何樣な御意に相成りまするか。」

「私は嫁の方ですよ。」と酒井は笑ふ。

「嫁？　さは、早瀬子と、令嬢とは、許嫁でお在なされますので。」

「決してそんな事はありません。然嫁ば、私と私の内とです。で、二人とも其に贊成……ですか。同意だつたから、夫婦に成りましたよ。女の方はどんな特色だか、更らに私には分りません。早瀬とくつついて、其が自由結婚なら、自由結婚、誠かと駈落をすれば、其は駈落結婚、」と澄ましたものである。

「へゝい、御串戲で。御議論が些と矯激でごわりませう！」

「先生、人の娘を、嫁に呉れい、と云ふ方が却つて矯激ですな、考へて見ると。けれども、習慣だから然ともも誠も怪まんのです。

貴下から縁談の申込みがある。娘には、惚れてる奴が居ますから、其の料下次第で御論を取締める、と云ふに、不思議はありますまい。唐突に嫁入らせると、其のぞつこんであつた男が、いや、失望だわ、懊惱だわ、如何だわ、辺つた、棘んだ、と兎角世の中が面倒くつて不可んのです。」

「で、ごわりまするが、此の理論ご破れますると、琅瀬子は其で宜しいとして、英吉君の方が、其こそ同じやうに、失望、懊惱、煩悶いたしませうで、……其の邊も御勘考下さりまするやうに。」

「大丈夫、」

と話は濟んだやうに莞爾して、

「昔から紗掬人殺の傳說が纏まらなかつた爲に、死ぬの、活きるの、と云つた例はありません。騷動の起るのは、紗掬人なしの內證の奴に秘つたものです。」

「はあ、」

と云つて、道學者は口を開いて、茫然として酒井の顏を見て居たが、

「しかし、貴下、聞く處に據りますると、早瀬子は、何か、藝妓風情を、內へ入れて居ると申すでごわりまするが。」

「然やう、藝妓を入れて居て、自分で不都合だと思つたら、女には指もさしますまい。直ちに河野へ嫁入らせる事に同意をしませう。其とも內心、を何うかしたいと云ふなら、女と夫婦に成る前に、藝妓と二人で、世帶の稽古をして居るんでせう。執方とも被奴の巡礼をお聞き下さい。或は、自分、を欲しいではないが、他ならず河野へは嫁っちや不可ん、と云へば、不もお斷りだ。何の道、如に惚れてるだから、

其の眞實愛して居るものゝ云ふことは、嫌に取つては、神佛の御託宣と同一です。」

殊勝恁くの如くんば、拘摸の事など言ひ出したら、尚ほ此の上の事の破れ、と纏之進石詰つて顔赤に成り、

「是非がございませぬ。兎も角、早瀬子を設きまして、更めて御承諾を願はうでございます。が、困りましたな。えゝ、先刻も飯田町の、あの早瀬子の居らるゝ路地を、私通りがゝりに覗きますると、何か、魚屋體のものが、指圖をいたして、荷物を片着け居りまする最中。何處へ引越される、と聞きましたら、（引越すんぢやない、夜逃げだい。）と怒鳴ります仕儀で。一向其の行先も分りませんが。」

先生唖然として、

「はゝはゝ、事實ですよ。拘摸の手傳ひをしたとかで、馬鹿野郎、東京には居られなくなつて、逃げたんです。最う此方へも暇乞に來ましたが、故郷の靜岡へ引込む、と云つて居ましたから、河野さんの本宅と同郷でせう。御相談なさるには使宜かも知れません。……御隨意に、――お引取を。」

あゝ、鍵的人には何が成る。黃色い手巾を忘れて、纏之進の歸るのを、自分で玄關へ送り出して、引返して、二階へ上つた、酒井が夫の其の八疊の書齋を開けると、其處には、主稅が、膝の前に手を支いて、長つて落涙しつゝ居たのである。夫人も傍に。

先生はつか〳〵と上座に直つて、

「謹、酌をして遣れ。早瀬、今のはお前へ餞別だ。」

五十八

主稅は心も拙だつたらう、覺束なげな足取で、階子段をみし〳〵と下りて來て、尤も、先生と夫人が居らるゝ、八疊の書齋から、一室越し袋の口を開いたやうな明は射すが、下は長六疊で、直ぐ其處が玄關の、書生の机も啥かつた。

さすがは酒井が注意して――早瀬へ、鍵、にする爲だつた――道學者との談話を漏聞かせまいため、先んじて、今夜は其となく餘所へ出して置いたので。羽織の紐は、結んだか何うか、未だ歸らぬ。

酔つては居ないが、鈴鼠と、壁へ手をつくばかりにして、壇を下り切ると、主稅は眞昭な穴へ落ちた思がして、がつくりと成つて、膝を支かうとしたが、先生は兎も角、其處まで送り出さうとした夫人を、平に、と推着けるやうに辭退して來たものを、此處で躊躇して居る内に、座を立たれては恐多い、と心を引立てた腰を、自分で突飛ばす如く、大跨に出合頭。

颯と開いた襖とともに、唐縮緬友染の不斷帶、格子の銘仙の羽織を着て、何時か、緣日で見たやうな、三ツ四ツ年紀の長けた麥、圓い透硝子の笠のかゝつた、春の高い竹臺の洋燈を、杖に支く形に持つて、母樣の居室から、衝と立ちざまの容子であつた。

お妙の顏を一目見ると、主稅は物をも言はないで、其のまゝ其處へ、膝を折つて、疊に突伏すが如く會釋をすると、お妙も、默つて差置いた洋燈の臺擦れに、肩を細うして指の尖を揃へて坐る、袂が疊にさらりと敷く音。

こんな慇懃な挨拶をしたのは、二人とも二人には最初で。玄關の障子に殆ど裾の附着く處で、向ひ合つて、恁うして、さて別れるのである。

と主稅が、胸を斜めにして、片手を膝へ上げた時、お妙のリボンは、何の色か、眞白な蝶のやう、燈火のうつろふ影に、黑髮を離れてゆらゆらと搖めいた。

「最う歸るの？」

と先へ膝を壓けられて、纏に顏を上げてお妙

を見たが、此の時の、俯は、主稅が世を終るまで、忘れまじきものであつた。

机に向つた横坐りに、やゝ亂れたが衣紋を氣にして、手で一寸々々と揃合はせるのが、何とやら薄寒さうで風采も沈んだのに、唇が眞黑だつたは、杜若を描く濃の、紫の雫を含んだのであらう、艷に媚めかしく、且つ寂しく、翌日の朝は結ふ髫の後れ毛さへ、眉を掠めてはらはらと、白き牡丹の花片に心の影のたゝずまへる。

「お嬢さん。」

「……」

「御機嫌宜う。」

「貴下も。」と唯一言、無量の情が籠つたのである。

靴を穿いて格子を出るのを、お妙は洋燈を背にして、框の障子に攀つて、熟と視くやうに見送りながら、

「然やうなら。」

と勢よく云つたが、快く別れを告げたのでは無く、學校の歸りに、何處かで朋達と別れる時のやうに、恁る折には恁う云ふものと、規則で口へ出たのらしい。

格子の外にちら〳〵した、主稅の姿が、まるで見えなく成つたと思ふと、お妙は拗ねた狀に袖だけを障子で隱して、其のつかまつた緣を、する〳〵二三度、烈しく掌で擦つたが、背を捻つて、切なさうに身を曲げて、遠い所のやうに、つい襖の彼方の茶の間を覗くと、長火鉢の傍の鈎洋燈の下に、ものゝ本にも實際にも、約束通りの女中の有樣。

一寸、風邪を引くよ、と先刻から、隣座敷の机に凭つかゝつて繪を描きながら、低聲で氣をつけた其の大搖れの船が、此の時、最早や見事な難船。

お妙は其の狀を見定めると、何を穿いたか自分も知らずに、スッと格子を開けるが拔いか、身動ぎに襦が解けた、しどけない扱帶の紅

五十九

「眼よ、主稅さん、地方へ行つては。」

とお妙の手は、井戸端の物に縋つたが、聲は早瀨をせき留める。

「……」

「眼だわ、私、地方へなんぞ行つて了つては。」

主稅は四邊を見たのであらう、闇の青葉に帽子が動いた。

「直き歸つて來るんですからね、心配しないで下さいよ。」

「だつて、直だつて、一月や二月で歸つて來やしないんでせう。」

「そりや、家を疊んで參るんですもの。二三年は引込みます積りです。」

「眼ねえ、二三年。……月に一度ぐらゐは遊びに行つた日曜さへ、私、待遠しかつたんだもの。そんな、二年だの、三年だの、眼だわ、私。」

お妙は格子戸を出るまでは、仔細らしく人目を忍んだやうだけれども、恁うなると敢て人聞きを憚る如き、低い聲では無かつたのが、愛で念に密りして、

「あの、貴下、父樣に叱られて、内證の……奥さん、」

「えゝ！」

「其の方と別れたから、それで悲くなつて地方へ行つて了ふのぢやないの、えゝ、ぢやなくつて？」

「……」

「其ならねえ、辛抱なさいよ。母樣が、其の方もお可哀相だから、可い折に、父樣に然う云つて、一所にして上げるつて云つてるんですよ。私がね、（お酌さん。）をして、澤山お酒を飲まして、然うして、其の時に細めば可いのよ、父

様が背いて哭れますよ。」

「……罰、罰の當つた事をおつしやる！　私は涙が溢れます、勿體ない。そりや最う、先生の御意見で夢が覺めましたから、生れ代りましたやうに、魂を入替へて、是から修行と思ひましたに、人は怨みません。自分の耽度だけれど、拘束と、何うしたの、怨うしたの、と云ふ汚名を被ては、人中へは出られません。

先生は、我儘は是れ面倒だつたら、又玄關へ來て居れ、置いて遣らう、とおつしやつて下さいますけれども、先生のお手許に居ては、尚ほ拘束の名が世間に騒しくなるばかりです。

車快なやうですけれど、其よりは當分地方へ引込んで、人の噂も七十五日と云ふのを、果敢ないながら、輒みにします方が、萬全の策だ、と思ひますから、私は、一日旅行してさへ、新橋、上野の停車場に着くと引みたいほど嬉しくなります、そんな懐しい東京ですが、しばらく別れねばなりません。」

「厭だわ、私、厭、行つちや。」

言が途絶えると、音がした、釣瓶の雫が落ちたのである。

差俯向くと、仄かにお妙の足が白い。

「靜岡へ參つて落着いて、都合が出來ますと、どんな茅屋の軒へでも、其れこそ花だけは綺麗に飾つて、歓迎をしますから、貴嬢、暑中休暇には、海水浴に入らしつて下さい。

江ノ島も興津も直き其處だし、未だ知りません が、久能山だの、御靜寺だの、名所があつて、清見寺も、三保の松原も近いんですから、」

「富士の山と申す、天までとやく山を御目にかけますまで、主税は嘘を賜して云つた。

「厭だわ、そんな事よりか、私、來年卒業すると、最うあんな學校や教頭なんか用は無いんだから、然うすると、主税さんの許へ、毎日朝から行つて、教頭なんかに見せつけて遣るのにねえ。口惜しいわ、擬徒の仲間だの、巾着切の同類だのつて、貴郎の事を然う云ふのよ。而して、口も利いちや不可ないつて、學校の名譽に障るつて云ふのよ。可うどざんす、歸途に直ぐに、早瀬さんへ行つていツつけて遣るつて、言はうかと思つたけれど、行狀點を減かれるから。然うすると、お友達に負けるから、見つともないから、默つて居たけれど、私泣いたの。主税さん。卒業したら、其日から、私も無茶かい、見て頂戴。)と、貴下の二階に居て點を取つて遣りたかつたに、殘念だわねえ。」

と捻寄つて、

「地方へ行かない工夫はないの？」と忘れたやうに、肩に凭れて、胸へ縋つたお妙の手を、上へ頂くが如くに取つて、主税は思はず、唇を指環に接けた。

「忘れません。私は死んでも鬼に成つて。」

君の影身に附添はむ、と誓約をさら〳〵と鳴らしたのである。

巣立の鷹

六十

「おつと、此處、此處、飯田町の先生、此方だ、此方だ、はゝはゝ。」

十二時近い新橋停車場の、まばらな、陰氣な構内も、呼返る高調子で、主税を呼懸けたのは、組の惣助。

手荷物はすつかり、此のいさみが預つて、先へ來て待合はせたものと見える。大な支那鞄を横倒しにして、えいこらさと腰を懸けた。重荷に小附の折の鞄、懸張つて挾んだ書物の、背のクロオスの文字が、伯林の、星の光は怨くぞとて、きら〳〵異樣を放つのを、瓢單式に膝に引着け、あの右角の、三等待合の入口を、叱られぬだけに塞いで、柳下石上の身の構へ、電燈

の花見る面色、九分九厘に飲酒たり矣。

あれでは、我慢が仕切れまい、竹砂町の井筒の前で、青蛙蒲ち、枝裂けて、お纏と分れて來る途中、何處で飲んだか、主税も陶然たるもので、くわつと二等待合室を、入口から転子を突込んで覗く處を、め組は巣の所謂へ此方。)から呼んだので。是が一言でブーンと響くほど聞えたのであるから、其大音や思ふ可し。

「やあ、待たせたなあ。」

主税も、怨うなると元氣なものなり。

ドッコイショ、と荷物は腰掛てに立つて來て、

「待たせたせぜ、先生、私あ九時から來て居た。」

「退屈したらう、氣の毒だつたい。」

「うんや、何、」

とニヤリとして、牛鍋の腹を撫けると、脚掛へ斜つかひに、正宗の四合罎、卜内證で見せて、

「是だ、證やねえ。退屈をするもんか。時々喇叭を練めちやあね、」

と向鄰巻の首を車つて、

「切符の費下口を見物でさ。はゝは、別さんの、お前さん、手ばかりが、他處で、眞白に怨うちらつく工合は、何の事あねえ、さしがねで蝶々を使ふか、活動寫眞の花火と云ふもんだ、見物だね。難有え。はゝはゝ、」

「馬鹿だな、何だと思ふ、お役人だよ、怪しからん。」

と苦笑ひをして鎖めながら、

「家はすつかり片附いたかい、大變だつたらう。」

「戰だ、炉然戰だね。だが、何だ、帳場の親方も來りや、抑子も手傳つて、燈の點く前にやれ、と云ふけれど、然うは行かねえやね。蔦ちやんが、手を突込んだ蜘味噌なんざ、打棄るのは出いから、車屋の媽々に遣りさ。お佛壇は、蔦ちやんが人手にや渡されえ、と云ふから、私は出背負つて、一度内へ歸つたがね、何だつて、お前さん、女人禁で、蔦ちやんに、栗を搾せねえで、蔵を明渡すんだから、煩かしいや。長火鉢の引出から、紙にくるんだ、お前さん、仕つけ絲の、捻屑を丹念に引丸めたのが出たのにや、お源坊がが出した。こんなに御新造さんが氣をつけて恁すつたお世帶だのにッて、へん、遣つてやあがら。

えゝ、飲みましたとも。錦砲巻は山に植むし、近所の看屋から、鯉はごさつても、鮎の沼の呼いやつを目利して、一土手提げて來て、私が切味をお目にかけたね。素敵な切味、一分だめしだ。轉がすと、一が出ようと云ふ心を親指でなめずりながら、酒は鉢前で、焚火で、煮燗だ。

さあ、飲めつてえ、と、三人で遣りかけましたが、景氣づいたから手明きの捏子どもを在りつたけ呼んで來た。薄暗い臺所を覗く奴あ、雪羽から來る八百屋だつて。此方へ上れ。豆腐イもお馴染だらう。彼ア背負引け。やあ、酒屋の小僧か、き様喇叭節を唄へ。面白え、と成つた處へ、近所の挨拶を濟まして、歸つて來た、お源坊がお前さん、一枚着換へて、お化粧をして居たらうぢやありませんか。盃取卿で小切を拵して、さつさと出てども行く事か。御奉公のおなごりに、皆さんお酌、と來たから、難有え、大目如來、已が車に乘せて遣る、いや、私が、と戰だね。

戰と云やあ、晉羽の八百屋は謝釋の蔦似を遣つた、親方が浪花節だ。

あゝ、是がお世帶をお持ちなさいますお祝ひだつたら、とお源坊が涙ぐんだしをらしさに。お前さん、有象無象が辭を納めて、しんみりとしたらうぢやねえか。震だれ、泣くやら、はゝはゝゝ、笑ふやら、はゝゝゝ。」

六十一

「其處でお前さん、何だつて、世帶をお仕舞えなさるんだか、金錢づくなら、此方等が無盡をしたつて、此家の御夫婦に夜逃げなんぞ爲せるんぢやねえ、と一番しみつたれた服裝をして、錢の無さゝうな豆腐屋が言はあ。よくしたもんだね。

錢命づくなら、め・組がついてる、と鐵砲卷の皿を餌中へ突出した、と思ひねえ。義理にや叫はねえ、御新造の方は、先生が子倒から世話に成つた、眞砂町さんと云ふ、大先生が不承知だ。聞きねえ。師匠と親は無理なものと思へ、とお祖師樣が云つたとよ。無理でも通さにやならねえ處を、一々御尤なんだから、一言もなしに、御新造も身を退いたんだ。あんなにお貼じかつた、へゝゝ、」

「おい、可い加減にしないかい。」

「可いやね、お前さん、遠慮をするにや當らねえ、酒屋の御用も、挽子迄も皆知つてらな。」

「なほ、惡いぜ。」

「まあ、忍けときねえな。其を、お前、大先生に叱られたつて、柔順に別れ話にした早瀨さんも感心だらう。

だが、何だ、其で家を疊むんぢやねえ。若い掏摸が遊損なつて、人中で面を打たれながら、お助け、と叫するから、其處ア男だ。諦來た、と報まれて、紙入を隱して遁つたのが墓露たんで、掏摸の同類だ、とか何とか云つて、且那方の交際が面倒臭く成つたから、引拂つて駈落だとね。話は間違つたかも知れねえけれど、何だつてお前さん報まれて退かねえ、と云やあ威勢が可いから、然う云つて、さあ、おい、皆、一番しやん、と古める處だが、且那が學者なんだから、萬歳、と遣れ。いよう且那萬歳、と云ふと御新造萬歳、大先生萬歳で、次手にお源ちやん萬歳——までは可かつたがね、へゝゝ、かゝり合だ、其の掏摸も祝つて遣れ。可からう、」

と乘氣に成つて、め・組の惣助、停車場で手眞似が交つて、

「掏摸萬歳——と遣つたが、（すりばんだい。）と聞えませう。近火のやうだね。火事は何處だ、と木遣で騒いで、巾着切萬歳！と祝ひ直す處へ、八百屋と豆腐屋の荷の番をしながら、人だかりの中へ立つて見てござつた差配樣が、お前さん、苦笑ひの顏をひよつこり。これ〳〵、火の用心だけは怠むよ、と云ふと、手廻しの可い事は、車屋のかみさんが、あと〳〵最う一度掏を掛けて、緣側を拭き直さう、と云ふ腹で、番頭が褒めい、差配は何處だと聞きやあがる。差配樣か、差配樣は此家の主人が駈落をしたから、後を追つかけて留守だ、と言つたら、苦つた顏色をしやがつて、家賃は幾干か知らんが、前から、空いたら借りたい、と思うて居つたんぢや、と云ふだらうぢやねえか。お前さん、我慢なるめえぢやねえかね。怎う、可い加減にしねえかい。柳橋の蔦吉さんが、情人と世帶を持つた家だ、汝達の手に渡すもんか。め・組の惣助と云ふ魚河岸の大問屋が、別莊にするつてよ、五百兩賣金が濟んでるんだ。歸れ、と喚くと、驚いて出て行つたつけ、はゝはゝ、何うだね、氣に入つたらう、先生。」

「惡戯をするぢやないか。」

「だつて、お前さん、當種が當種な上に、同體が氣に食はねえや。しらふの時だつたから、未だまあ其で濟んだがね。掏摸萬歳の時で御覽じろ、えて吉、存命は豐東ねえ。」

と國に乘つて饒舌るのを、をかしさうに聞惚れて、夜の潮の、光ち滯ちた棚内に溶標の如く千鳥脚を引摺るて憚からぬ高話、人もなげな振舞、小面憎かつたものであらう、夢中に成つた渠等の傍で、膝頭が一名、密と寄つて、中にも

「止せよ、そんな事。」

と主税は帽子の前を下げる。

「まあさ、そんな中へ來やあがつて、お剩に、空くのを待つて居た、と云ふ口吻で、其の上横柄だ。

誰の癪に障るのも同一だ、と見えて、可笑しうがしたぜ。車屋の挽子がね、お前さん、え、え、えつッて、人の惡いッたら、蟇の眞似をして、痘痕の極印を打つた、其奴の鼻頭へ横のめりに耳を突かけたと思ひねえ。奴もむか腹が立つた、と見えて、空いた家か、と喚いたから、私ア階子段の下に、蔦ちやんが香を隱して置いたらしい白粉入を引出しながら、空家だい！と怒鳴つた。吟驚しやがつて、早瀨は、と聞くから、夜逃げをしたよ、と威かすと、へゝゝ且那、」

め・組は極めて小さい聲で、

「私ア高利貸だ、と思つたから……」

話も事にこそよれ、勿體ない、道學の先生を……高利貸。

六十二

些と默つたか、と思ふと、め・組はきよろ〳〵四邊を見ながら、歸天齋が扱ふやうに、俄捉く四合罎から倒にがぶりと飲つて、呼吸も吐かず、

「それからね、人を馬鹿にしやあがつた、其の痘痕、差配樣は何處だと聞きやあがる。差配樣か、差配樣は此家の主人が駈落をしたから、後を追つかけて留守だ、と言つたら、苦つた顏色をしやがつて、家賃は幾干か知らんが、前から、空いたら借りたい、と思うて居つたんぢや、と云ふだらうぢやねえか。お前さん、我慢なるめえぢやねえかね。怎う、可い加減にしねえかい。柳橋の蔦吉さんが、情人と世帶を持つた家だ、汝達の手に渡すもんか。め・組の惣助と云ふ魚河岸の大問屋が、別莊にするつてよ、五百兩賣金が濟んでるんだ。歸れ、と喚くと、驚いて出て行つたつけ、はゝはゝ、何うだね、氣に入つたらう、先生。」

「惡戯をするぢやないか。」

「だつて、お前さん、當種が當種な上に、同體が氣に食はねえや。しらふの時だつたから、未だまあ其で濟んだがね。掏摸萬歳の時で御覽じろ、えて吉、存命は豐東ねえ。」

と國に乘つて饒舌るのを、をかしさうに聞惚れて、夜の潮の、光ち滯ちた棚内に溶標の如く千鳥脚を引摺るて憚からぬ高話、人もなげな振舞、小面憎かつたものであらう、夢中に成つた渠等の傍で、膝頭が一名、密と寄つて、中にも

め・組の横腹の邊で唐突に、がんからん、がんからん、がんからん。

「ひやあ、」と据眼に呼吸を引いて、たじ〳〵と退ると、驛員は冷々然として衝と出つて、入口へ向いて、がらんがらん。

主税も驚いて、

「切符だ、切符だ。」

と思はず口へ出して、慌てゝ行くのを、

「おつと、おつと、先生、切符なら心得てら。」

「最う買つといたか、其は豪い。」

惣助これには答へないで、

「えゝ、驚いたい、串戲ぢやねえ、二合半が處フイにした。さあ、まあ、お乘んなせえ。」

荷物を引立てゝ來て、二人で改札口を出た。其の半纖着と、薄色背廣の押並んだ對象は妙であつたが、乘客は唯此の二人の影のちら〳〵と分れて映るばかり、十四五人には過ぎないのであつた。

め・組が、中ほどから、急にあたふたと駈出して、二等室を一ッ飛越しに最一つ出て、ひよいと、飛込むと、早や主税が近寄る時は、荷物を入れて外へ出た。

「此處が可いや、先生。」

「何だ、青も符か。」

「知れた事だね、」
「大臣を言ふな、駅丁の身分ぢやないか。幾千だつけ。」
と横へ反身に衣兜を探ると、め組はどんぶりを、ざつくと叩き、
「得てら。」
「お前に連引かして振るものか。」
「うゝむ、と貴面目で、頭を掻つた、
「不幾叩き賣つた道具のお綾が、ゴッしりあるんだ。お岡さんが、美ちやんに遺れつて云ふのを、未だ預つて居るんだから、遠慮はねえ、はゝはゝ。」
「それぢや遠慮しますまいよ。」
と乗込んだ時、他に二人。よくも見ないで、窓へ立つて、主税は乗出すやうにして嫌なことを云つた。其は――め組の日から漏らした、河野の母親が以前、恋じたと云ふ――馬丁貞造の事に就いてであつた。
「何分頼むよ。」
「むゝ、可いつて事に。」
主税は笑つて、
「其の事ぢやない、馬丁の居處さ。己も捜すが、お前の方も。」
「……分つた。」
と後退つて、叩うざまに顔卷を占め直した。手を拭まゝ、花火の如く上へ開いて、
「いよ、孤鳳！」
傷へ乗た貴に、突のめるやうに、お辭儀をして、
「貴牛御免ねえ、はゝはゝ。」
主税は窓から立—る時、向うの仲に、銅鑼な褌卷の後姿を見た。ドンと硝子戸をおろしたトタンに、斜めに北返つたのはお芦である。
はつと思ふと、お芦は知らぬ顔をして、またくるりと背を向いた。
汽車出でぬ。

春

買初に雪の山家の給本かな
まな板に旭さすなり芹薺
爪紅の雫を染めたる若菜かな
鬱人と書院に語る雪解かな

蕪園をおもふ

背門晶ひねもす雨の梅かな
母こひし夕山梅峰の松
春月や摩耶山切利天上寺
町内の螢来たり朝梅
雪渕をかざせば花の梢かな
紅闘に暮落ちたり夜半の春
花李美人の影の青きまで
釣鐘に袖觸れつ春寒き寺
おぼろ夜や片輪車のきしる音
雨の中摘むべき草を見てすぎぬ
長の家わづかに蠶なき一間
掌に花抽のせつゝ片折戸

――鶴花余樂卷十五「夏日」より

婦系圖（後篇）

貴婦人

一

其の翌日、神戸行きの急行列車が、函嶺の隧道を出る時分、食堂の中に椅子を占めて、卓子は別であるが、一人外國の客と、流暢に獨逸語を交へて、自在に談話しつゝある青年の旅客があつた。

此方の卓子に、我が同胞の解く巧みに外國語を操るのを、羨しさうに、且つ頼母しさうに、熟と見ながら、時々思出したやうに、隣の椅子の上に愛らしく乗つかゝつた、かすりで揃の、袷と筒袖の羽織を着せた、四ツばかりの男の兒に、極めて上手な、肉叉と小刀の扱ひ振で、肉を切つて皿へ取分けて遣る、盛装した貴婦人があつた。

見渡す青葉、今日しと〳〵、窓の絣に降りかかる雨の中を、雲は白鷺の飛ぶ如く、ちら〳〵と來ては山の腹を後に走る。

「函嶺を絞る點滴に、自然、浴した貴婦人の肩は、滑かに玉を刷んだやうに見えた。

眞白なリボンに、黒髪の艶は、令蒔絵の櫛の光を沈めて、愈澄の如く、蘇鉄のぼかしに牡丹の花、恋に金入の半襟、栗梅の紋お召の袷、薄色の裾を襲ねて、幽かに紅の入つた黒地友染の下襲ね、折からの雨に涼しく見える、柳の腰を、十三の練で結んだかと黒繻子の丸帯に心泥です〳〵と引いた琴の絃、活へた模様の琴柱の一枚が、驚くりと乳房を包んだ胸を壓へて、時計の金鎖を留めて居る。羽織は薄い小豆色の縮緬に……一寸分りかねたが……五ツ紋、小刀持つ手の勁くに連れて、指環の珠の、蔑つか連つてキラ〳〵人の眼を射るのは、水晶の珠數を爪繰るに似て、非ず、浮世は今を盛の色。嬰粟な女併優が、子役を連れて居るやうな。年齢は、然れば、其の兒の母親とすれば、少くとも四五であるが、姉とすれば九、でも二十でも差支へはない。

婦人は、頭に、其の鶯語に巧妙な同胞の、景物の通つた、細表の、色の浸黒い、眉のやゝ迫つた男の、少々しい口許と、心の透通るやうな眼光を見て、ともすれば我を忘れるばかりに成るので、小兒は手が空いたが、最う腹は出來たり、退屈らしく皿の中へ、指でくる〳〵と環を描いた。其も、飽らなさうに、闘い目で、貴婦人の顔を視めて、同一やうに其方を向いたが、一向珍らしくない日本の兒より、是は外國の小父さんの方が面白いかの、あどけなく見入つて傾く。

其の、不思議さうに姉をくる〳〵と遣つた様子は、餘程可愛くつて、隅の窓を三角に取つてイんだボオイさへ、莞爾した程であるから、當の外國人は煙をもじや〳〵と破顔して、丁ど食後の林檎を剝きかけて居た處、小刀を日八分に取つて、皮をひよいと雷干に、菓物を差上げて何か口早に云ふと、青年が振返つて、身を捻ぢざまに、直ぐ近かつた、小兒の乗つかつた椅子へ手をかけて、

「坊ちやん、入らつしやい。好いものを上げますとさ。」と其の言を通じたが、無理な乗出しやうをして逆に向いたから、つかまつた腕に力が入つたので、椅子が斜めに、貴婦人の方へ横に成ると、其を頓しさうに、臆面なく、

「アハアハ、」と小兒が笑ふ。

青年は、好事にも、故と自分の腰をずらして、今度は危氣なしに兩手をかけて、擦籠のやうにぐら〳〵と遊ると、

「アハ、、」と愈嬉しがる。

御機嫌を見計つて、

「さあ、お來なさい、お來なさい。」

貴婦人の底意なく飼いたのを見て、小さな鞠を思ふ樣上下に刎れて、外國人の前に行くと、小刀と林檎と一緒に放して差置くや否や、によいと手を伸ばして、小兒を抱へて、スポンと床から振取つたやうに、日よりも高く差上げて、覺束ない口で、

「萬歲——」

ポオイが愛想に、パタ〳〵と手を叩いた。客は時に食堂に、此の一組ばかりであつた。

二

「今のは獨逸人でございますか。」

外客の、食堂を出たあとで、貴婦人は青年に尋ねたのである。會話の英語でないのを、既に承知して居たので、其の方の素養のあることが知れる。

青年は椅子をぐるりと廻して、

「僕も然うかと思ひましたが、違ひます、伊太利人ださうです。」

「はあ、伊太利の、商人ですか。」

「否、何うも學者のやうです。しかし此方が學者でありませんから、科學上の識番は出來ませんでしたが、樣子が、何だか理學者らしうございます。」

「理學者、然うでございますか。」

小兒の肩に手を懸けて、

「此の父親も、些ばかり其の端くれを、致しますのでございますよ。」

扨は理學士か何ざである。

貴婦人は思う云つた時、やゝ得意氣に見えた。

「嘸おもしろい、お話がございましたでせうね。」

雪踏をずらす音がして、柔かな肱を、唐草の浮模樣ある、卓子の藏に曲げて、身を入れて聞かれたので、青年は何故か、困つた顏をして、

「何う仕りまして、然うおつしやられては恐縮しましたた、僕のは、でたらめの理學者ですよ。えゝ、」

と一寸天窓を掻いて、

「林檎を食べた處から、先輩のニウトン先生を思ひ出して、其處で理學者と遣つたんです。はゝ、はゝ、實際は其の何だか些とも分りません。」

「まあ。お人の惡い。貴郎は、」

と莞爾した流纏の嫋かしさ。熟と見られて、青年は目を外らしたが、今は仕切の外に拡へた、ポオイと硝子越に顏の合つたのを、手招きして、

「珈琲を。」

「あゝ、此方へも。」

と貴婦人も註文しながら、

「ですが、大層お話が持てましたぢやありませんか。彼地の文學のお話でゞもございましたんですか。」

「何ういたしまして、」

と青年は愈弱つて、

「人を見て法を說けは、外國人も心得て居るんでせう。僕の柄ぢや、そんな貴女、高尙な話を仕かけッこはありませんが、妙なことを云つて居ましたよ。はあ、來年の事を云つて居ました。西洋ぢや、別に鬼も笑はないと見えましてね。」

「來年の、どんな事でございます。」

「何ですつて、今年は一度國へ歸つて來年出直して來る、と申すことです。（日蝕があるから其を見に又出懸ける、東洋ぢや、殆ど皆既蝕だ。）と云ひましたが、未だ日本には、其の風說がないやうでございますね。」

有つても一向心懸のございません僕なんざ、年の暮に、太神宮から暦の廻りますまでは、つい氣がつかないで了ひます。尤も東洋とだけで、支那だか、朝鮮だか、それとも、北海道か、九州か、何處で觀ようと云ふのだか、其を聞き懸けた處へ、貴女が食堂へ入つてお出なさいましたもんですから、（呀、これは日蝕處ぢやない。）と云ひましたよ。」

「ぢや、あとは、私をおなぶんなすつたんでございませうねえ。」

「御串戲おつしやつては不可ません。」

「それでは、どんなお話でございましたの。」

「實は、何う云ふ御婦人だ、と聞かれまして……」

「はあ、」

「何ですよ、貴女、腹をお立てなすつちゃ困りますが、えゝ、」

と俯向いて、低聲になり、

「女俳優だ、と申しました。」

「まあ、」と清い目を睜つて、屹と睨むが如くにしたが、口に微笑が含まれて、苦しくはない樣子。

「澤山、そんなことを云つてお冷かしなさいまし。私は最う下りますから、」

「何方で、」

と遠慮らしく聞くと、貴婦人は小兒の事も忘れたやうに、訓子が冴えて

「靜岡——ですから其先は御勝手におたぶり遊ばせ、室が違ひましても、私の乘つて居ますに、内は穀生でございませんで。僕も靜岡で下りるんです。」

「御心配はございますわ。」

「お湯。」

と小兒が云ふ時、一所に手にした、珈琲は未だ熱い。

三

「靜岡は何方へお越しなさいます。」

貴婦人が嬉しさうにして尋ねると、青年は稍と元氣を失つた體に見えて、

「何處と云つて當なしなんです。當分、旅籠屋へ厄介に成りますつもりで。」

もし其ならば、土地の樣子が聞きたさうに、

「貴女、靜岡は御住居でございますか、其とも一寸御旅行でございますか。」

「東京から稼ぎに出ますんですと、未だ取柄はございますが、まるで田舍俳優ですからお恥かしう存じます。田舍も貴下、草深と云つて、名も情ないぢやありませんか。場末の小屋がけ芝居に、お飯炊の世話ばかり勸めます、おやまですわ。」

と淺色の手巾で、口許を蔽うて笑つたが、前髪に隱れない、俯向いた眉の美しさよ。

青年は少時默つて、うつかり卷莫を取出しながら、

「何とも恐縮。決して惡氣があつたんぢやありません。貴女ぐらゐな女優があつたら、我國の名譽だと思つて、對手が外國人だから、香、眞個其のつもりで言つたんですが、眞に失禮。」

と眞面目に謝罪つて、

「失禮次手に、又お話をします氣で伺ひますが、貴女もし靜岡で、河野さん、と云ふのを御存じではございませんか。」

「河野……あの、」

深く頷き、

「はい、」

「あら、河野は私どもですわ。」

と無意識に小兒の手を取つて、卓子から伸上るやうにして、胸を起こした、帶の模樣の琴の絃、撥ぐが如く氣を籠めて、

「而して、貴下は。」

「英吉君には御懇親に預ります、早瀨主稅と云ふものです。」

と、青年は衝と椅子を離れて立つたのである。

「まあ、早瀬さん、道理こそ。貴下は、お人が惡いわよ。」と、何とも知つた目に莞爾する。

主税は驚いた顏で、

「えゝ、人が惡うございます つて？　其の女俳優、と言ひました事なんですかい。」

「否、家が氣に入らない、と仰有つて、酒井さんのお嬢さんを、貴下、英吉に許しちや下さらないんですもの、ほゝゝ。」

「……」

「兄は最う失望して、蒼くなつて居りますよ。早瀬さん、初めまして、」

と此方も立つて、手巾を持つたまゝ、此の時更めて、略式の會釋あり。

「私は英さんの妹でございます。」

「あゝ、おうはさで存じて居ります。鳥山さんの令夫人でいらつしやいますか。……これは何うも。」

靜岡縣……某……校長、鳥山理學士の夫人菅子、英吉が嘗て、脫兎の如し、と評した美人は是であつた。

足一度靜岡の地を踏んで、其を知らない者のない、淺間の森の唉耶姫に對した、草深の此花や、實にこそ、と頷かるゝ。河野一族臨一の麗、其一門の富貴榮華は、一に此の夫人に因つて代表さるゝと稱して可い。

夫の理學士は、多年西洋に留學して、身は顯職にありながら、純然たる學者肌で、無慾、恬淡、衣食ともに一向氣にしない、無趣味と云ふよりも無造作な、腹が空けば食べるので、寒ければ着るのであるから、唯其の分量の多からむことを欲するのみ。煮たのでも、焼いたのでも、酢でも構はず。兵兒帶でも、ずぼんでも、羽織に紐が無くつても、更に差支へのない人物、人に逢つても挨拶ばかりで、容易に口も利かないくらゐ。其の短を補ふに、令夫人があつて存する數か、菅子は極めて交際上手の、派手好で、話好で、遊びずきで、御喋走ずきであるから、玄關に引きも切れない來客の名刺は、新聞記者も、學生も、下役も、吳服屋も、繪師も、役者も、宗教家も、……悉く夫人の手に受取られて、偏に其の指環の寶玉の光によつて、名を輝かし得ると聞く。

四

五體包んで悪むのもあれば、ビールを飲ませて歸らすのもあり、連れて出て、見物をさせるのもあるし、音樂會へ行く約束をするのもあれば、慈善市の相談をするのもある。飽かず、倦まず、撓まないで、客に接して、何れもをして隨喜渇仰せしむる妙を得て居て、加ふるに其の日が又吉今の能辯であることは、爰に一日見て主税も知つた。

聞くが如くんば、理學士が少からぬ年俸は、過半菅子のために消費されても、自から求むる處のない夫は、些の苦痛も感じないで、其の爲すがまゝに任せる上に、英吉も云つた通り、實家から附屬の化粧料があるから、天の爲せる寵賞に、紅粉の裝を以てして、小遣が自由に成る。然も御衣勝の着寢はしたが、玉の膚豐かにして、汗は紅の露と成らう、宜なる哉、楊家の女、牛込南町に於ける河野家の學問所、桐楊塾の楊の字は、菅子あつて、擇ばれたものかも知れぬ。で、某女學院出の才媛である。

當時、女學校の廂下を、紅色の緒のたつた、襲裏の上穿草履で、ぱた〳〵と鳴らしたもので、其が全校に行はれて一時物議を起した。近頃靜岡の流行は、衣裳も髮飾も此の夫人と、最う一人、――土地隨一の豪家で、安倍川の橋の秋に、大嚴山の峰を蔽ふ、千歳の柳とともに、鶴屋と聞えた貝商家が、去年東京の然る華族から娶り得たと云ふ――新夫人の二人が、二つ巴の、巴川に渴を卷いて、お濠の水の溢るゝ勢。

「蚊とも存じませんで、失禮を。貴女、英吉君とは、蚊とも似てお出なさらないから勿論氣が着かう筈がありませんが。」

主税の此の挨拶は、眞に如才の無いもので。熱々視れば何處にか、俤が似通つて、水晶と陶器とにしろ、目の大きい處などは、彼是同一であるけれども、英吉に似た、と云つて嬉しがるやうな婦人はないから、聊かも似ない事にした。其の段は大出來だつたが、時に衣兜から燐寸を出して、鼻の先で吸つけて、ふつと煙を吐いたが早いか、矢の如く飛んで來たボオイは、小火を見附けたほどの騒ぎ方で、

「煙草は不可んですな。」

「いや、是は。」主税は狼狽へて、くるりと廻つて、そゝくさ扉を開いて、隣の休憩室の暖爐へ突込んで、喫みさしを揉消して、太く恐縮の體で引返すと、其のボオイを手招へ呼んで、夫人は莞爾々々笑ひながら低聲で何か命じて居る。但し携の笑ひ方は、他人の失策を嘲つたのではなく、親類の不出來しを面白がつたやうに見える。

「すつかり面目を失ひました。僕は、此の汽車の食堂は、生れてから最初だ。」

と、半ば、獨言を云ふ。折から四五人どやどやと客が入つた。其等には目もくれず、

「ほゝゝ、日本式ではないんだわねえ、貴下、お氣には入りますまい。」

「何ういたしまして、大恥辱。」

「旅馴れないのは、却つて江戸子の名譽なんですわ。」

ボオイが莉盞を持つて來て、夫人の手に渡すのを見て、大照れの主税は、口をつけたばかりの珈琲も其まゝ、立つたなりの膝も掛けずに、

「此處へも勘定。」

傍へ來て腰を屈めて、慇懃に小さな聲で、

「御一所に頂戴いたしました、は、」

「飛んでもない、貴女、」

と今度は主税が火の附くやうに慌しく急つて云ふのを、夫人は澄まして、紙入を帶の間へ、キラリと黄金の鎖が動いて、

「旅馴れた田舍稼ぎの……」

（女俳優）と云ひさうだつたが、客が居たので、

「女形にお任せなさいまし」

とすらりと立つた丈高う、半面を颯と彩る、椰色の窓掛に、色彩羅馬の女神の如く、愛神の手を片手で曳いて、主税の肩と擦違ひ、

「さあ、此方へ入らしつて、澤山お煙草を召上れ。」

と見返りもしないで先に立つて、件の休憩室へ導いた。背に立つて、一寸小首を傾けたが、腕組をした、肩が聳えて、主税は大跨に後に續いた。

窓の外は、根野の紫雲英、高嶺の雪、富士皓く、雨霽也。

五

聞けば、夫人は一週間ばかり以前から上京して、南町の桐楊塾に逗留して居たとの事。櫻も過ぎたり、菖蒲の節句と云ふでもなし、遊びではなかつたので、用は、此の小兒の二年如が、眼病――寧ろ目が見えぬと云ふほどの容體で、隨分實家の醫院に於ても、治療に詮議を盡したが、其の效なく、一生の不幸に成りさうな、斷念のために、折から夫理學士は、公用で九州地方へ旅行中。恰も祖親は、兄の英吉の事に就いて、牛込に行つて居る、彼是便宜だから、大學の眼科で診斷を受けさせる爲に出向いた、今日が其の歸途だと云ふ。

因より其の女の兒に取つて、實家の親父さんは、當時の醫學、昔取つた杵づかですわ、と輕い口を其の時交へて、であるし、病院の院長は、義理の伯父さんだし、注意を等閑にしようわけはないので、はじめには二月三月、然るべき東

京の夜門警にもかゝつたけれども、何うしても治らないから、三年前に既に思切つて、盲目の娘、（可哀相だわねえ、と客觀的の口吻だつたが、）今更大學へ行つたつて、所詮效のない事は知れ切つて居るけれど、……要するに其は口實にしたんですわ、と一寸堅い語が交つた。

夫が又、隨分自分には我儘をさせるのに、東京へ出すのは、何故か蟲が嫌ふかして許さないから、是非行きたいと唆嗾も出來ず、雖と二年越、上野の花も隅田の月も見ないで居ると、京都へ染めに遣つた羽織の色も、何だか、艷がなくつて、我ながらくすんで見えるのが情ない。

まあ、御覽なさい、と云ふ折から窓を覗いた。

此の富士山だつて、東京の人がまるつ切知らないと、こんなに名高くはなりますまい。自分は田舍で埋木のやうな心地で心細くつて成らない處、夫が旅行で多日留守、此時こそと思つても、あとを預つて居る主婦なら猶の事、實家の手前も、旅をかけては出世いから、其處で、盲目の娘をかこつけに、補を拔けた。親鳥も、とりめにでもならなければ可い、小兒の罰が當りませう、と言つて、夫人は快活に吻々と笑ふ。

此の談話は、主稅が立續けに卷煙草を煙らす間に、食堂と客室とに挾まつた、其の幅廣な休憩室に、差向ひで爲れたので。

椅子と椅子と間が眞に短いから、袖と袖と、むかひ合つて擦するほどで、裳は長く足袋に著ちても、腰の高い、雪踏の尖は爪立つばかり。汽車の動搖みに留南奇が散つて、友染の花の亂るゝのを、夫人は幾度も引かされ、引かされるのであつた。

主稅は其の盲目の娘と云ふのを見た。其は、食堂から此處へ入ると、突然客室戸を開けようとして男の兒が硝子扉に手をかけた時であつた。——銀杏返に結つた、三十四五の、實直らしい、小綺麗な年增が、丁度腰掛けの端に居て、直ぐに其處から、扉を開けて、小兒を迎へ入れたので、母は乳母よ、と見ると、最う一人、被布を着た女の子の、キチンと坐つて、此の陽氣に、袖口へ手を引込めて、首を萎めて、ぐつたりして、其の年增の膝に凭りかゝつて居たのがあつて、病氣らしい、と思つたのが、卽ち話の、目の病い娘なのであつた。

乳母の目からは、奥に引込んで、夫人の袖は見えないが、自分は居ながら、硝子越に被方から見透くのを、主稅は何か憚つて、一寸々々氣にしては目遣ひをしたやうだつたが、其の風を見ても分る、優しい、深切らしい乳母は、大くお主の盲目なのに同情したために、自然氣が映つて成つたらしく、女の兒と同一やうに目を瞑つて、男の兒に何かものを言ひかけるにも、向ほ深く差俯向いて、聊も室の外を窺ふ氣色は無かつたのである。

恁くて彼一句、是一句、遠慮なく、やがて靜岡に著くまで續けられた。汽車には太く倦じた體で、夫人は腕を仰向けに窓に投げて、がつくり鬢を枕する如く、果は腰帶の弛んだのさへ、引緒ふ元氣も無くなつて見えたが、鈴のやうな目は活々と、白い手首に鐘大きく、主稅の顏を瞻つて、物打語るに疲れなかつた。

草深邊

六

縣廳、警察署、師範、中學、新聞社、丸の内をさして朝毎に出勤する其の道其の道の紳士の、最も遲刻する人物も最う出揃つて、——初夜の九時十時のやうに、朝の九時十時頃も、一時は魔の所有に寂寞する、草深町は靜岡の侍小路を、カラ〳〵と捲いて通る、一臺、艷かな幌に、夜上りの浸渡つた富士を透かして、燃立つばかり

の鳥毛の蹴込み、友染の背當てした、高臺細骨の腕車があつた。

あの、音の冴えた、輕い腕車の軋る響きは……例のがお出掛けに違ひない。昨日東京から歸つた管。それ、衣更への委を見よ、と小橋の上で留るやら、且那を送り出して引込んだばかりの奥から、わざ〳〵駈出すやら、鯛釣瓶の手を休めるやら、女連が上も下も騷しく見る目を華てたが、腕車は確に、軒に藤棚があつて下を用水が流れる、火の番小屋と相角の、辻の帳場で、近頃燈替へて、鳥山の令夫人に乘初めをして頂く、と十日ばかり取つて置きの逸物に違ひないが——風呂敷包一つ乘らない、空車を挽いて、車夫は被物なしに駈けるのであつた。

ものゝ半時ばかり經つと、同じ腕車は、通の方から、勢よく茶畑を走つて、草深の町へ曳込んで來た。時に車上に居たものを、折から行違つた土地の豆腐屋、八百屋、（のりは何うですね——）と賣つて通る女房などは、若竹座へ乘込んだ俳優だ、と思つたし、且那が留守の、座敷から簾越に伸上つたり、玄關の衝立の蔭に成つて差覗いた奥様連は、千鳥座で金色夜叉を演ると云ふ新俳優の、あれは貫一に扮る謎かだ、と立騷いだ。

主稅が又此地へ來ると、幾とをかしいほど男ぶりが立勝つて、薙放しの頭髮も洗つたやうに水々しく、色もより白くすつきりとあく拔けがしたは、水道の餘波は爭はれぬ。土地の透明な光線には、（埃だらけな洋服を着換へた。）酒井光生の垢附を邪氣ものらしい、黑羽二重二ツ巴の紋着の羽織の中古なのさへ、艷があつて折目が凜々しい。久留米か、薩摩か、紺絣の單衣、これだけは新しいから今年出來たので、卯の花咲くとともに、お蔦が心盡けたものであらう。

渠は昨夜、呉服町の大東館に宿つて、今朝は夫人に迎へられて、草深さして來たのである。

仰いで、淺間の森の流るゝを見、俯して、濠の水の走るを見た。忽ち一朶紅の雲あり、夢の如く眼を遮る。合歡の花ぞ、と心着いて、流の音を耳にする時、腕車はがらりと石橋に乘懸つて、黑の大構の門に排が下りた。

「此處かい。」とひらりと出る。

「へい、」

と門内へ駈込んで、厩附の格子戸をがらがらと開けて、車夫は横さまに身を開いて、淺黄裏を風めて待つ。

冠木門は、茅式のまゝで數木があるから、横附に玄關まで曳込むわけには行かない。

男の兒が先へ立つて駈出して來る事だらう、と思ひながら、主稅が帽を脱いで、雨あがりの松の傍を、綠の露に袖擦りながら、格子を潛つて、土間へ入ると、天井には鶯籠でも釣つてありさうな、昔ながらの大玄關。

唯見ると、正面に一段高い、式臺、片隅の板戸を一枚開けて、後の緣から射す明りに、黑髮だけ際立つたが、向つた土間の薄暗さ、衣の色朦朧と、俤白き立姿、夫人は待兼ねた體に見える。

會釋もさせず、口も利かさず、見迎への莞爾して、

「まあ、遲かつたわねえ。あゝ御苦勞よ。」

一寸車夫に辭を懸けたが、

「嘸寢坊していらつしやるだらうと思つたの。さあ、此方へ。さあ、」

口早に促されて、急いで上る、主稅は明い外から入つて、一倍暗い式臺に、高足を踏んで、ドンと板戸に打附かるのも、菅子は心づかぬまで、いそ〳〵して、

「此方へ、さあ、ずつと此處から、ほゝゝ、市川音女、部屋の方へ。」

と直ぐに縫づたひで、はら〳〵と、素足で擦

霧の音。

七

市川菅女……と耳には爲たが、玄關の片隅切つて、緣へ駈込むほどの慌しさ、主稅は足早に續く喧嘩で、何の意味か分らなかつたが、其の緣の中ほどで、はじめて明日汽車の中で、夫人を女俳優だと、外人に揶揄一番した、あゝ、祟だ、と氣が付いて、茫爾とした時、渠の眼は口許に似ず銳かつた。

丁度其の横が十疊で、客室らしい造だけれども、夫人は最う其處を緣づたひに通越して、次の（菅女部屋）から、

「ずつと入らつしやいよ。」と聲を懸ける。

主稅が狐疑ふと、

「あら、座敷を嘱いちや不可ません、未だ散らかつて居るんですから、」

と笑ふ。是は、と思ふと、緣の突當り正面の大姿見に、渠の全身、飛白の紺も鮮麗に、部屋へ入つて居る夫人が、何處から見遣したらうと驚いた其の目の色まで、歴然と映つて居る。

姿見の前に、長椅子一脚、廣緣だから、十分に餘裕がある。戸袋と向合つた壁に、棚を釣つて、香水、香油、白粉の類、花瓶まじりに、ブラッシ、櫛などを並べて、洋式の化粧の間と見えるが、要するに、開き戸の押入を拔いて、造作を直して、壁を張替へたものらしい。

薄萌黄の窓掛を、件の長椅子と雨戸の間へ引掛けて、幕が明いたやうに、絞つた裾が靡いて居る。腕車で見た合歡の花は、心も此の庭の、黒い塀の外になつて、用水は其の下を、門前の石橋續きに折曲つて流るゝので、惜い哉、庭は唯二本三本を植棄てた、長方形の空地に過ぎぬが、其のかはり富士は一目。

地を坤軸から掘覆して、將棋倒に凭せかけたやうな、あらゆる峰を旋に抱いて、折からの蒼空に、雪なす袖を飜して、輕く其の薄紅の合歡の花に乘つて居た。

「結構な御住居でございますな。」

此處で、つい通りな、然も逸切なことを云つて、部屋へ入ると、長火鉢の向うに坐つた、飾を插さぬ、S卷の濃色が、滴るばかり。お納戸の絹せるに、ざつくり、山繭縮緬の縞の羽織を引掛けて、帶の弛い、無造作な居住居は、直ぐに立膝にも成り兼れないやう。横に飾つた箪笥の前なる、鏡臺の鏡の裏へ、其の玉の顎、に後毛のはら〳〵とあるのが通つて、新に薄化粧した美しさが背中まで透通る。白粉の香は座蒲團にも籠つたか、主稅が坐ると馥郁たり。

「こんな處へお通し申すんですから、まあ、堅くるしい御挨拶はお止しなさいよ。一寸昨夜は旅籠屋で、一人で寂しかつたでせう。」

と火鉢を壓へたさうな白い手が、銅壺の湯氣を除けて、ちら〳〵して、

「昨夜にも、お迎ひに上げませうと思つたけれど、一度、寂しい思をさして置かないと、他國へ來て、友達の難有さが分らないんですもの。是からも粗末にして不實をすると不可ないから……」

と莞爾笑つて、聲と見て、

「其に最う内が毫なしですからね、私が一週間も居なかつた日にや、門前雀羅を張るんだわ。手紙一ツ來ないんですもの。今朝起抜けから、自分で拂を持つやら、掃出すやら、大騒ぎ。未だ些とも片附かないんですけれど、貴下もつまらなからうし、私も早く逢ひたいから、可い加減にして、直ぐに腕車を持たせて、大急ぎ、と云つて遣つたんですがね。

あの、地方の腕車だつて疾いでせう。其でも何よ、未だか、未だか、と立つて見たり坐つて見たり、何にも手につかないで、御覽なさい、身化粧をしたまんま、鏡臺を始末する方角も

ないぢや ありませんか。たうとう玄關の處へ立切りに待つて居たの。何處を通つて來らしつて？」

「叔事も聞かないで、ボン〳〵時計を打仰ぐに、象牙のやうな咽喉を仰向け、胸を反らした、片手を疊へ。

「まあ、未だ一時間にも成らないのね。半日ばかり待つてたやうよ。途中で何處を見て來ました。大東館の直き此方の大きな山葵の看板を見ましたか、郵便局は。あの右の手の廣小路の正面に、煉瓦の建物があつたでせう。縣廳よ。お城の中だわ。あゝ、さあ、早瀑さん、澤山喫つて頂戴、お煙草。露西亞卷だつて、貰つたんだけれど、烏山（夫を云ふ）は些とも喫みませんから……」

八

其から名物だ、と云つて屠蘇の銚子を出して、茶を煽じる手つきはなよやかだつたが、鐵瓶のは未だ沸らぬ、と銅壺から湯を掬む柄杓の柄が、へし折れて、短く成つて居たのみか、二度ばかり土瓶にうつして、最う一杯、どぶりと突込む。他愛なく、拔けて柄に成つて了つたので、

「まあ、」と飛んだ顰をして、斜めに取つて見遣かした風情は、此の夫人の艶なるだけ、中指の鼈甲の斑を、日影に透かした趣だつたが、

「仕樣がないわね。」と笑つて、其の柄を投り出した樣子は、世帶の事には餘り心を用ゐない、學生生活の俤が殘つた。

主稅が、小兒衆は、と尋ねると、二人とも乳母が連れて、土產ものなんぞ持つて、東京から歸つた報知旁々、朝早くから出向いたとある。

「河野の父さんの方も、内々小兒をだしに使つて東京へ濟びに行つた事を知つて居るんですから、言句は言はないまでも、苦い顰をして、鞠の中から一眠み眠むに遣ひはないんですもの、難有くないわ。但樣は自分の方へ、姉が惹つて行つたんですから御機嫌が可いでせう、最う暫と經つと歸つて來ます。其までは、私、實家へは強を出さないつもりで、當分風邪をひいた分よ。」

と火鉢の緣に肱をついて、男の顔を視めながら、魂の拔け出したやうな伝氣ないことを云ふ。

「そりや、惡いでせう。」

と主稅が却つて心配らしく、

「彼方から、誰方かお來なさりやしませんか。貴女がお歸りだ、と知れましたら。」

「來るもんですか。義兄（醫學士——姉婿を云ふは忙しいし、また些とでも姉さんを出さないのよ。火でれ〳〵なんですから。父さんはね、其にね、頃日は、家族主義の事に就いて、些と纏まつた著述をするんだつて、母屋に閉籠つて、時々は、何よ、一日藏の中に入り切の事があつてよ。藏には書物が一杯ですから。父さんはね、醫者なんですけれど、もと個人、人一人二人の病を治すより、國の病を治したい、と云ふ大な希望の人ですからね。過年、あの、家族主義と個人主義とが新聞で騒ぎましたね。あの時も、父樣は、東京の叔父さんだの、坂田道（學者）さんに應援して、火の出るやうに、敵と戰つたんだわ。

惜い事に、兄さん（英吉）も奔走してくれたんですけれど、可い機關がなくつて、ほんの教育雜誌のやうなものに揭つたものですから、論文も、名も出ないで了つて、殘念だからつて、一生懸命に遣つてますの。確か、貴下の先生の酒井さんは、其の時の、あの敵方の大立ものぢやなくつて？」

と不意に質問の矢が來たので、些と、狼狽ついたやうだつたが、

「何うでしたか、最う忘れましたよ。」と氣もなく答へる。